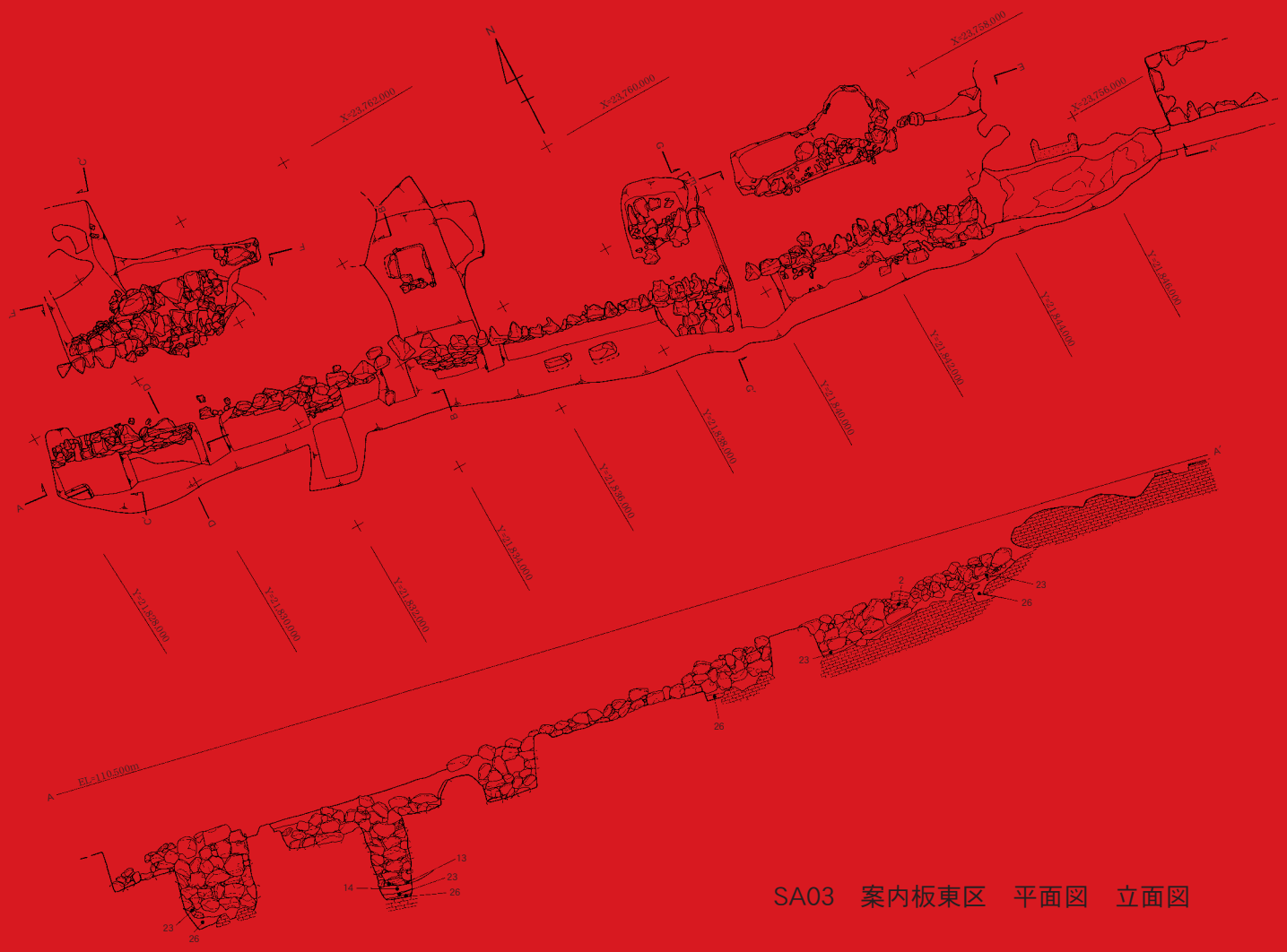
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第13集

あいじょううふみち

綾門大道跡

－首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書－



SA03　案内板東区　平面図　立面図

2003（平成15）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第13集

あいじょううふみち

綾門大道跡

－首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書－

2003（平成15）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

巻首図版 1　上：綾門大道（航空写真、沖縄県立埋蔵文化財センター2000）
下：ペリー来琉時（1853）の守礼門と綾門大道（ニライ社　1987）

巻首図版 2　上：平成10年度調査区全景（西から）　下：平成11年度調査区Ⅱ地区全景（東から）

1

2

3

4

5

6

7

8

巻首図版３

１．平成11年度調査区（Ⅱ地区）
２．ＳＡ03案内板東区（平成12年度　北地区）
３．ＳＡ03　ＳＳ03　案内板西区（平成12年度　北地区）
４．平成11年度調査区（Ｉａ地区）
５．平成11年度調査区（Ｉｂ地区）
６．ＳＸ01（平成10年度　南地区）
７．土層断面（平成11年度　Ｉｂ地区）
８．柱穴遺構（平成11年度Ⅱ地区）

巻首図版４

9．ＳＳ01（平成11年度　Ⅰｂ地区）
10．ＳＡ01（平成11年度　Ⅱ地区）
11．ＳＡ01（平成11年度　Ⅱ地区）
12．ＳＡ01（平成11年度　Ⅱ地区）
13．ＳＡ01（平成11年度　Ⅰｂ地区）
14．柱穴遺構（平成11年度　Ⅲ地区）
15．16．ＳＡ03案内板東区（平成12年度　北地区）

序

本報告書は平成10(1998) 年度から平成12(2000) 年度の３ヵ年間に実施した首里城跡綾門大道の発掘調査の成果をまとめたものです。

発掘調査は平成10(1998) 年度から平成11(1999) 年度までは沖縄県教育庁文化課が所管し、平成12(2000) 年４月沖縄県立埋蔵文化財センターの開所に伴い、平成12(2000) 年度以降は、当埋蔵文化財センターが継続して調査を行い、この度報告書を刊行することとなりました。

首里城跡の復元整備事業は昭和60(1985) 年度から開始され、平成４(1992) 年度には正殿、北殿、南殿、奉神門等が復元されて以降、首里城周辺は県内でも有数の観光地として毎年、多くの観光客が訪れるようになりました。それに伴い首里城周辺の整備も引き続いて行われており、首里城公園として公開されています。

今回はその整備事業の一環として、守礼門周辺区域の調査を実施しました。調査対象区域は首里城跡の大手門とも言える歓会門から西方の首里城公園管理センターまでの、かつて「綾門大道」と呼ばれていた区域です。「綾門大道」は去る大戦まで旧来の首里の町並みを色濃く残した古道として、そして近世以前には琉球王府第一の道路として知られていました。

今回の調査では綾門大道を造成した状況や道幅を拡張した痕跡を広範囲にわたって確認することができました。また綾門大道以前の土地利用に関してもある程度確認することができました。

これらの成果をまとめた本報告書が、沖縄における王国時代の歴史や首里城および城下の様相を知る上で貴重な資料として活用されるとともに、文化財保護への理解を深めることにもつながれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査や資料整理を行うにあたってご指導賜りました諸先生方をはじめ、調査にご協力頂きました関係各位に厚く御礼を申し上げます。

平成15(2003) 年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　安　里　嗣　淳

例　　言

1．本書は平成10年度から平成12年度に実施した、首里城跡綾門大道跡に係る発掘調査の成果をまとめたものである。
2．調査は文化庁の補助事業として平成10年度から11年度までは沖縄県教育庁文化課が、平成12年度は沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
3．資料整理作業は、平成10年度から11年度までは沖縄県教育庁文化課が、平成12年度と14年度は沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
4．本書に使用した１／25,000 地形図は国土地理院発行の資料によった。
5．本書に表した高度値は海抜高である。
6．本文中に使用した戦前の首里城写真は関係者の御厚意により複写したものである。
7．図面に記載されている国土座標は平成14年３月以前のものである。
8．資料整理にあたり、下記の方々には各遺物の鑑定、または同定をお願いした。記して謝意を表したい。（五十音順、敬称略）

陶　磁　器　手　塚　直　樹（青山学院大学）
褐釉陶器　　向　井　　亙（金沢大学大学院）
瓦　　上　原　　靜（沖縄国際大学）
石器　　神　谷　厚　昭（沖縄県立真和志高等学校）
獣骨　　渡　辺　　誠（名古屋大学大学院教授）

9．本書の編集は金城亀信、古屋聡洋、田里一寿、比嘉優子の協力を得て山本正昭が行った。
巻首図版のレイアウト：金城亀信
校正：照屋利子、外間　瞳
10. 各章の執筆は下記のように分担した。

山本正昭　Ⅰ章第３節、Ⅱ章、Ⅳ章第２節、Ⅶ章第１、４、５、12、14、15、16節、Ⅷ章
金城亀信　Ⅰ章第１、２節、Ⅲ章、Ⅷ章
古屋聡洋　Ⅳ章、Ⅷ章
田里一寿　Ⅰ章第３節、Ⅳ章、Ⅴ章、Ⅷ章
比嘉優子　Ⅴ章第２節、Ⅶ章第11、19、20節
知念隆博　Ⅶ章第２、３、13節
羽方　誠　Ⅶ章第７、８節
瀬戸哲也　Ⅶ章第９、10節
盛本　勲　Ⅵ章
新垣　力　Ⅶ章第６節
岸本竹美　Ⅶ章第17節
喜多亮輔　Ⅶ章第18節

11. 本書に掲載された写真は金城亀信、古屋聡洋、田里一寿が、出土遺物は宮崎典子、光嶋香の撮影によるものである。
12. 本書に掲載した首里城跡綾門大道跡発掘調査に関する写真、実測図などの記録は全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管してある。
13. 発掘調査・資料整理などの調査体制についてはⅠ章の第２節に記した。

報　告　書　抄　録

ふりがな	あいじょううふみちあと
書名	綾門大道跡
副書名	首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第13集
編著者名	山本正昭・金城亀信・古屋聡洋・田里一寿・比嘉優子・羽方誠・知念隆博・瀬戸哲也 新垣力・岸本竹美・喜多亮輔
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　　TEL 098-835-8752
発行年月日	西暦2003（平成15）年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あいじょううふみち 綾門大道	おきなわけんな 沖縄県那 はししゅり 覇市首里 きんじょうちょう 金城町	那覇市 472018	『那覇市歴史地図』(1986) 805. 綾門大道	26° 12′	127° 43′	1998.4～ 2000.5	1.648㎡	県営公園整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
綾門大道	道路	グスク時代 ～ 現代	石積み 石列 砂利敷き 石敷き 石畳 土抗 柱穴	青磁 白磁 染付 本土産陶磁器 沖縄産無釉陶器 沖縄産施釉陶器 褐釉陶器 瓦質土器 陶質土器 土器 瓦 塼 円盤状製品 石造製品 玉類 貝製品 骨製品 銭貨 木材 金属製品	琉球王国のもとで第一の国道として機能していた。その道の起源並びに変遷はこれまで明らかではなかったが、15世紀において造成されたと見られ、現在まで4度の大規模な造成がなされていたことが判明した。

目　次

巻首図版
序
例言
報告書抄録
Ⅰ章　序　章
第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　調査体制…… 2
第３節　調査経過…… 4
第４節　凡例…… 6

Ⅱ章　位置と環境
第１節　地理的環境…… 15
第２節　歴史的環境…… 15

Ⅲ章　平成10年度調査区
第１節　遺構と層序…… 20
第２節　遺構と遺物…… 21
第３節　小括…… 53

Ⅳ章　平成11年度調査区
第１節　層序と遺構…… 54
第２節　遺構と遺物…… 57
第３節　小括…… 103

Ⅴ章　平成12年度調査区
第１節　遺構と層序…… 104
第２節　遺構と遺物…… 109
第３節　小括…… 124

Ⅵ章　遺構出土の動物遺体…… 125

Ⅶ章　撹乱層出土の遺物
第１節　青磁…… 128
第２節　白磁…… 135
第３節　染付…… 139
第４節　褐釉陶器…… 144
第５節　その他の輸入陶磁器…… 147
第６節　本土産陶磁器…… 150
第７節　沖縄産施釉陶器…… 153
第８節　沖縄産無釉陶器…… 154
第９節　瓦質土器…… 157
第10節　陶質土器…… 157
第11節　カムイヤキ…… 157
第12節　土器…… 158
第13節　円盤状製品…… 158
第14節　瓦…… 158
第15節　銭貨…… 161
第16節　金属製品…… 163
第17節　玉製品…… 164
第18節　石器、石製品、石造製品…… 165
第19節　貝製品…… 166
第20節　骨製品…… 167

Ⅷ章　総括…… 169
附図

図目次

第１図　凡例…… 6
第２図　沖縄本島位置図…… 7
第３図　綾門大道位置図…… 8
第４図　調査区位置図…… 9
第５図　綾門大道各年度調査区位置図…… 10
第６図　遺構配置図及びグリット設定図…… 11
第７図　調査区周辺地質図…… 16
第８図　首里古地図…… 17
第９図　周辺史跡位置図…… 18
第10図　SA01　平面図・立面図及び断面図…… 21
第11図　SA01　出土遺物・青磁…… 23
第12図　SA01　出土遺物・白磁…… 24
第13図　SA01　出土遺物・瓦…… 24
第14図　SA01　出土遺物・銭貨…… 25
第15図　SA01　出土遺物・鉄製品…… 25
第16図　SA01　出土遺物・貝製品…… 26
第17図　SR01(a)平面図・立面図及び断面図…… 27
第18図　SR01(b)平面図…… 29
第19図　SR02　平面図・立面図及び断面図…… 31
第20図　SR02　出土遺物・黒釉磁器…… 33
第21図　SR02　出土遺物・陶質土器…… 33
第22図　SR02　出土遺物・円盤状製品…… 33
第23図　SR02　出土遺物・鉄製品…… 33
第24図　SS01(a)平面図・断面図…… 34
第25図　SS01(b)平面図・断面図…… 35
第26図　SS01(b)立面図及び壁面図…… 37
第27図　SX01　平面図・立面図…… 39
第28図　SX01　遺物出土状況…… 40
第29図　SX01　層序…… 41
第30図　SX02　平面図・断面図…… 42
第31図　SX02　出土遺物・中国産黒釉陶器・タイ産褐釉陶器…… 43
第32図　SX02　出土遺物・沖縄産施釉陶器…… 44
第33図　SX02　出土遺物・沖縄産無釉陶器…… 44
第34図　SX04・SX05平面図・断面図…… 45
第35図　セ－14・15包含層部分・平面図…… 47
第36図　セ－14・15包含層部分
立面図及び断面図・１…… 49
第37図　セ－14・15包含層部分
立面図及び断面図・２…… 50
第38図　セ－14・15出土遺物・沖縄産無釉陶器… 51
第39図　セ－14・15出土遺物・青銅製品…… 51
第40図　セ－14・15出土遺物・瓦…… 51
第41図　Ⅰａ地区平面図…… 55
第42図　Ⅰａ地区立面図・断面図…… 56
第43図　SA01　平面図…… 60
第44図　SA01　断面図・１…… 61
第45図　SA01　断面図・２…… 62
第46図　SA01　検出トレンチ出土遺物…… 64
第47図　SA02　平面図…… 65
第48図　SA02　断面図…… 67
第49図　SA02　立面図及び断面図…… 68
第50図　SA02　出土遺物・８層黒色土粒混赤褐色土層（造成層）・青磁…… 70
第51図　SA02　出土遺物・８層黒色土粒混赤褐色土層（造成層）・青磁…… 72
第52図　SA02　出土遺物・８層黒色土粒混赤褐色土層（造成層）・青磁…… 75
第53図　SA02　出土遺物・８層黒色土粒混赤褐色土層（造成層）・染付…… 76
第54図　SA02　出土遺物・染付…… 77
第55図　SA02　出土遺物・褐釉陶器…… 77
第56図　SA02　出土遺物・半練…… 77
第57図　SA02　出土遺物・中国産陶器・褐釉陶器・沖縄産陶器・煙管・金属製品・銭貨・石器…… 79
第58図　SA02　出土遺物・19層黒褐色混土礫層（第５礫層）青磁・擂鉢・瓦…… 80
第59図　SA02　出土遺物・本土産陶器…… 81
第60図　SA02　出土遺物・沖縄産陶器…… 81
第61図　SA02　出土遺物・瓦質土器…… 81
第62図　SA02　出土遺物・瓦…… 82
第63図　SA02　出土遺物・円盤状製品…… 82
第64図　SA02　出土遺物・石製品…… 83
第65図　SS02　平面図・立面図…… 84
第66図　SS02　検出地区出土遺物・青磁・染付・三彩・褐釉陶器・本土産磁器…… 86
第67図　SS02　検出地区出土遺物・沖縄産陶器… 87
第68図　SS02　検出地区出土遺物・瓦…… 87
第69図　SS02　検出地区出土遺物・金属製品…… 87
第70図　SS02　検出地区出土遺物・銭貨…… 87
第71図　SS02　検出地区出土遺物・石器…… 87
第72図　SR03　平面図・立面図及び断面図…… 88
第73図　SR03　出土遺物・青磁…… 90
第74図　SR03　出土遺物・沖縄産無釉陶器…… 90
第75図　SR03　出土遺物・瓦…… 90
第76図　Ⅱ地区柱穴遺構　平面図 …… 91
第77図　Ⅲ地区柱穴遺構　平面図・１…… 91
第78図　Ⅲ地区柱穴遺構　平面図・２…… 92
第79図　Ⅲ地区柱穴配置模式図…… 92
第80図　Ⅱ地区・Ⅲ地区柱穴・土坑断面図…… 93
第81図　柱穴遺構出土遺物 pit1 出土・銭貨…… 95
第82図　柱穴遺構出土遺物・青磁・沖縄産施釉陶器・土器…… 97

第83図　23ａ層暗褐色土層出土遺物・青磁…… 98
第84図　23ａ層暗褐色土層出土遺物・白磁・黒釉陶器・中国産陶器…… 99
第85図　23ａ層暗褐色土層出土遺物・産地不明土器…… 99
第86図　23ａ層暗褐色土層出土遺物・産地不明白磁…… 99
第87図　23ａ層暗褐色土層出土遺物・瓦…… 99
第88図　23ａ層暗褐色土層出土遺物・金属製品… 100
第89図　25ｂ層暗橙褐色土層出土遺物・金属製品…… 100
第90図　SA04 平面図・立面図…… 101
第91図　SA03 案内板東区　平面図・立面図…… 109
第92図　SA03 案内板東区　立面図及び断面図… 111
第93図　SA03・SS03 案内板西区平面図・立面図及び断面図…… 112
第94図　SA03 出土遺物・青磁…… 117
第95図　SA03 出土遺物・中国産白磁…… 119
第96図　SA03 出土遺物・染付…… 119
第97図　SA03 出土遺物・黒釉陶器(天目)…… 119
第98図　SA03 出土遺物・中国産褐釉陶器・本土産陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・陶質土器・カムィヤキ…… 120
第99図　SA03出土遺物・瓦……121
第100図 SS03出土遺物・円盤状製品…… 122
第101図 SS03出土遺物・銭貨…… 122
第102図 SS03出土遺物・金属製品…… 122
第103図 SS03出土遺物・染付…… 122
第104図 トーチカ断面図…… 123
第105図 青磁（碗）…… 129
第106図 青磁（皿・杯・盤・瓶）…… 130
第107図 白磁（碗・小碗・皿・杯・瓶）…… 136
第108図 染付（碗）…… 140
第109図 染付（皿）…… 141
第110図 染付（小碗・杯・瓶・蓋）…… 142
第111図 褐釉陶器　中国産・タイ産…… 145
第112図 その他の輸入陶磁器（１）…… 147
第113図 その他の輸入陶磁器（２）…… 148
第114図 本土産陶磁器…… 151
第115図 瓦（高麗系・大和系・明朝系)……159
第116図 銭貨…… 162
第117図 骨製品…… 167
第118図 冊封御規式之時守礼門并御城御座之図（１）（２）…… 170
冊封御規式之時守礼門并御城御座之図（３）（４）…… 171
第119図 天界寺跡及び守礼門周辺地区下層遺構… 173
第120図 天界寺跡及び守礼門周辺地区上層遺構… 175
附図
１　遺構全体図
２　平成10年度調査区（南地区）
３　平成11年度調査区（Ｉｂ・Ⅱ地区）
４　平成11年度調査区（Ⅲ地区）

表目次

第１表　SA01 遺構表…… 22
第２表　青磁観察一覧…… 23
第３表　白磁観察一覧…… 24
第４表　瓦観察一覧…… 25
第５表　銭貨観察一覧…… 25
第６表　鉄製品観察一覧…… 26
第７表　貝製品観察一覧…… 26
第８表　SR01（a）遺構表…… 28
第９表　SR01（b）遺構表…… 30
第10表　SR02 遺構表…… 32
第11表　黒釉磁器観察一覧…… 33
第12表　陶質土器観察一覧…… 33
第13表　円盤状製品観察一覧…… 33
第14表　鉄製品観察一覧…… 33
第15表　SS01（a）遺構表…… 34
第16表　SS01（b）遺構表…… 38
第17表　SX01 遺構表…… 42
第18表　SX02 遺構表…… 43
第19表　タイ産褐釉陶器観察一覧…… 43
第20表　沖縄産施釉陶器観察一覧…… 44
第21表　沖縄産無釉陶器観察一覧…… 44
第22表　SX04 遺構表…… 46
第23表　SX05 遺構表…… 46
第24表　沖縄産無釉陶器観察一覧…… 51
第25表　青銅製品観察一覧…… 51
第26表　瓦観察一覧…… 51
第27表　現代遺構の観察一覧…… 52
第28表　SA01 遺構表…… 63
第29表　青磁観察一覧…… 64
第30表　白磁観察一覧…… 64
第31表　褐釉陶器観察一覧…… 64
第32表　円盤状製品観察一覧…… 64
第33表　SA02 遺構表…… 69
第34表　青磁観察一覧（１）…… 71
第35表　青磁観察一覧（２）…… 73
第36表　青磁観察一覧（３）…… 74
第37表　青磁観察一覧（４）…… 75

第38表　染付観察一覧…… 76
第39表　染付観察一覧…… 77
第40表　褐釉陶器観察一覧…… 77
第41表　半練観察一覧…… 77
第42表　本土産陶器観察一覧…… 81
第43表　沖縄産陶器観察一覧…… 81
第44表　瓦質土器観察一覧…… 82
第45表　瓦観察一覧…… 82
第46表　円盤状製品観察一覧…… 82
第47表　SS02　遺構表…… 85
第48表　青磁観察一覧…… 86
第49表　染付観察一覧…… 86
第50表　三彩観察一覧…… 86
第51表　褐釉陶器観察一覧…… 86
第52表　本土産陶磁器観察一覧…… 86
第53表　沖縄産陶器観察一覧…… 87
第54表　瓦観察一覧…… 87
第55表　銭貨観察一覧…… 87
第56表　SR03 遺構表…… 89
第57表　青磁観察一覧…… 90
第58表　沖縄産無釉陶器観察一覧…… 90
第59表　瓦観察一覧…… 90
第60表　柱穴遺構表…… 94
第61表　柱穴計測表…… 94
第62表　銭貨観察一覧…… 96
第63表　青磁観察一覧…… 97
第64表　沖縄産施釉陶器観察一覧…… 97
第65表　土器観察一覧…… 97
第66表　青磁観察一覧…… 98
第67表　白磁観察一覧…… 99
第68表　黒釉陶器観察一覧…… 99
第69表　中国産陶器観察一覧…… 99
第70表　産地不明白磁観察一覧…… 99
第71表　暗褐色土層遺物出土表…… 100
第72表　SA04 遺構表…… 102
第73表　SA03 遺構表…… 113
第74表　SS03　遺構表…… 114
第75表　SA03・SS03暗褐色土層遺物出土表…… 115
第76表　青磁観察一覧…… 118
第77表　中国産白磁観察一覧…… 119
第78表　染付観察一覧…… 119
第79表　黒釉陶器（天目）観察一覧…… 119
第80表　中国産褐釉陶器観察一覧…… 120
第81表　本土産陶磁器観察一覧…… 120
第82表　沖縄産施釉陶器観察一覧…… 120
第83表　沖縄産無釉陶器観察一覧…… 120
第84表　陶質土器観察一覧…… 120
第85表　カムイヤキ観察一覧…… 120
第86表　瓦観察一覧…… 121
第87表　タイ産褐釉陶器製円盤状製品観察一覧… 122
第88表　銭貨観察一覧…… 122
第89表　金属製品観察一覧…… 122
第90表　染付観察一覧…… 122
第91表　トーチカ遺構表…… 123
第92表　11年度　魚類出土一覧…… 126
第93表　11年度　ニワトリ出土一覧…… 126
第94表　11年度　ウマの歯出土一覧…… 126
第95表　11年度　ウマ出土一覧…… 126
第96表　11年度　イノシシ or ブタ出土一覧 …… 126
第97表　11年度　イノシシ or ブタ歯牙出土一覧
…… 126
第98表　11年度　ウシ歯出土一覧…… 127
第99表　11年度　ウシ出土一覧…… 127
第100表 11年度　ウシ or ウマ出土一覧 …… 127
第101表 12年度　ウマ出土一覧…… 127
第102表 12年度　ウシ歯出土一覧…… 127
第103表 12年度　ブタ歯出土一覧…… 127
第104表 12年度　ブタ出土一覧…… 127
第105表 青磁観察一覧（1）…… 131
第106表 青磁観察一覧（2）…… 132
第107表 青磁観察一覧（3）…… 133
第108表 青磁観察一覧（4）…… 134
第109表 白磁観察一覧（1）…… 137
第110表 白磁観察一覧（2）…… 138
第111表 染付観察一覧（1）…… 143
第112表 染付観察一覧（2）…… 144
第113表 中国産褐釉陶器観察一覧…… 146
第114表 タイ産褐釉陶器観察一覧…… 147
第115表 その他の輸入陶磁器観察一覧…… 149
第116表 本土産陶磁器観察一覧…… 152
第117表 沖縄産施釉陶器観察一覧（1）…… 153
第118表 沖縄産施釉陶器観察一覧（2）…… 154
第119表 沖縄産無釉陶器観察一覧（1）…… 155
第120表 沖縄産無釉陶器観察一覧（2）…… 156
第121表 土器観察一覧…… 158
第122表 円盤状製品観察一覧…… 158
第123表 瓦観察一覧…… 160
第124表 銭貨観察一覧…… 161
第125表 玉製品観察一覧…… 164
第126表 石器・石製品・石造製品観察一覧…… 165
第127表 貝製品観察一覧…… 166
第128表 骨製品観察一覧…… 167
第129表 首里城関係主要年表（1）…… 240
第130表 首里城関係主要年表（2）…… 241

図版目次

図版１　玉製品…… 164
図版２　上：平成10年度調査区から首里城を望む
下：守礼門現況（東から）…… 181
図版３　遺構検出状況（１）…… 182
図版４　遺構検出状況（２）…… 183
図版５　遺構検出状況（３）…… 184
図版６　遺構検出状況（４）…… 185
図版７　遺構検出状況（５）…… 186
図版８　遺構検出状況（６）…… 187
図版９　遺構検出状況（７）…… 188
図版10　遺構検出状況（８）…… 189
図版11　遺構検出状況（９）…… 190
図版12　遺構検出状況（10）…… 191
図版13　遺構検出状況（11）…… 192
図版14　遺構検出状況（12）…… 193
図版15　遺構検出状況（13）…… 194
図版16　遺構検出状況（14）…… 195
図版17　守礼門古写真…… 196
図版18　SA01 出土遺物・青磁・白磁・瓦・銭貨・鉄製品・貝製品…… 197
図版19　SX01 出土遺物・黒釉磁器・陶質土器・円盤状製品・鉄製品・褐釉陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・青銅製品・瓦…… 198
図版20　SX01 出土遺物・石材（１）…… 198
図版21　SX01 出土遺物・石材（２）…… 199
図版22　SA01 検出トレンチ出土遺物・青磁・白磁・褐釉陶器・円盤状製品
SA02 出土遺物・８層黒色土混赤褐色土層（造成層）青磁…… 200
図版23　SA02 出土遺物・８層黒色土粒混赤褐色土層（造成層）青磁…… 201
図版24　SA02 出土遺物・８層黒色土粒混赤褐色土層（造成層）青磁・染付
SA02 出土遺物・染付・褐釉陶器・半練
…… 202
図版25　SA02 出土遺物・中国産陶器・褐釉陶器・沖縄産陶器・煙管・金属製品・銭貨・石器
SA02 出土遺物・19層黒褐色混土礫層（第５礫層）青磁・擂鉢・瓦
SA02 出土遺物・本土産陶器・沖縄産陶器・瓦質土器…… 203
図版26　SA02 出土遺物・瓦・円盤状製品・石製品
SS02 検出地区出土遺物・青磁・染付・三彩・褐釉陶器・本土産磁器…… 204
図版27　SS02 検出地区出土遺物・沖縄産陶器・瓦・金属製品・銭貨・石器
SR03 出土遺物・青磁・沖縄産陶器…… 205
図版28　柱穴遺構出土遺物・pit１出土・銭貨…… 206
図版29　柱穴遺構出土遺物・青磁・沖縄産施釉陶器・土器・23ａ層暗褐色土層出土遺物・青磁・白磁・黒釉陶器・中国産陶器・土器・瓦・金属製品…… 207
25ｂ層暗橙褐色出土遺物・金属製品…… 207
図版30　SA03 出土遺物・青磁…… 208
図版31　SA03 出土遺物・中国産白磁・染付
黒釉陶器・中国産褐釉陶器・本土産陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・陶質土器・カムィヤキ…… 209
図版32　SA03 出土遺物・瓦…… 210
図版33　SA03 出土遺物・瓦・円盤状製品・銭貨金属製品…… 211
SS03 出土遺物・染付…… 211
図版34　骨（１）魚類・ニワトリ・イノシシ or ブタ・ウシ・ウマ…… 212
図版35　骨（２）ウマ・ウシ…… 213
図版36　青磁（１）…… 214
図版37　青磁（２）…… 215
図版38　青磁（３）…… 216
図版39　青磁（４）…… 217
図版40　白磁…… 218
図版41　染付（碗）…… 219
図版42　染付（皿）…… 220
図版43　染付（小碗・杯・瓶・蓋）…… 221
図版44　褐釉陶器（中国産・タイ産）…… 222
図版45　その他の輸入陶磁器（１）…… 223
図版46　その他の輸入陶磁器（２）…… 224
図版47　本土産陶磁器（１）…… 225
図版48　本土産陶磁器（２）…… 226
図版49　沖縄産施釉陶器…… 227
図版50　沖縄産無釉陶器（１）…… 228
図版51　沖縄産施釉陶器（２）…… 229
図版52　瓦質土器…… 230
図版53　陶質土器…… 231
図版54　上：土器・カムィヤキ　下：円盤状製品
…… 232
図版55　瓦（高麗系・大和系）…… 233
図版56　瓦（明朝系）…… 234
図版57　金属製品（１）…… 235
図版58　上：金属製品（２）下：銭貨…… 236
図版59　石器・石製品…… 237
図版60　石造製品…… 238
図版61　貝製品・骨製品…… 239

Ⅰ章　序章

第１節　調査に至る経緯

沖縄県の県庁所在地にある那覇市には、鎌倉時代から明治時代までの約550年間にわたって琉球王国の政治･経済・文化の中心として歴代国王の居城である首里城があった。

首里城は歴代国王（尚王家）によって、当時の琉球王国の土木・建築技術などの粋を集めて築城されたグスクであった。グスク（城内）には正殿、北殿、南殿などの多くの建造物が存在し、その幾つかは国宝として1925(大正14）年に指定されていたが､1945(昭和20）年の沖縄戦で、首里城地下に日本軍の沖縄総司令部壕が構築されたことにより米軍の集中砲火を浴びて国宝であった首里城正殿をはじめとする首里城内に入る第一の坊門である「中山門」（俗称：下の綾門｡1428年に尚巴志により創建）並びに第二の坊門である「守礼門」（俗称：上の綾門｡1527年～1555年尚清により創建）などの貴重な文化財が消失してしまった。

首里城の第二の坊門である守礼門は、第二尚氏王統第４代の尚清王代（1527～1555年）の創建と伝えられている。また、第一の坊門である「中山門」から第二の坊門「守礼門」、王城正面の歓会門までの首里城正面道路を綾門大道（あやじょうおおみち。俗称：あいじょううふみち）と称された王府第一の道路があった。当時の綾門大道の規模は、道路幅約12m、道の両脇には高い石墻が連なっていたようである。更に道路の路面には、琉球石灰岩の石粉とネナシカズラの汁を撒いて敷き詰固めたり、或いは線香の原料となるタブノキの皮を粉にした“香粉（こーぐー)”を石粉に混ぜるなど特殊な材料を石粉に混ぜて舗装材に使用したと伝えられている。そのため綾門大道は、“香粉道（コーグーミチ)”とも称された。

戦災で消失した旧国宝「守礼門」（俗称：上の綾門）の復元は、昭和31(1956）年２月に守礼門復元期成会が結成された。同期成会から復元工事を琉球政府文化財保護委員会に委嘱して、昭和32(1957）年８月から着工して、昭和33(1958）年10月に復元された。

しかしながら復元された守礼門も34年を経過した平成４(1992)年の時点で木部に塗装された朱塗り塗膜の剥落、全体的な白カビの発生、北側石墻寄りの敷石の一部破損（土盤の沈下による亀裂)、木部の部分的な腐食、軒瓦の部分的な欠失、全体的に細かく亀裂の発生した漆喰などにより再び復元修理を平成４年度に県教育庁文化課（総事業費33, 619,200円）が財団法人文化財建造物保存技術協会に委託をして、６月～10月までの工期で破損部分の補修と塗装を実施したが、平成10(1998)年・平成11(1999)年に守礼門の老朽化した軒瓦の取り替え及び漆喰の塗り替え補強工事(平成11年度事業費2, 270, 200円)県教育庁文化課が県単独予算で修理を行い今日に至っている。

このように守礼門及び守礼門周辺の僅かな道路部分のみが整備されていたが、綾門大道の本体は､1950年代に整備された県道50号（観音堂～守礼門）と重なり、現在に至っている。県道50号道路工事の際に綾門大道の大部分は、破壊されたようである。

ところで、首里城及びその周辺の整備事業についての構想や整備計画の提案を時系列的に主な計画等を整理すると以下のとおりとなる。

昭和45(1970)年：琉球政府文化財保護委員会による首里城跡及び周辺の文化財の復元計画の策定。

昭和47(1972)年：本土復帰に伴い『第一次沖縄振興開発計画』の中で、首里城をはじめとする周辺の文化財を戦災文化財として位置付けて、同年度から「首里城城郭等復元整備事業」が開始され、首里城歓会門復元整備に着手した。以後、年次計画に基づいて久慶門、木曳門、継世門、など櫓門と城郭の整備を行い平成13年度に事業終了した。

昭和57(1982)年：『第二次沖縄振興開発計画』の中で、「首里城跡一帯の歴史的風土を生かしつつ、公園としてふさわしい範囲について整備を検討する」と明記された。

昭和59(1984)年：沖縄県が、首里城を含周辺文化財を含めた区域約18ｈａを都市公園の範囲とした「首里城公園基本計画」を策定した。その中には古都首里の歴史的景観(町並み保全)を視野に入れた“首里城杜構想”を明記した。更に、昭和61(1986）年には「首里城公園基本計画調査」が行われ、公園周辺の環境整備についての具体的提案がなされ、県営公園区域が庁議決定された。

昭和61(1986)年：首里城公園計画区域約18ｈａの内、首里城内郭の約４ｈａについては沖縄県の本土復帰を記念して国営公園区域「国営沖縄記念公園首里城地区」として整備を行うことが、閣議決定さ

れた。国営公園区域約４ｈａの事業は、昭和62年に承認された。

昭和63(1988)年：沖縄県土木建築部「首里城公園基本設計」が策定され、首里城周辺のエリア別の整備計画が立案された。

以上、昭和63(1988) 年の策定された「首里城公園基本設計」に基づいた県営首里城公園整備事業の一環で、エリア別に発掘調査が実施されている。

サービスエリア（平成元年・２年、平成７・８年度：天界寺及び周辺の発掘調査)、玉陵エリア、城郭周辺エリア（平成10～12年度：継世門周辺発掘調査、平成13年度：城の下発掘調査)、龍潭・安国山エリア（平成４年度：龍潭周辺東部地区の発掘調査)、円鑑池・ハンタ山エリア（平成３年度：ハンタ山及び龍潭周辺東部地区の発掘調査)、円覚寺エリア（平成９～13年度：円覚寺跡発掘調査)、上の毛エリア（平成６年度：上の毛発掘調査)、博物館エリア（平成４～６年度：旧中城御殿石牆の発掘調査）以上の八つのエリアに分けて実施されている。

今回報告する綾門大道の発掘調査は、県営首里城公園の整備計画に基づくもので、綾門大道の整備範囲である都市計画道路首里城線と県道50号が交差する交差点から守礼門正面までの区間である。発掘調査は平成10年度～12年度の三ヵ年に実施され平成12年度の調査終了と共に“綾門大道”が守礼門北側石牆と共に整備された。県営首里城公園整備事業のサービスエリア（首里城木曳門から玉陵東側までの区域：綾門大道、天界寺、守礼門、園比屋武御嶽、真珠湊碑文、国王頌徳碑、真珠道）に含まれ、同エリアの綾門大道の整備に向けた発掘調査となっている。

参考資料

・沖縄県土木建築部『首里城公園基本設計』 昭和63(1988) 年３月。
・沖縄県『沖縄県有形文化財　旧首里城守礼門保存修理工事報告書』平成５(1993) 年３月。

第２節　調査体制

この発掘調査は以下の体制で実施した。

事業責任者	安室　肇	(沖縄県教育委員会教育長、1998年度)
	翁長良盛	(沖縄県教育委員会教育長、1999～2000年度)
事業　総括	當眞嗣一	(沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1998年度)
	〃	(沖縄県教育委員会文化課課長、1999～2001年度)
	知念　勇	(沖縄県立埋蔵文化財センター所長、2000～01年度)
	安里嗣淳	(沖縄県立埋蔵文化財センター所長、2002年度)
	大城　慧	(沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1999～2000年度)
	上原　靜	(沖縄県教育委員会史跡整備係長、1997～98年度)
	盛本　勲	(沖縄県教育委員会史跡整備係長、1999年度)
	〃	(沖縄県教育委員会記念物係長、2000年度)
	島袋　洋	(沖縄県教育委員会文化課埋蔵文化財係長1999年度)
	〃	(沖縄県立埋蔵文化財センター調査課長、2000～01年度)
事務　業務	大城将保	(沖縄県教育委員会文化課課長、1998年度)
	大浜　節	(沖縄県教育委員会文化課主幹兼管理係長、1998～1999年度)
	砂川邦子	(沖縄県教育委員会文化課管理係主査、1998～1999年度)
	稲嶺靖子	(沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1998年度)
	名嘉政修	(沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1999年度)
	横山さゆり	(沖縄県教育委員会文化課管理係主任、1999年度)
	千木良芳範	(沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1999～2000年度)
	仲座宜久	(沖縄県教育委員会文化課専門員、1998年度)
	上原美代子	(沖縄県教育委員会財務課主査　1999年度)
	知念廣義	(沖縄県立埋蔵文化財センター副所長兼庶務課長、2000～01年度)
	城間千賀	(沖縄県立埋蔵文化財センター庶務課主事、2000～01年度)
	上原　浩	(沖縄県立埋蔵文化財センター庶務課主事、2000～01年度)

調査及び資料整理指導
上　原　　静（沖縄国際大学文学部専任講師）
池　田　榮　史（琉球大学法文学部教授）
金　子　浩　昌（東京国立博物館）
上　村　俊　雄（鹿児島大学法文学部教授）
金　武　正　紀（那覇市教育委員会文化課課長）
手　塚　直　樹（青山学院大学）
宮　城　伸　一（勝連町教育委員会）
宮　城　弘　樹（今帰仁村教育委員会）
渡　辺　　誠（名古屋大学大学院文学研究科教授）
西　平　　剛（玉城村教育委員会主事）
木　全　敬　蔵（奈良国立文化財研究所測量室長）
福　島　駿　介（琉球大学工学部教授）
上江洲　安　享（首里城公園管理センター学芸員）
大　城　秀　子（知念村教育委員会主事）
宜　保　栄治郎（沖縄大学教授）

発掘担当者
金　城　亀　信（沖縄県教育委員会文化課主任、1998年度）
古　屋　聡　洋（沖縄県教育委員会文化課臨時任用職員、1999年度）
田　里　一　寿（沖縄県教育委員会文化課臨時任用職員、1999年度）
西　銘　　章（沖縄県立埋蔵文化財センター指導主事、2000年度）

発掘調査員
又　吉　純　子（沖縄県教育委員会文化課嘱託職員、1999年）
徳　川　和　也（沖縄県教育委員会文化課嘱託職員、1999年）
安座間　　充（沖縄県教育委員会文化課嘱託職員、2000年度）
矢　沢　秀　雄（沖縄県教育委員会文化課嘱託職員、2000年度）
宜　保　章　太（沖縄県教育委員会文化課嘱託職員、2000年度）
増　　泰　隆（沖縄県教育委員会文化課嘱託職員、2000年度）

資料　整理
金　城　亀　信（沖縄県教育委員会文化課主任、1998～2002年度）
古　屋　聡　洋（沖縄県教育委員会文化課臨時任用職員、1999年度）
田　里　一　寿（沖縄県教育委員会文化課臨時任用職員、1999年度）
〃　　（沖縄県立埋蔵文化財センター調査課嘱託職員、2000年度）
山　本　正　昭（沖縄県立埋蔵文化財センター調査課臨時任用職員、2000年度）
〃　　（沖縄県立埋蔵文化財センター調査課嘱託職員　2001年度）
〃　　（沖縄県立埋蔵文化財センター調査課専門員　2002年度）

発掘調査作業員（五十音順）
新垣キク・新垣直美・上原直美・浦崎京子・大城輝子・大城守広・大城安志・親川菊江・喜納初子
宜保仁美・金城さとみ・呉我フジ子・小波津ヨシ子・佐渡山正子・島仲恵子・高良嘉之・田場直樹
照屋タケ・照屋トミ・當間フミ・富山勇・中塚末子・永吉弘子・比嘉洋子・宮国恵子・柚木崎末子
与那嶺勢津子

資料整理作業員（五十音順）
井上亜紀・安座間充・池原直美・石橋朝子・上原園子・上原美穂子・大城勝江・大城直美・大城守広
大城安志・大村由美子・岡村綾子・我那覇悠子・金城克子・金城敬子・國場のりえ・国吉縁・崎原美智子
新城さゆり・城間千鶴子・瑞慶覧尚美・仲里美智子・仲村妙子・長田剛・田中ゆきの・平良貴子・高良公子
高良三千代・嵩元佳代子・友利映子・富山勇・玉城恵美利・玉那覇キミ子・玉寄智恵子・照屋利子
天願睦美・徳原由香・當眞彩・成田満利子・仲宗根三枝子・浜元春江・比嘉なおみ・比嘉優子・比嘉洋子
備瀬枝美子・廣木ゆかり・藤田奈穂美・外間瞳・真榮田聡子・牧志加代子・宮城利香・宮里竹織・宮良郁・
山田和恵

調査協力者（五十音順）
天久朝海・大島誠・城間肇・金子浩昌・當銘清乃・仲座久宜・西銘章・藤崎京・前田一舟

第３節　調査経過

平成10年度

平成10(1998) 年度の綾門大道の発掘調査は、平成10(1998) 年９月２日～平成11(1999) 年３月31日まで約７ヶ月間(実働日数130日)を要しているが、９月２日～同月30日の期間は、パワーショベルによる県道50号のアスファルト及び土盤材（コーラル、白砂）の除去、グリットの設定（10m四方)、首里城奉神門前の階段端に求めてあった絶対高を守礼門及び周辺のグリットへの移動、守礼門及び周辺の不法な出店及び写真屋を含む７・８店舗の排除と観光客等の安全を確保する目的で、高さ180ｃｍの金属フェンス等の設置及び同フェンスに取り付ける粉塵対策用ネット（寒冷紗）の設置、調査現場のプレハブ設置等に時間を要した。

特に金属フェンス及び支柱、現場への二箇所の出入口用のゲート支柱は、特別注文で県外から搬入することとなった為、注文から現場での設置までに１ヶ月近くを要している。また、守礼門及び周辺に不法に占拠する出店等の７・８店舗は、数回にわたる店舗撤去の行政指導をおこなっていたが、これを無視し続けたため、県においては行政代執行による強制撤去を執ることで日程を調整していたが、最終的に知事選終了後に取りやめとなったようである。発掘調査現場への金属フェンス等の設置の目的は、観光客の導線を首里杜館東側出入口から首里城歓会門へ導線変更、不法占拠の出店の強制排除、観光客や調査員及び作業員の安全確保であった。この措置については、県都市計画課、県文化課、首里城跡管理センター等との調整結果によるものであった。

金属フェンス等の設置後に発掘調査に着手したが、ほぼ毎日のようにサングラスを掛けた叔父さんによる威圧や暴言による嫌がらせ、自動車のマフラーの加熱を利用した粉塵対策用ネットの焼失などもあった。その他に不法占拠の出店経営者の要望を受けた県議会議員（総務企画委員）が、出店の支援と金属フェンス等設置に対する営業妨害について、調査担当者を呼び出して抗議をするなどの状況もあった。

グリットの設定は、10m四方の方眼をトランシットによる測量で組み、杭は測量鋲を打ち込んで、グリット名を鋲の環にマジックで明記した。グリットは、首里城歓会門入口の北側袖石積み（東）から守礼門（西）方向へ算用数字を冠し、園比屋武御嶽（北）から首里杜館（西）方向に向けて北から50音のカタカナで表記した。グリットの名称は、東南隅に冠した。また、調査の途中で、基準点測量を業者に委託した。地形測量は、発掘調査が実施できない雨天日を利用して、雨傘を差しながら平板測量やコンター測量（50ｃｍ間隔の等高線）を観光客や自動車の往来を確認しながら500分の１の地形図を作成しながら発掘調査を進行させて無事に大きなケガや事故もなく発掘調査を完了した。

平成11年度

平成11年度の発掘調査は、平成11年７月１日から平成12年３月31日までの９ヶ月間に渡って行われ、守礼門が観光地である事を考慮して進められた。

調査区は便宜上３つに区分し、守礼門から西に向かってⅠ地区、Ⅱ地区、Ⅲ地区と設定した（第５図)。そして、沖縄県土木建築部都市計画課との調整により、おおむねⅡ地区、Ⅲ地区、Ⅰ地区の順に進められ、更に城西小学校敷地内である首里城案内板西側の試掘も行った。調査開始当初、平成11年度の発掘面積は約678㎡であったが、綾門大道復元に係る都市計画課の要望により、各調査区の拡張を段階的に行い、発掘面積は約320㎡増え、最終的には総面積約998㎡となった。

平成10年度の遺構との関係を確認する為、Ⅱ地区から調査を行う事となったが、守礼門へ通り抜ける城西小学校側の歩道を範囲としていたので、観光客の流れの妨げとならぬよう歩道部分は先送りする事となった。発掘は戦後の開発によって埋められた東西に伸びるパイプ埋土および客土を除去する作業を中心に行った。その結果、部分的に破壊を受けているが、平成10年度に確認した東西に伸びる石列の延長や平面に広がる礫敷が確認でき、パイプ埋設溝壁面セクションと発掘区南北に任意で設定したトレンチの壁面セクションからいくつかの時期の礫層が確認できた。また、綾門大道建設以前のものと考えられるピットも１つ確認でき、かなり破壊を受けてはいたが、先送りされた城西小学校側の歩道部分からも、同時期ものと考えられるピットが古銭を伴って確認できた。

Ⅲ地区の調査は調査開始当初、調査期間の後半に行う予定であったが、都市計画課との調整の結果、Ⅲ地区中央から西側のみを先行して発掘する事となり、城西小学校通学路の安全を確保する為に、車道南側と首里杜館側の歩道までを調査範囲とした。調査の結果、北側はマンホール溝、南側は歩道の雨水溝によって、地山や岩盤まで破壊を受けている状況であったが、Ⅱ地区で確認できた礫層も僅かながら確認でき、地山層からはピットが多数確認できた。平成11年度調査後半に残る東側の調査も行ったが、西側よりも深刻な破壊を受けており、礫層の

確認は困難であった。しかし、西側と同じように地山層からピットを多数確認している。

Ⅰ地区の調査は、守礼門の観光スペースを確保する為、守礼門正面の地点を先行して調査し、埋め立てた後、本格的に行う事となった。Ⅱ地区と同様に埋設パイプ埋土および客土を除去する作業を中心に行った結果、Ⅱ地区で確認した礫層をより明確に確認する事ができ、それにより、綾門大道が大きく４つの時期に変遷する事が確認できた。また、Ⅰ地区北側から造成層が確認でき、ある時期の綾門大道が造成され、道幅を拡張していた事が確認できた。その他にも、僅かではあるが守礼門正面の付近から石畳が確認でき、範囲こそ明らかではないが、綾門大道に石畳が敷かれていた事、また南北方向の石積が積まれた部分がある事が確認できた。

平成11年度調査期間末期に、都市計画課の要望で急遽、綾門大道北側の石積復元に伴う、試掘調査を、Ⅰ地区北側に位置する城西小学校敷地内の首里城公園案内板西側にて行った。同地点には、地表に露出した状態の東西に伸びる石列があったので、石列をより明確に確認する為に南北方向のトレンチを設定して試掘を行った結果、石列は石積である事がわかり、その北側には石畳が敷かれている事も確認できた。しかし、石積西側の延長部は沖縄戦時、日本軍によって設置されたトーチカによって破壊を受けており、同じく石積東側の延長部も案内板によって破壊された状態であった。以上の結果をふまえて、案内板から東側にも綾門大道の北端を担う石積や関連遺構が確認される可能性がでてきた為、平成12年度に案内板東側の本格的な発掘調査を行う事となった。

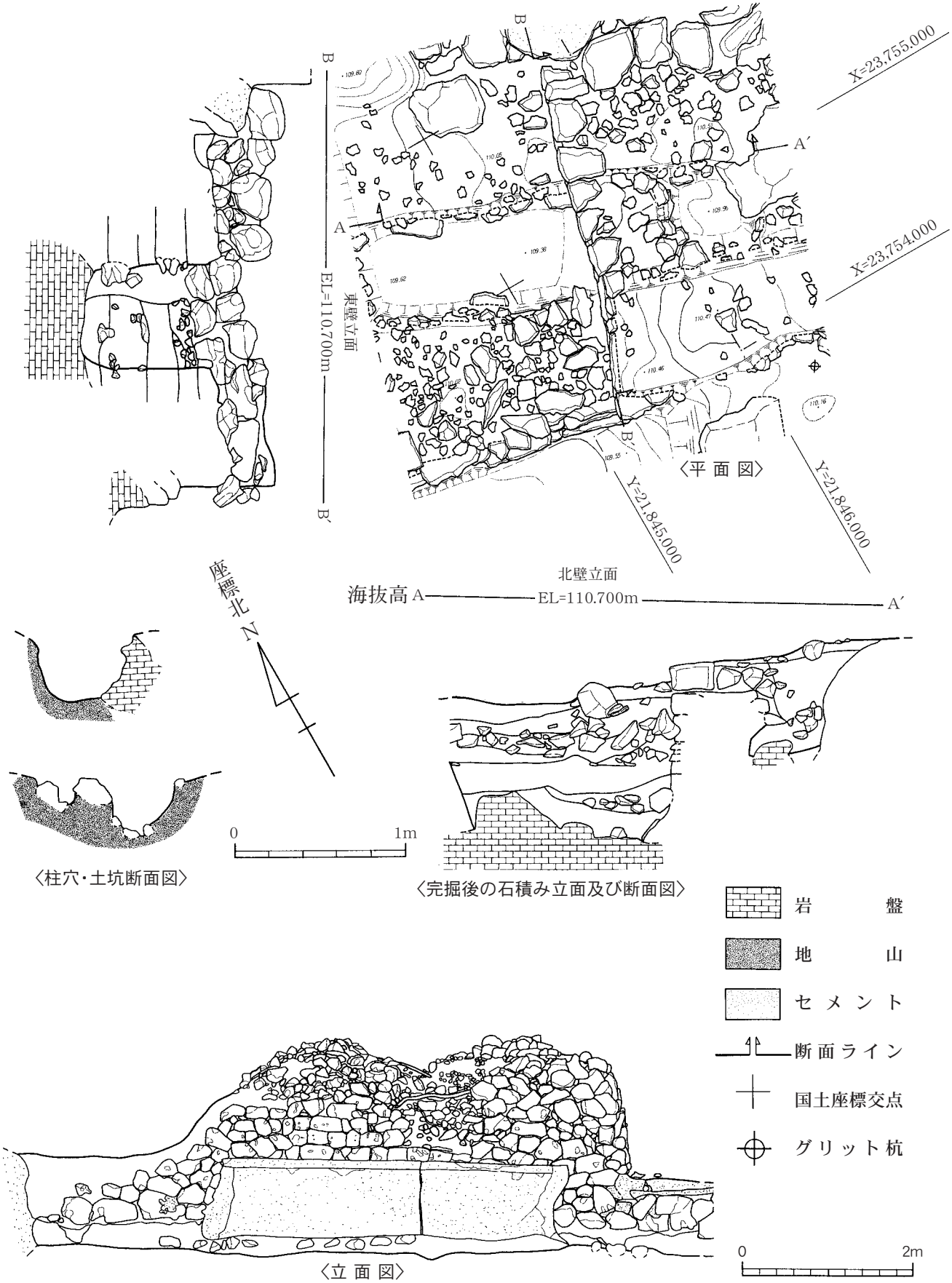
平成12年度

平成12年度の発掘調査は、沖縄県教育委員会文化課から沖縄県立埋蔵文化財センターに調査主体を移し、平成12年度に検出した案内板西側の石積延長部を確認する目的で、城西小学校敷地の傾斜地に調査区を設定して、平成12年４月１日から５月19日まで総面積約51㎡を発掘する事となった。平成12年度の調査区は、城西小学校の樹木が茂っていた為、伐採を行い、伐採後に平成11年度のグリットを延長して設定した。各グリットの客土を除去していくと、予想以上に良好な状態で石積を確認する事ができた。また、各グリットの南北に設定したトレンチにより、この石積が綾門大道北端の主な遺構である事が確認できた。これらの遺構は、完掘後に写真撮影し、平面・断面図の作成を行って、平成12年度の現場作業は終了した。

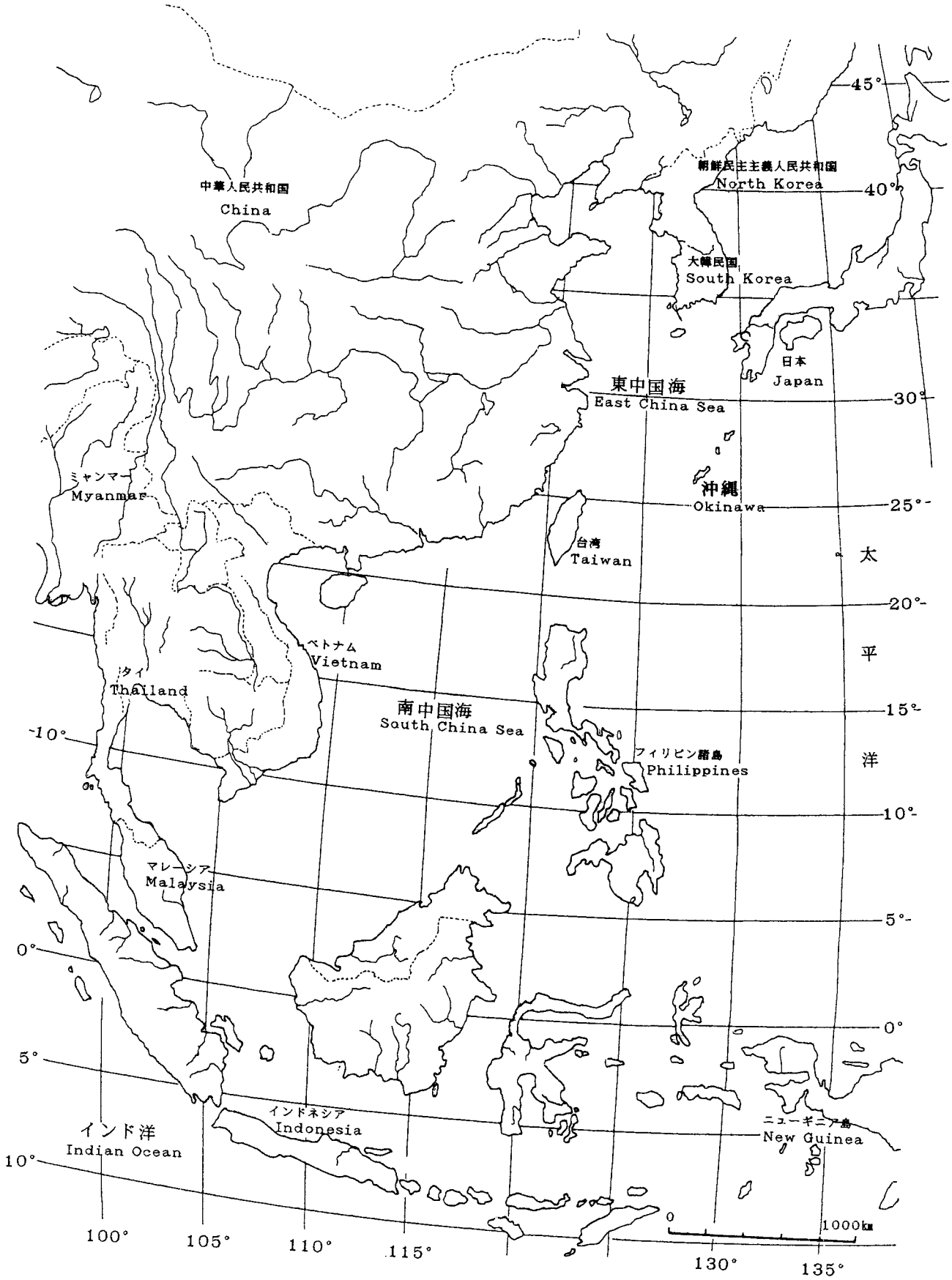
以上、平成10～12年度に渡って行われてきた首里城公園整備に伴う綾門大道跡発掘調査によって、守礼門周辺の綾門大道の様相はある程度は掴む事ができた。しかし、綾門大道は中山門から守礼門の間に敷かれていた道を定義づけるなら、今回の調査成果だけでは完全に綾門大道様相の確認を行ったわけではない。今後の公園整備や復元の為には、今回行われなかった未調査地域の発掘調査は課題となるであろう。

第４節　凡例

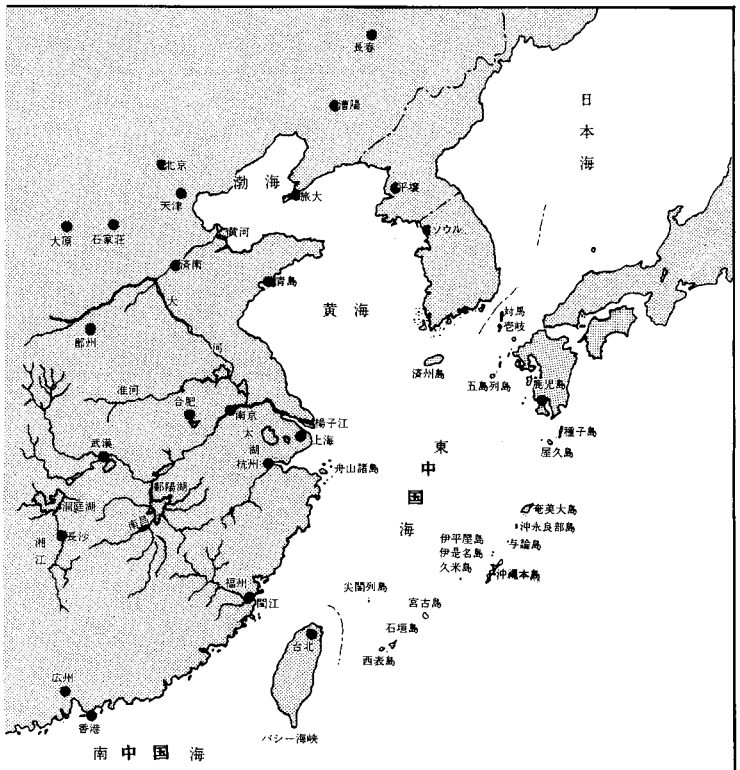
本書掲載の遺構詳細図の図中表現の仕様は下記のとおりである。

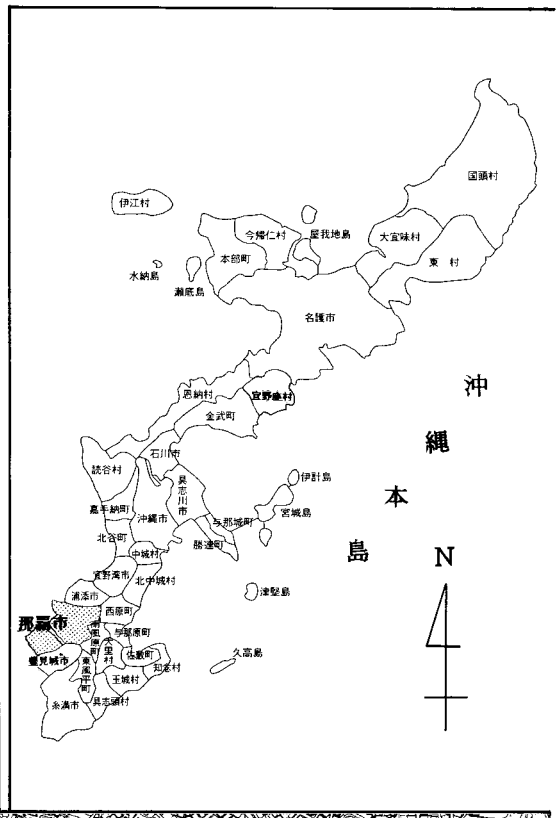


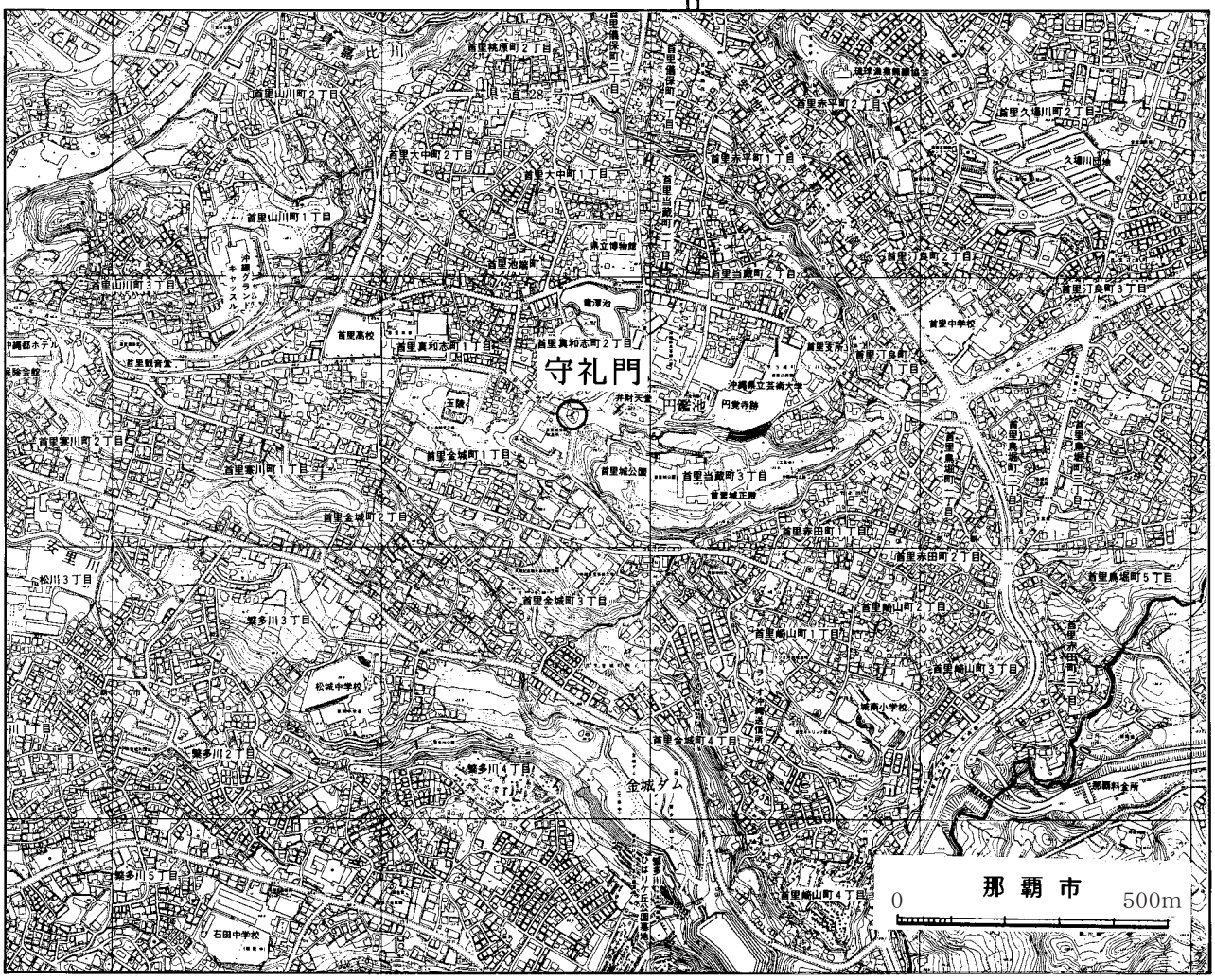
第１図　凡　例



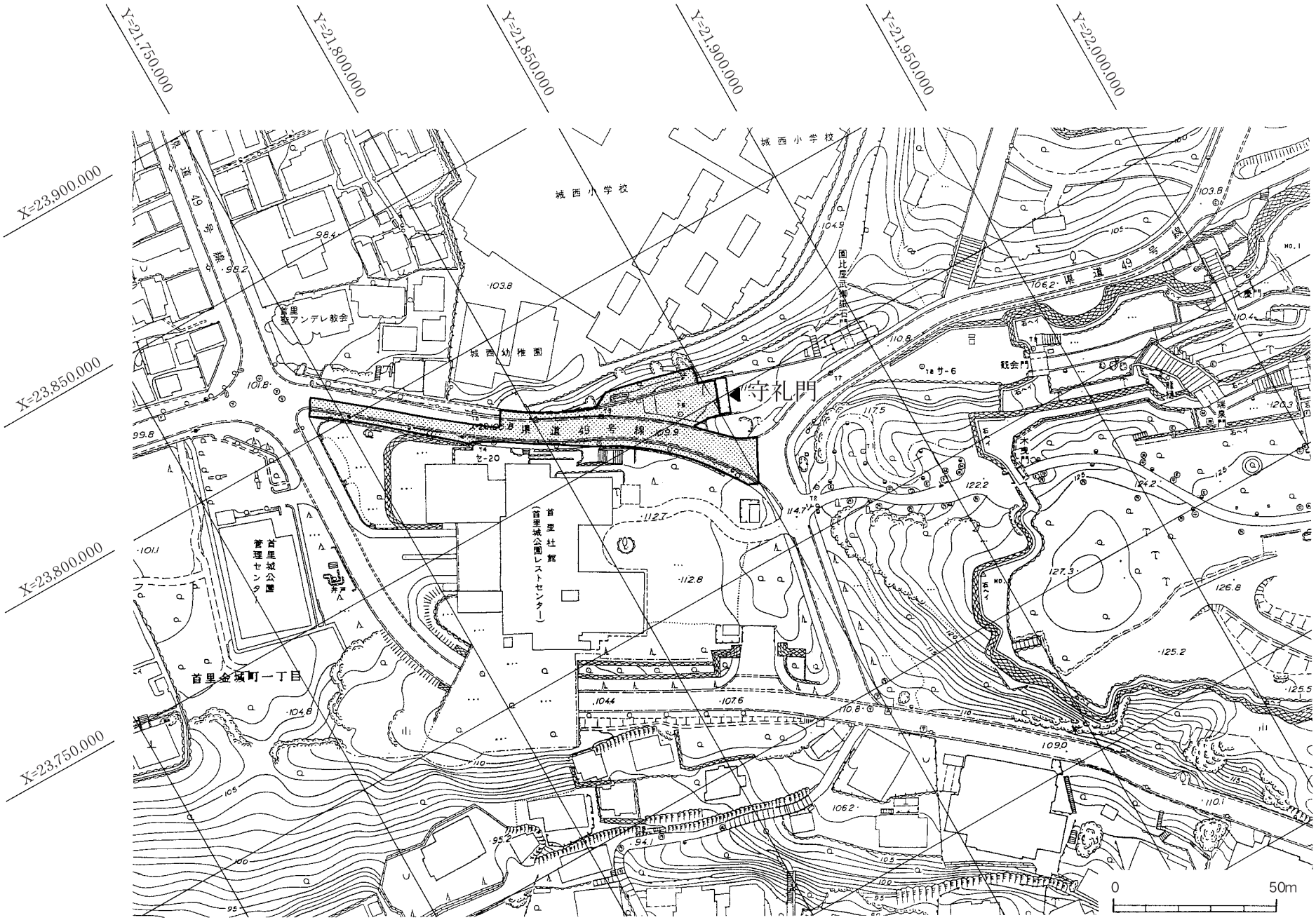
第２図　沖縄本島の位置図


長春
瀋陽
北京
天津
大連
平壤
ソウル
渤海
日本海
大同
石家荘
黄河
済南
青島
黄海
蚌埠
合肥
南京
上海
杭州
舟山諸島
武漢
洞庭湖
長沙
湘江
福州
泉州
厦門
東中国海
五島列島
鹿児島
種子島
屋久島
奄美大島
沖永良部島
与論島
伊平屋島
伊是名島
久米島
沖縄本島
宮古島
石垣島
西表島
台北
広州
香港
バシー海峡
南中国海

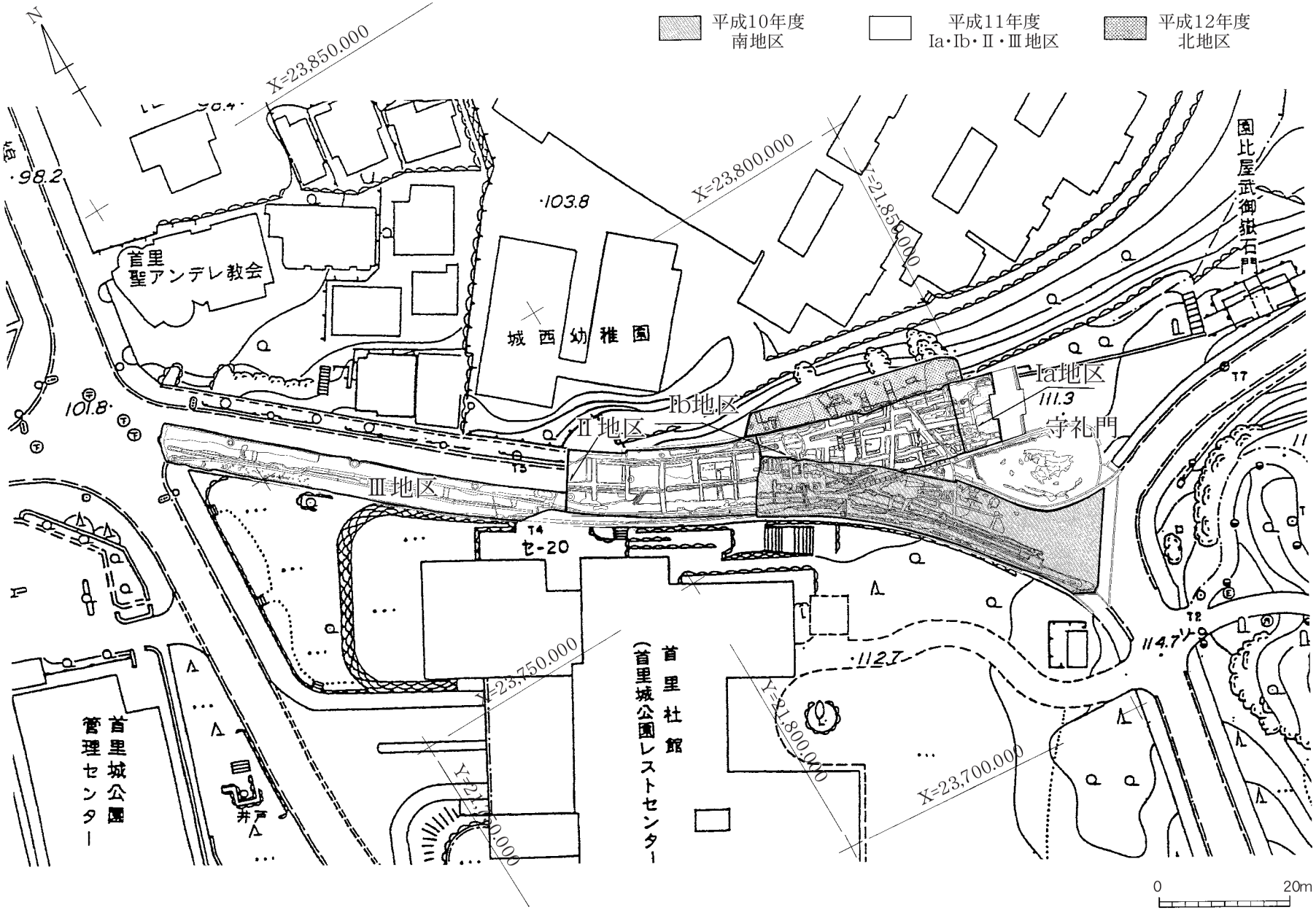

国頭村
伊江村
今帰仁村
屋我地島
大宜味村
本部町
東村
水納島
瀬底島
名護市
恩納村
宜野湾市
金武町
石川市
伊計島
読谷村
具志川市
宮城島
嘉手納町
沖縄市
与那城町
北谷町
勝連町
中城村
宜野湾市
北中城村
津堅島
浦添市
西原町
那覇市
南風原町
与那原町
豊見城市
佐敷町
知念村
玉城村
糸満市
具志頭村
久高島
沖縄本島
N


国道一号
国道329号
首里城跡
首里城公園
首里城正殿
守礼門
円鑑池
弁財天堂
円覚寺跡
沖縄県立芸術大学
首里高校
首里真和志町1丁目
首里真和志町2丁目
首里金城町1丁目
首里金城町2丁目
首里金城町3丁目
首里金城町4丁目
首里当蔵町3丁目
首里赤田町1丁目
首里赤田町2丁目
首里鳥堀町5丁目
首里崎山町1丁目
首里崎山町2丁目
首里崎山町3丁目
首里崎山町4丁目
首里中学校
城南小学校
松城中学校
石田中学校
金城ダム
那覇料金所
那覇市
0
500m

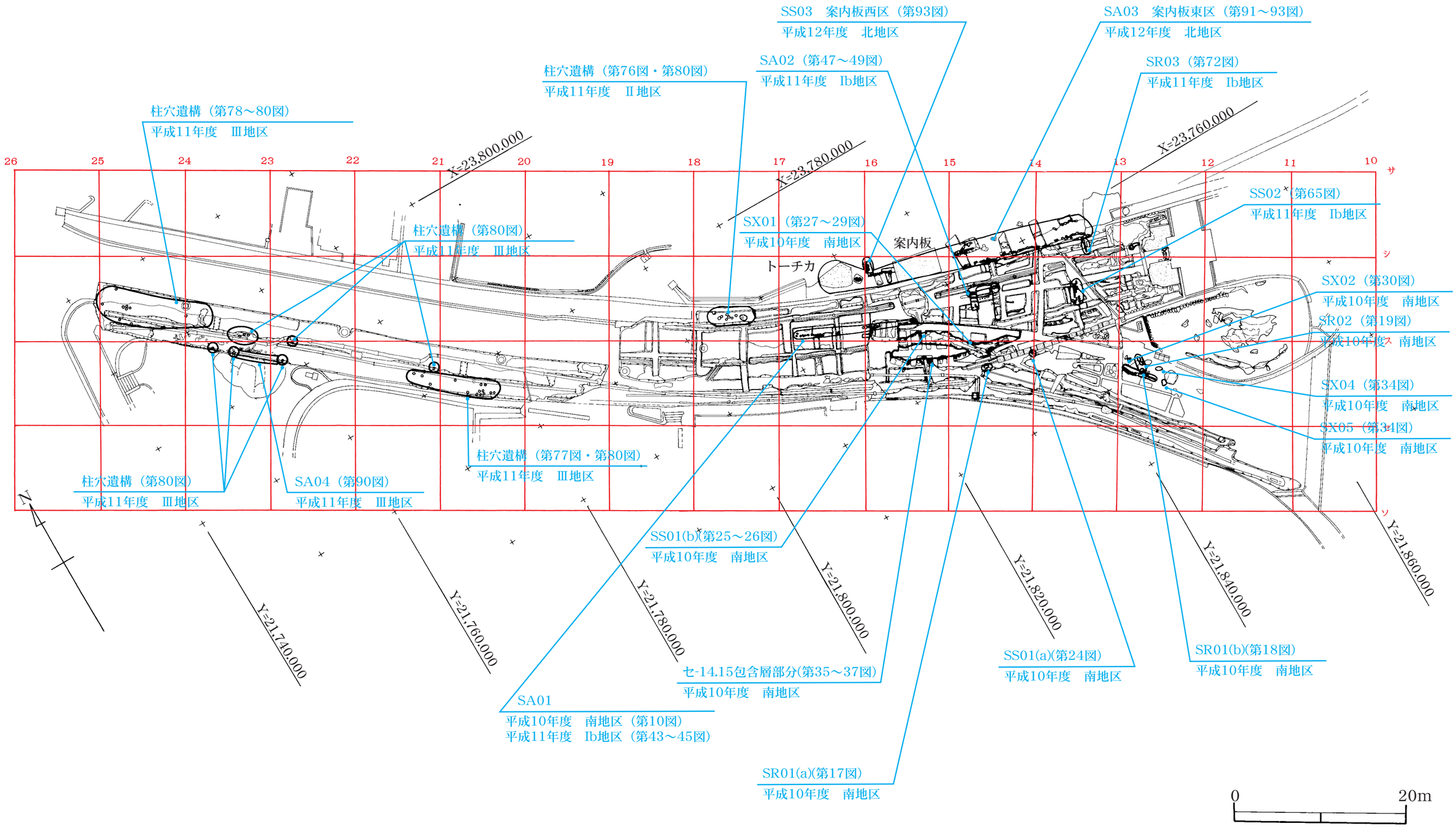
第３図　綾門大道位置図


Y=21,750,000
Y=21,800,000
Y=21,850,000
Y=21,900,000
Y=21,950,000
Y=22,000,000
X=23,900,000
X=23,850,000
X=23,800,000
X=23,750,000
城西小学校
城西小学校
首里教会アンデレ教会
城西幼稚園
守礼門
県道49号線
首里社館
（首里城公園レストセンター）
首里城公園管理センター
首里金城町一丁目
0
50m

第４図　調査区位置図



第５図　綾門大道各年度調査区位置図



第６図　遺構配置図及びグリット設定図

Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

綾門大道の所在する那覇市は沖縄県における県庁所在地であるとともに人口30万人を越える県内第一の都市である。市の面積は38.63km² で人口密度は7,722人／ km² と県内で最も人口が密集した地域となっている（那覇市役所2001）。

綾門大道は那覇市街北東部の琉球石灰岩から形成される台地に位置している。その台地は「首里台地」と呼称され、北側の城西小学校から円覚寺跡にかけては島尻層群（砂岩）そして、首里城南側は島尻層群（泥岩）に一部、挟まれて東西に広がる琉球石灰岩台地である（第７図）。首里台地は北方に標高100～200mの末吉山から虎頭山、弁が嶽に至る丘陵を頂き、南方に金城川が流れる凹地、さらには識名丘陵、東方は南風原町との境界を流れるナゲーラ川、西方は真嘉比川に囲まれ、他地域とは隔絶されている。このような自然の障壁に囲まれた首里台地の最高部には首里城が築かれ、綾門大道はその北西隣の台地縁から西側へ漸次下っていくような形で配置されている。近代から現代にかけて周辺は大幅な改変がなされ、とくに去る沖縄戦においては道に面した建物はほぼ全壊し、その跡地に住宅が建てられるに至った。後に綾門大道の東半分においては首里城公園の一部として整備が進められ、首里城への観光道として利用に供している。現在は東半分がレストセンターを含んだ観光地、西半分は住宅地と区分することができる。

第２節　歴史的環境

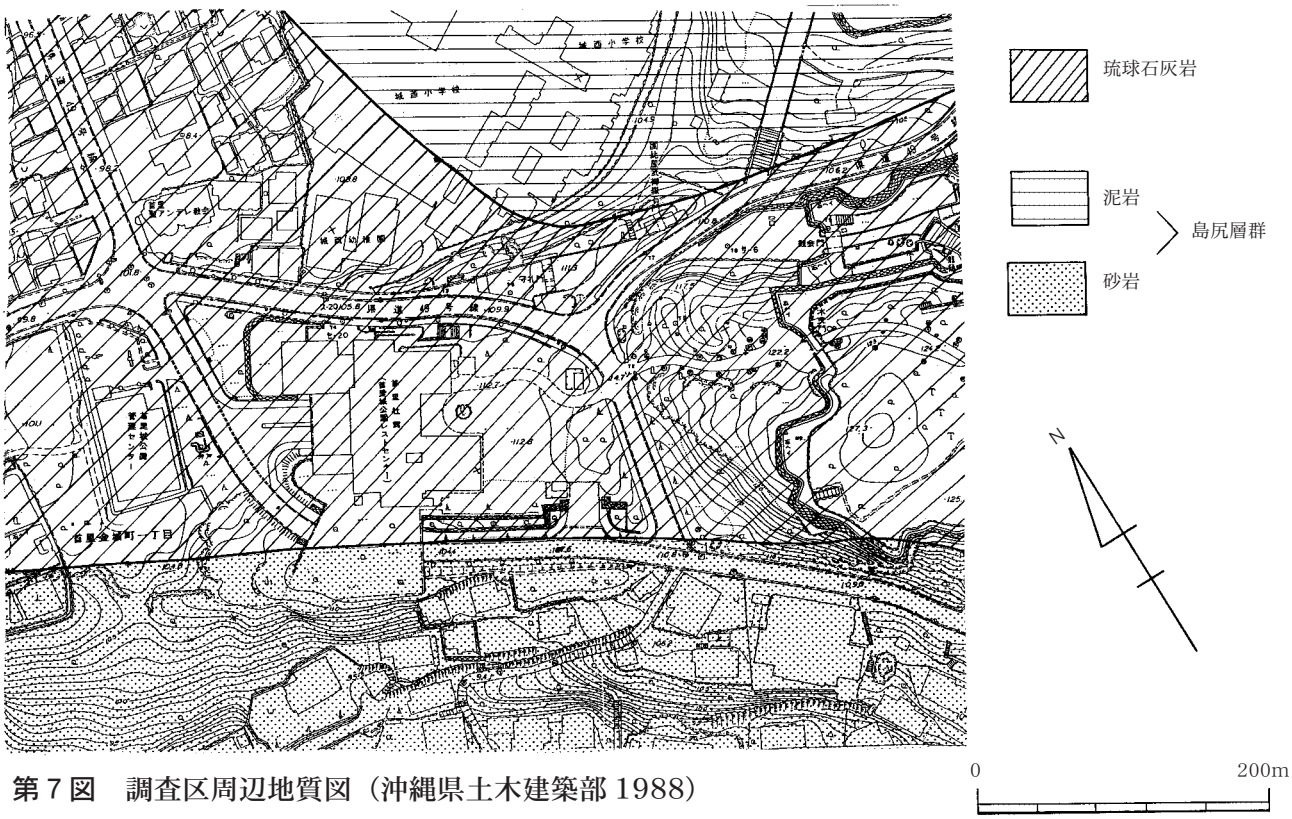
首里城城下の起源は定かではない。しかし首里城の過去における発掘調査から14世紀には正殿が存在し（當眞、上原1987）、首里城の東側（現首里杜館）には14世紀後半頃の集落が見られる（那覇市教育委員会 1999，2000）ことから、14世紀段階には首里城とそれに伴う城下集落が出現していたことが想定される。1429年の尚巴志による三山統一によって初めて沖縄本島内に統一政権が樹立され、その中心地を首里とした。しかし政権内部は不安定でわずか30年弱で金丸（後の尚円：第二尚氏初代王）によって政権は奪われてしまう。政権が安定するのは第二尚氏王統第三代尚真王が即位する15世紀後半以降のことであり、国内における内政改革並びに首里・那覇周辺の整備を積極的に行っていくようになるもこの頃である。

綾門大道そのものの起源について記載した史料は現在のところ確認されていない。よってその起源は詳しくないが、『朝鮮王朝実録　世祖実録』の世祖八（1463）年二月辛巳条において「公私、家舎は大小と無く其の制、一字の如く、回互無し」「民居は稠密にして屋を列べ墻を連ね、街路は甚だ狭し」と整然と家屋は街区割りされているような記載が見られることから、15世紀中頃には那覇、首里といった琉球王国内でも主要となる街は計画的な屋敷配置がなされていたことが示唆される。計画的な街路配置の中でおそらく綾門大道は首里と那覇を結ぶ幹線道路として第一に設定されていたものと推測される。

綾門大道の文献史料における初見は1534年に冊封のために明より来琉した陳侃による見聞記『使琉球録』である。その中で「牌坊一座有り。扁して中山と日う。此れより以往、路皆平坦にして九軌を容るべし。旁に石牆を壘ね、亦百雉の制の若し」と記載されている。これらから16世紀前半において中山門が存在していたこと、道は平坦で幅広く、道に接して屋敷囲いの石牆が整然と並んで配置されている様子を伺うことができる。またこの一文の後に冊封を受ける世子がこの道で待っていたという記載もあわせて、当時において既に那覇から首里へ至る重要な国道として機能していたことを読み取ることができる。

近世に入っても冊封使が綾門大道について記載している。1633年に冊封のために来琉した杜三策の従客胡靖は「坊ありて守礼之邦と曰ふ。即ち守礼村と名づく、此に至れば街衢更に活濶なり。両辺、尽く短街を立つ」と屋敷囲いの石牆が多く見られることを『杜天使冊封琉球真記奇観』に記載している。更に1756年に来琉した周煌は「又一坊、牌に曰く、守礼之邦と。（略）。道左に天界寺有り、寺の西南を王塋と為し、街に対するを大美殿と為す。」と天界寺、玉陵、大美御殿といった施設が配置されていたことが記載されている。

19世紀の中頃になると欧米諸国の艦隊が来琉するようになり、その遠征記の中で綾門大道について触れている。1854年にロシアから来琉したゴンチャロフは『日本渡航記』において「私たちは門を入った。私たちの前には広い通りが無限に続いていた。いや、それはさっきの路なのだが、ただサンゴ石を敷かずに砂利道のように小石を



第７図　調査区周辺地質図（沖縄県土木建築部 1988）

敷き詰めてあって、その両側にすばらしい樹木が植わった庭園か公園かがあった。塀の蔭から瓦屋根が所々に出ていた。（略）どうやらこの街路には上層階級又は金持ち階級が住んでいるらしく、広々として石の廊下が家まで続いていた。」とある。

また1853～1854年にかけてペリー探検隊が綾門大道を通った際の当時における様子について記載している。「段々と登っていって、木造の門をくぐるとその上方には漢字で中山と書いてあった。王城という意味らしい。本通りは敷石がしてあるため、大変綺麗であるが、屋敷又は家も見えない程の高い石壁をめぐらしその内側に花園を設けてあった。大通りの両側には高い石壁が築いてあって、所所から両方へ小路が通っている。」とある。ここで初めて路面の状況に関しての記載が見られる。ゴンチャロフは砂利道のように小石を敷き詰めているとあり、ペリーは敷石をしていたとある。ほぼ時期を同じくする綾門大路における路面状況の記載が両者において相違する理由については判然としない。しかし綺麗である、すばらしい樹木が見られるといったことから路の管理が行き届いていたことを窺い知ることができる。

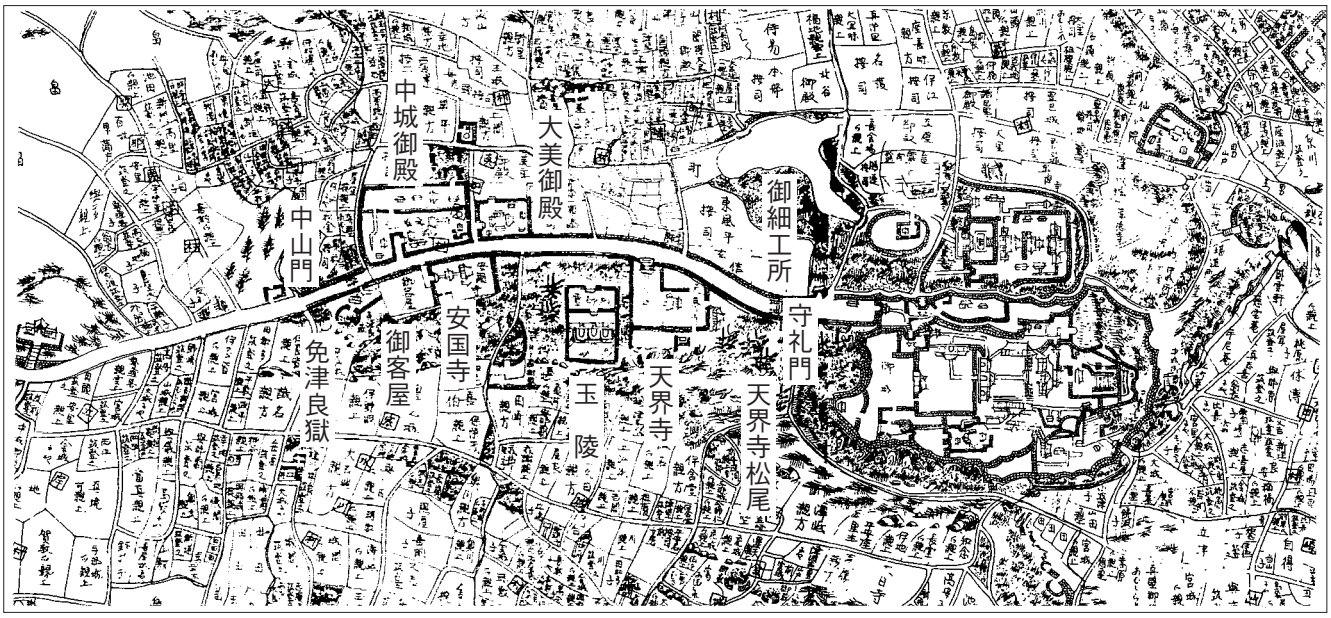
一方、首里古地図（1700年頃）では綾門大道沿いにかつてあった王府関連施設と士族の屋敷が記されている（第８図）。前者は前節で記したとおりであるが、後者は金武、大宜見、高嶺、護得久、玉城等のグスク時代の頃に王家から分かれた家筋の邸宅、王位継承事件で勝利した池内殿内の邸宅が連なる（沖縄県教育委員会1985）、所謂王族若しくは有力士族の居住区であったことが伺える。主な王府関連及び寺院、御嶽等の施設に関して以下、列挙する。

中山門

「下の鳥居」「下の綾門」との別称が付される牌楼。綾門大道の西側の起点となる坊門で1428年に創建されたとする。かつては板葺きであったが1681年に瓦葺きに改められた。額には「中山」と書かれており、第一の国門として、その姿を長くとどめていたが1908（明治41）年に払い下げを受け、同年に取り壊された。

守礼門

「上の鳥居」「上の綾門」との別称が付される牌楼である。『中山世譜』では1528年とその翌年の２度にわたる冊封使の派遣に伴って建造されたものとしている。中山門と同型同寸の第２国門で当初は「待賢」の額が掲げられ次いで「首里」の額が掛けられた。現在掲げられている「守礼之邦」の額は16世紀後半からとされてい



第８図　首里古地図（一部改変）

る。沖縄戦により全壊したが1958年に復元されている。

御客屋

中山門の南東、安国寺の西側に位置する薩摩の在番奉行が首里城に上る際の控所。首里王府の指示が有るまでこの場所で待ったと云われている。1733年に寺社奉行の下に移管され、御客屋守の座敷官２名、筆者２名が置かれた。

安国寺

御客屋の東隣にあった臨済宗の寺院。天界寺の末寺で山号は太平山とする。当初は首里久場川の地において1450～56年に創建され、周擁禅師を開山上人とした。その後、荒廃が進み、1674年に現在の場所に移転している。沖縄戦によって全壊したが戦後、再建されて現在に至る。

玉陵

尚真王が第二尚氏王統初代尚円王の遺骨を改葬するために1501年建立された。以降、第二尚氏王統の墓陵となった。墓室は東西に連なる岩山を穿ってつくられており、東、中、西室の３つから成る。破風墓が３つ連続した形式で沖縄県内では最大の墓陵である。戦後、修復工事が行われ、平成12年には世界遺産となっている。

大美御殿

首里城御内原の別邸で御小用所とも呼ばれた。安国寺の向かい、中城御殿の東隣に設置されていた。金穀収納や冠婚葬祭の礼式を行う御殿で王族の産所としても使用された。もとは尚清王が世子であった頃の別邸であったが、即位後、お産、葬礼、祭礼を行う場として新たに３つの建物を1547年に創建した。廃藩置県後は建物の一部が首里市役所の建物として転用された。

中城御殿

次期国王となる「世子」の御殿。尚豊王代（1621～40）の頃の創建とされ、1870年に龍潭の南側へ移設されるまでの約230年間、大美御殿の西隣に設置されていた。17～18世紀における中城御殿の建物配置や敷地面積に関しては『首里古地図』に記されている以外に詳細な記載は見られない。

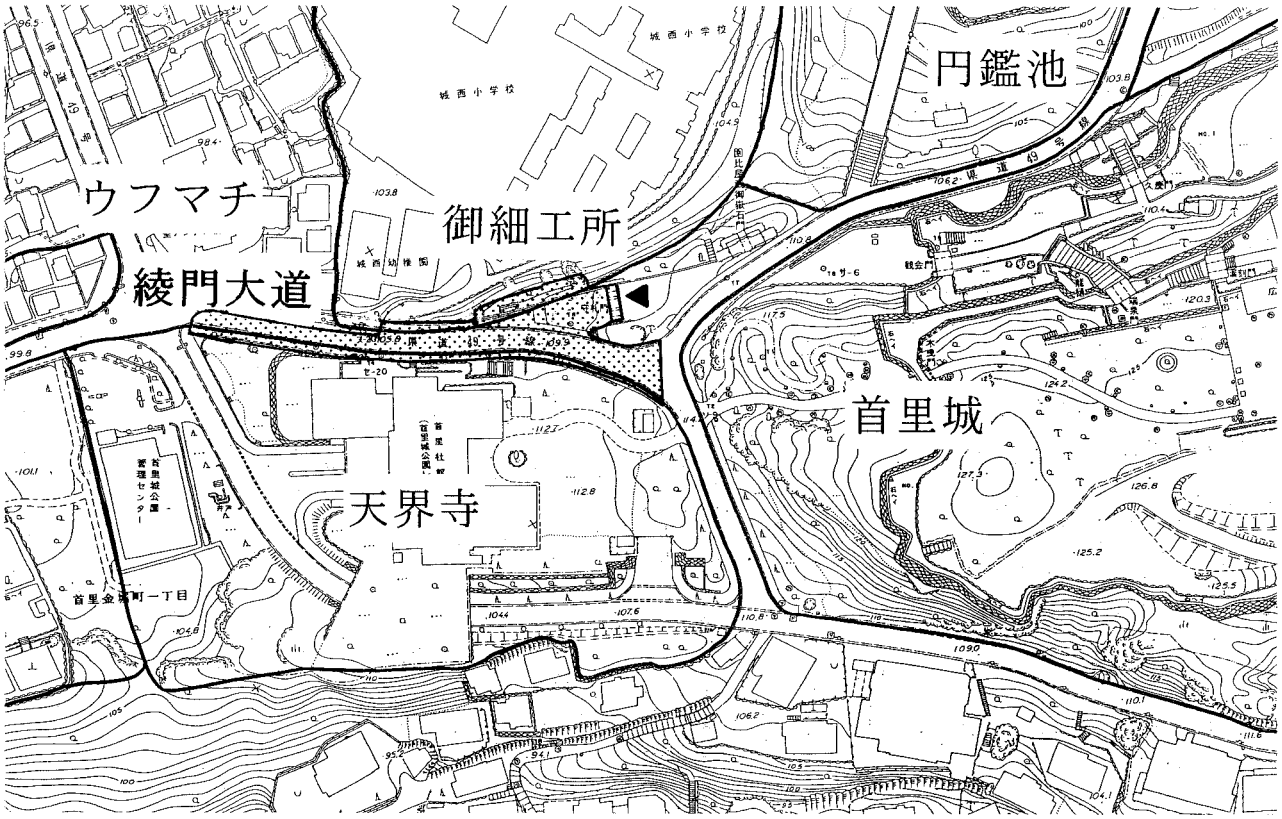
天界寺

玉陵の東隣にあった臨済宗の寺院。1450～56年の間に創建され、渓隠禅師を開山上人とする。創建当初は寝室、方丈、両廊、東房、西房、大門、厨司などを備えた王府内でも有数の大規模寺院であった。琉球処分後は荒廃し、明治末年頃には廃寺となった。現在は井戸のみが残されている。

天界寺松尾

天界寺の西側に正式名は妙高山、俗称天界寺松尾と呼ばれる松が植栽された小高い丘があった。妙高山とは梵語で須弥山を表し、仏教では世界の中心に聳える高い山を意味する。大正年間に道路補修用の砕石場となり、その後は沖縄師範学校の運動場に変貌した。

御細工所



第９図　周辺史跡位置図

王府や王家の縫物、冠、畳、提灯、表具、笠、鞍、硯、唐紙といった細工物を製作する役座。1612年に貝摺奉行所が設置されていることから17世紀前半頃に現在の場所に設置されたものと考えられる。その後、廃藩置県により廃される。

免津良嶽（美連御嶽）

真壁大あむしられの崇める八御嶽のひとつ。形の整った岩石をイビとする。その起源は詳しくないが17世紀に尚貞王が世子の頃に拝殿を設置したと云われている。

真壁殿内

大あむしられの殿内のひとつ。真和志・豊見城・小禄・兼城・高嶺・喜屋武・摩文仁・真壁・東風平・読谷山・名護・久志・久米島・宮古・八重山のノロ、ツカサの拝所或いは遙拝所となっていた。

当時の綾門大道は道幅が約12mであった。琉球石灰岩の砕片に線香の粉を混ぜる琉球独特の粘着材を厚めに敷き詰め、路面の艶出しとして石粉にネナシカズラのつき汁をまき固めるといった「サントー」と呼ばれる舗装工法がなされていた。聞き取り調査においては裸足で歩くに気持ち良く、雨天においてもぬかるむことはなかったとの証言が得られた（角川地名大辞典1986）。また近世には国王一代に付き一回、「綾門大綱」と呼ばれる大綱引が行われ、毎年正月には「とり出し」と呼ばれる馬調べ行事が行われた（真栄平房敬1983）。戦前の古写真では道の両脇には人の背程の屋敷囲いの石牆が道に沿って配置されており、道幅も守礼門の棟幅程有しているのが伺えることができる。明治末年頃には首里大町が隣接されると盂蘭盆の時期には綾門大道が大きな市に変わり、戦前まで多くの人で賑わっていたとされる。

近代に入ってから周辺の環境は文教地区に変貌し、大正の初めには県道40号線（現在の県道29号線）が開通したことによって、綾門大道は那覇から首里への主要幹線としての役割は失っていくこととなる。大正年間にはすでに路の管理補修がなされていなかったと云われている。また荷馬車の普及により、その轍によって路面が傷付けられ、徐々に「サントー」は剥げていったとされている。僅かに、玉陵前の約20メートルおきに敷設された２

基の水切り石のみしか残っていなかった程に荒れていた。そのため沖縄戦直前には首里市が綾門大道の大規模な補修工事を実施している。一方で守礼門は1929(昭和４）年に制定された「国宝保存法」により首里城正殿や歓会門等とともに国宝に指定され、さらに1936(昭和11）年には修復工事を受け、その翌年に完了している。

1945(昭和20）年の沖縄戦では、爆撃等により守礼門が全壊すると共に道も砲弾によって各所が陥没するほどの破壊を受けた。終戦後においては綾門大道の周辺は払い下げが行われ綾門大道一帯には住宅が建てられ、僅かに当時の様子を伝える史跡として玉陵が1956(昭和31）年、琉球政府によって有形文化財に指定され、修復、保存されるに至った。また、守礼門も1958(昭和33）年に復元されている。綾門大道そのものに関しては首里城跡に琉球大学が1950(昭和25）年に設置されるにあたって、綾門大道は造成がなされた。かつての路は一部、土が盛られ若しくは削られ、また下水設置の際に岩盤を削り込む等の破壊を受け、路面はアスファルト舗装に姿を変えた。平成に入ると首里城復元整備事業を契機に観光案内所首里杜館や首里城公園一帯を管理する首里城管理センターが綾門大道の南側に設置されると共に現在は守礼門とあわせて観光客が賑う、首里城歓会門へ至るメインストリートに変貌した。

参考文献

那覇市役所『那覇市統計書　平成13年度版』 2001
真栄平房敬「綾門大道」『沖縄大百科事典　上巻』沖縄タイムス社　1983
沖縄県教育委員会『沖縄県歴史の道調査報告書』 1985
當眞嗣一、上原静「首里城正殿の調査」『文化課紀要』第４号　沖縄県教育委員会　1987
沖縄県教育委員会『沖縄県歴史の道調査報告書』 1987
沖縄県教育委員会『琉球国絵図資料集』第３集　1994
ペルリ著　神田精輝訳『ペルリ提督琉球訪問記』国書刊行会　1997
ゴンチャロフ著　井上満訳『日本渡航記』岩波書店　1941
角川書店『角川地名大辞典　沖縄県』1986
那覇市教育委員会「天界寺跡」『那覇市文化財調査報告書』第42集　1999
那覇市教育委員会「天界寺跡」『那覇市文化財調査報告書』第43集　2000

Ⅲ章　平成10年度調査区

第１節　遺構と層序

平成10(1998) 年度の綾門大道跡の発掘調査では、県道50号線の道路を封鎖後に発掘調査区域内をパワーショベルによるアスファルト及び土盤材（石灰岩の小礫、白砂）の除去から始めた。また、道路下には４本の導水管及び水導管（ＳＤ01、ＳＤ02、ＳＤ03、ＳＤ04）や首里杜館から調査区域内を経過する排水溝、守礼門に石牆に隣接するコンクリート製の暗渠（ＳＤ06）に注意しながらアスファルト及び土盤の除去作業を調査員立合で実施した。次の作業としては、パワーショベルによる大型の導水管である（ＳＤ01）の除去を行ったが、ＳＤ01の導水管は守礼門方向に延びる暗渠（ＳＤ06）の両側面の一部を削岩機で穿孔後に暗渠内から導水管をとおして敷設していたため水道管を撤去する際に暗渠（ＳＤ06）の一部であるコンクリートが破損したようである。

首里杜館の排水が調査地区内に流れ込むため、排水桝から直接塩化ビニールパイプを使用して排水溝に連結させて排水の流入を防ぐ等の条件を整備した後に発掘調査に着手した。

発掘調査では、パワーショベルによるアスファルト及び土盤材の取り残しを手作業で除去したが、現代の導水管や水道管も含めて便宜的に全ての遺構等に記号と数字を冠して発掘調査を実施した。遺構については、確認された時点で継続番号を冠しながら包含層の有無を確認しながら遺構面や包含層直上まで掘り下げた。この作業と平行しながら土盤材が残っている溝の中を確認するために溝の中の土盤材を除去して、水道管（ＳＤ03、ＳＤ05）や電気ケーブル（ＳＤ04）を検出しながら攪乱層の除去を行った。

攪乱部分の除去に際しては、遺構や包含層の有無を確認するために土層観察用の畦を必要に応じて複数残しながら発掘調査を実施した。最終的に攪乱部分を除去した時点で、綾門大道の遺構及び包含層が残された。確認された遺構及び遺構の周辺には、遺構の構造、性格、時代を確認するために小さなトレンチや試掘穴を設けて確認した。

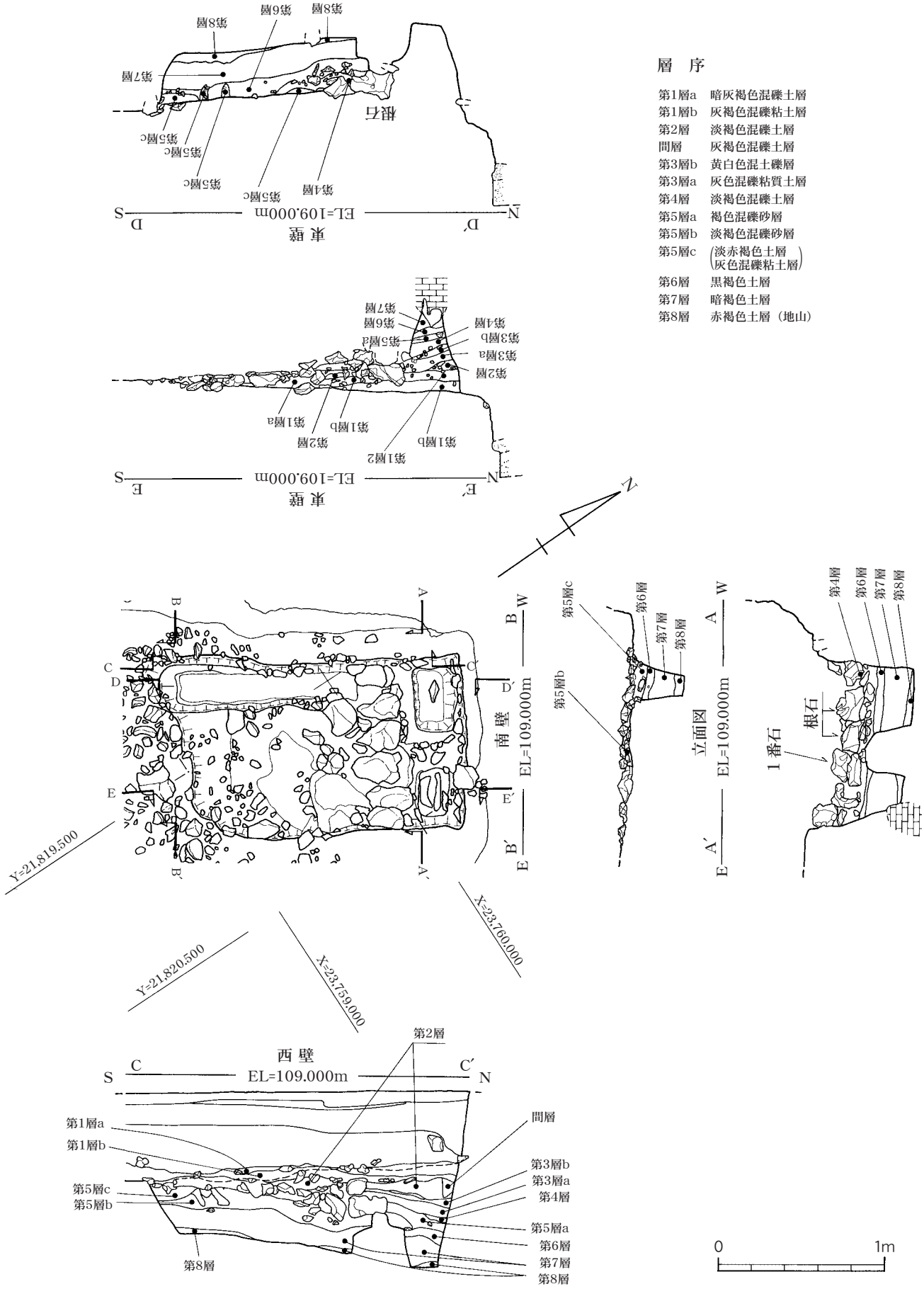
検出された遺構には、遺構の性格が判るように便宜的に以下のように冠した。

ＳＤ（排水溝、暗渠、溝状遺構）……ＳＤ01～ＳＤ06までの６基。
ＳＡ（石積み、土留め石積み）……ＳＡ01の１基。
ＳＲ（石列及び根石）……ＳＲ01(ａ)、ＳＲ01(ｂ)２基。
ＳＳ（礫敷き及び漆喰敷き）……ＳＳ01(ａ)、ＳＳ01(ｂ)２基。
ＳＸ（炉跡及び性格不明、土壙）……ＳＸ01～ＳＸ05　４基。

現代の遺構を含めて以上の15基が確認されている。現代遺構は、ＳＤ01からＳＤ06の６基、ＳＸ03の１基の計７基である。綾門大道及びそれと関連する遺構は、６基であった。

遺構及び層序に関しては遺構単位の遺構表（第１表、第８～10表、第15～18表、第22､23表、第27表）に明記してある。遺構毎の出土遺物については、遺構単位で整理し、出土遺物の個々の観察を行って、表記（第２～７表、第11～14表、第19～21表、第24～26表）した。

層序に関しては、遺構を構築する際の造成土を周辺の赤土（地山）やシルト質泥岩の風化土（方名：クチャ）なども使用しているようである。遺構の調査では、特に根石や根石下部の包含層から出土する遺物が遺構の時期決定に重要と判断されたため調査員による直接発掘や調査員が張り付いて作業を進めるなどの方法で実施した。従って、調査員が会議等で抜けた場合は、遺物の洗浄や遺構図の作成を指示した。



第10図　SA01　平面図・立面図及び断面図

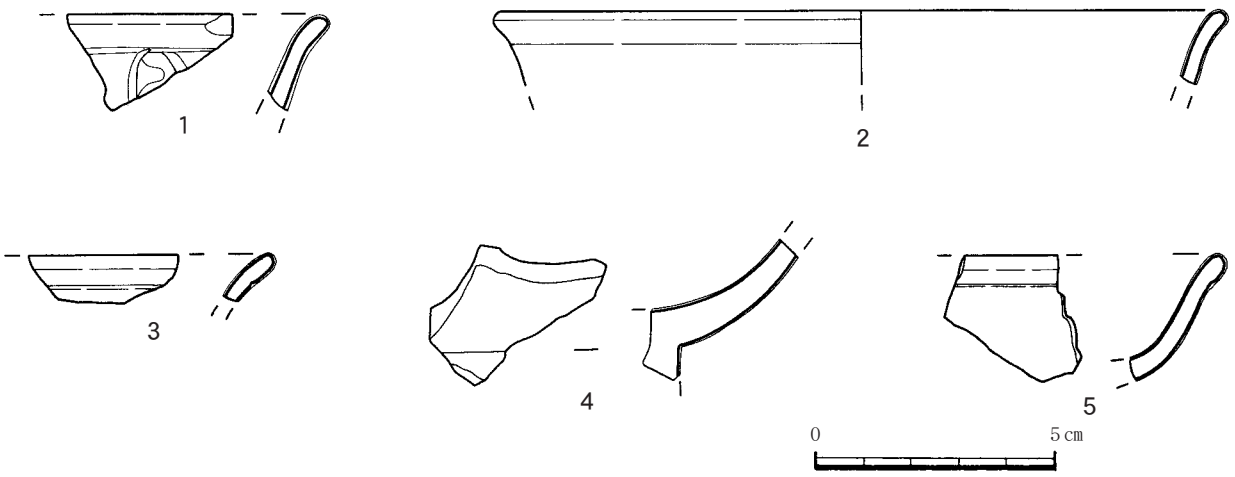
第１表　SA01 遺構表

位置	地　　区	セー 15　　X=23,760.200・X=23,759.900。　Y=21,829.100・Y=21,829.900。
	重　　複	SD03 の水道管埋没工事の際に西側部分が破壊されている。SS01(b) の下に位置する。
構造	形　　状	直線的形状。野面積み（土留め石積み）。遺構の主軸は N59°25′W。
	規　　模	土層観察用の畦（幅 50cm）により一部は隠れているが、石積みの長さは 173cm を測る。野面の石の個々のサイズは面石幅が、16 ～ 20cm・高さ 8 ～ 10cm・控え長さ 20 ～ 30cm の石を用いている。根石と一番石を含めた勾配は 80°であった。
	工 法 な ど	第 6 層（黒褐色土層）面が土盤の基礎となっていて本層の一部を掘り込んでいる。第 6 層の上に堆積した第４層（淡灰色混礫土層）が土留め石積みを安定させるために持ち込んだ土盤材とみられ、その土盤材の上位に５～ 10cm 程度の石灰岩礫を栗石として入れ込んだ後から土留めの石積を行っている。根石が主に残っているが、根石の上には、一番石が乗っている箇所もある。

出土遺物集計表

層序	種類	中国産青磁			小計	中国産白磁		小計	中国産染付	中国産褐釉		小計	沖無				小計	銭貨		小計	明朝系瓦		小計	鉄製品			小計	合計
		碗	皿	不明		碗	不明		不明	甕	不明		鉢	すり鉢	蓋	不明		聖宋元寶	有文		赤	灰		角釘	鉄片	不明		
第１層ａ	暗灰褐色混礫土層																				16	50	66					66
第１層ｂ	灰褐色混礫粘土層		1		1		1	1	1		4	5			1	1	2				1	11	13	3		1	4	26
第２層	淡褐色混砂土層									1		1									1		1					2
第３層ｂ	黄白色混土礫層										2	2						1		1	4		4	2	3		5	12
第３層ａ	灰色混礫粘質土層								1			1		1			1				2	1	3					5
第４層	淡褐色土層	1			1																							1
第５層ａ	褐色混礫砂層	2		2	4		2	2			1	1							3	3		1	1					11
第５層ｂ	淡褐色混礫砂層																					1	1					1
第５層ｃ	淡赤褐色土層												1				1					3	3					4
	灰色混礫粘土層																					1	1					1
第６層	黒褐色土層	2			2	1		1													4	4	8			2	2	14
	小計	5	1	2	8	1	3	4	2	1	7	10	1	1	1	1	4	1	3	4	28	72	101	5	3	3	11	143

その他の出土遺物	本土産染付（第３層ｂ黄白色混礫層　不明１点）・本土産陶器（第３層ｂ黄白色混礫層　不明２点）・沖縄産施釉（第１層ｂ灰褐色混礫粘土層　不明４点）・陶質土器（第６層黒褐色土層　不明１点）・瓦質土器（第３層ｂ黄白色混礫層　不明１点）・土器（第６層黒褐色土層　不明２点）・石材（第１層ｂ灰褐色混礫粘土層８点）・高麗系瓦（第３層ｂ黄白色混礫層・第５層ａ褐色混礫砂層　平２点）・大和瓦（第１層ｂ灰褐色混礫粘土層　平１点）・塼（第１層ｂ灰褐色混礫粘土層　３点）・ガラス（第１層ａ暗灰褐色混礫土層　１点）
備考	SA01 の土留め石積が、構築された時期については、第４層ａ及び第５層ｃから出土した陶磁器で最も新しいのは第５層ａから出土した 15 世紀後半～ 16 世紀に比定される白磁外反皿（第 12 図 2）である。当該遺構は 15 世紀後半～ 16 世紀に構築されたものとみられる。綾門大道の下部構造を知ることのできる重要な遺構である。



第 11 図　SA01　出土遺物・青磁

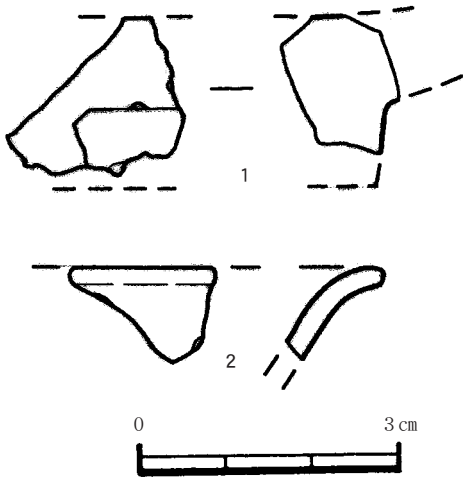
第 2 表　青磁観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	口　径	底径	文様･成形等の特徴	素　　地	釉色・施釉状況	層　序	出土地
第11図 1 図版18 1	碗	口縁	(15.8)	—	外反口縁型の蓮弁文碗。外体面には片切彫りによる蓮弁文を施した後で、軽く浅目の圏線を弁先近くに施している。14 c 中～ 15 c 中。	淡灰白色の微粒子。龍泉窯系。	明緑色の透明釉を厚く施す。貫入はない。	第 5 層 a 褐色混礫砂層	セー15 イ
第11図 2 図版18 2	碗	口縁	15.2	—	薄手の無文外反口縁碗。15 c 後半～ 16 c 。後述の 3 と同一タイプの碗とみられる。	灰色の粗粒子。微粒な黒色の鉱物を少量含んでいる。中国南部の窯か。	灰緑色の釉を薄く施す。二次的に加熱を受けた為、両面の釉が微細な気泡状となり、釉色も若干、白色に変色。	第 6 層黒褐色土層	セー15 イ
第11図 3 図版18 3	碗	口縁	—	—	薄手の外反口縁碗。外体面の口頸部に成形時のカンナによる削りが入る。15 c 後半～ 16 c 。	灰色の粗粒子。微細な黒色鉱物を少量含んでいる。中国南部の窯か。	明灰色の釉を薄く施す。ガラス質の透明釉。両面に細かい貫入。	第 5 層 c 淡赤褐色土層	セー15 イ
第11図 4 図版18 4	碗	底部	—	—	見込みを欠いた高台破片。高台際と高台の境目をやや深く削り取っている。14 c 後半～ 15 c 。	灰白色の細粒子。微細な灰色の鉱物を僅かに含んでいる。	灰緑色の釉を薄く施す。貫入はない。	第 5 層 a 褐色混礫砂層	セー15 イ
第11図 5 図版18 5	皿	口縁	—	—	玉縁口縁皿。やや大きめの玉縁状の肥厚を造る。肥厚帯直下は丸彫り様の工具で削り取っている。14 c 後半～ 15 c 中。	淡灰白色の微細子。龍泉窯系。	明黄緑色の釉を薄く施す。貫入はない。	第 1 層 b 灰褐色混礫粘土層	セー15 イ

※（　）内の数字は、図上復元はできなかったが、推算によって求められたサイズ。

白磁

第12図１図版18－６の高台破片は、高台の形状や成形等から森田勉のＣ群（註１）中に含まれ､15世紀前後に位置付けられているタイプと同一のものとみられる。この種の碗は、今帰仁城跡で白磁皿類（註２）と分類されているもので、調査者の金武正紀は「山北（今帰仁）王が中国交易を行った1383～1415年を中心に将来されたと考える。」（註３）と述べている。県内遺跡の出土状況から判断すると、金武正紀が今帰仁城跡で時期設定した1383～1415(14世紀末～15世紀初頭）年は妥当な時期と考えられる。



第12図　SA01　出土遺物・白磁

註

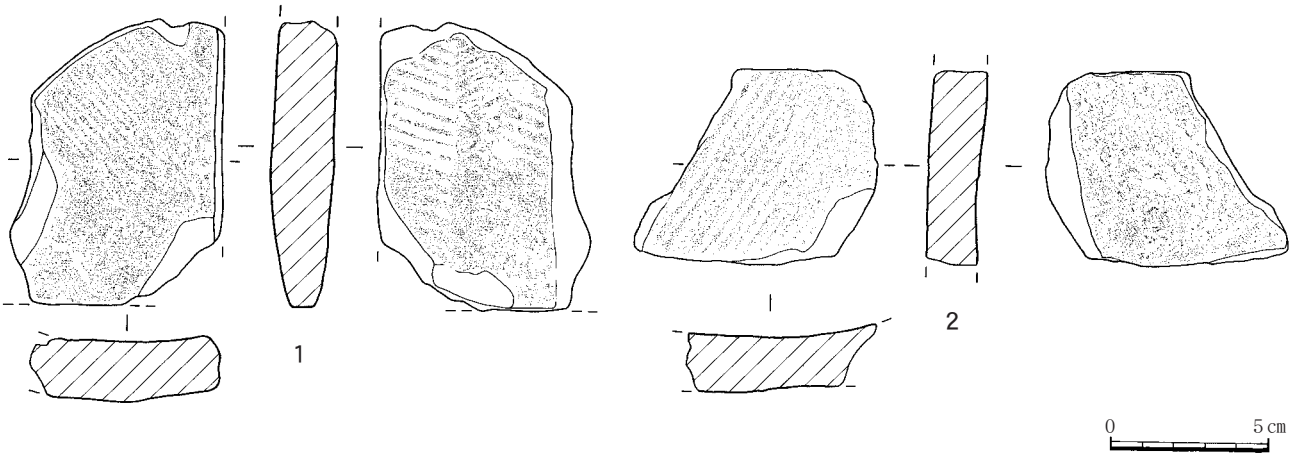
註１森田　勉「14～16世紀の白磁の分類編年」『貿易陶磁研究』№.２　日本貿易陶磁研究会　1982年。

註２金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ』今帰仁村教育委員会1983年。

註３金武正紀「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』６月号　№.320　ニュー・サイエンス社1990年。

第３表　白磁観察一覧

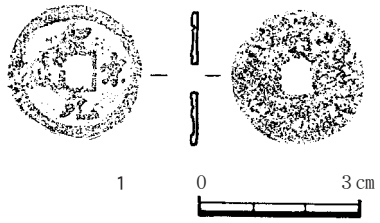
挿図番号 図版番号	器種	部位	口　径	底径	文様･成形等の特徴	素　　地	釉色・施釉状況	層　序	出土地
第12図 1 図版18 6	碗	底部	—	—	高台際が僅かに残る細片。高台外面の形状等から外反型の白磁碗が推定される。14ｃ末～15ｃ初。	灰白色の細粒子。	灰白色の薄い釉が高台際まで施されている。貫入はない。	第６層黒褐色土層（シルト土壌、ブロック混）	セー15 イ
第12図 2 図版18 7	皿	口縁	—	—	薄手の外反口縁皿。口縁の外反はきつく折り曲げて成形。15c後半～16ｃ。	淡灰白色の微粒子。	灰白色の薄い釉を施している。貫入はない。	第５層ａ褐色混礫砂層	セー15 イ



第13図　SA01　出土遺物・高麗系瓦

第４表　瓦観察一覧

挿図番号 図版番号	名称	種類	成　　形	器　　色	混入物	層　序	出土地
第13図 1 図版18 8	高麗系瓦	平瓦	平瓦の側面と下端部分の破片。凹面の左上に僅かに糸切り痕がみられる以外には成形時の削りの面である。右側面に分割面が残る。凸面に羽状の叩き目文がみられる。凸面右下は削りによる面取り成形。	凹面の色調は糸切り痕の部分が灰色で他は淡灰色。凸面は凹面よりも白色が強くなり灰白色となる。還元焼成の瓦。焼成はやや弱い。	素地に微細な石英を多く含む。僅かに微細な雲母片がみられる。希に細かい灰色や茶色の鉱物のが鉱物が含まれている。	第５層ａ褐色混礫砂層	セー15 イ
第13図 2 図版18 9	高麗系瓦		平瓦の小破片（上下・左右の側面は割れ面）。凹面には桶に巻き付けとみられる織目の細かい 0.4㎜四方の布目痕が中央より右寄りに集中している。同面の中央よりに布目痕と糸切り痕が切り合っている。凸面は削り面が主体であるが大部分は摩耗。	凹面の色調は、黄色味のある明るい灰色。凸面は黄色の強い明灰色。還元焼成の瓦。焼成は悪い。	素地に微細な石英を多く含む。僅かに微細な雲母片がみられる。僅かながら粗い茶褐色や細かい灰色の鉱物が含まれている。	第１層ｂ灰褐色混礫土層	セー15 イ

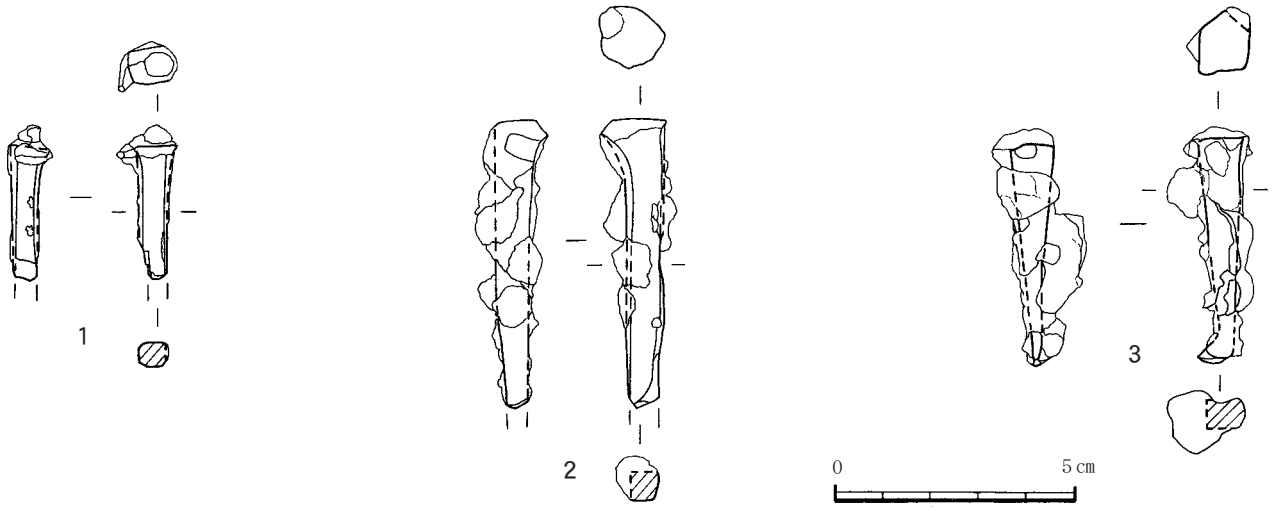


第14図　SA01　出土遺物・銭貨

第５表　銭貨観察一覧

挿図番号 図版番号	銭文	残存状況	初鋳年	書体	外縁外径（㎜）	外縁内径（㎜）	孔径（㎜）縦/横	厚み（㎜）外/内	重量（g）	観察事項	層序	出土地
第14図 1 図版18 10	聖宋元寶	完形品	北宋 1101年	行書	2.53	2.00	(5.0) ／ 6.4	1.4 ／ 0.9	4.1	濶縁タイプ（内郭の縁幅は2.3～3.0㎜と幅広）。面の縁および文字は鮮明であるが、背の縁は、不鮮明。青緑色の錆は面の一部と背の半分以上に発生する。銅銭。	第３層ｂ黄白色混礫土層	セー15 イ

※（　）は錆により正確に計測が出来ない部位。



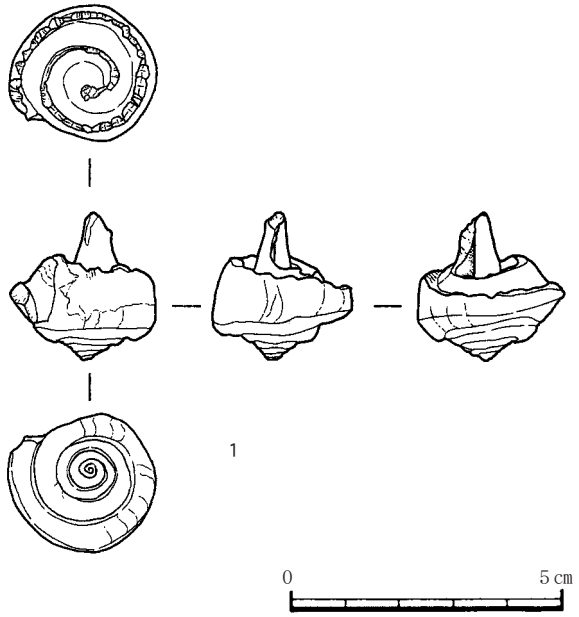
第15図　SA01　出土遺物・鉄製品

第６表　鉄製品観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	特　　徴	層　　序	出土地
第15図 1 図版18 11	角釘	頭部の平面観は長方形状となる皆折れ釘。頭部に錆が集中し、歪な形状となる。身の尖端を欠く。断面は方形状を呈する。残存長 3.2cm。頭部（縦 12mm、横 6.7 ～ 8.0mm）。身の幅（5.0 ～ 6.0mm）。残存重量 2.9 g。	第１層ｂ灰褐色混礫粘土層	セー15　イ
第15図 2 図版18 12	角釘	皆折れ釘。頭部の一部を欠き、平面観が錆により隅方形状となる。身の尖端を欠く。断面は方形状。錆が著しく発生したことにより錆瘤が身の上半部分に集中。地金にクラックが縦位あるいは斜位に入り剥離しやすい状態にある。残存長 5.9cm。頭部（縦 1.3mm、幅 1.2mm）。身の幅（6.4 ～ 7.6mm）。残存重量 12.3 g。	第３層ｂ黄白色混礫土層	セー15　イ
第15図 3 図版18 13	角釘	皆折れ釘。頭部の平面観は錆により歪な梯形状となる。ほぼ完形品であるが、身の先端が「く」の字に折れている。頭部から先端まで錆が全体的に発生し、身の上部と下部に錆瘤がみられる。断面は方形状。残存長 4.8cm。頭部（縦 11mm、横 1.87mm）。身の幅（5mm）。残存重量 9.8 g。	第３層ｂ黄白色混礫土層	セー15　イ

貝製品

第16図１図版18－14の類似例は、竹富町の竹富島カイジ浜貝塚（註１）で出土しているものと、同一タイプの資料とみられる。カイジ浜貝塚の独楽は､12世紀頃と考えられている。竹富島のカイジ浜貝塚発掘調査時に本タイプのマガキガイ製の独楽を作業員の請盛用吉氏は子供の頃にマガキガイ製の独楽を廻して遊んだ物と教示を頂いた。廃品となったマガキガイを遊具の独楽として再利用したものと考えられる。



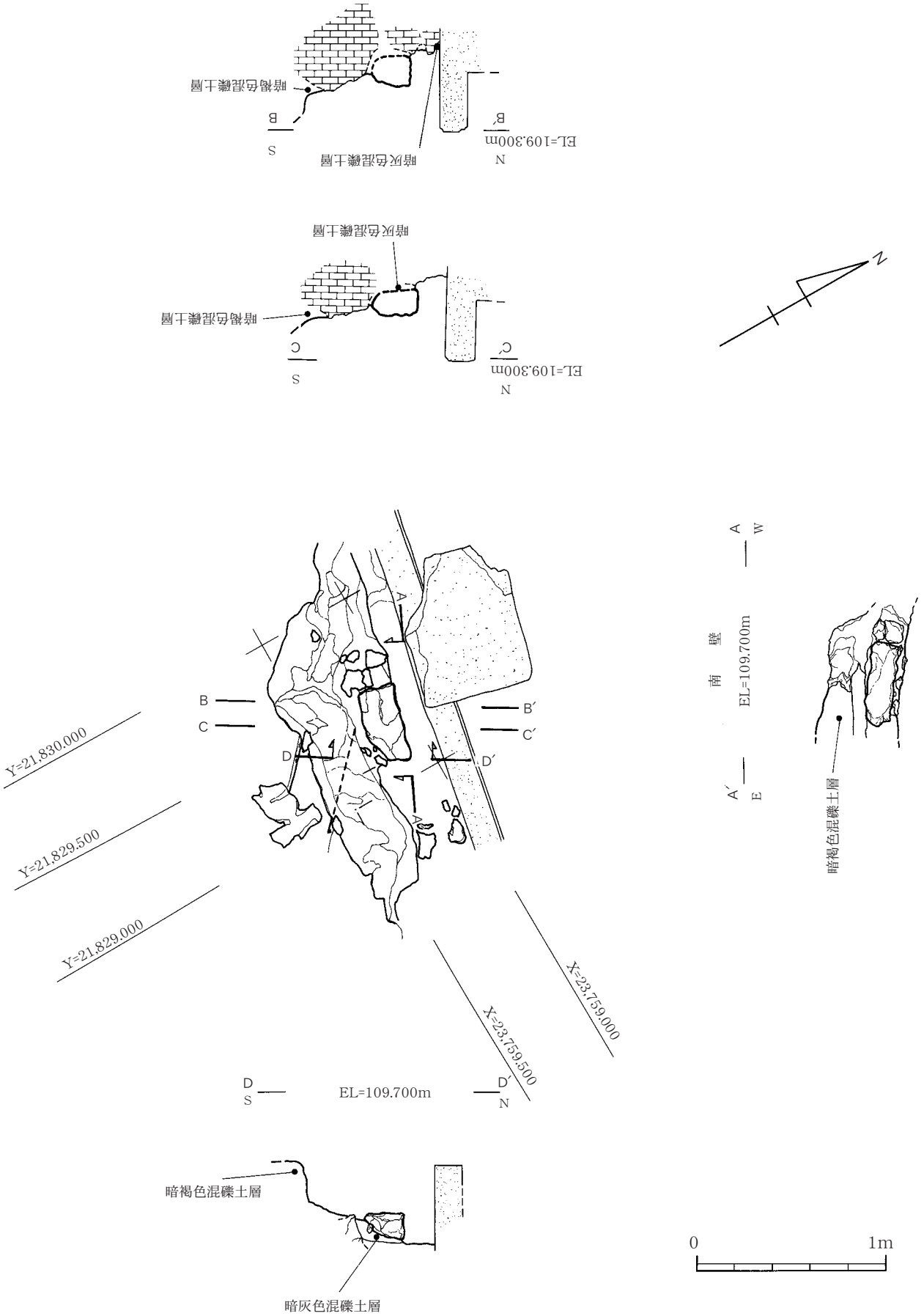
第16図　SA01　出土遺物・貝製品

註

註１　金城亀信・山城安生ほか
『竹富町カイジ浜貝塚竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』 沖縄県教育委員会1994年

第７表　貝製品観察一覧

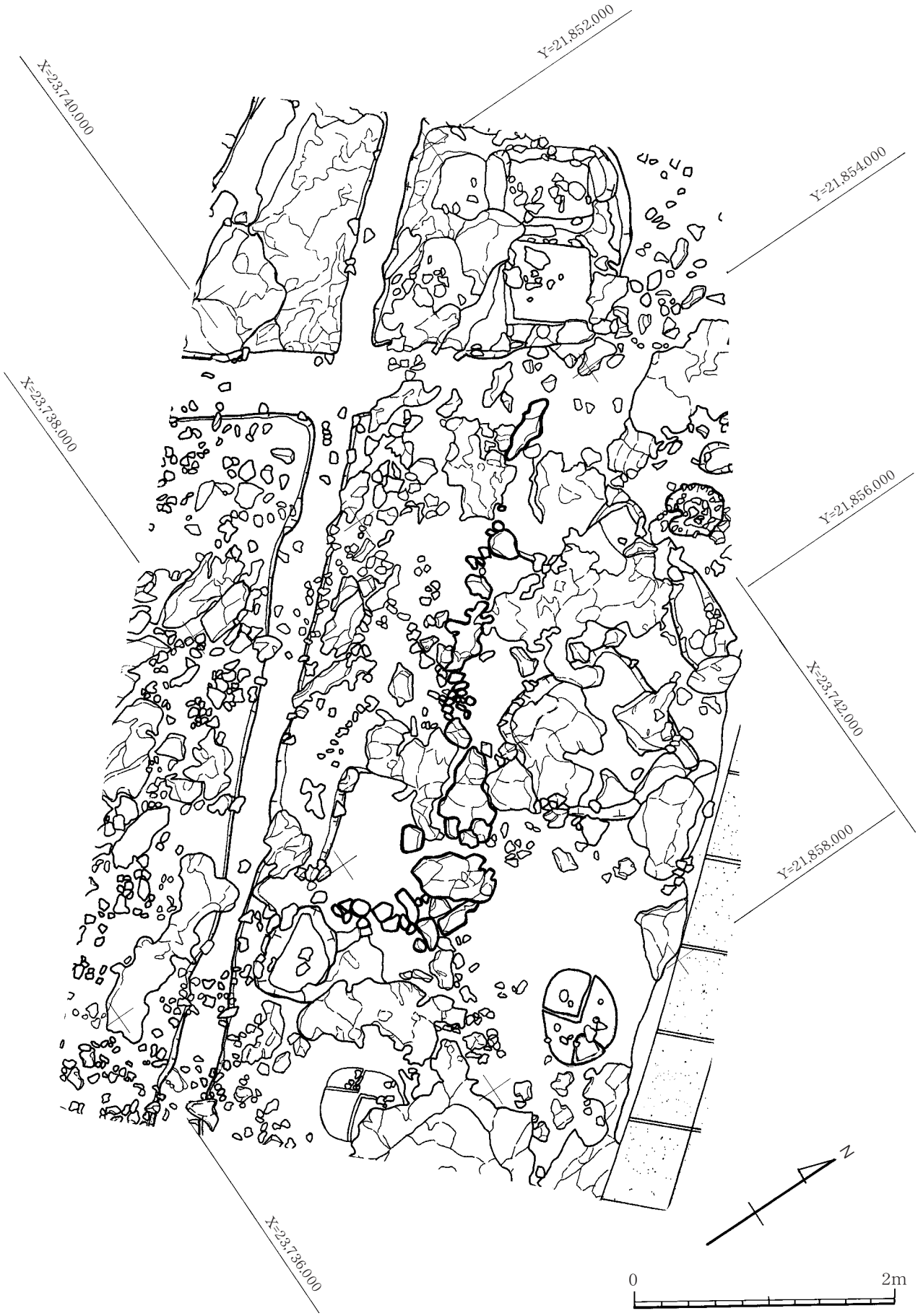
挿図番号 図版番号	観　察　事　項	層　　序	出土地
第16図１ 図版18 14	マガキガイ製の独楽とみられるものである。体層部を打ち欠いて殻軸の一部を残している。殻頂部は若干破損しているが、その破損部分が使用により摩耗している。残存長 27mm、最大幅 26mm、重量 11.9 g	暗褐色混礫土層	セー 15　イ １層ｂ



第17図　SR01（a）　平面図・立面図及び断面図

第８表　SR01（a）遺構表

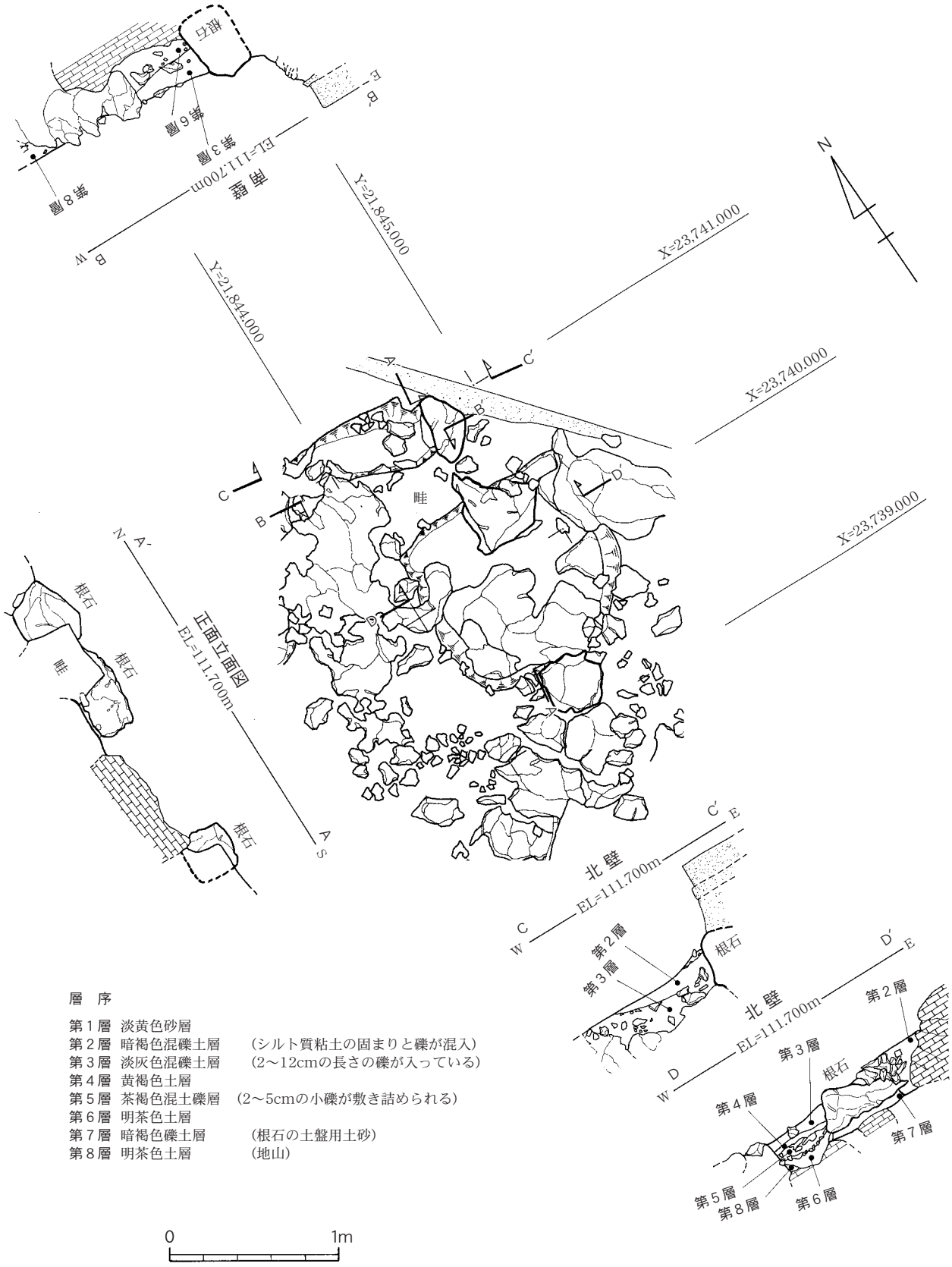
位置	地　　区	セー 14　　X=23,748.880・X=23,749.160。　Y=21,837.730・Y=21,838.140。
	重　　複	単独の遺構。切石（根石）のみ検出。SS01（a）と平行する時期。
構造	形　　状	直線的形状か。遺構の主軸　N71˚50′W
	規　　模	面石幅 44㎝・高さ 18㎝・控え長 24㎝。勾配は 87.5˚と 89˚。
	工　法　な　ど	根石を設置する目的で岩盤を抉り取るように加工。加工された岩盤の床面に根石下端の端持部に小礫と土砂（暗灰色混礫土層）を入れて根石の安定と勾配を調整したようである。
出土遺物	SR01（ａ）と SS01（ａ）と同様に SD06 を検出するために SD06 と平行して設定したトレンチ（SD06 東側トレンチ）内の下部（岩盤直上）から検出されている。トレンチ内は SD06(1958 年設置のコンクリート製の蓋付暗渠）の構築によって堆積層は根石直上まで撹乱されていた。トレンチ内の撹乱層（暗褐色混礫土層）からは、砲弾片、板ガラス、コカコーラの瓶、赤瓦、灰瓦、沖縄産荒焼及び施釉陶器中国産瑠璃釉瓶、青磁線刻細蓮弁文碗などの破片が出土している。但し、根石の周辺（控えと直下の土層：暗灰色混礫土層）は未撹乱。根石直下に推積する暗灰色混礫土層は、部分的な酸化鉄の影響を受けて赤褐色を帯びているところが観察できた。	
備考	SR01(a) と SS01(a)・SS01(b) は、同時期に平存した遺構とみられる。SR01(a) と SS01(a) は、SD06 東側トレンチ内の撹乱層から出土した遺構の中で、時期設定の標準資料となっている青磁線刻細蓮弁文碗（15 世紀後半～ 16 世紀）が出土している。SR01(a) 及び SS01 は、15 世紀後～ 16 世紀に構築された遺構とみられる。	



第18図　SR01（b）　平面図

第 9 表　SR01（b）遺構表

位置	地　　区	セー 14　　X=23,740.800 ・ X=23,738.700。　Y=21,852.140 ・ Y=21,850.150。
	重　　複	SR02 の下位。SX03 と並存か。本来は SR02 の下部の栗石か裏込目石。
構造	形　　状	東端から南へ約 80゜折れる。蛇行状の石列。遺構の主軸 N51゜45′W。
	規　　模	東西 420cm、南北 115cm。
	工　法　な　ど	SR02 の下位にあった栗石もしくは裏込目石とみられるが、東側が県道 50 号の工事の際に切石は消失し、裏込目の石などが動かされた。西側は砲弾や手榴弾によって岩盤直下の自然の鍾乳洞陥没と県道工事とで動かされた。SR02 の栗石か裏込目石。
主な遺物	第　1　層	・土色は茶褐色土層で、県道 49 号の工事や砲弾により撹乱。出土遺物として砲弾片、灰色瓦、赤瓦、炭などが出土。 ・第 1 層の下に地山の赤土と基盤の琉球石灰岩がある。
備考	SR02 を構築した際の裏込目石か栗石とみられる。時期的には SR02 と平行するものと考えられる。	



第19図　SR02　平面図・立面図及び断面図

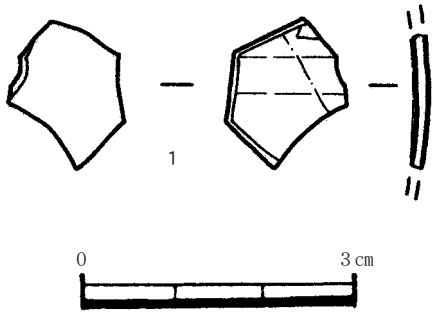
第10表　SR02 遺構表

位置	地区	セー 12　X=21,854.200 ・ X=21,854.100 Y=23,738.850 ・ Y=23,740.955
	重複	根石。
構造	形状	直線的形状。遺構の主軸は N2˚00′E。切石の面は西向き。
	規模	残存長 212㎝。個々の切石でサイズの判明している根石は、面石幅 52㎝・高さ 25㎝・控え長 52㎝であった。根石の切石に乗る一番石は残っていない。県道 50 号の工事の際に除去されたようである。根石の勾配は 66˚30′と強く傾いている。
	工法など	岩盤の上に 4 ～ 6㎝ の礫混じりの第 7 層（暗褐色混礫土層）が乗っていて、この土層の上に根石の切石を設置している。根石の艫（石尻）には、艫介石とみられるものと栗石の後方にある岩盤の間には礫混じりの土砂である第 2 層（黒褐色混礫土層）を投入したようである。 根石を設置するラインは、予め決定した後に岩盤を露出されるまで溝状に掘り下げた可能性が高いことを示す地山第 8 層（明茶色土層）の堀り込みがみられる。そのため根石の石面と根石と根石前面の凹地となった堀込石組部分には、面石の下端に当たる端持部分まで第 6 層（明茶色土層）を投入し、その後に第 5 層（茶褐色混礫層）の礫を敷きつめている。 本層上の第 4 層は礫を含まない間層である。第 3 層（淡褐色混礫土層）は、シルト質泥岩の風化土である方名クチャの固まりが僅かに混入する。

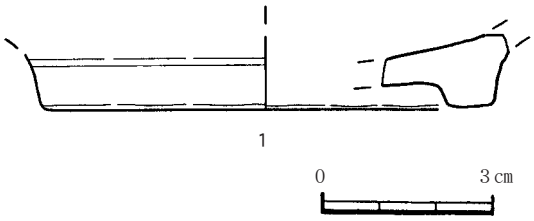
出土遺物

層序	種類	沖無	小計	陶質土器		小計	明朝系瓦					小計	石材	合計
		不明		火炉	不明		赤		灰					
		胴		底	胴		平	不明	丸	平	不明			
第 1 層	淡黄色砂層			1		1		6			3	9		10
第 2 層	暗褐色混礫土層	1	1					1			1	2		3
	－										1	1	1	2
第 2 層（撹乱）	淡灰色混砂土層						1	1		1		3		3
第 3 層	黄褐色土層				1	1	1	1		1	2	5	1	7
	－	1	1								2	2		3
第 3 層相当	－							1				1		1
第 5 層	－								1			1		1
－	黒褐色混礫土層										1	1		1
－	暗褐色土層										1	1	2	3
小計		2	2	1	1	2	2	10	1	2	11	26	4	34

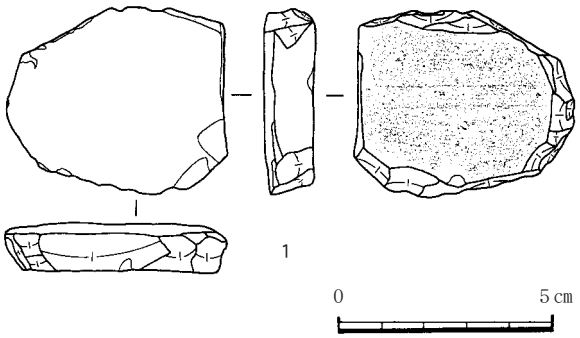
その他の出土遺物	中国産青磁（第 3 層黄褐色土層不明 1 点）・中国産白磁（第 3 層黄褐色土層 1 点）・中国産染付（第 3 層黄褐色土層不明 1 点）・中国産白磁（第 3 層黄褐色土層 1 点）・中国産黒釉磁器（第 2 層暗褐色混礫土層不明 1 点）・鉄製品（第 1 層淡黄色砂層 1 点）・ガラス（第 2 層暗褐色混礫土層 1 点）・不明（第 2 層暗褐色混礫土層 1 点）・円盤状製品（第 2 層攪乱淡灰色混砂土層）
備考	SR02 の根石面の下端に当たる端持部分に堆積した第 5 層からは明朝系灰色瓦（丸瓦）と青磁皿の高台片が出土していることから 15 世紀頃に構築された石積とみられる。



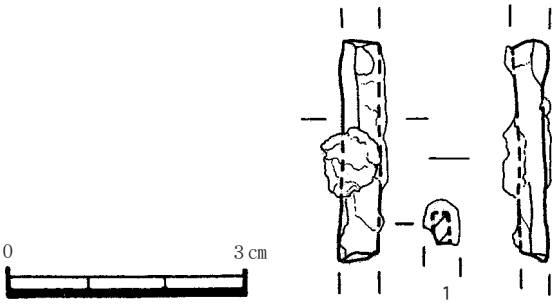
第20図　SR02　出土遺物・黒釉磁器



第21図　SR02　出土遺物・陶質土器



第22図　SR02　出土遺物・円盤状製品



第23図　SR02　出土遺物・鉄製品

第11表　黒釉磁器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	口径 器高 底径	観察事項	層序	出土地
第20図 1 図版19 1	袋物	―	小品で袋物の胴部片。器壁が1.2～1.3㎜と非常に薄く、轆轤引きの精緻な製品。外体面に黒褐色の釉を施す。内体面には釉垂れがみられる。素地は淡灰白色の微粒子。中国景徳鎮窯製品とみられる。	南東側第2層暗褐色混礫土層	セー12 ① SA03

第12表　陶質土器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	底径	特徴	調整	素地等	層序	出土地
第21図 1 図版19 2	火戸	底部	8.0	畳付けに糸切り痕が僅かに見られる。他は使用による摩滅である。	高台際から高台外面は回転篦削り。高台内面は丁重なナデ。内体面は回転擦痕。	焼成は悪く脆い。素地は細かい。微細な石英を多量に含む。僅かに微細な雲母片と1～2㎜程度の茶褐色の物質を含む。色調は淡橙色。	第1層淡黄色砂層	セー12 ① SA03

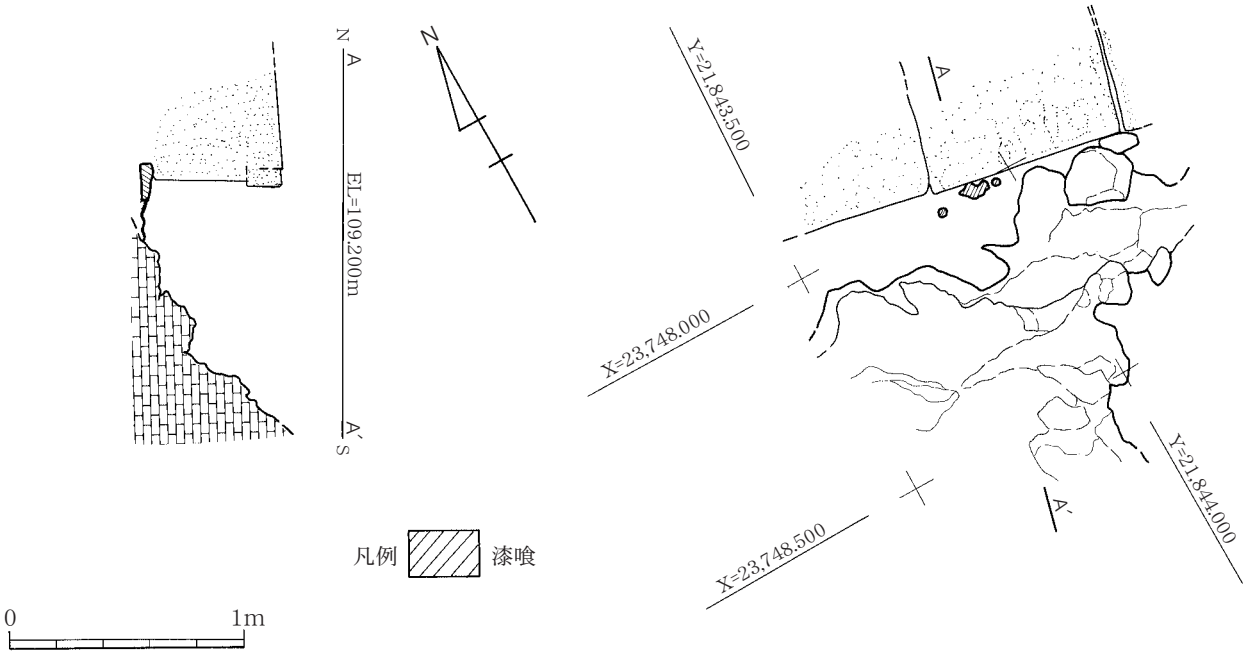
第13表　円盤状製品観察一覧

単位：㎜・g

挿図番号 図版番号	素材	長径 短径 厚さ 重さ	使用部位	官／破	備考	層序	出土地
第22図 1 図版19 3	沖縄産無釉陶器	52 42 9 33.8	壺の胴部	完形品	右側面及び上面の大半は破損面で、下面と左側面は遊具とし製作する際の打割による剥離面である。打割調整は主に外面から実施されている。	南側第2層撹乱淡灰色混砂土層	セー12 SA03 ①

第14表　鉄製品観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	備考	層序	出土地
第23図 1 図版19 4	縁金具	鉄製の縁金具とみられる。断面は「U」の字に折り曲げられている。鉄瘤が中央付近に発生している。残存長2.7cm・身の幅4.8㎜。厚さ4㎜。残存重量1.4ｇ。	第1層淡黄色砂層	セー12 SA03 ①

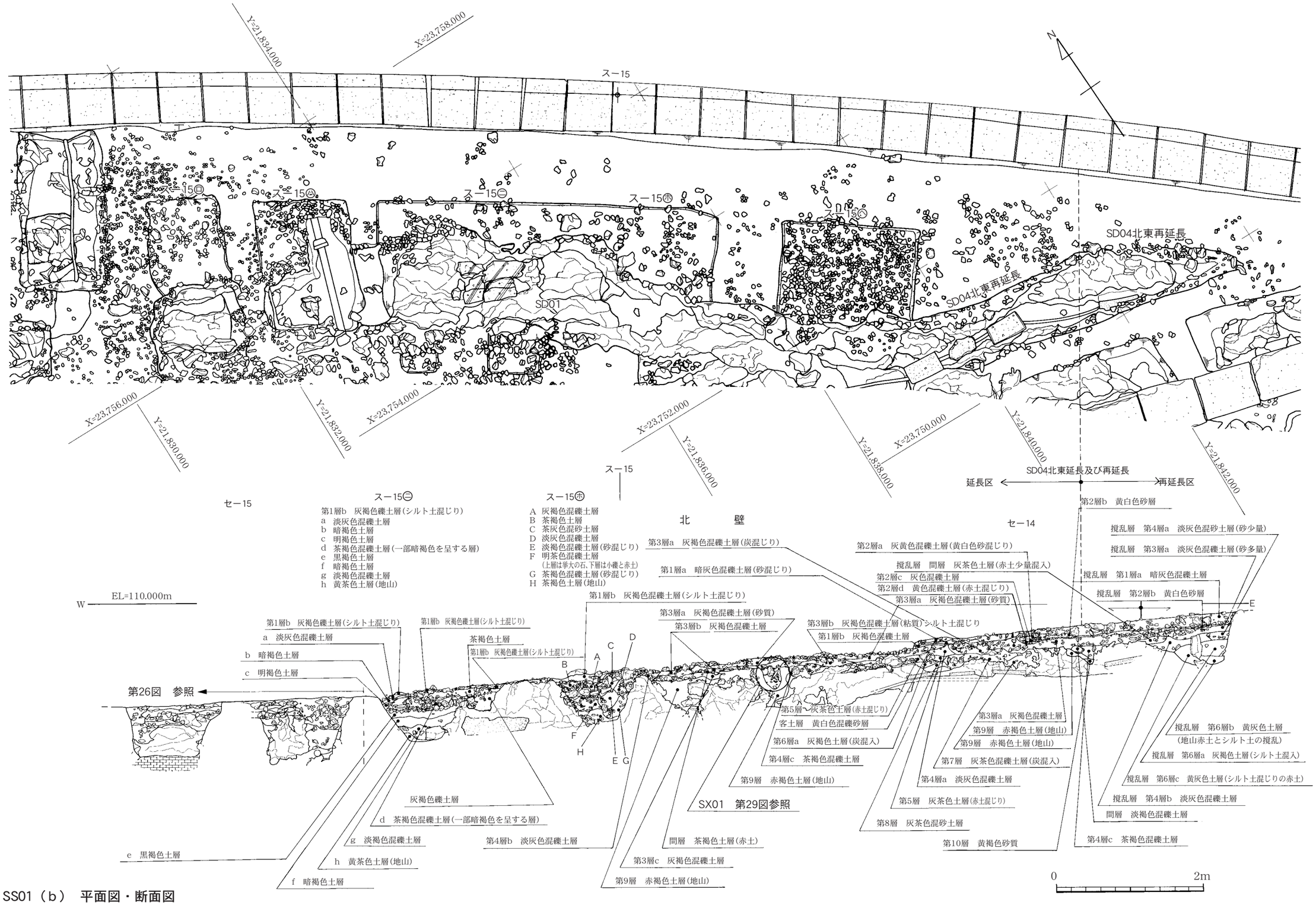


第24図　SS01（a）　平面図・断図面

第15表　SS01（a）遺構表

位置	地　　区	セー14　　X=23,747.730 ・ X=23,747.900。 Y=21,843.690 ・ Y=21,843.990。
	重　　複	SD06（1958 年設置の暗渠）の直下に在る。SR01（a）と平行する時期。
構造	形　　状	漆喰の破片（歪な三角形・隅丸方形）
	規　　模	漆喰の残存するサイズは長軸 15㎝, 短軸 8㎝ ＋ Xcm, 厚さ 4㎝。傾斜は西に傾き、勾配は 10°の傾斜。
	床　　面	SR01（a）の根石直下と同一の土盤の土砂（暗灰色混礫土層）を岩盤床面に敷いて、その上に厚く、漆喰を施したようである。ここでは SS01（a）を漆喰と表記したが、その成分については将来の化学分析に委ねられるところである。

出土遺物	種類		青磁		白磁		染付				瑠璃釉	中国産褐釉			沖縄産施釉陶器					沖縄産無釉陶器					陶質土器	土器	明朝系	石材	現代遺物		合計
			碗	碗	碗	小杯	碗	鉢	皿	小杯	瓶	甕	壺		鉢	火取	瓶or壺	器種不明		鉢	すり鉢	瓶	瓶or壺			器種不明	器種不明	軒丸	石英	小碗	ガラス	
	層序		口縁部	胴部	胴部	底部	底部	口縁部	胴部	胴部	胴部	胴部	胴部	底部	底部	口縁部	胴部	底部	胴部	口縁部	胴部	胴部	胴部	不明	胴部	胴部	胴部	赤		口縁部		
	セー13･14 SD06東側トレンチ	暗褐色混礫土層	1	4	1	1	1	1	1	1	1	8	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	42
	合　計		1	4	1	1	1	1	1	1	1	8	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	42
備考	SS01（a）と SR01（a）の関係は、SR01（a）が側溝石積みの根石で、SS01（a）は側溝の床面に敷かれた漆喰とみられる。																															



第25図　SS01（b）　平面図・断面図

スー15㊐　撹乱層

撹乱1層　緑灰色混礫土層(砲弾片含む)

スー15㊐　包含層

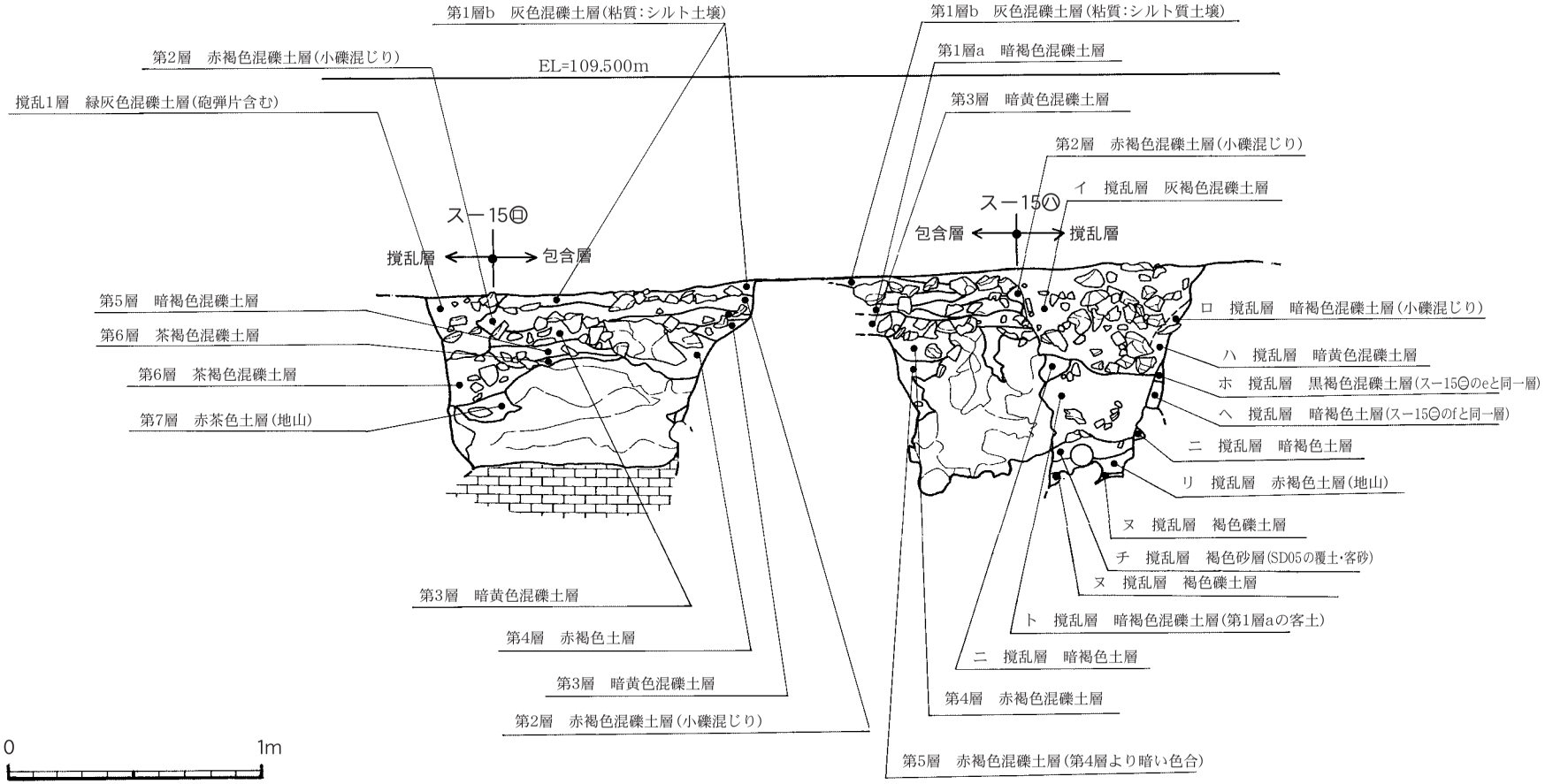
第1層b　灰色混礫土層(粘質:シルト土壌)
第2層　赤褐色混礫土層(小礫混じり)
第3層　暗黄色混礫土層
第4層　赤褐色土層
第5層　暗褐色混礫土層
第6層　茶褐色混礫土層
第7層　赤茶色土層(地山)

スー15㊅　包含層

第1層a　暗褐色混礫土層
第1層b　灰色混礫土層(粘質:シルト質土壌)
第2層　赤褐色混礫土層(小礫混じり)
第3層　暗黄色混礫土層
第4層　赤褐色混礫土層
第5層　赤褐色混礫土層(第4層より暗い色合)

スー15㊅　撹乱層

イ　撹乱層　灰褐色混礫土層
ロ　撹乱層　暗褐色混礫土層(小礫混じり)
ハ　撹乱層　暗黄色混礫土層
ニ　撹乱層　暗褐色土層
ホ　撹乱層　黒褐色混礫土層(スー15㊀のeと同一層)
ヘ　撹乱層　暗褐色土層(スー15㊀のfと同一層)
ト　撹乱層　暗褐色混礫土層(第1層aの客土)
チ　撹乱層　褐色砂層(SD05の覆土・客砂)
リ　撹乱層　赤褐色土層(地山)
ヌ　撹乱層　褐色礫土層



第26図　SS01（b）立面図及び壁面図

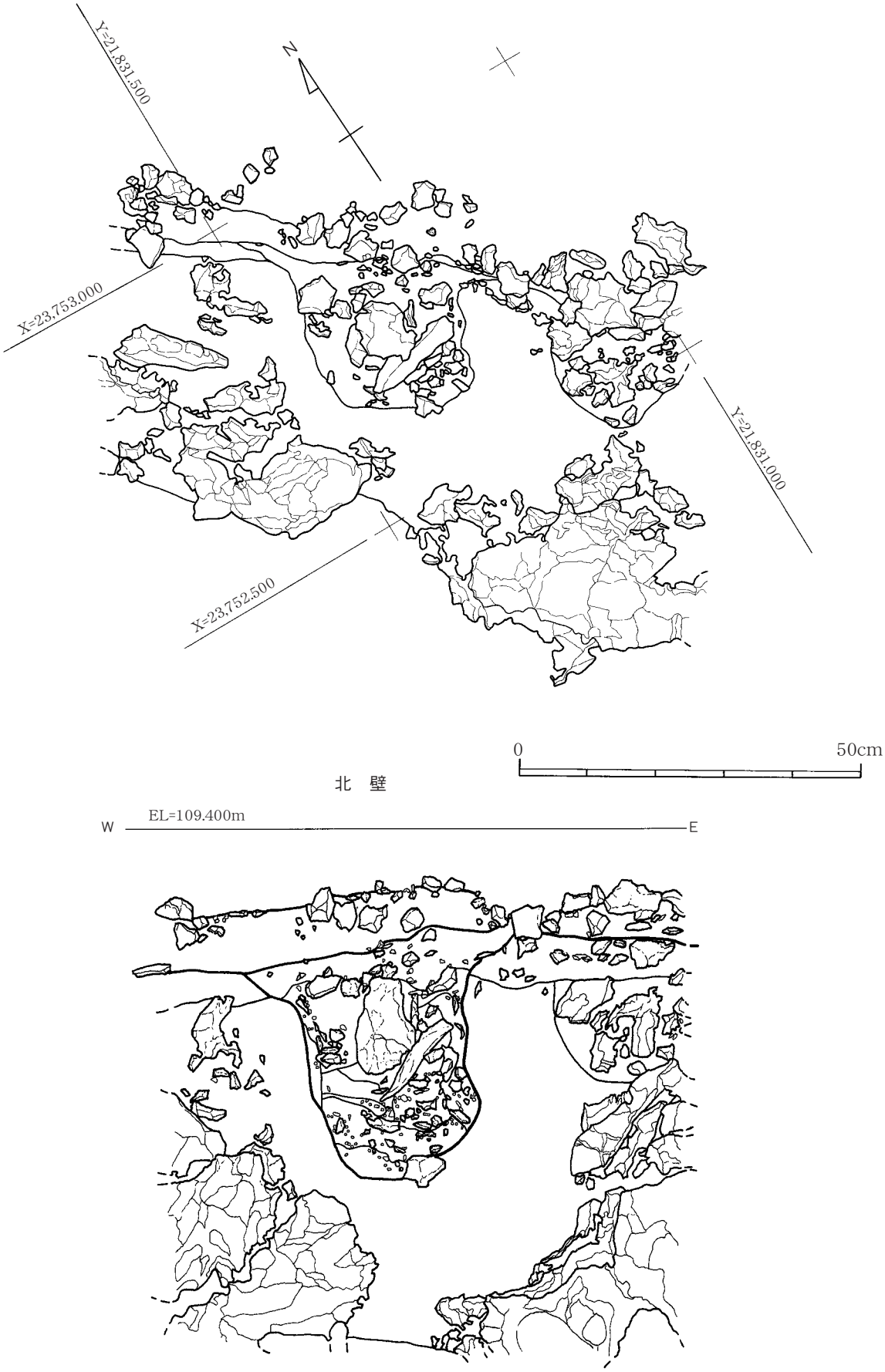
第16表　SS01（b）遺構表

位置	地　区	セー 14 西側　（南西隅 X=23,757.540・Y=21,830.480。北西隅 X=23,759.480・Y=21,831.500） 中央部最大　（中央南 X=23,751.310・Y=21,840.000。中央北 X=23,753.900・Y=21,834.060） セー 15 東側　（東南隅 X=23,749.760・X=21,843.690。北東隅 Y=23,750.560・Y=21,844.180）
	重　複	SX01 と重複。SS01(b) は、現代の遺構 SD01 ～ SD05 の 5 基によって大部分が破壊される。
構造	形　状	残存形は歪な長方形。遺構の主軸は N56°　W（本来は守礼門方向 N103°45′E に延びる）である。綾門大道建設時の基礎部分（造成土盤）。
	規　模	残存最長軸 12m52cm（SD04 北東端まで）、残存幅最大 2 m 33cm、造成土盤の厚さの平均は 20cm 前後。
	工法など	基本的に岩盤もしくは地山の上に石灰岩の礫を投入して基礎の土盤とする。その土面の上には、綾門大道の傾斜（勾配）や平坦舗装を目的とした土砂を投入する。更に石灰岩の小礫を全面に敷いて、土盤の安定を図っている。以上のように礫敷き、土砂、礫敷きで舗装整備。土砂、礫敷きで再舗装の整備と綾門大道は整備及び再整備がされたのではないかと残存の基礎土盤から推定され

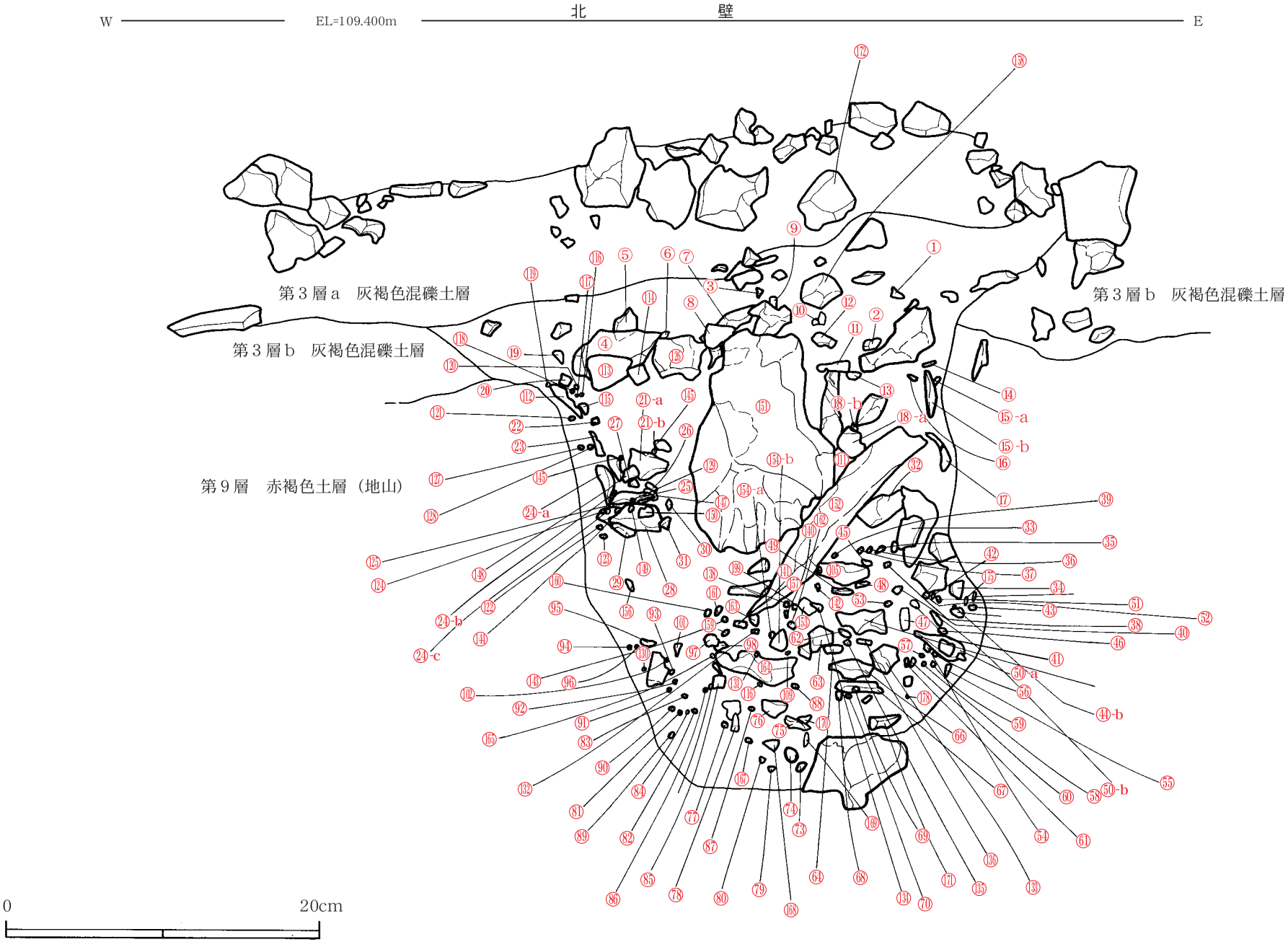
出土遺物

層序			種類	青磁			小計	染付	小計	中国・タイ産褐釉		小計	陶質土器		小計	沖施						小計	無釉							小計	現代遺物	合計
				碗		不明		皿		壺			器種	不明		碗		瓶	蓋	袋物	器種不明		碗	壺	瓶 or 壺			器種不明	鉢		ガラス	
				口縁部	胴部	口縁部		底部		胴部	底部		胴部	底部		口縁部	底部	胴部	撮み	胴部	胴部		口縁部	胴部	胴部	底部	不明	胴部	底部		ビー玉	
セー15	ロ	第1層a	暗灰色混礫土層										1		1																		1
セー15	ロ	第1層b	灰色混礫粘土層								1	1																					1
セー15	ハ	第1層b	灰色混礫粘土層																				1							1		1
セー15	ハ	第1層b	灰色混礫土層			1	1																										1
セー15	ハ	第1層b	淡褐色混砂混礫土層																														0
セー15	ハ北側	第1層																															0
セー15	ニ	第1層a	暗灰褐色混礫土層										1		1													2		2		3
セー15	ニ	第1層a	暗灰色混礫土層							1		1																				1
セー15	ニ	第1層b	灰色混礫粘土層					1	1																							1
セー15	ニ間畦	第1層b	灰色混礫粘土層																									1		1		1
セー14	ホ	第1層a	暗灰色混礫土層							1		1					1					1									1	3
セー14	ホ	第1層a	暗灰色混礫土層							3		3																				3
セー14	ホ	第1層a	暗灰褐色混礫土層							1		1																				1
セー14	ホ	第1層b	灰色混礫粘土層											1	1							1							1	1		3
セー14	ホ		灰褐色土層（赤土ブロック混入）					1	1																1		1			2		3
セー14	ホ・ヘ間畦		灰褐色土混（クチャ混入）															1				1										1
セー14	ホ北側										1	1													1	1	1			2		3
セー14	ヘ	第1層a	暗灰色混礫土層		2		2	2	2	2		2	1		1	3		1		1	1	6		1				5		6		19
セー14	ヘ	第1層a	暗灰褐色混礫土層							1		1	1		1													1		1	1	4
セー14	ヘ	第2層	淡黄白色混土礫層																1			1										1
セー14	ヘ		淡灰色混礫土層	1			1														1	1						1		1		3
セー14	ヘ北側		白色混砂礫層下部																													0
セー14	ヘ北側		暗褐色土層（茶色土ブロック混入）																		1	1			2					2		3
セー14	ヘ北側																															0
セー14	ヘ東壁		黄褐色混砂礫層	1			1																									1

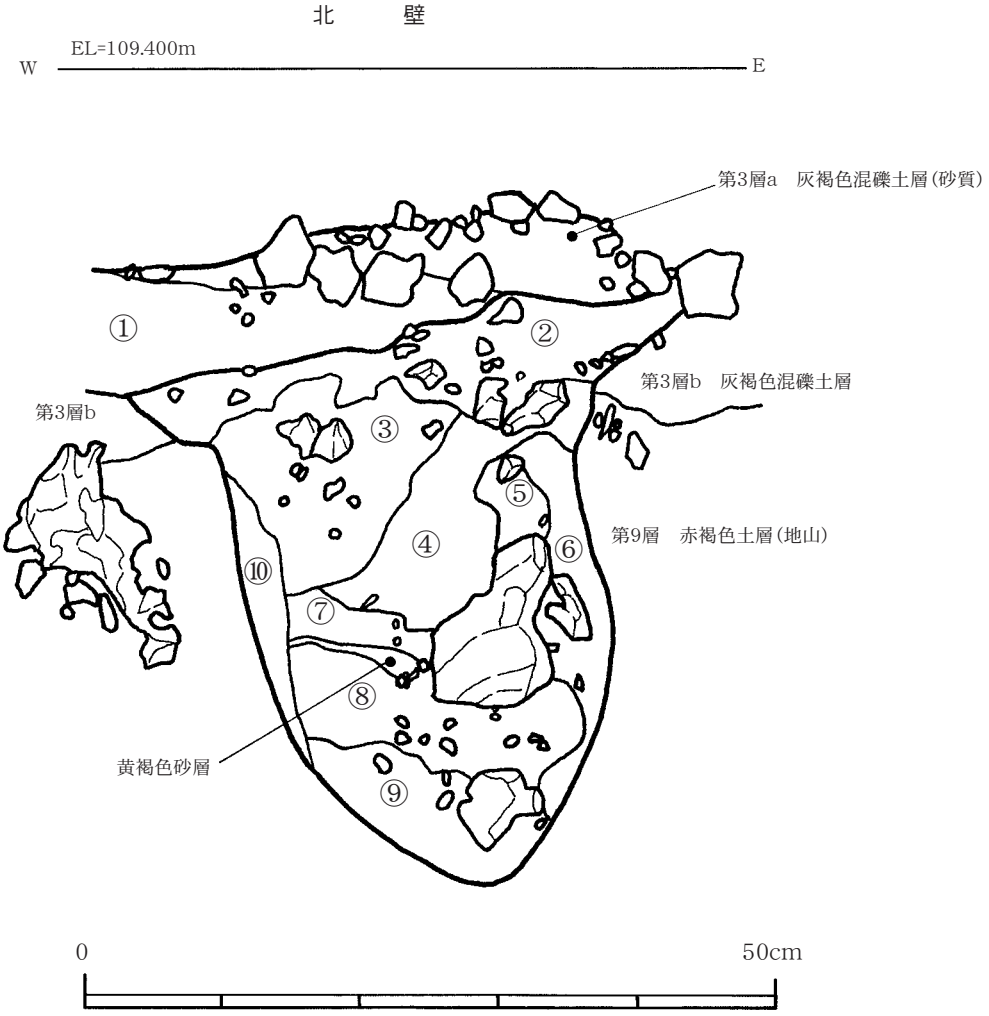
その他の出土遺物	白磁（セー 14 ホ暗灰褐色混礫土層 皿 底部 1 点・セー 14 ヘ付近暗灰色混礫土層 瓶 底部 1 点）・薩摩褐釉壺（セー 14 ヘ第 1 層 a 暗灰褐色混礫土層 胴部 3 点）・本土産磁器（セー 15 二間畦 灰色混礫粘土層 不明 1 点）・本土産染付碗（セー 14 ヘ北側 口縁 印判 1 点）・土器（セー 15 ハ第 1 層 b 淡褐色混砂混礫土層 1 点）・瓦（セー 15 二第 1 層 a 暗灰褐色混礫土層 不明 2 点・セー 14 ヘ第 1 層 a 暗灰色混礫土層不明灰 1 点・セー 14 ヘ付近 大和系 平 灰 1 点）・金属製品（セー 15 ハ第 1 層灰色混礫土層 青銅製品 1 点・セー 14ホ 暗灰褐色混礫土層 鉄製品 1 点・セー 15 ロ第 1 層灰色混礫粘土層 1 点）・ 円盤状製品（セー 14 ヘ第 1 層 a 暗灰褐色混礫土層 施釉 1 点・セー 15 ハ北側 1 層・沖無 1 点・セー 14 ホ第 1 層 a 暗灰色混礫土層 瓦 1 点）
備考	SS01(b) は、綾門大道の復元整備のため、第 1 層 a 面で発掘を止めた。第 1 層 a 面の礫面を露出させながら遺物も取りあげた。第 1 層 a 面直上には、県道 50 号の土盤材として使用された白砂や土砂が被されていたため、ガラス瓶、丸釘、弾丸片などの現代遺物も含まれている。SS01(b) の礫敷きを大きく二つの時期に分けた場合以下のとおりとなる。下層の礫層をⅠ期として捉え、SA01 の土留め石積み構築時期の 15 世紀後半～ 16 世紀の礫層（礫面）の時期に設定すると，上層の礫面（Ⅱ期）からは、沖縄製無釉陶器や施釉陶器などの近世の遺物が出土する状況から 17 世紀～ 18 世紀となるものと判断される。従ってⅠ期の礫面は 15 世紀後半～ 16 世紀、Ⅱ期は 17 世紀～ 18 世紀となり、綾門大道の整備（Ⅰ期）と補修の再整備（Ⅱ期）の時期は、15 世紀後半～ 18 世紀の間に実施されたものかと推定される。



第27図　SX01　平面図・立面図



第28図　SX01　遺物出土状況



① 第３層ａ　灰褐色混礫土層（僅かにスミ混入）。
② 明灰色混礫土層（①よりも明るい土色）→石材片少量混入。
③ 淡茶色土層（②がブロック状に入っている）→石材片少量混入。
④ 明灰色混砂土層（砂粒が多く混入する。赤土の細かなブロックが僅かに混入）→②と同一層か。
⑤ 暗茶色混砂土層→石材片僅かに混入。
⑥ 暗赤色混砂土層→赤褐色土層（地山）と混ざった土層。
⑦ 灰茶色混砂土層→赤褐色土層（地山）④より明るい土色。
⑧ 暗茶色混礫土層→石材片が多量に含まれている。
⑨ 茶褐色土層→石材片が僅かに混入。
⑩ 赤褐色度層→明灰色混砂土がブロックで入り込んでいる。

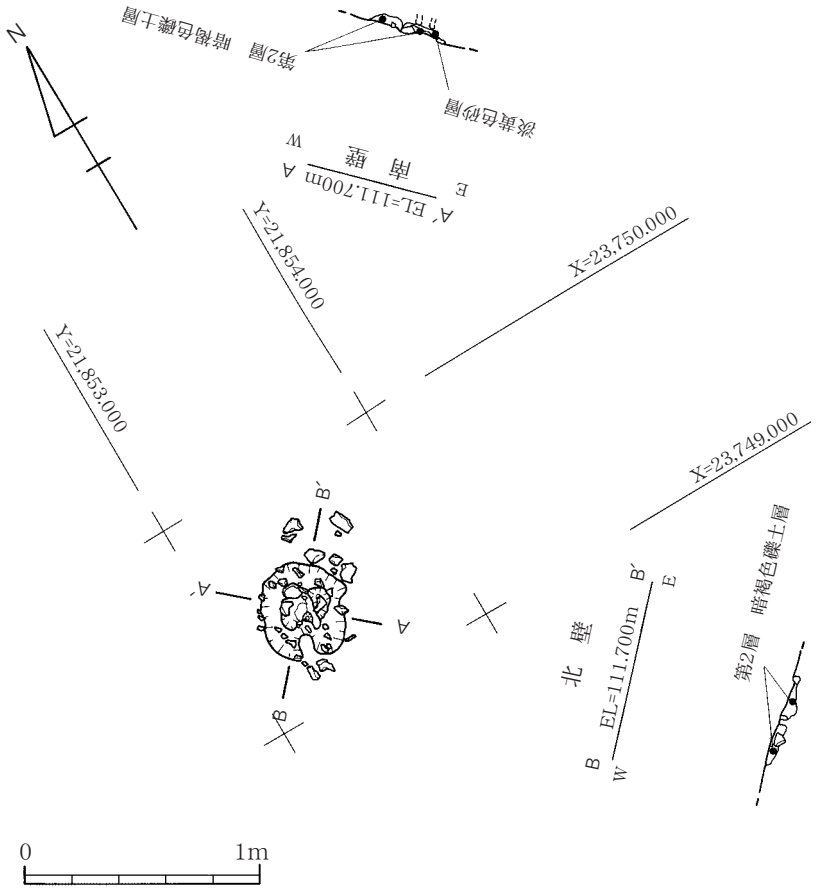
第29図　SX01　層序

第17表　SX01　遺構表

位置	地　　区	セー 14　　X=23,752.570 ・ X=23,752.970。 Y=21,837.600 ・ Y=21,837.630。
	重　　複	SD01(1958 年以降のコンクリート製導水管)により南半分を破壊される。SS01(b)の下位に位置する。
構造	形　　状	歪な半円形。本来は楕円形もしくは円形状。石材の破片を廃棄した土壙。
	規　　模	平面（長軸 40cm、短軸 22cm）上場 40cm、下場約 10cm、深さ 52cm。
	工法など	地山の赤褐色土層を斜位（76°）方向に深さ 50cm 前後掘り込んでいる。ＳＸ 01 内の土層は 9 枚が確認され、下層が上層まで砂岩を主体とする石材の破片 200 点余が出土している。他に方解石、石英片、石灰岩片も混ざって出土している。

出土遺物	層位 / 石質	①	②		③			④	⑤		⑥		⑦	⑧		⑨	⑩	黄褐色砂層	出土地点不明		計
	石灰岩	1		4		8				1		6			8					5	33
	砂岩		8		35			7	6		31		6	29		4	2	2	54		184
	方解石						1														1
	計	1	8	4	35	8	1	7	6	1	31	6	6	29	8	4	2	2	54	5	218

備考	SX01 は綾門大道建設時の土盤面である SS01（b）の下位にあり、綾門大道との直線的な関係は導い。SX01 内から出土した石材片などから守礼門の創建（1527 ～ 1555 年）と関係が深い土壙とみられる。 石材片は守礼門の柱の礎石や柱を安定させる挟石などを加工した際に発生した廃材とみられる。石材の剥片を破棄した遺構と推定される。SX01 内からは、石材片以外の土器、陶磁器などの資料は一点も検出されていないが守礼門建設時期と伝えられている 1527 ～ 1555 年の時期が今のところ考えられる。



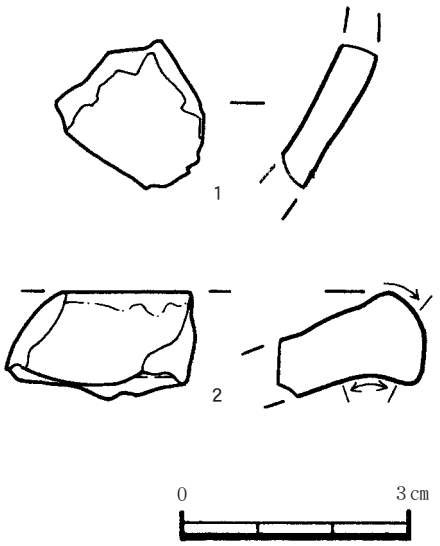
第30図　SX02 平面図・断面図

第18表　SX02　遺構表

位置	地区	セー12　X=23,741.380・X=23,741.800。Y=21,855.050・Y=21,855.450。			
	重複	SR01(ｂ)・SR02に隣接。			
構造	形状	歪な円形。			
	規模	長軸42cm、短軸40cm、深さ6cm。			
	工法など	炉跡？。完掘後の炉内部には2～6cm程度の石灰岩片が出土。			
主な出土遺物の集計	層位／出土遺物	第1層淡黄色砂層	第2層暗褐色礫土層	計	
	中国産天目茶碗 胴部		1	1	
	タイ産褐釉陶器 壺口縁		1	1	
	明朝系瓦 赤瓦	2	4	6	9
	明朝系瓦 灰瓦		3	3	
	中国産青磁瓶		1	1	
	石材（石灰岩）		1	1	
	沖縄産無釉陶器		1	1	
	青銅滓		1	1	
	計	2	13	15	
備考	上記の集計表以外に第2層からは、ボルトナット・手榴弾の破片なども出土していて、第2層まで後世の撹乱を受けている。				

中国産黒釉陶器

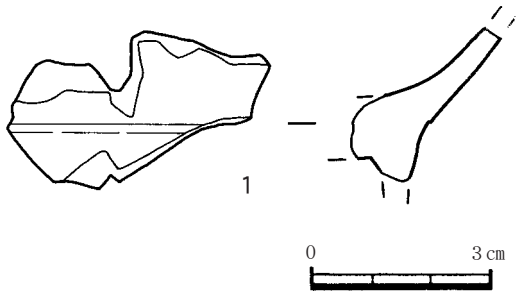
第31図1図版19－5は黒釉天目茶碗の胴下部の細片である。素地は淡灰粗粒子である。素地には微細な黒色鉱物を多量に含んでいる。釉は両面に薄く施している。釉色は、下地に黒色の釉を厚く施し、その上に薄い茶褐色の釉を二度掛けしていたようである。二度掛けによる施釉のため、下地の黒色は表裏面に浮遊し、褐錆斑（茶黒色の斑文状）となる。素地や釉色等などから中国寧徳市飛鸞窯のものと推定される。セー12第2層より出土。



第31図　SX02　出土遺物・中国産黒釉陶器・タイ産褐釉陶器

第19表　タイ産褐釉陶器観察一覧

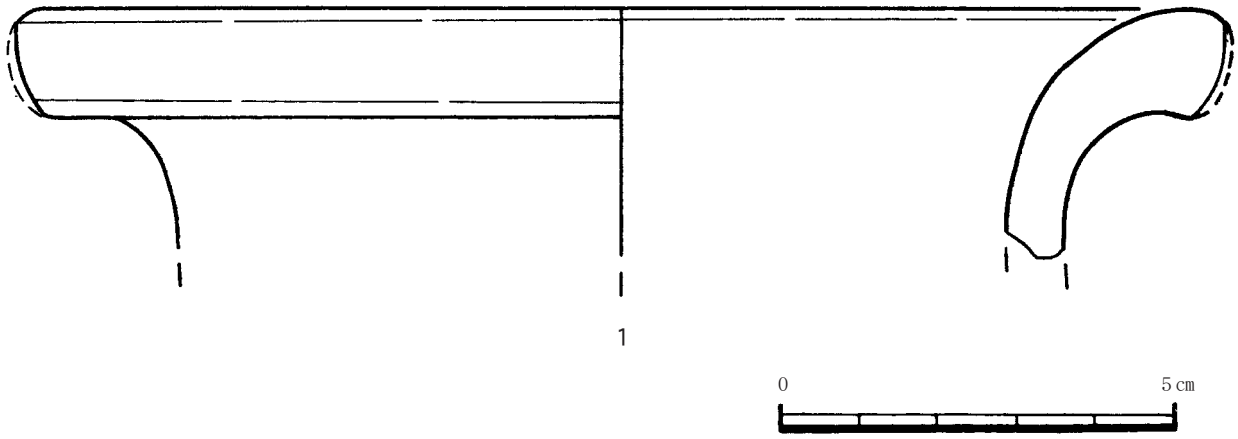
挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底部	特徴	層序	出土地
第31図 2 図版19 6	壺	口縁	－	タイ産の褐釉陶器壺の口縁破片。口縁が逆「ハ」の字状に開くタイプ。口縁の内外端が肥厚し、口唇は丸味を帯びている。肥厚は外面端で三角形となる。茶褐色の釉は内面、口唇上端、外面肥厚帯直下に施されている状況から口唇部の釉を掻き取ったものとみられる。器面の調整痕は外面にのみ粗い回転擦痕が認められる程度である。素地は濃い茶紫色の細粒子で細かい石英と茶褐色の鉱物を少量含んでいる。タイのシーサッチャーナライ窯の製品とみられる。	SX02北隣第2層相当第2層暗褐色混礫土層	セー12 ①



第32図　SX02　出土遺物・沖縄産施釉陶器

第20表　沖縄産施釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底部	特　　徴	層　序	出土地
第32図 1 図版19 7	碗	底部	－	湧田窯系の灰釉碗の高台破片。高台際と高台の境い目に深目の削りを加えて高台を意識する。外体面の下部は削り調整後に丁寧な擦痕を加えて仕上げる。高台外面と内面は、雑な削りで仕上げている。内体面は丁寧な回転擦痕を施している。内体面に砂目（粗い石英粒）の目痕がみられる。素地は灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物を多量に含んでいる。	第２層 混礫土層	セー12 北東 SX02

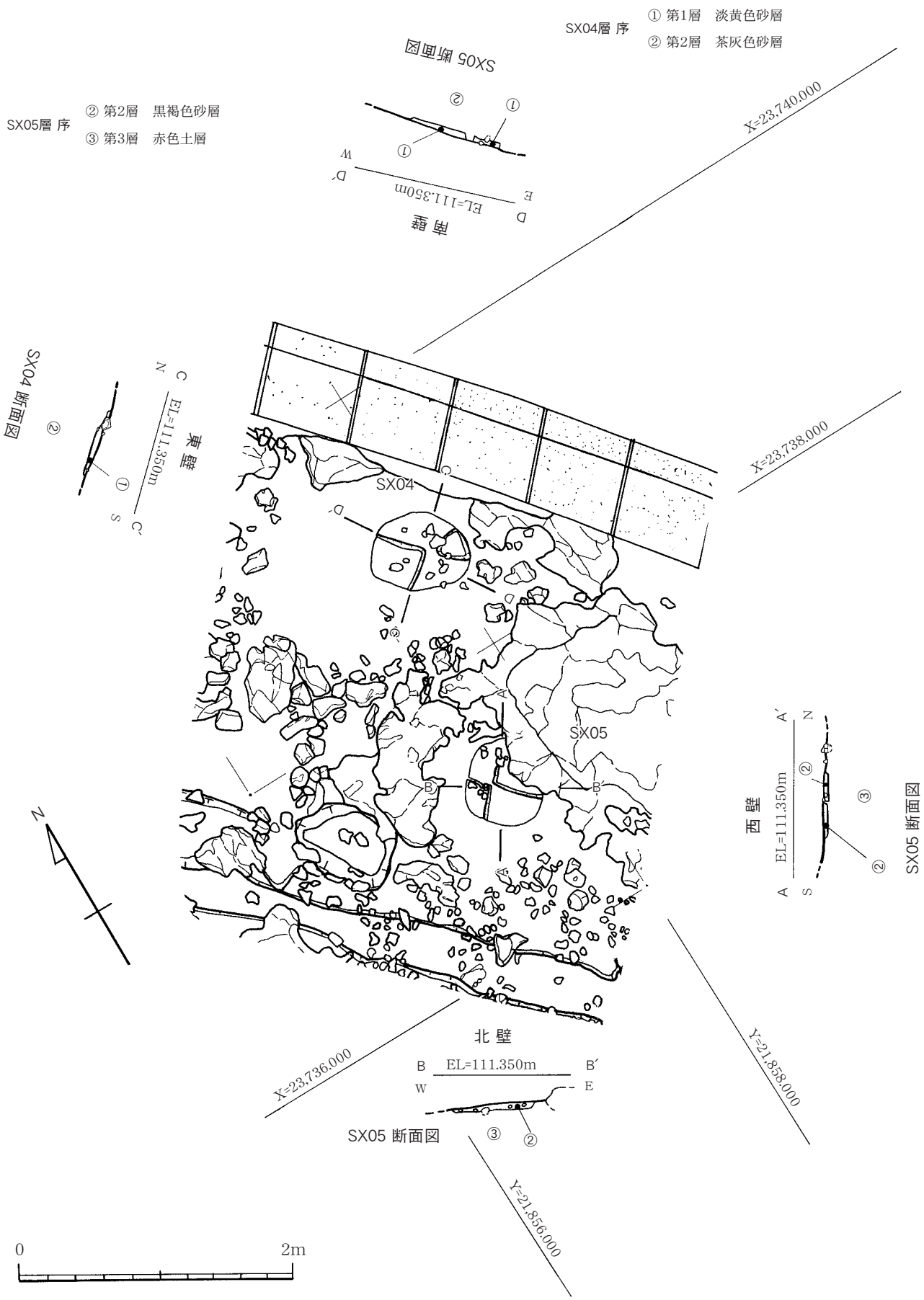


第33図　SX02　出土遺物・沖縄産無釉陶器

第21表　沖縄産無釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底部	特　　徴	層　序	出土地
第33図 1 図版19 8	壺	口縁	15,2	口縁の大半を欠くが、口縁の形状を残存部から肥厚の断面が三角状の肥厚となるものと推定できる。口縁は大きく外側に開く。両面とも回転擦痕が観察される。擦痕の目は粗い。素地は茶褐色の細粒子で、細かい石英を多く含んでいる。	SX02 第１層 淡黄色 砂層	セー12 ①



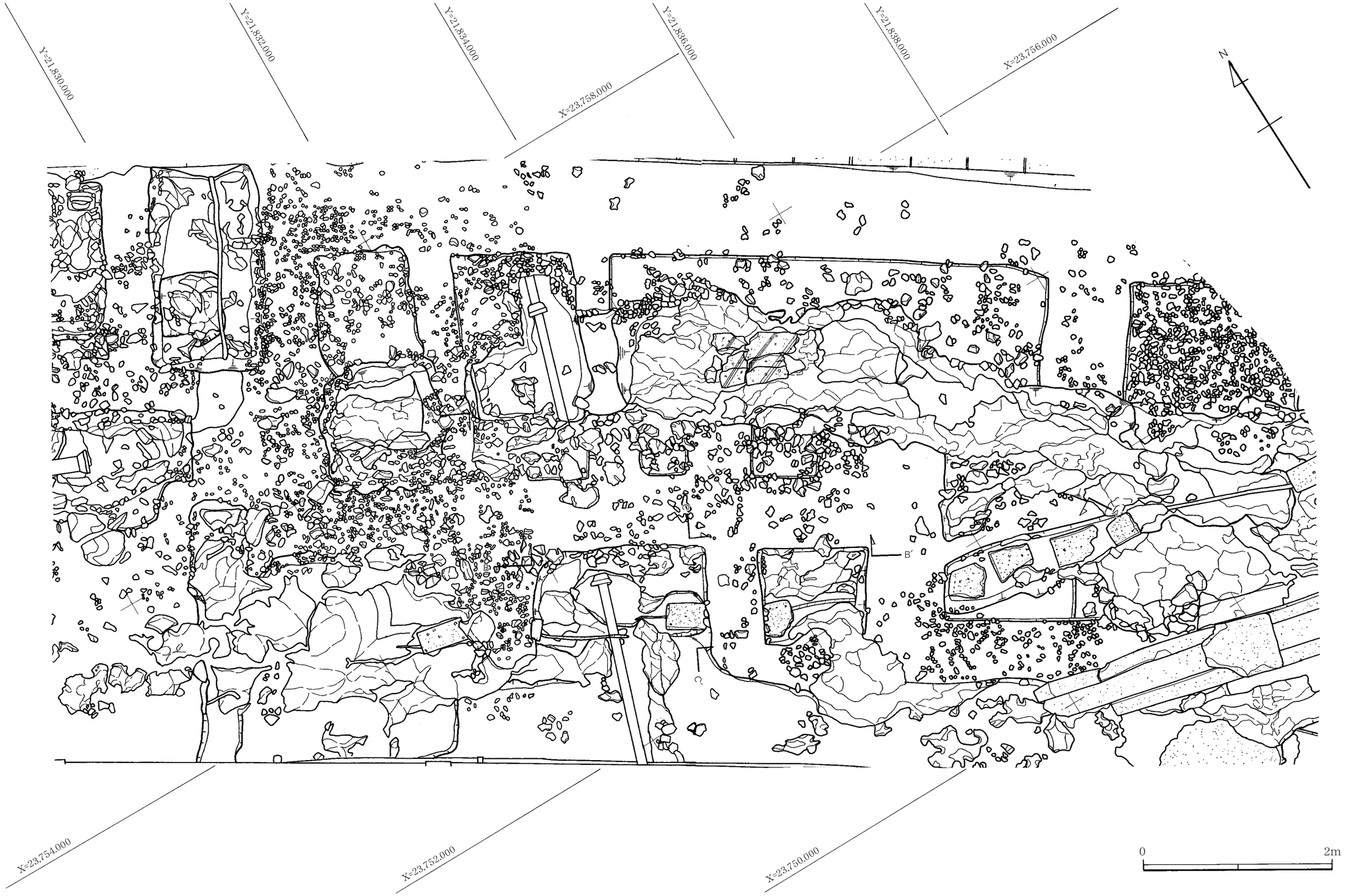
第34図　SX04・SX05　平面図・断面図

第22表　SX04　遺構表

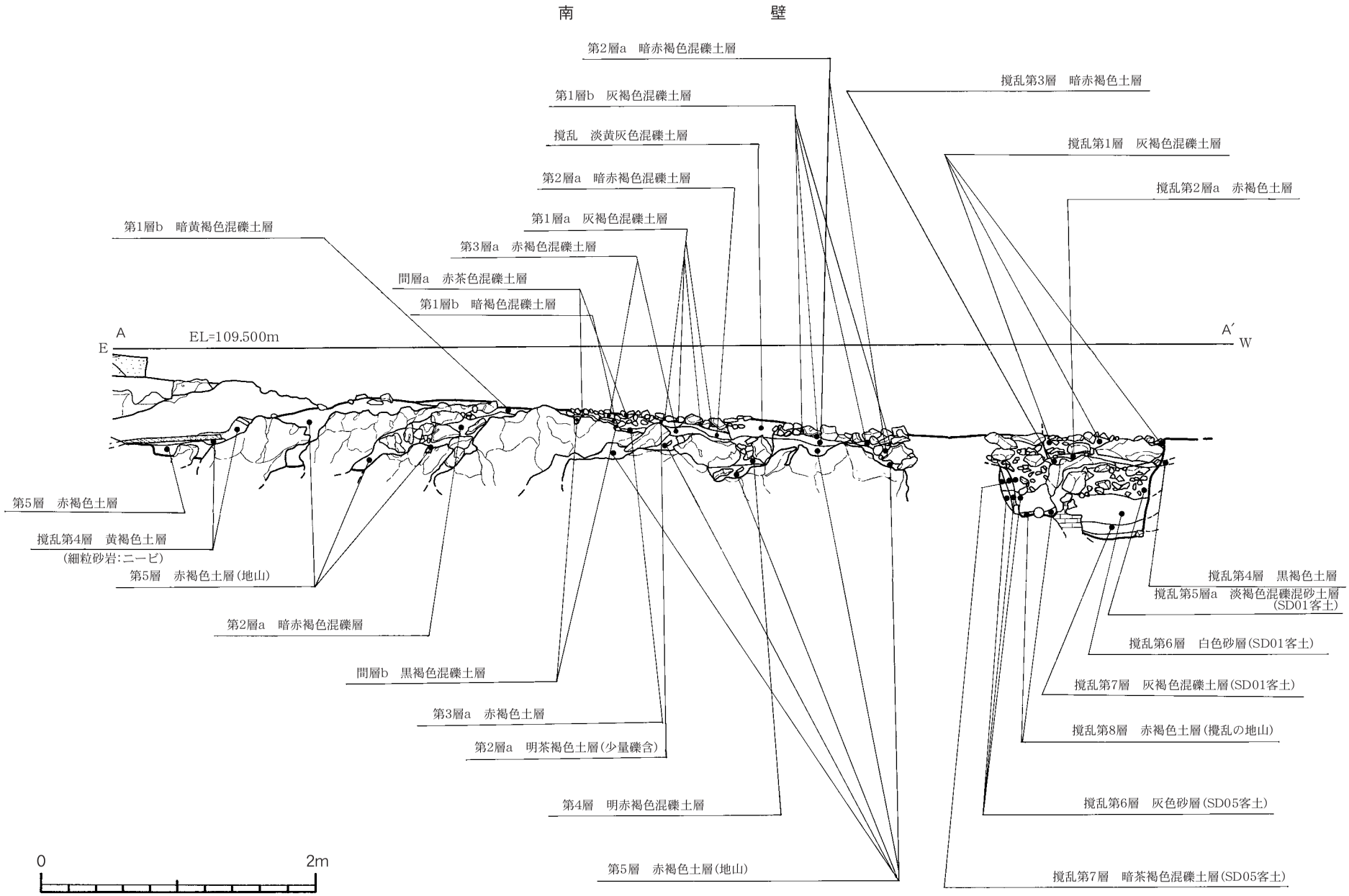
位置	地区		セー 12。　X=23,738.500・X=23,739.100。　Y=21,857.550・Y=21,858.200。			
	重複		単独遺構。			
構造	形状		歪な扁楕円形。			
	規模		長軸 66㎝、短軸 55㎝、深さ 7㎝。			
	工法など		炉跡？。			
主な出土遺物の集計	層位／出土遺物		第 1 層淡黄色砂層	第 2 層茶灰色砂層	計	
	明朝系瓦	赤瓦(平瓦)		2	2	6
		赤瓦(不明)	1	1	2	
		灰瓦	1	1	2	
	ガラス片			8	8	
	石材片		1		1	
	計		3	12	15	
備考	上記の集計表以外に第 2 層からは、ガラス容器、沖縄製無釉陶器壷などの破片が出土している状況から後世の撹乱を受けている。					

第23表　SX05　遺構表

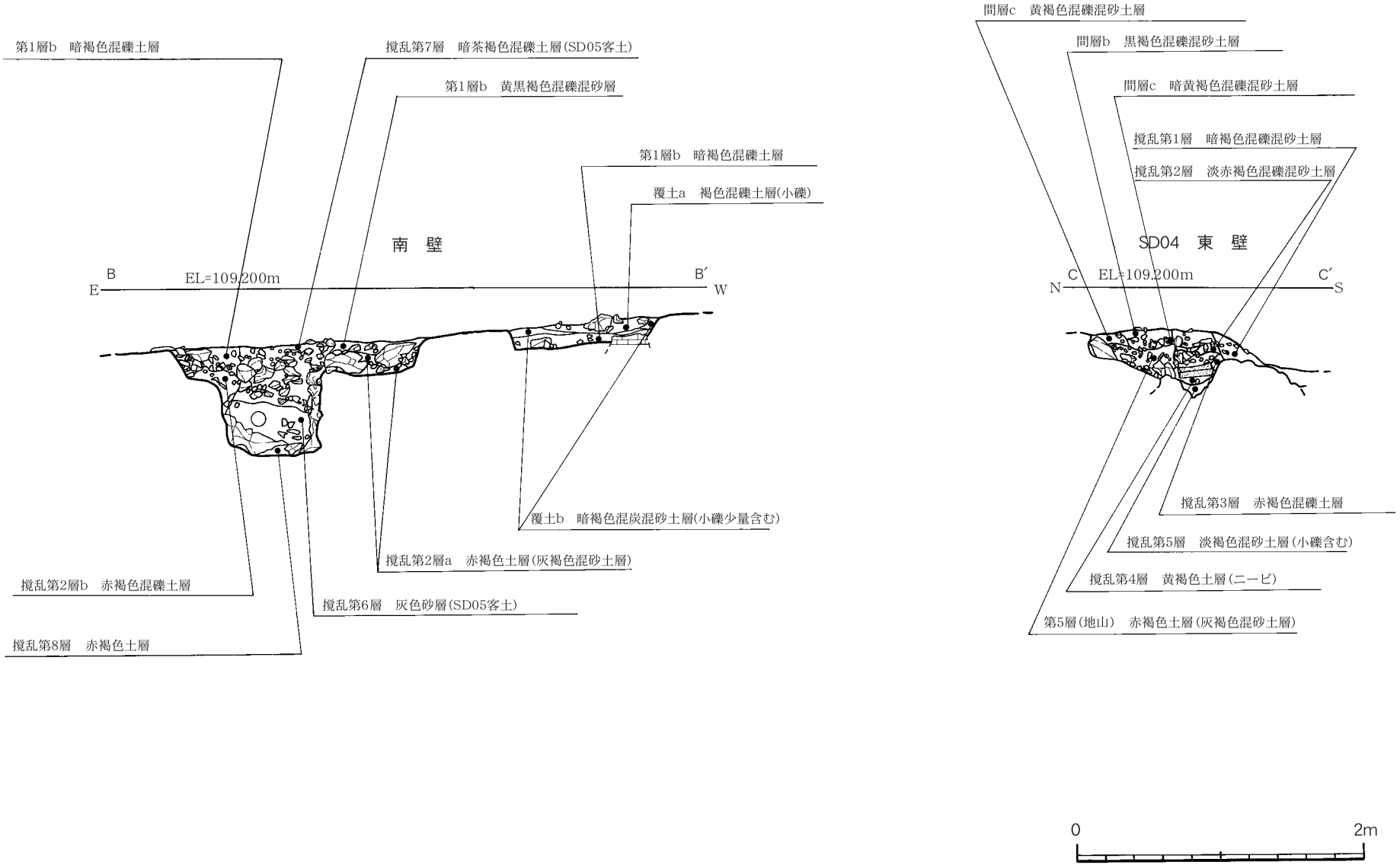
位置	地区		セー 12。　X=23,736.800 ・ X=23,737.430。　Y=21,857.240 ・ Y=21,857.720。			
	重複		単独遺構。			
構造	形状		一辺を欠いた隅丸方形。			
	規模		長軸 63㎝、短軸 37㎝、深さ 3㎝。			
	工法など		炉跡？。			
主な出土遺物の集計	層位／出土遺物		第 2 層黒褐色砂層	第 3 層赤色土層	計	
	明朝系瓦	赤瓦	1		1	2
		灰瓦(平瓦)	1		1	
	石材片			1	1	
	計		2	1	3	
備考	SX05 は後世の撹乱を受けてはいない。明朝系瓦の時期と平行する時期が考えられるところである。					



第35図　セー 14・15 包含層部分　平面図



第36図　セー14・15包含層部分立面図及び断面図・1



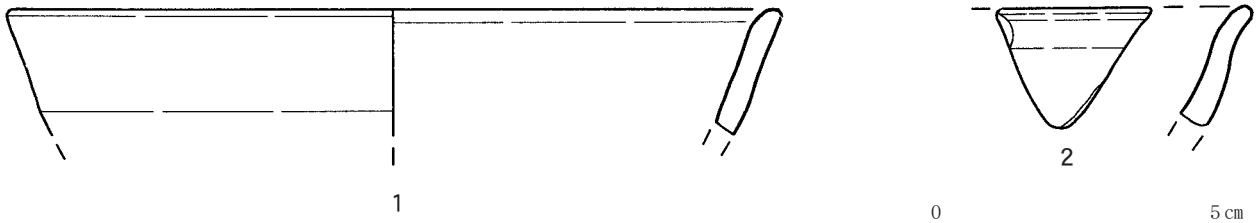
第37図　セー14・15包含層部分立面図及び断面図・2

沖縄産無釉陶器

セー15で出土した無釉陶器の類似は湧田古窯跡（注１）で出土している。湧田古窯跡の報告では、器形の特徴等から瓦質土器と陶器へ移行する時期に誕生した中間的要素を保持した陶器として捉えている。今回の資料から考えられたのは、湧田古窯の製品と判断された場合、本品は無釉陶器誕生（初期頃）期の17世紀初～前半頃のものと位置付けられることが予想されるが、類似資料が少なく判然としない。今回の出土品を湧田古窯跡出土の沖縄産無釉陶器の分類に準じた場合、第38図１が湧田分類の碗Ⅲ類、同図２は湧田分類のⅡ類に該当するようである。

註

註１　金城亀信「第11節　沖縄産無釉陶器」『湧田古窯跡（１）－県庁舎行政棟建設に係わる発掘調査－』沖縄県教育委員会1993年。

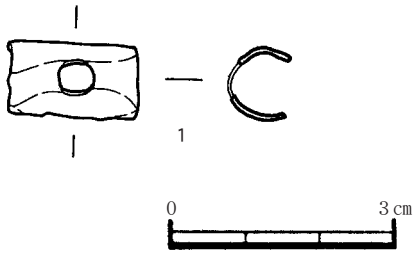


第38図　セー 14・15 出土遺物・沖縄産無釉陶器

第24表　沖縄産無釉陶器観察一覧

単位：㎝

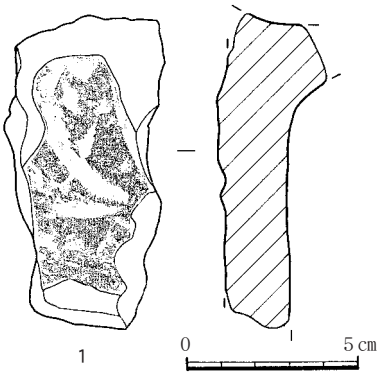
挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底部	特　　徴	層　序	出土地
第38図 1 図版19 10	碗	口縁	13,0	直口口縁の碗とみられる。口縁の形状は逆「八」の字状に開く。両面とも轆轤曳きによる細かい擦痕が施されている。器色は、外面が暗い灰色、内面は明るい灰色を帯びている。素地は、明灰色の細粒子で、微細な石英を多く含んでいる。	第１層ａ 暗褐色混礫土層	セー15 C
第38図 2 図版19 9	碗	口縁	—	口縁はひねり返して、べっ甲口とする。両面とも轆轤成形で仕上げる。器色は外面が灰色、内面は茶褐色を主体とするが、口縁部分が暗灰色を呈する。素地は灰褐色の細粒子で粗い石英が僅かに含まれる。	第１層２ 暗褐色混礫土層	セー15 C



第39図　セー14･15出土遺物･青銅製品

第25表　青銅製品観察一覧

挿図番号 図版番号	特　　徴	層　序	出土地
第39図 1 図版19 11	表面に鍍金されていたようであるが、大部分は禿げ落ちている。青銅製の縁金具もしくは、装飾金具が考えられる。平面観は短冊型で、断面が半円状を呈している。中央に孔を穿っている。孔径は4.0～4.9㎜を測る。長さ16.8㎜。幅8.3㎜。厚さ 0.8㎜。重量 1.6 ｇ。完形品。	第１層ａ 暗褐色混礫土層	セー15 C



第40図　セー 14・15 出土遺物・瓦

第26表　瓦観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	特　　徴	器色	混入物	層序	出土地
第40図 1 図版19 12	軒平瓦	軒平瓦の瓦当部分の破片。髭瓦。瓦当面に残る文様は葉と蔓のみである。内面には、瓦型に粘土を押し込む際に生じた指圧痕や、雑な指ナデがみられる。明朝系瓦。	両面とも淡橙色。酸化焼成の瓦。焼成は悪い。	素地に微細な石英を多量に含む。微細な雲母や細かい茶色の物質も少量ながら含まれる。	第1層ａ	セー14 D

第27表　現代遺構の観察一覧

遺構記号	地区名	位　　置	重　　複	構造（形状・規模など）	備　　考
SD01 附図2	ソー11東端	東南隅　(X=23,727.600　Y=21,857.900) 北東隅　(X=23,727.950　Y=21,868.390)	現代の遺構（SD03・SD 04・SD05・SD06・SX 01・SP01・SP02）7基と切り合っている。また、綾門大道の遺構であるSS01（b）をSD01が切っている。SD01内に焚火跡（SP01・SP02）とみられる炭溜りが2基確認されている。遺構の主軸は西側がN114°Eで東側N140°Eである。	平面観は扁平な「へ」の字状。検出規模は、長さ43m80cm、溝の幅（最小60cm、最大150cm）、深さは13ラインから西へ6m30cmのラインで、EL=111.000mレベルを0mとした場合、－86cm～－104cmが床面コンクリート製差し込み式導水管の床掘り溝。導水管の直径18cm。	1958年以降に設置された導水管及びその床掘り溝。
	セ・ソー13（13ライン上）	南　側　(X=23,737.700　Y=21,849.450) 北　側　(X=23,738.300　Y=21,849.800)			
	セー14（14ライン上）	南　側　(X=23,753.300　Y=21,835.850) 北　側　(X=23,754.450　Y=21,836.550)			
	セー15（15ライン上）	南　側　(X=23,757.650　Y=21,827.450) 北　側　(X=23,758,450　Y=21,827,800)			
	セー15西端	東西隅　(X=23,757.650　Y=21,827.450) 北西隅　(X=23,758.450　Y=21,827.800)			
SD02 附図2	ソー11東端	東南隅　(X=23,718.900　Y=21,861.690) 北東隅　(X=23,719.700　Y=21,862.090)	現代の遺構(SD03・SD05)の2基と切り合っている。遺構の主軸西端N119°E、西半分N130°E、東半分N142°E、東端N141°E。	平面観は扁平な弧状。検出された規模は、長さ50m70cm、溝の幅（最小70cm 最大150cm）、深さは13ラインから西へ6m30cmのラインで、EL=111.000mレベルを0mとした場合、－126cmが床面である。水道管の位置は前記レベルより－86cm ～－116cmにある。ボトル留めの鋼鉄製のパイプ。	1955年～1958年に設置された導水管のパイプで、旧琉球大学の本館東側にあったタンク、現在の首里城東のアザナから繋がる。導水管の床掘り溝。
	ソー12（12ライン上）	南　側　(X=23,727.800　Y=21,854.950) 北　側　(X=23,728.400　Y=21,855.670)			
	ソー13（13ライン上）	南　側　(X=23,736.250　Y=21,848.310) 北　側　(X=23,738.100　Y=21,849.090)			
	セー14（14ライン上）	南　側　(X=23,743.000　Y=21,841.150) 北　側　(X=23,744.090　Y=21,841.750)			
	セー15（15ライン上）	南　側　(X=23,748.840　Y=21,832.850) 北　側　(X=23,749.000　Y=21,833.550)			
	セー15西端	南西隅　(X=23,753.140　Y=21,824.350) 北西隅　(X=23,754.100　Y=21,825.500)			
SD03 附図2	セー15南端	東南隅　(X=23,753.120　Y=21,827.490) 南西隅　(X=23,753.300　Y=21,827.080)	現代の遺構（SD01・SD02・SD04）の3基と切り合っている。遺構の主軸N147°W（N33°E）	平面観は「－」の字状。検出された長さは7m50cm、溝の幅が40cm。深さは北壁側で、EL=111.000mを0mとした場合、－200cmが床面となり水道パイプは－193cmのレベルで検出。鉄製の水道パイプ。	SD01・SD02の上位で検出。
	セー15北端	南　側　(X=23,759.500　Y=21,831.500) 北　側　(X=23,759.950　Y=21,830.650)			
SD04 附図2	セー14東端	東　側　(X=23,749.950　Y=21,843.690) 西　側　(X=23,751.250　Y=21,841.000)	現代の遺構（SD01・SD05・SD03）の3基と切り合っている。また、綾門大道の遺構であるSS01(b)をSD04が切っている。遺構主軸西端N70°W。西半分N75°E、東半分N90°E、東端N107°E。	平面観は蛇行状。検出された長さは16m30cm、溝の幅（最小40cm、最大90cm）。スー14から西側5m地点で、EL=111.000mレベルを0mとした場合、深さ－110cmと－114cmに水道パイプ、深さ－102cmに水道パイプの保護用ｺﾝｸﾘｰﾄ板。	SD01・SD05・SD01の上位にある。
	セー15（15ライン上から西へ40cm）	南　側　(X=23,751.950　Y=21,834.390) 北　側　(X=23,752.350　Y=21,834.610)			
	セー15西端	東南隅　(X=23,754.500　Y=21,828.150) 南西隅　(X=23,755.000　Y=21,828.350)			
SD05 附図2	セー15南端	東南隅　(X=23,750.850　Y=21,831.550) 南西隅　(X=23,751.050　Y=21,831.300)	現代の遺構（SD01・SD04・SD02）の3基と切り合っている。また、綾門大道の遺構であるSS01(b)をSD05が切っている。遺構の主軸はN20°E。	平面観は一直線状。検出された長さは6m90cm。溝の幅（最小20cm 最大50cm）。16ラインから東へ385cmの地点、EL=109.000mレベルを0mとした場合、－80cmと－88cmの箇所に導水管。	
	セー15北端	南　側　(X=23,756.800　Y=21,833.600) 北　側　(X=23,756.900　Y=21,833.350)			
SD06 附図2	セー13東端	東　側　(X=23,746.900　Y=21,848.500) 北　側　(X=23,747.550　Y=21,847.800)	現代遺構のSD01と切り合う。現代遺構SD04と平行する。綾門大道の遺構SS01（a）の上にSD06が乗っている。また、SR01（a）に隣接。遺構主軸N103°30′E。	検出された規模は長さ13m30cm、溝の幅（内寸30cm・外寸60cm）、溝の深さ(内寸40～46cm)、蓋の厚さ16cm。勾配5°。スー14ラインから南へ2mの地点で、EL=110.000mを0mとして深度を計測した場合、－10cmで蓋の直上、－64cmで側溝の外底となる。	1958年の守礼門復元に伴って整備された排水溝（暗渠）。SD01のコンクリート製導水管がSD 06の構内を貫通する。
	セー14（14ライン）	南　側　(X=23,747.950　Y=21,844.150) 北　側　(X=23,748.600　Y=21,844.450)			
	セー14西端	東南隅　(X=23,749.700　Y=21,836.100) 北西隅　(X=23,755.490　Y=21,835.500)			
SX03 附図2	セー12東端	東南隅　(X=23,737.850　Y=21,852.000) 北東隅　(X=23,739.220　Y=21,852.630)	洞穴もしくは、旧日本軍地下壕が砲撃を受けて陥没した凹地に県道50号の道路工事によって集められた礫溜り。	平面観は歪な凸状。長軸（南北305cm東西190cm）。	旧日本軍地下壕の記事は、琉球新報平成11（1999）年3月11日(木)朝刊に掲載、見出しは「米軍旧日本軍地下壕を分析平和推進課沖縄戦の機密資料入手」。
	セー12西端	南西隅　(X=23,738.600　Y=21,850.400) 北西隅　(X=23,740.800　Y=21,852.720)			

第３節　小　括

平成10(1998) 年度の綾門大道跡の発掘調査で検出された遺構で、綾門大道の下部の遺構や守礼門と関連する遺構が検出されている。綾門大道の下部の構造などを知る遺構として土留め石積み（ＳＡ01)、礫敷き（ＳＳ01(ｂ)）の二基がある。守礼門及び綾門大道と関係する遺構で、明確な遺構は、守礼門の南側石牆の一部（ＳＲ01)、暗渠の底盤に敷かれた漆喰の一部（ＳＳ01(ａ)）、土壙（ＳＸ01）内の三基がある。

綾門大道の下部構造が判る遺構としては土留め石積み（ＳＡ01)、礫敷き（ＳＳ01(ｂ)）などがある。土留め石積み（ＳＡ01）構築時期は、第５層ａから出土した15世紀後半～16世紀に位置付けられる白磁外反皿がある。この時期に守礼門の創建と綾門大道の道路の延長工事が成されたものと思慮される。道路を延長するために道路の基礎となる土留め石積み（ＳＡ01）を積み上げたものと推察される。その後に礫敷き（ＳＳ01(ｂ)）を整備するが、礫敷き面は、壁面の状況から二面存在することからⅠ期とⅡ期に分けられるようである。Ⅰ期の下位の礫敷き面は、土留め石積み（ＳＡ01）とほぼ同時期の15世紀後半～16世紀、上位にあるⅡ期の礫敷きは、出土した沖縄産無釉陶器や同施釉陶器から17世紀後半～18世紀頃に分けられることからⅡ期の礫面は、綾門大道の補修や再整備のものと観られる。また、Ⅰ期の礫面の下位にある土壙（ＳＸ01）内からは守礼門の鋏石及び礎石を加工した際に生じた石材の屑や破片が200点余も多量に出土している。以上のような状況から判断するとすれば、「守礼門（国宝)」（俗称：上の綾門。1527年～1555年尚清により創建）が創建される直前には綾門大道（道路の延長）の下部の工事がある程度は終了していたものと考えられる。

次に遺構調査区内からは、守礼門の南側石牆の一部（ＳＲ01）と暗渠の底盤に敷かれた漆喰の一部（ＳＳ01(ａ)）が検出されている。（ＳＲ01）と（ＳＳ01(ａ)）が検出されたトレンチ内の攪乱層からは青磁線刻細蓮弁文碗（15世紀後半～16世紀）が検出されていることから当該期に守礼門と綾門大道と周辺石積みと暗渠の整備を行ったものと思慮される。

その他に東側のセ―12のグリット内からは、守礼門の南側石牆とは別に切石の根石（ＳＲ02）が検出されている。切石の時期は、根石面下端の端持部分の包含層から出土した青磁皿の高台片や明朝系灰色瓦などから15世紀頃からそれ以降に構築された切石積みと判断される。切石の根石（ＳＲ02）と守礼門の南側石牆との具体的な関係については不明であるが、現時点では、一応、守礼門の南側石牆と関連する遺構として推定される。

切石の根石（ＳＲ02）の周辺には、炉跡？（ＳＸ02、ＳＸ04、ＳＸ05）及び切石の根石（ＳＲ02）の栗石若しくは裏込め石（ＳＲ01(ｂ)）の４基が検出されている。これら４基の遺構内の堆積層は若干の攪乱を受けているが、出土した遺物から時期を絞り込んで特定することはできなかった。しかしながら後代の遺物である手榴弾の破片、ガラス片、ボルトナットなどを除いた場合、概ね15世紀～18世紀に掛けての遺物が残ることから当該期に構築された遺構とみられる。この４基の遺構の中で、栗石若しくは裏込め石（ＳＲ01(ｂ)）の時期は、切石の根石（ＳＲ02）と平行する15世紀頃が考えられるようである。

Ⅳ章　平成11年度調査区

第１節　遺構と層序

第１項　層序

平成11年度の調査地区は守礼門から直線距離で約140mを測り、守礼門正面より平成10年度調査区の境界までをⅠ地区、平成10年度調査区の西端より城西小学校正面までをⅡ地区、城西小学校正面より首里城公園管理センターのある十字路までをⅢ地区と設定して行った。Ⅰ地区についてはⅢ章で述べたように調査の都合上、守礼門正面部分をⅠａ地区、それ以降をⅠｂ地区と設定した。（第５図）

調査区内には一部のみに認められる層が多数あるが、これは当該地が道路という性格上、綾門大道建造から戦前までの間に部分的な路面の補修・整備が行われたことが十分に考えられる場所であることによると考えられる。これらは遺構との関連性が考えられる層には前後層との関係より算用数字の次にアルファベットの小文字を付してある。また、小範囲のみに限られて確認される層は間層としてある。当該調査地区は戦後の開発・整備のため、幸運にも戦災を免れた部分も被害を受けている。特にⅠａ地区とそれ以降の地区では、戦後の撹乱により層の連続性を確認できなかった。このためⅠａ地区の層と他地区の層を対応させることができなかった。以下に各地区の層序を述べる。

Ⅰａ地区

守礼門西側の基壇から５ｍの範囲を櫛歯状に北側・中央・南側の３ヶ所にトレンチを設定した。当該調査区は戦後の造成や工事等による撹乱により、調査面積の５割以上が岩盤までの掘削・配管が認められた。中央トレンチは残存状態が良好であり、岩盤までの層厚約40ｃｍのうち、上位約20ｃｍは道路整備の客礫層で、セメント片やガラス片を含む礫層または混土礫層が重なる。

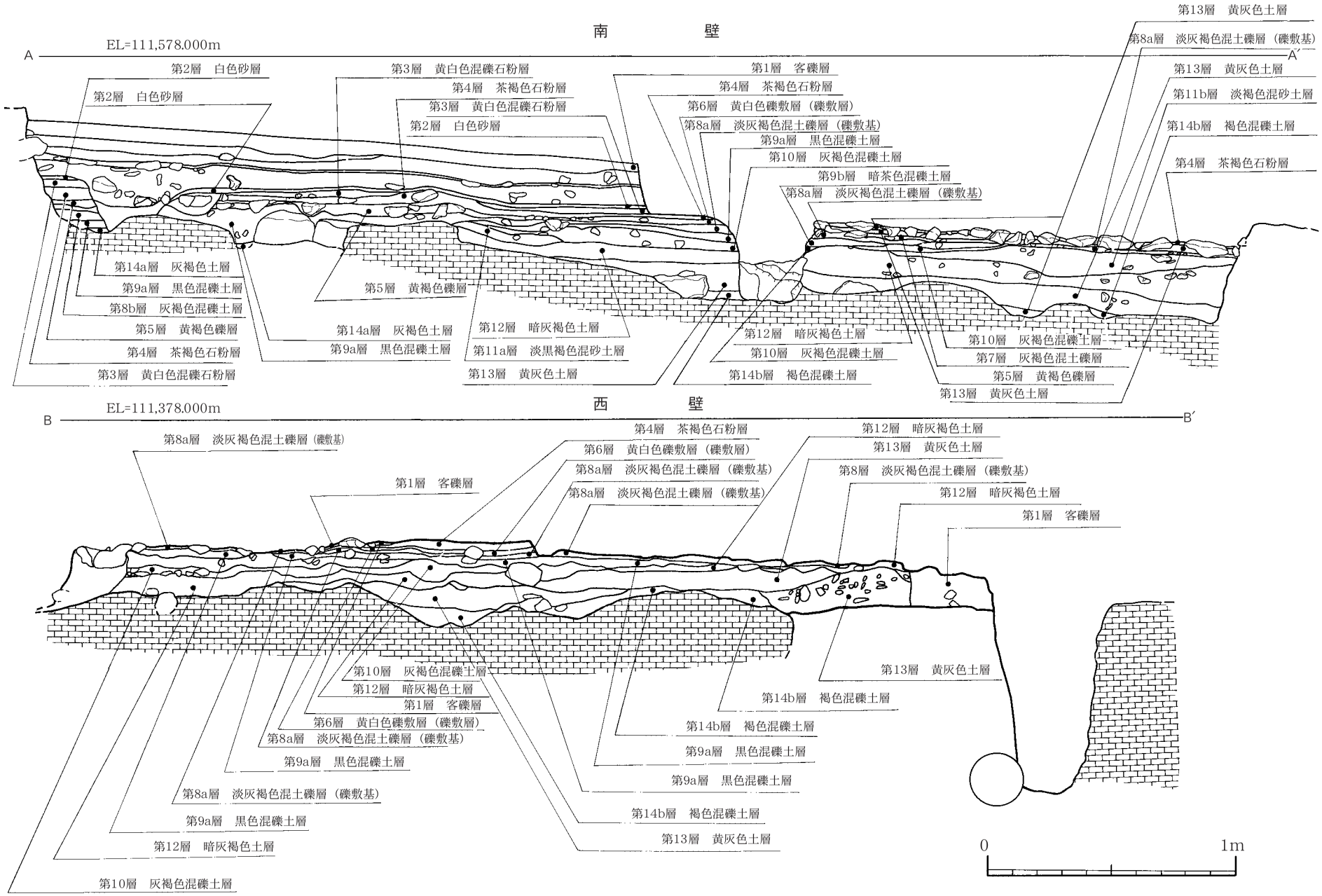
下位約20ｃｍは岩盤直上まで15世紀から19世紀までの遺物を包含する綾門大道期の層が残存していた。１層を除去し２層の黄白色混礫石粉層を検出後、中央トレンチの南壁沿いと、北側・中央・南側トレンチの接する東壁沿いにサブトレンチを直行するように設定し、下部構造の調査を行った。検出された層のほとんどが細礫を含む混礫土層か礫層であり、３層の茶褐色石粉層からは17世紀から19世紀前半の沖縄産陶器が出土し、６層の灰褐色混土礫層からは17世紀の中国産染付･17世紀から19世紀前半沖縄産陶器、７層の淡灰褐色混土礫層からは15世紀から16世紀にかけての中国産染付 ･16世紀の中国産褐釉陶器が出土する。長径10～20ｃｍ大の礫を含む５層黄白色礫層は前後層の出土遺物から近世の路面の可能性が考えられる。

遺構は検出されなかったが、２層直上の客土層から岩盤まで掘り込む戦後に構築されたピットが、守礼門基壇より約30ｃｍの地点に基壇に沿って３基検出されている。南北の２基は過半部がトレンチ外のため全形を伺えない。中央のピットは長軸72ｃｍ、短軸43ｃｍ、深さ22ｃｍを測り、長軸40ｃｍ前後の石灰岩が２基南北に並べて据えられる。

Ⅰｂ地区

調査区の中央に東西軸の観察畦として幅１ｍの畦を設定するとともに、調査区を東西に走るＳＤ15･ ＳＤ16等の配管跡を観察溝として利用した。南北軸の観察畦は各グリッドラインとその中間である５ｍラインに設定した。Ⅰａ地区での検出層は13ライン付近まで認められるが、岩盤上まで撹乱されていたため層序の連続性を確認することができなかった。調査区は全面に１層（戦後の客礫･客土層）が認められた。１層を除去すると発掘区のほぼ全面において、２層（現代遺物を含む礫層）と３層（現代遺物を含む混礫のクチャ層）が認められその下位より６層暗灰色混礫土層（第３礫層）が検出される。６層より下層の調査は南北軸に設定した観察畦に沿ってサブトレンチを設定して行い、調査区北側と調査区中央より南側では層順が異なることが確認された。調査区北側（現在の城西小学校側の斜面）では、グリットスー13から16とセー16で認められる８層黒色土粒混赤褐色土層（造成層）と、その基礎と考えられグリットスー13から15の間で確認される10ａ層褐色混礫土層（第４礫層ａ）･グリット15からⅡ地区で確認され10ｃ層黒褐色混礫土層（第４礫層ｂ）、その間層でグリットスー15でのみ確認される10ｂ層

第41図　Ⅰa地区　平面図



第42図　Ⅰa地区　立面図・断面図

褐色土層が検出された。10層の下層はグリットスー15の５ｍライントレンチで平成12年度発掘調査にて検出されたＳＡ03の基礎層である13層淡褐色粘質土層、造成部の基礎と考えられる14層白褐色細礫層・15層黄褐色混礫砂質土層が検出された。調査区中央から南側では６層の下位より19層黒褐色混礫土層（第５礫層）が、その下位の20ａ層暗褐色混礫土層・20ｂ層暗褐色粘質土層がグリットスー15の５ｍライントレンチで確認された。23層暗褐色土層と24層暗褐色混礫粘質土層は綾門大道創建以前と考えられる層で、23層は調査区のほぼ全域で確認された。24層はグリットスー14で23層の下位で確認される。26層は地山である

Ⅱ地区

Ｉｂ地区と同じく調査区の中央に東西軸の観察畦として幅１ｍの畦を設定するとともに、調査区を東西に走るＳＤ01・ＳＤ02・ＳＤ16等の配管跡を観察溝として利用した。南北軸の観察畦は各グリットラインとその中間である５ｍラインに設定した。

Ⅱ地区の層順は基本的にＩｂ地区とほぼ同様で、調査区は全面の１層（戦後の客礫・客土層）を除去すると２層（現代遺物を含む礫層）と３層（現代遺物を含む混礫のクチャ層）が認められた。その下位より６層暗灰色混礫土層（第３礫層）が検出される。Ｉｂ地区北側で確認された造成層である８層黒色土粒混赤褐色土層はグリット17ラインまで確認され、その基礎と考えられる10ｃ層黒褐色混礫土層（第４礫層ｂ）がグリット18ラインより東へ約４ｍの地点まで確認される。またＩｂ地区では検出されていない層で、同じく造成層の基礎と考えられる11層暗褐色混砂土層がグリット17ライン付近から18mラインより東へ約３ｍの地点で確認され、12層暗赤褐色土層がグリット16ラインより東へ約４ｍの地点からグリット17ラインより西へ約２ｍの地点まで断続しながら確認される。調査区中央から南側では、19層黒褐色混礫土層（第５礫層）、６層と19層の間層である７層暗赤褐色混砂混礫土層が確認された。綾門大道創建以前と考えられる層は22層暗褐色混砂土層、23層暗褐色土層、25層暗橙褐色土層で、23層は調査区のほぼ全域で確認された。22層・25層はグリットセー17で確認される。26層は地山であるグリットセー17以西では戦後の削平が著しく、７層、19層、23層、地山である26層、岩盤が露呈する。また、調査区南側は平成10年度の調査で確認されたＳＤ02がⅡ地区を縦断しⅢ地区へと続く。ＳＤ02が岩盤を掘削しているため、調査区南側の層位を確認することは不可能であった。

Ⅲ地区

Ⅲ地区は、北側がマンホール溝、南側が雨水溝によって地山まで破壊を受けており、東側および西端も戦後の開発によって、ほぼ岩盤まで削平されている状況であった為、僅かに残ったⅢ地区西側を中心に発掘調査を行った結果、全体の様相こそ伺えなかったが、Ⅰ・Ⅱ地区に共通する層がいくつか確認できた。

戦後に敷かれた第１・２礫層（１層：客土）、僅かではあるが綾門大道拡張の時期に相当すると考えられる第５礫層（10ａ層：暗赤褐色混砂混礫土層）、綾門大道整備以前に相当する生活層（23層：暗褐色土層）が確認できた。しかし、Ⅲ地区は戦後の開発によって他の地区と完全に断絶した状況の為、直接的に層の繋がりを確認する事はできなかった。

第２節　遺構と遺物

平成11年度調査において検出された遺構はＩｂ地区の石積遺構ＳＡ02、敷石遺構ＳＳ02、石積遺構ＳＲ03、Ⅱ地区の石列遺構ＳＡ01、Ⅲ地区のＳＡ04、柱穴遺構である。時期別では第１期の遺構が柱穴遺構、第２ａ期の遺構がＳＡ01、第２ｂ期の遺構がＳＡ02、ＳＡ04、第２ｃ期の遺構がＳＳ02、ＳＲ03と考えられる。以下、11年度に検出された遺構について観察表とともに概略を述べる。

Ｉｂ地区

Ｉｂ地区では８層（赤褐色土層（黒色ブロック混））及び10ａ層（褐色混礫土層・第４礫層）に関連する遺構ＳＡ02と６層（暗灰色混礫土層・第３礫層）に関連する遺構ＳＳ02とＳＲ03が検出されている。

SA02　石積遺構　スー15（第47～49図、第33表、図版10）

グリット15ラインより東に５ｍ地点に設定したトレンチ及び同じくグリット15ラインより東へ2.5m地点に設定したトレンチ下部にて検出。主軸を略東西に持つ石列とその上部に堆積する礫層から構成され、造成層である

８層の下に位置する。グリットシー13･14の守礼門北側は崖状に落ち込み、当該グリット付近の地形も低地である北側へと傾斜する。石列はその傾斜する岩盤の最頂部に配されており、その列石は略長方形で長径18ｃｍ～27ｃｍ、高さ15ｃｍ前後を測る。石列南側約１ｍの地点では岩盤がほぼ垂直に隆起し、その隆起部に14層（白褐色細礫層）､15層（黄褐色混礫砂質土層）が堆積する。礫層は隆起する石灰岩と15層を略段状に覆い、その北端部は石列まで続く。礫層の礫は歪で長径15ｃｍ～20ｃｍを測り、鶴嘴でも容易に動かすことができないほど堅く締まる。ＳＤ16によって断続される北側の層序は岩盤直上に26層（赤褐色土層･地山）､23ａ層（暗褐色土層）､23ｂ層（灰色粘質土層）が堆積し、石列北側を覆う14層が堆積する。これらの層を基礎とし、全体に10ａ層が重なり、上部に８層が堆積して平坦面を形成し､６層が覆う。

SS02　敷石遺構　スー14（第65図、第47表、図版９）

グリットスー14の南側中央付近で検出。遺構は中央部に主軸N68°Ｅの目地を有し、目地の東側に９個、西側に21個の総数30個の敷石が残存する。敷石の表面は摩滅し滑らかで、長径13ｃｍ～22ｃｍ、厚さ７ｃｍ～10ｃｍを測る。下部構造は６層の直上に５層（暗灰褐色混礫土層）を重ね基盤とし、敷石を配する。遺構西端部は敷石面より29ｃｍ～36ｃｍの深さで遺構ごと掘削され､３ａ層（暗灰色粘質土層）が遺構直上及び掘削部に堆積する。

SR03　石積遺構　スー14（第72図、第56表、図版８､９）

グリットスー14の北側中央付近で検出。遺構の北端はコンクリート製の側溝設置により損壊する。南端はＳＤ16北壁には認められるも対壁であるＳＤ16南壁には認められず、ＳＤ16により損失した範囲内で完結する可能性が考えられる。根石も含め２段確認されており、面は西側を向く。遺構の主軸はN20°Ｅである。積石の成形は雑で面及び胴は認識できるも個々の石は歪で大きさは不揃い。６層を掘りこんで基礎及び裏込めとなる６～15ｃｍ前後の礫を含む４ａ層（暗褐色混礫砂質土層）を入れる。根石である１段目は４ａ層に設置される。

Ⅱ地区

SA01　石列遺構　セー17（第43～45図、第28表、図版10）

セー17北側部分で検出。歪な長方形の切石を東西に並べる石列遺構。面は北東を向き、第２･３トレンチの石列の主軸はN72°W、第１トレンチの石列の主軸はN76°Wと若干異なる。第１トレンチの東側に平成10年度に検出したＳＡ01と連続する同一の遺構と考えられるが、石列の主軸が若干異なる。石列の残存長はトレンチを挟み長さ３m93ｃｍ、切石の面の長軸は23ｃｍ～48ｃｍ、高さ15ｃｍ～25ｃｍを測る。遺構は19層（黒褐色混土礫層･第５礫層）を掘り込み、設置される。第１･２トレンチは８層と10ｂ層の間層が異なる。造成土である８層とその基盤層である10ｂ層がＳＡ01北側で検出される。前記２層及び、その下層である16ａ層（淡灰褐色混砂土層）､16ｂ層（淡灰褐色混礫土層）､17ａ層（明黄灰褐色混砂土層）､17ｂ層（明褐色混礫土層）､17ｃ層（黒褐色混砂礫土層）､17ｄ層（明褐色混礫土層）17ｅ層（淡灰褐色混砂土層）は、ＳＡ01を覆うため、ＳＡ01の構築以降と判る。

Ⅲ地区

柱穴遺構　（第76～79図　図版12）

Ⅱ地区およびⅢ地区の各所から、柱穴遺構が検出されている（第76～79図）。柱穴遺構は、綾門大道整備以前の１期に相当する23層を含土とするという共通の特徴から、本項では各地区から検出された柱穴遺構を一括して扱う。

確認された柱穴遺構のほとんどは、現代の雨水溝、マンホール溝、歩道ガードレール支柱、戦後の開発による配管によって、上部が著しく破壊されている状況であり、調査範囲内における全体的な様相、各柱穴の詳細確認は困難であったが、調査の結果、次の事がわかった。

Ⅱ地区から検出された柱穴１からは、銭貨50点と土器の底部１点が出土しており、綾門大道の整備以前に北側に位置した施設との関連が考えられる。

Ⅲ地区各所から検出された柱穴遺構は、Ⅲ地区中央から東西に分断されたように、東側グループと西側グループに分かれ、Ⅲ地区中央からは柱穴が確認できなかった。今回の調査では、戦後の開発による破壊の為、柱穴遺構全体の様相は不明だが、天界寺跡に隣接している事から、当施設とⅢ地区の柱穴遺構の検出状況は、何らかの関連が考えられる。参考に第119,120図に天界寺跡の調査（那覇市教育委員会　2000）で報告された図面を一部

改変して掲載した。

柱穴遺構に伴う遺物　（第81、82図　図版28、29）

柱穴別の出土遺物の詳細は下記の通りである。

柱穴１

多数の銭貨（第81図　図版28）と土器（第82図３　図版29－３）が出土している。銭貨は、開元通寶２点、元符通寶１点、洪武通寶22点不明１点であった。土器片は、グスク土器の底部片１点のみの出土で、全形が伺えない為、詳細は不明である。資料の個々の詳細は第62、65表の観察一覧に記した。

柱穴10

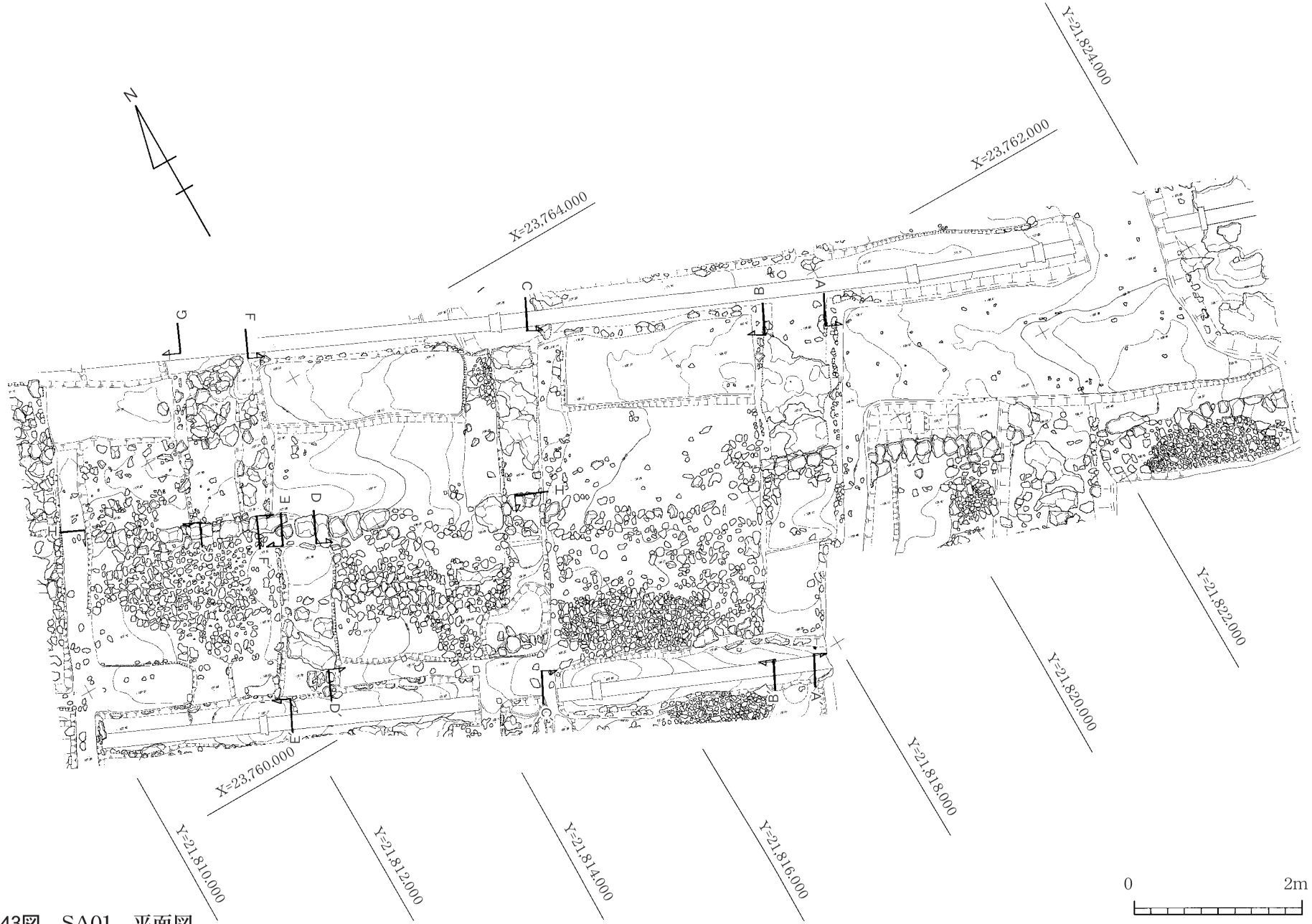
第82図－１図版29－１は、14Ｃ後半～15Ｃ前半頃のものと考えられる青磁碗の口縁部である。

SA04　（第90、第72表、図版11）

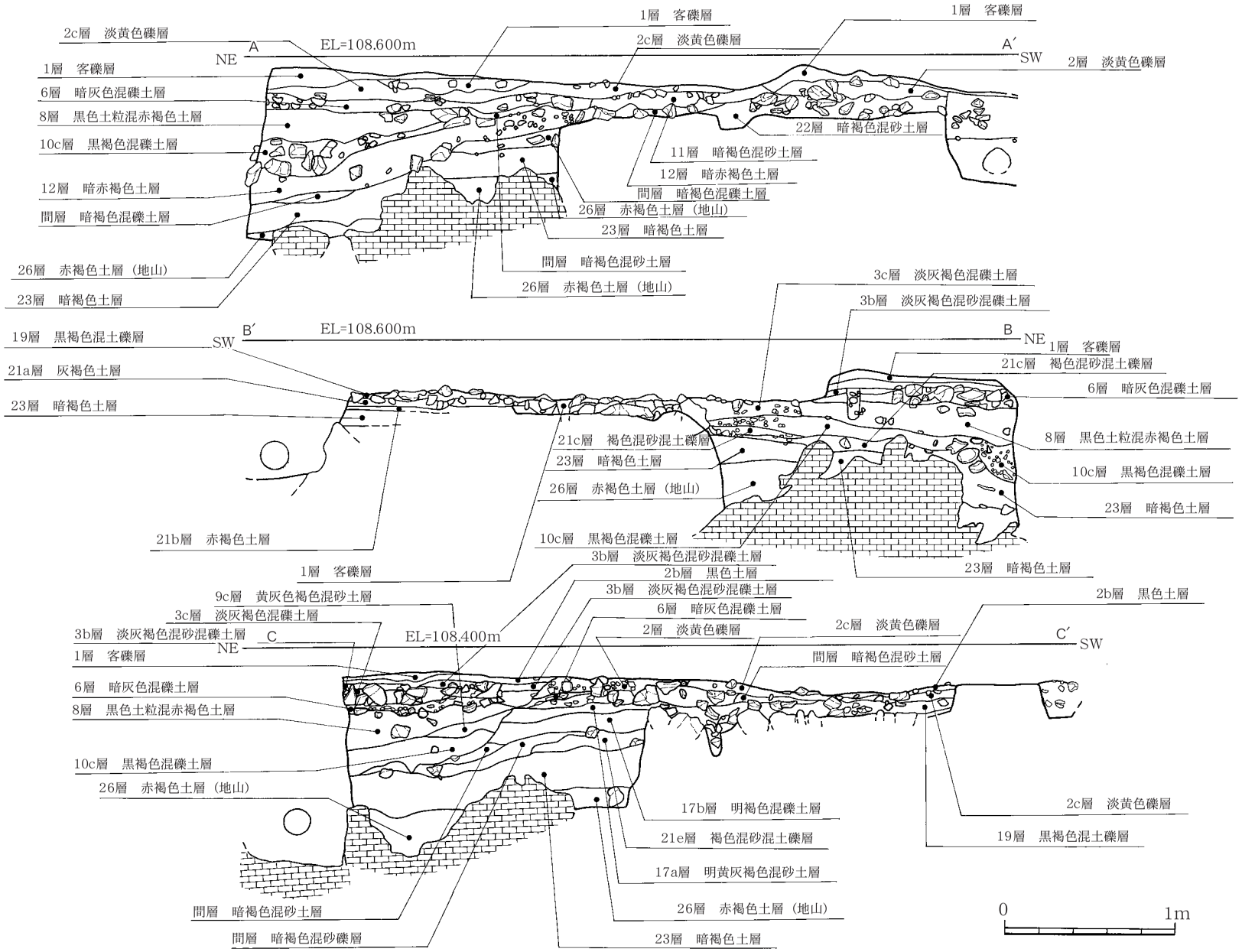
天界寺跡との関連が考えられる石積み（以下 SA04）が、Ⅲ地区南側に、表土から露出した状態で確認できる。今回の調査では、SA04を根石まで確認した。SA04上部は、新しく積まれたものや石積み上部の木の根によって崩落している状況であったが、下部はしっかりとした布積みを確認できた。根石は、綾門大道の整備以前の生活層（Ｉ期）と考えられる暗褐色土層を、部分的に地山まで削平して積まれている。この工法は、平成12年度調査区の SA03にも見られる事から、綾門大道整備の時期（２ｂ期）とほぼ近い時期に天界寺の整備も行い、天界寺の屋敷囲いを兼ねる綾門大道南端を担う石積みを構築した可能性が考えられる。しかし、SA04の東西延長部は、戦後の開発により破壊を受けており、残存しておらず、SA04北側も現代の雨水溝によって、石積みを安定させる礫を含んだ造成層は、直接的には確認できなかった。

参考文献

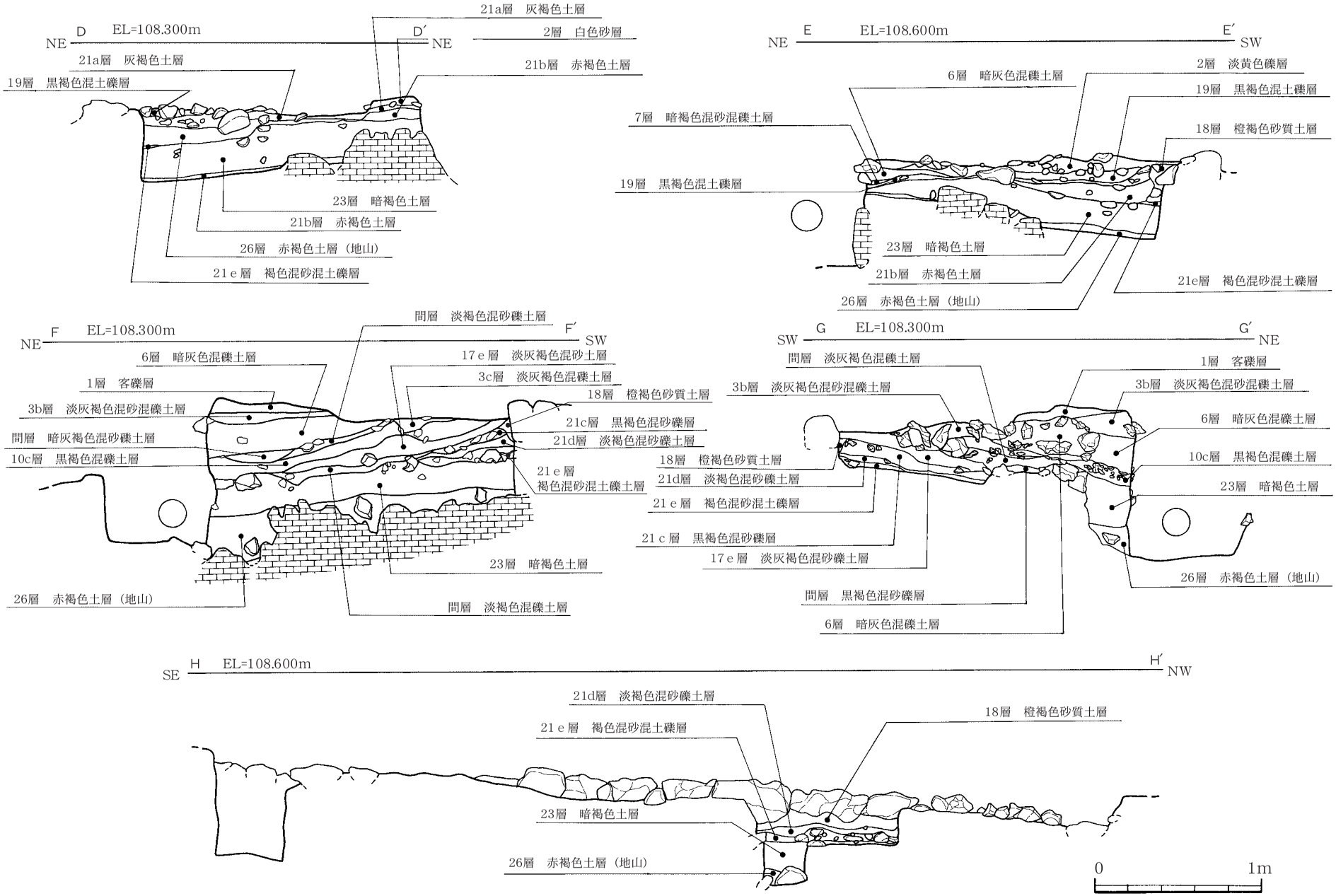
「天界時跡」『那覇市文化財報告書』第43集　那覇市教育委員会　2000年



第43図　SA01　平面図



第44図　SA01 断面図・1



第45図　SA01　断面図・2

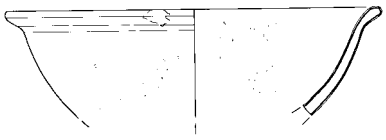
第28表　SA01 遺構表

位置	地　　区	セー 17　　X=23,761.000 ～ X=23,760.000。 Y=21,824.000 ～ Y=21,810.000。
	重　　複	遺構の主軸より、平成 10 年度検出のＳＡ 01 に連続する同一遺構。
構造	形　　状	面と胴が判別のつく程度の粗い成形の控えを持つ石と面を長軸とする歪な長方形の切石を東西に並べる石列遺構。面は北東を向き、遺構の主軸は N72°W である。第 1 トレンチ検出部分は N76°W で、第 1 トレンチの東側の平成 10 年度に検出したＳＡ 01 と近い傾きとなる。面は北東を向く。
	規　　模	トレンチを挟み長さ 7m75cm で、切石の面の長軸は 23cm ～ 48cm、高さ 15cm ～ 25cm を測る。本年度検出部分では 2 段目は確認されていない。
	工法など	遺構は 19 層（黒褐色混土礫層・第 5 礫層）を掘り込み、基盤層となる 18 層（橙褐色砂質土層）を敷いた後に設置される。第 1・2 トレンチは 8 層と 10b 層の間層が異なる。

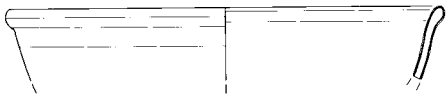
出土遺物

層序		種類	中国産青磁					中国産白磁			中国産褐釉陶器			高麗系瓦	大和系瓦	大和瓦	円盤状	金属製品	合計
			碗			皿	不明	碗	不明		壷			灰	灰	灰	タイ産褐釉陶器	釘	
			口縁	胴	底	底	胴	口縁	口縁	胴	口縁	胴部	底部	平	平	丸			
SA01 Ⅱ地区（セー16）	セー 16　南北畦①西トレンチ東壁 SA01 北側	8 層　黒色土粒混赤褐色土層	1									1							2
	セー 16 中央トレンチ	8 層　黒色土粒混赤褐色土層	1	1	1		2					6		1					12
	セー 16 東トレンチ	8 層　黒色土粒混赤褐色土層																1	1
	セー 16　SD16	8 層　黒色土粒混赤褐色土層										1							1
	セー 16 東トレンチ	8 層　黒色土粒混赤褐色土層					1				2					1			4
	セー 16　南北畦①西トレンチ東壁 SA01 北側	9 c 層　黄灰褐色混砂土層										1							1
	セー 16 中央トレンチ	間層　暗灰褐色混砂礫層		1				1				2							4
	セー 16 中央トレンチ	間層　淡灰褐色混砂礫土層				1			1	1		1							4
	セー 16 中央トレンチ	10 c 層　黒褐色混礫土層	1				2					2	1						6
	セー 16 東トレンチ西壁	19 層　黒褐色混土礫層												1	1				2
	スー 16	2 層　客土層															1		1
	合　　計		3	2	1	1	5	1	1	1	2	13	1	2	1	1	1	1	37

備考	造成土である 8 層とその基盤層である 10b 層が SA01 北側で検出される。前記 2 層及び、その下層である 16a 層（淡灰褐色混砂土層）、16b 層（淡灰褐色混礫土層）、17a 層（明黄灰褐色混砂土層）、17b 層（明褐色混礫土層）、17c 層（黒褐色混砂礫土層）、17d 層（明褐色混礫土層）が、層序より SA01 構築以降であることが判明している。また、19 層（黒褐色混土礫層・第 5 礫層）と SA01 は層の切り合いにより 19 層が先行する。第 2a 期の遺構と考えられる。



1

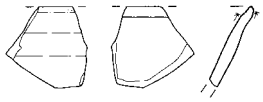


2

第29表　青磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	素　地	口径 器高 高台径	釉色・貫入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第46図 1 図版22 1	外反口縁碗	口～胴	灰色の微粒子。白色粒子が多く、黒色粒子が僅かに見られる。	14.6 － －	濃緑色の失透釉。貫入は見られない。	口縁部が「く」の字状に折れる外反碗。全釉されるが粒状に釉下の胎土が散見される。	Ⅱ地区赤褐色土層
第46図 2 図版22 2	外反口縁碗	口	灰白色の微粒子。白色粒子が僅かに見られる。	17.0 － －	明緑色の失透釉。内外面ともにやや粗い貫入が見られる。	口縁部が玉縁状となる碗。口唇部は尖り気味となる。	セー16南北畦①西トレンチSA02 8層黒色土粒混赤褐色土層

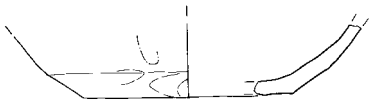


3

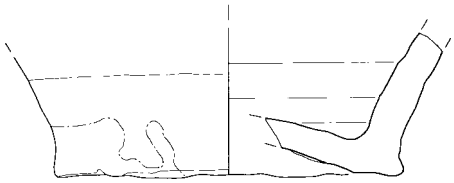
第30表　白磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	素　地	口径 器高 高台径	釉色・貫入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第46図 3 図版22 3	口禿口縁碗	口	白色の微粒子。気泡、黒色粒子が見られる。	－	やや青味がかった白色の透明釉。貫入は見られない。	口唇部のみ釉は施されない。外面には轆轤成形痕が見られる。	ス-16南北畦①西トレンチ23ａ層暗褐色土層



4

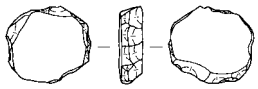


5

第31表　褐釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	部位	口径 器高 底径	器種・器面調整	文様・素地など	出土地点 出土層
第46図 4 図版22 4	底	－ － 8.1	鉢・ナデ成形	灰白色の微粒子。白色砂粒がかなり多くみられる。	ス-16南　北畦①西トレンチ23ａ層暗褐色土層
第46図 5 図版22 5	底	－ － 13.1	壺。胴部は内外面ともに轆轤成形痕が見られる。胴部と底部の境における素地の色は異なる。外底面には目跡が残る。	底部から胴部にかけては開き気味移行する。釉は褐灰色で外底面のみ露胎となる。素地は胴部が灰白色の微粒子で白色粒子が見られ、底部は明黄褐色の微粒子で気泡、白色粒子が見られる。	ス-16南　北畦①西トレンチ８層黒色土粒混赤褐色土層



6

0　5cm

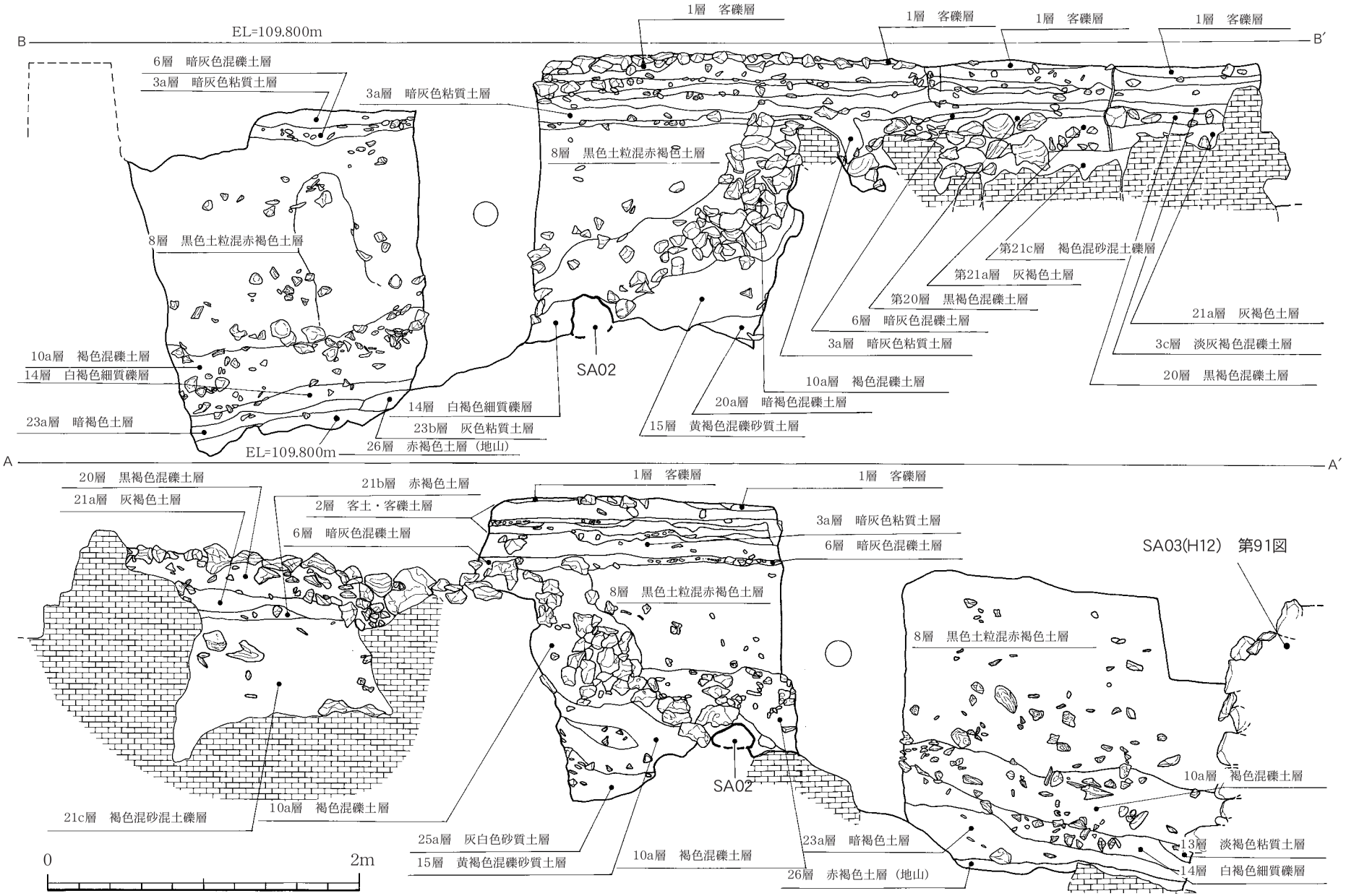
第32表　円盤状製品観察一覧

単位：mm、g

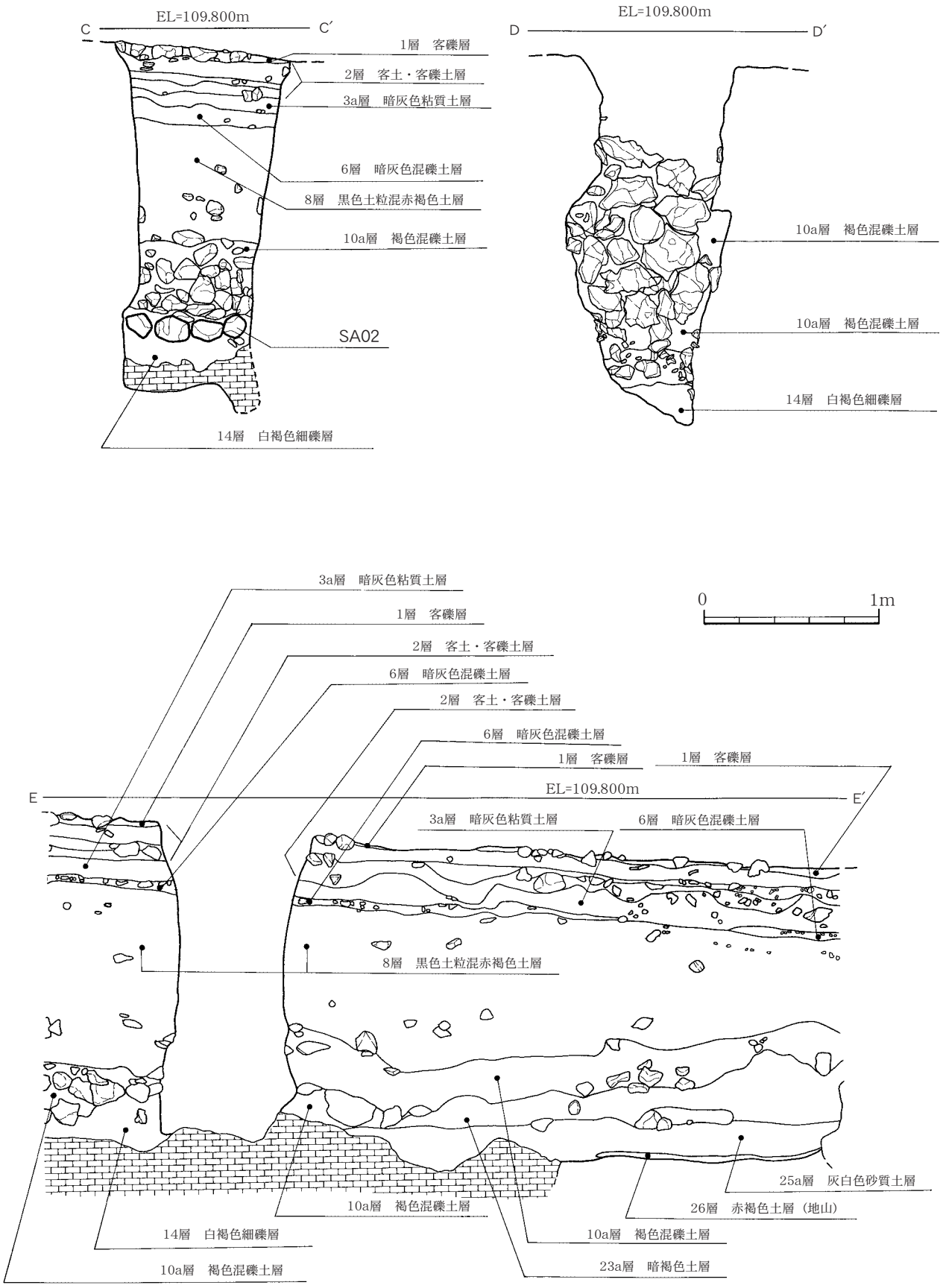
挿図番号 図版番号	素　材	長径	短径	厚さ	重さ	使用部位	完・破	出土地点 出土層
第46図 6 図版22 6	タイ産 褐釉陶器	31.8	28.6	8.2	11.1	胴部	完	スー16 ２層客土層

第46図　SA01検出トレンチ出土遺物

第47図　SA02　平面図



第48図　SA02　断面図



第49図　SA02　立面図及び断面図

第33表　SA02 遺構表

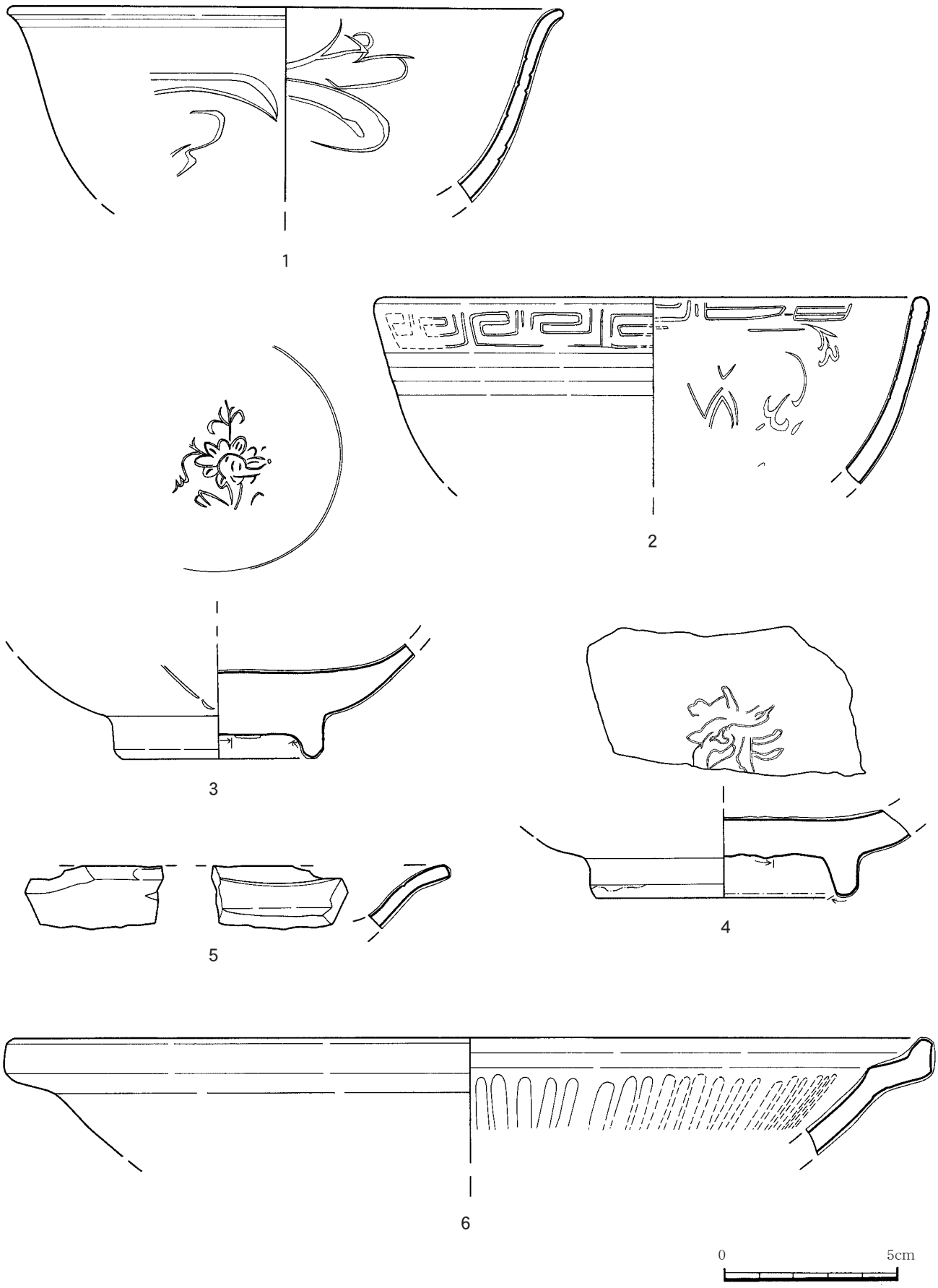
位置	地　　区	スー15　　X=24,367.000 ～ X=23,371.000。 Y=21,111.8210 ～ Y=21,111.5460。　第 47 図参照
	重　　複	ＳＤ 16 が遺構北側に構築され、岩盤まで削平する。
構造	形　　状	主軸を略東西に持つ石列とその上部に堆積する礫層。石列は 1 列 1 段で面と胴の区別が付く程度の粗雑な造りであり主軸はN58°W。石列を構成する石は長軸 20cm ～ 30cm 前後を測る。上部には特別の加工の認められない長径 15cm ～ 20cm の石灰岩の礫層が略段状に堆積する。
	規　　模	トレンチでの確認のため、畦を挟み 3m45cm のみ検出。
	工法など	石列は岩盤に据えられ、南側を 15 層（黄褐色混礫砂質土層）で覆われる。15 層の下には岩盤直上の 25a 層（灰白色砂質土層）が重なる。礫層は石列より 1m 南側で隆起する岩盤に沿って 15 層を覆いながら略段状に石列まで堆積する。礫層は鶴嘴を用いても容易に動かせないほど堅く締まる。石列北側に堆積する 14 層（白褐色細礫層）と礫層を 10a 層（褐色混礫土層・第 4 礫層）が覆い、次いで 8 層（黒色土粒赤褐色土層）が重なり、上面で平坦面を形成し 6 層（暗灰色混礫土層・第 3 礫層）が敷かれる。

出土遺物

層序	種類	中国産青磁											中国産白磁			中国産染付				中国産褐釉陶器					その他の輸入陶磁器	タイ産半練	本土産陶器	土器	石器	高麗系瓦	大和系瓦		円盤状			古銭	金属製品		合計
		碗			皿		盤		瓶				碗		皿	碗		瓶	不明	壺			擂り鉢		天目碗	蓋	擂り鉢	胴部	石製品	灰	灰	赤	沖無	瓦	褐釉	銭	釘	鈴状製品	
		口縁	胴	底	口縁～底	口縁	底	口縁	底	胴	口縁	胴	底	口縁	胴	口縁	胴	底部	胴部	口縁	胴部	底部	口縁	底部	胴部	甲部	胴部			平	平	平							
スー14 SD16	8 層　黒色土粒混赤褐色土層	7		4	1			1			4		1	1	1	1	1				23		1	1		1	1	1		2			1		1				54
スー14 SD16 北壁	8 層　黒色土粒混赤褐色土層	3	1	4		1	3	1		1	1	1						1				9								1	1	1		1			1		31
スー14　5m ライントレンチ（石積北）	8 層　黒色土粒混赤褐色土層	1						1							1					1																			4
スー14　5m ライントレンチ東西畦北側	8 層　黒色土粒混赤褐色土層	4		1		2		1			5								1		3					1			1							1		1	21
スー14 SD16 北壁	10a 層　褐色混礫土層																				1																		1
スー14 SD16 南壁	10a 層　褐色混礫土層										1																												1
スー14　5m 以西トレンチ	10a 層　褐色混礫土層																					1																	1
スー14　5m ライントレンチ	10a 層　褐色混礫土層	3																			2																		5
スー14 SD16 北壁	15 層　黄褐色混礫砂質土層									1																													1
スー14　5m ライントレンチ東西畦北側	15 層　黄褐色混礫砂質土層																				3				1														4
スー14　5m	20c 層　暗褐色粘																																						

備考

平成 12 年度調査で検出されたSA03 とSA02 及び 8 層・10a.b.c 層と間層は道幅拡張工事における同一工程内の構築物と考えられ、SA02 は層順から造成土の基礎となる遺構と考えられる。第 2b 期の遺構。礫層が隆起する岩盤から石列まで略段状に堆積するのは、堅く締まった基盤を造成部の境界に構築することにより、造成部の境界面の剥離や陥入・沈降を防ぐためではないかと推察される。

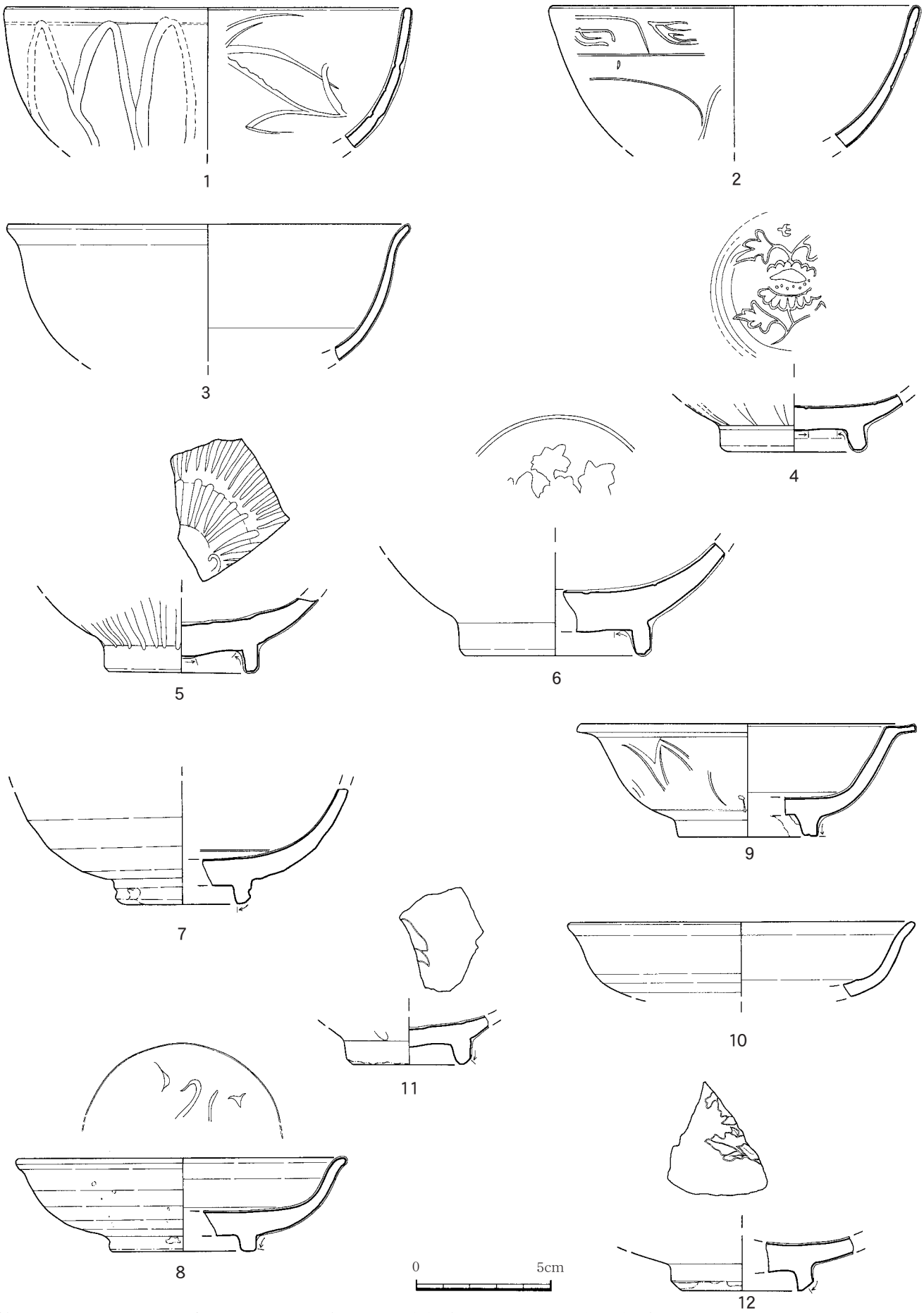


第50図　SA02　出土遺物　８層　黒色土粒混赤褐色土層（造成層）・青磁

第34表　青磁観察一覧（1）

単位：cm

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	素　　地	口　径 器　高 高台径	釉色　貫入	器形・文様・施釉 などの特徴	出土地点 出 土 層
第50図 1 図版22 7	ラマ式蓮 弁文碗	口	黄灰色の微粒子。黒色粒子が僅かに見られる。	15.8 － －	暗オリーブ色のやや透明がかった失透釉。貫入は見られない。	外反碗。外面にはラマ式蓮弁文、内面には刻花文を配する。15c前～中。	ス－14　5mライントレンチ8層黒色土粒混赤褐色土層
第50図 2 図版22 8	雷文帯碗	口	白色の微粒子。黒色粒子が僅かに見られる。	16.0 － －	白味がかった緑色の失透釉。貫入は内外面の胴部にやや粗い貫入が見られる。	大振りの直口口縁碗。雷文の中心で反転する雷文を外面口縁直下に配する。内面口縁直下には簡略化された雷文が見られる。雷文の直下には草花文か。15c中～後。	ス－14　5mライントレンチ8層黒色土粒混赤褐色土層
第50図 3 図版22 9	碗底部	底	灰白色の微粒子。黒色粒子、気泡が見られる。	－ － 5.6	淡緑色の透明釉。内外面ともにかなり粗い貫入が見られる。	高台内刳りの浅い碗の底部。内底面に圏線と菊花文、外面には蓮弁の下部と考えられる片切彫りの縦位線が見られる。15c前～中。	セ－16　8層黒色土粒混赤褐色土層
第50図 4 図版22 10	碗底部	底	黄白色の微粒子。気泡が多く見られる。	－ － 7.2	緑色の透明釉。外底面は全釉の後、蛇の目状に釉剥ぎ。内外面ともに粗い貫入が見られる。	高台が「ハ」の字状に外傾する碗の底部。文様は見られない。15c前～中。	ス－14　SD15　8層黒色土粒混赤褐色土層
第50図 5 図版22 11	稜花皿	口	灰白色の微粒子。黒色粒子、気泡が見られる。	－	緑色の失透釉。外面のみやや粗い貫入が見られる。	内面胴部に丸彫りの圏線、胴部と底部の境にも同様の圏線が見られる。15c前～中。	ス－14　5mライントレンチ8層黒色土粒混赤褐色土層
第50図 6 図版22 12	鍔縁盤	口	灰白色の微粒子。黒色粒子が多く見られる。	26.8 － －	明緑色の失透釉。内外面ともに細かい貫入が見られる。	鍔端部を上方に撮み上げて成形する盤。内面胴部に櫛描の蓮弁文を配する。	ス－14　5mライントレンチ8層黒色土粒混赤褐色土層



第51図　SA02　出土遺物　８層　黒色土粒混赤褐色土層（造成層）・青磁

第35表　青磁観察一覧（２）

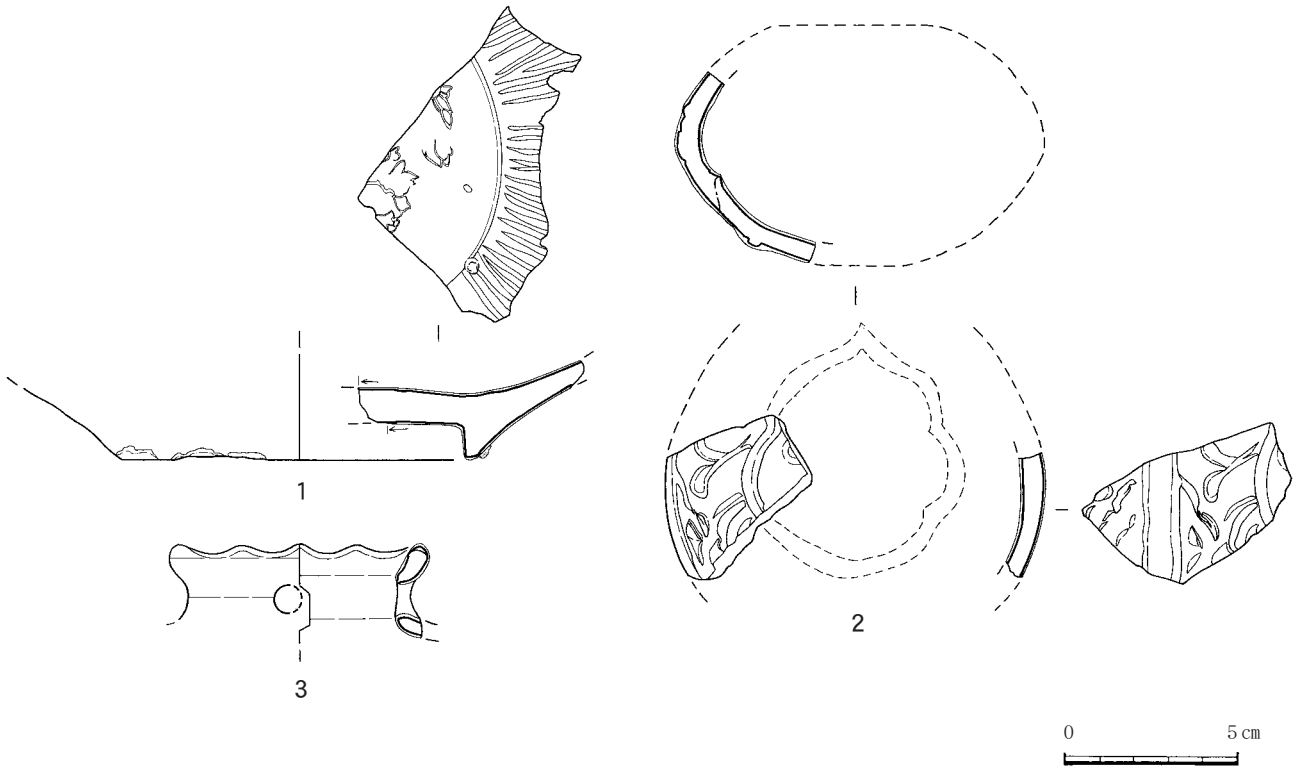
単位：cm

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	素　　地	口　径 器　高 高台径	釉色　貫入	器形・文様・施釉 などの特徴	出土地点 出 土 層
第51図 1 図版23 1	直口口縁碗	口～胴	青白色の微粒子。気泡と黒色粒子が見られる。	15.2 － －	淡緑色の透明釉。貫入は見られない。	外面には片切彫りの蓮弁文。内面には刻花文が見られる。内外面ともに釉は厚く施される。	スー14　SD16 ８層黒色土粒混赤褐色土層
第51図 2 図版23 2	直口口縁碗	口～胴	灰白色の微粒子。気泡が見られる。	14.0 － －	明緑色の失透釉。内外面ともに粗い貫入が見られる。	外面には口縁直下に雑な雷文、その下にラマ式連弁文が配される。外面胴部に篦による轆轤成形痕が見られる。	スー14　SD16 ８層黒色土粒混赤褐色土層
第51図 3 図版23 3	外反口縁碗	口～胴	灰色の微粒子。気泡が見られる。白色の粗粒子が僅かに混入。	15.2 － －	淡緑色の失透釉。貫入は見られない。	口縁部が「く」の字状に折れる外反碗。内面胴下部には陰圏線が１条見られる。	スー14　SD16 ８層黒色土粒混赤褐色土層
第51図 4 図版23 4	碗底部	底	灰白色の微粒子。気泡が多くみられる。	－ － 5.5	明緑色のやや透明がかった釉。内外面ともにやや粗い貫入が見られる。	高台は「ハ」の字状に外傾する。内底面には陰圏線と印花で菊文を、外面には片桐彫りで無鎬蓮弁文を配する。全釉後、外底面のみ輪状に掻き取る。	スー14　SD16 ８層黒色土粒混赤褐色土層
第51図 5 図版23 5	碗底部	底	白色の微粒子。気泡が見られ、黒色粒子がわずかに混入する。	－ － 5.8	明緑色の失透釉。内外面ともに細かい貫入が見られる。	高台断面は台形状となる。内面には丸彫りの縦位線を並べた連続文、内底面にも同様の文様が見られる。外面には線刻細蓮弁文を配する。全釉後、外底面のみ円形状に掻き取る。	スー14　SD16 ８層黒色土粒混赤褐色土層
第51図 6 図版23 6	碗底部	底	灰白色の微粒子。気泡が多くみられる。	－ － 7.2	明緑色のやや透明がかった釉。内外面ともにやや粗い貫入が見られる。	高台はやや高く、畳付は丸味を帯びる。内底面には陰圏線、印花文が見られるが、全体の文様構成は不明。全釉後、外底面のみ円形状に掻き取る。	スー14　SD16 ８層黒色土粒混赤褐色土層
第51図 7 図版23 7	碗底部	底	灰白色の微粒子。白色砂粒気泡が見られる。	－ － 5.1	灰オリーブ色の失透釉。内外面の一部に細かい貫入が見られる。	高台は低く、高台断面は三角形状となる。内底面に陰圏線が１条、外面胴部には回転篦削り痕が見られる。畳付は水平で、高台内面から露胎となる。	スー14　SD16 ８層黒色土粒混赤褐色土層

第36表　青磁観察一覧（３）

単位：cm

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	素　　地	口　径 器　高 高台径	釉色　貫入	器形・文様・施釉 などの特徴	出土地点 出 土 層
第 51 図 8 図版 23 8	玉縁口縁皿	口～ 底	灰白色の微粒子。気泡が僅かに見られ、茶褐色の粒子が混入する。	12.4 3.5 5.2	オリーブ灰色の失透釉。貫入は見られない。	口縁部が玉縁状となる。畳付は水平で高台は低い。高台の断面形は台形状となる。内底面には陽圏線が一条見られる。外面高台下部から外底面にかけて露胎。	スー 14　SD16 ８層黒色土粒混 赤褐色土層
第 51 図 9 図版 23 9	口折皿	口～ 底	灰白色の微粒子。黒色の粒子が混入する。	12.8 4.2 5.2	淡緑色の透明釉。内外面ともに細かい貫入が見られる。	鍔上面が僅かに窪み、釉が溜まって平坦となる。外面胴部には篦描きで蓮弁文、櫛描きで界線を描く。高台の断面形は台形状となる。畳付は水平に仕上げている。底部の一部は露胎となるが、掻き取った痕跡は見られない。	スー 14　SD16 ８層黒色土粒混 赤褐色土層
第 51 図 10 図版 23 10	外反口縁皿	口～ 胴	灰白色の微粒子。気泡が見られる。	13.0 － －	明緑色の透明釉。内外面ともに細かい貫入が見られる。	内底面には陽圏線が一条、外面の高台近くには陰圏線が２条見られる。外面には轆轤成形痕が見られる。	スー 14　SD16 ８層黒色土粒混 赤褐色土層
第 51 図 11 図版 23 11	皿底部	底	橙色の微粒子。気泡が見られる。	－ － 4.6	濃緑色の失透釉。内外面ともに細かい貫入が見られる。	外底面には回転成形痕が見られる。内底面に線刻の文様が見られる。高台下部まで施釉され、畳付から外底面まで露胎。	スー 14　SD16 ８層黒色土粒混 赤褐色土層
第 51 図 12 図版 23 12	皿底部	底	灰色の微粒子。気泡が僅かに見られる。	－ － 5.4	オリーブ灰色の透明釉。貫入は見られない。	高台下部は斜めに面取りされる。外底面には成形痕が見られる。内底面には草花文と考えられる文様が見られる。釉は高台下部まで施される。外底面は露胎。	スー 14　SD16 ８層黒色土粒混 赤褐色土層

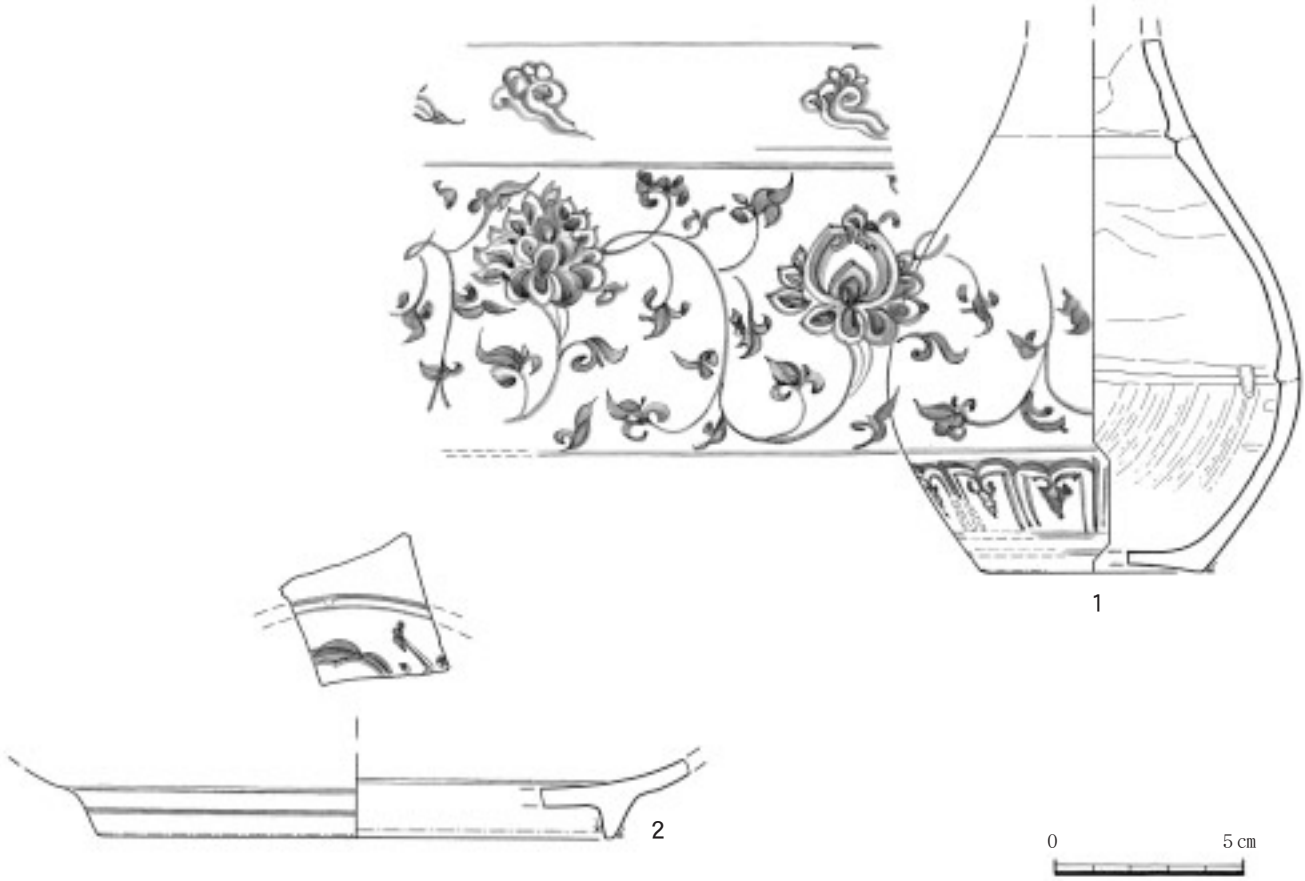


第52図　SA02　出土遺物　８層　黒色土粒混赤褐色土層（造成層）・青磁

第37表　青磁観察一覧（４）

単位：㎝

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	素　　地	口　径 器　高 高台径	釉色　貫入	器形・文様・施釉 などの特徴	出土地点 出 土 層
第 52 図 1 図版 24 1	盤	底	灰色の微粒子。気泡、黒色粒子が見られる。	－ － 10.2	濃緑色のやや透明がかった釉。貫入は見られない。	内面胴部には櫛描きの蓮弁文と内底面には花文が見られる。釉は外底面の一部を除いて施される。畳付には砂粒が付着する。	スー 14　SD16 ８層黒色土粒混赤褐色土層
第 52 図 2 図版 24 2	瓶	胴	青白色の微粒子。茶褐色の粒子が塊状となって混入する。	－	淡緑色の透明釉。内面の一部に粗い貫入が見られる。	瓶の肩部に相当する。草文が陽刻で施こされている。内面には継ぎ目と考えられる突起が見られる。	スー 14　SD16 ８層黒色土粒混赤褐色土層
第 52 図 3 図版 24 3	不明	不明	白色の微粒子。茶褐色の粒子が塊状となって混入する。	7.4 － －	明緑色の失透釉。内外面にかなり粗い貫入が見られる。	口縁部と考えられる部分は波状となり、円形の透かしが見られる。器形から香炉か器台になると考えられる。	スー 14　SD16 ８層黒色土粒混赤褐色土層

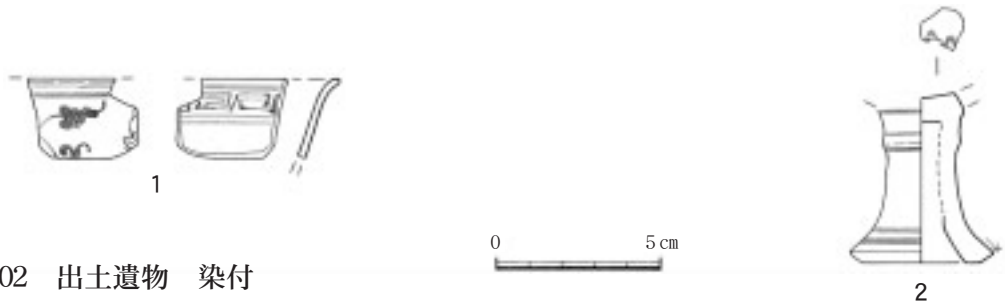


第53図　SA02　出土遺物　８層　黒色土粒混赤褐色土層（造成層）・染付

第38表　染付観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	文 様 構 成	呉　須 （藍色） の発色	釉色	施釉・素地・貫入など	出土地点 出 土 層
第53図 1 図版24 4	瓶	頸 〜 底	－ － 5.7	頸部には雲文、胴部は宝草華唐草文、底部近くには上向きのラマ式蓮弁文が見られる。各文様を画するように１条ないし２条の界線が見られる。	やや鈍い	青白色	べた底の外底面以外は全釉。内面には細かい貫入、外面にはやや粗い貫入が見られる。素地は白色で微粒子。黒色粒子、気泡が僅かに見られる。胴部の最大径部分と胴部と頸部との境に継ぎ目痕が見られる。14c 後〜15c 中。	スー14　SD-16 ８層黒色土粒混赤褐色土層
第53図 2 図版24 5	盤	底	－ － 13.6	外面に３条の界線、内底面には全体構成は窺えないが如意頭雲文（霊芝雲）と考えられる文様が見られる。	やや鈍い	青白色	畳付と内面高台下部のみ露胎。内面には細かい貫入、外面にはやや粗い貫入が見られる。素地は白色で微粒子。黒色粒子、気泡が僅かに見られる。15c 後〜 16c 中。	スー14　SD-16 ８層黒色土粒混赤褐色土層

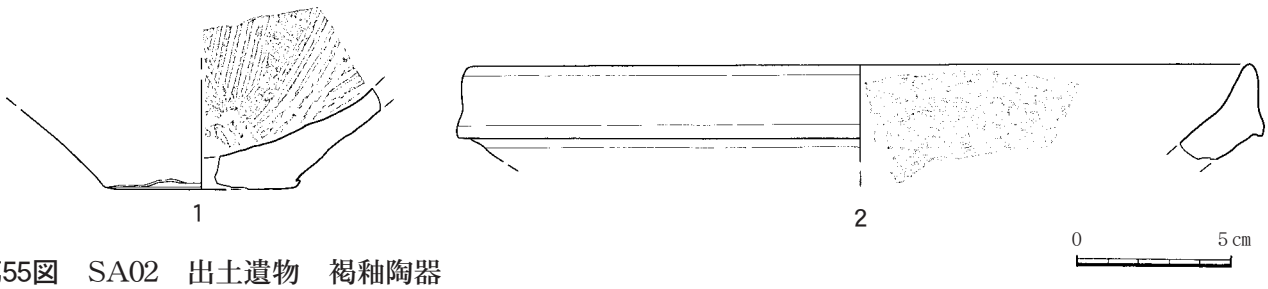


第54図　SA02　出土遺物　染付

第39表　染付観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	文様構成	呉須（藍色）の発色	釉色	施釉・素地・貫入など	出土地点 出土層
第54図 1 図版24 6	碗	口	－	内面には、口縁直下に雷文帯、胴部には口縁直下に界線とその下に宝相華唐草文が見られる。	明瞭	青白色	素地は白色の微粒子。気泡が見られる。15c 前～後。	スー14　SD-16 8 層黒色土粒混赤褐色土層
第54図 2 図版24 7	台付き杯	脚	－ － 4.4	底部近くに２条の圏線、脚中央部に３条の圏線が見られる。内底面にも呉須で文様を描くが全体構成は不明である。	やや鈍い	青白色	脚部内面、底面は露胎で、外面、内底面は施釉される。素地は白色で気泡が僅かにみられる。15c 後～ 16c 中。	スー14　SD-16 8 層黒色土粒混赤褐色土層

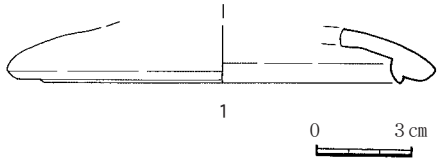


第55図　SA02　出土遺物　褐釉陶器

第40表　褐釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	部位	口径 器高 底径	器面調整	文様・素地など	出土地点 出土層
第55図 1 図版24 8	底	－ － 6.2	内底面中央を中心にして８本単位の櫛目が内面底部から胴部にかけて施される。外面器表には僅かながら凹凸が見られる。	底部から胴部にかけては直線状に立ち上がる擂り鉢。素地は灰黄色で気泡が僅かに見られる。白、黒色砂粒が多く混入する。	スー14　SD16 8 層黒色土粒混赤褐色土層
第55図 2 図版24 9	口	25.2 － －	内面口縁部に轆轤成形痕が見られる。	口縁下部に鍔をつくる。やや反りを有しながら胴部へ移行する。素地は黄灰色の微粒子で白色の粗粒子、砂粒、橙色の粒子が見られる。	スー14　SD16 8 層黒色土粒混赤褐色土層



第56図　SA02　出土遺物　半練

第41表　半練観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	部位	端部径	観察事項	出土地点 出土層
第56図 1 図版24 10	端部	11.2	端部を折り曲げ、そのまま先端に丸みを持たせて成形する。折り曲げた先端部は丁寧に上方へ折り返している。表裏面ともに回転成形痕が残り、器表の色調は橙色となる。素地は橙色の微粒子で灰色の粗粒子、砂粒が見られる。	ス-14 SD-16　8 層黒色土粒混赤褐色土層

中国産陶器（第57図１図版25－１）

肩の張る壺で口径は小さい。内外面ともに轆轤成形痕が見られる。素地は灰白色の微粒子で黒色粒子、気泡、白色粒子が見られる。口径2.4㎝。16ｃ。

褐釉陶器（第57図２、３図版25－２、３）

第57図の２は、ナデ肩を呈する茶壺。口縁部直下には段を有する。素地は橙色の微粒子で白色粒子が混入する。口径7.6㎝。

第57図３は、口径18.9㎝。口縁部が「ク」の字状に折れる壺。頸部は急な立ち上がりを見せる。釉色は黒褐色で、釉厚には斑が見られる。内外面ともに細かい貫入が見られる。素地は黄褐色の微粒子、白、黒色粒子や砂粒が見られる。

沖縄産陶器（第57図４図版25－４）

底径4.5㎝。底径から小振りな碗と考えられる。外面は畳付と外底面中央辺りが露胎となる。内面は内底面が輪状に釉掻きがなされている。釉色は外面が黒褐色で内面は黄白色。素地は暗褐色の微粒子で白色粒子が僅かに見られる。

煙管（第57図５図版25－５）

煙管の雁首。陶質で側面は八面取りされる。孔は雑に穿たれており、上部にいくほど径が大きくなる。下部は欠損する。残存量6.1ｇ。

金属製品（第57図６、７図版25－６、７）

角釘。全長3.9㎝。芯部分の断面形は四角形となり、頭部の平面形は楕円形状となる。残存量3.9ｇ。

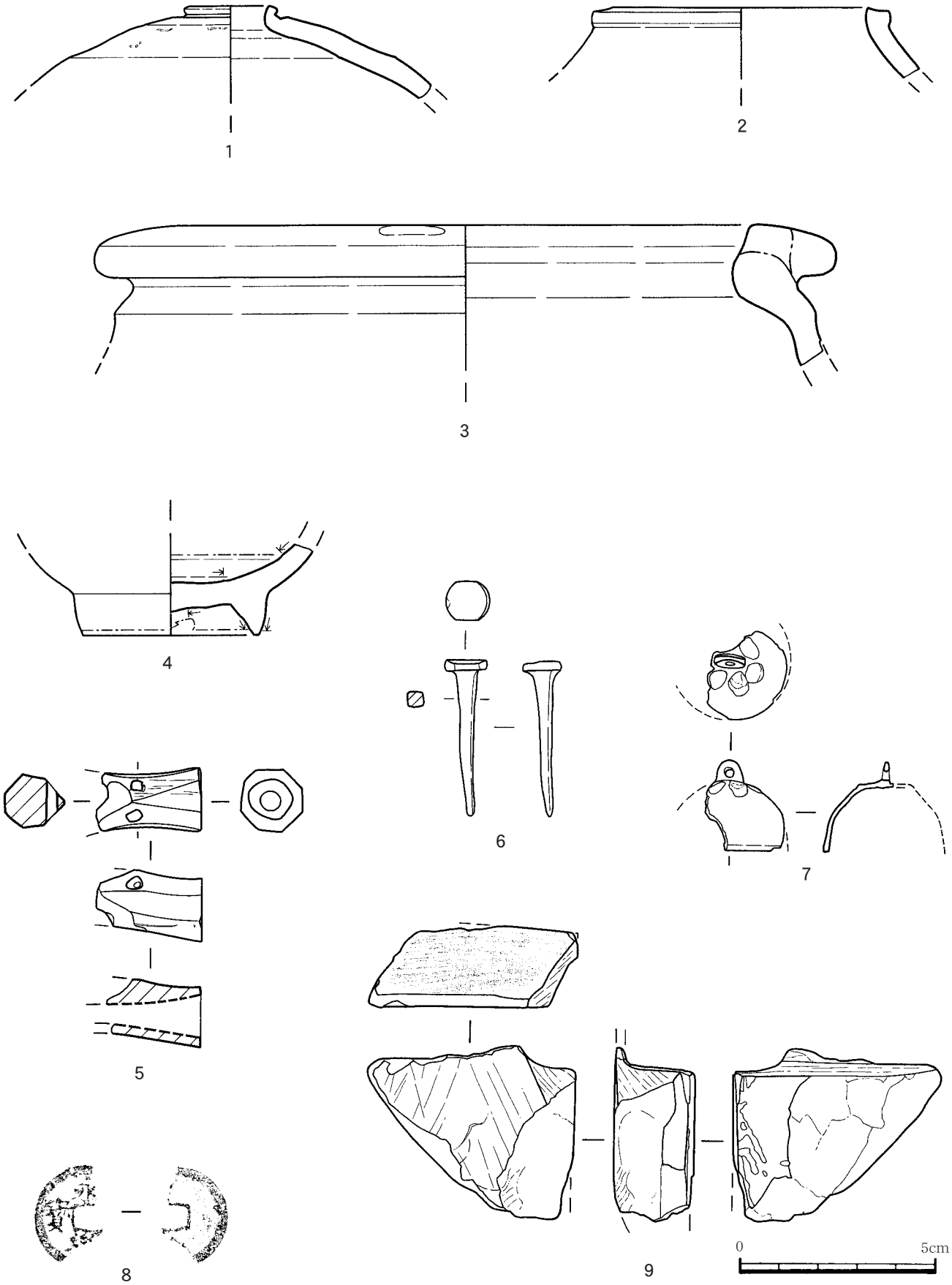
銅製の鈴か。半円のドーム状となりその頂部には吊り下げるための孔が穿たれた金属片が付属する。残存量4.1ｇ。

銭貨（第57図８図版25－８）

永楽通宝。半分が欠損しており「永」「寳」の二字が読み取ることができる。残存量1.8ｇ。

石器（第57図９図版25－９）

砥石若しくは硯と考えられるが小片のため詳細は不明。残存量48.1ｇ。



第57図　SA02　出土遺物　中国産陶器１　褐釉陶器２、３　沖縄産陶器４　煙管５　金属製品６、７
銭貨８　石器９

19層黒褐色混土礫層（第５礫層）

泉州窯系磁器（第58図１図版25－10）

口縁部が緩やかに外反する碗である。外面口縁直下に界線が見られる。釉は内外面ともに薄く施され、一部露胎となる。釉色は灰緑色の失透釉、外面胴部のみ貫入が見られる。素地は黄白色の微粒子、気泡がわずかに見られる。

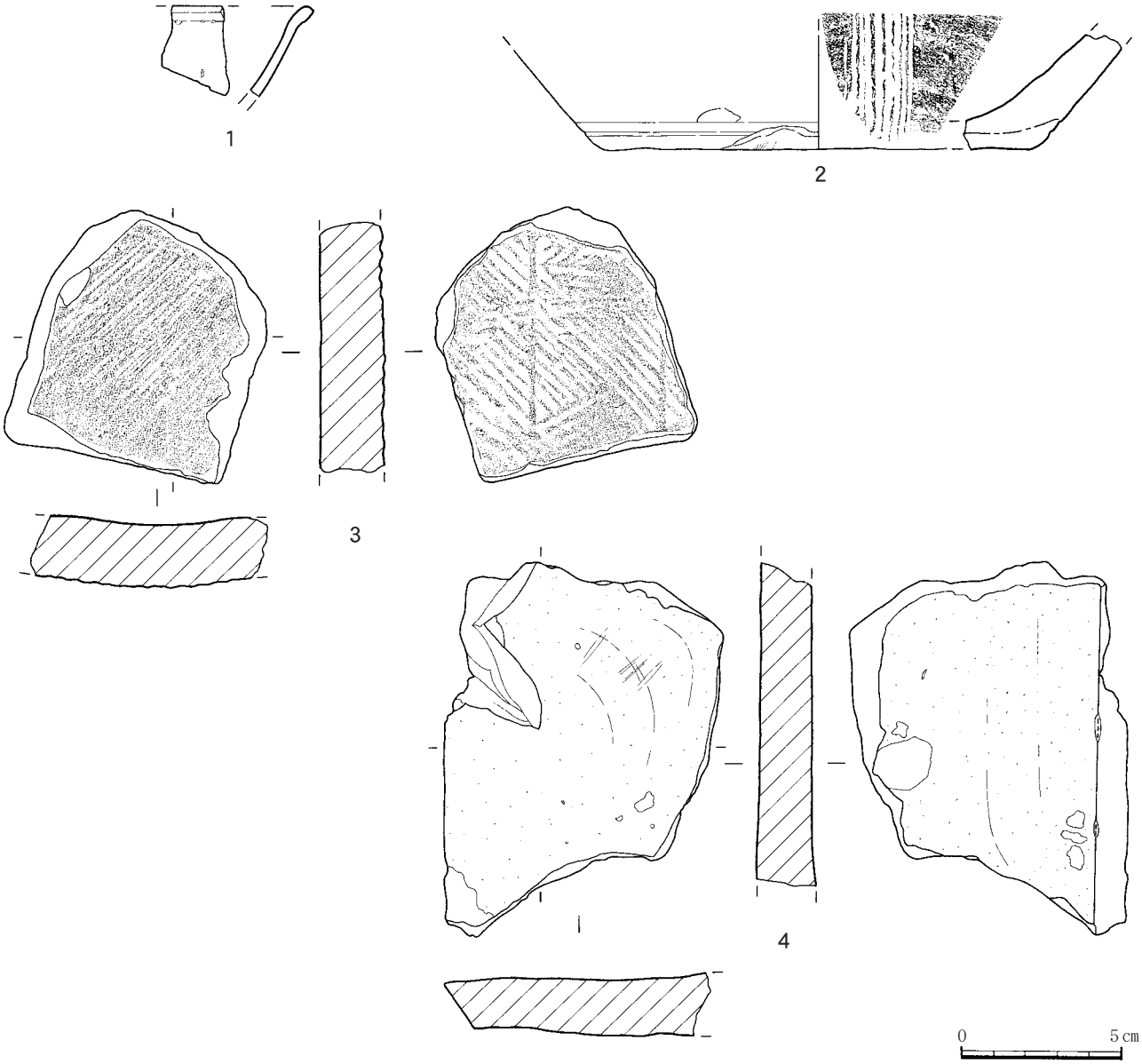
本土産陶器（第58図２図版25－11）

肥前の擂鉢底部。底部から胴部にかけて直線上に立ち上がる。内外面ともに轆轤痕が残り、８本単位の櫛描きが内底面には施される。素地は浅橙色で、白色粒子が多く見られる。

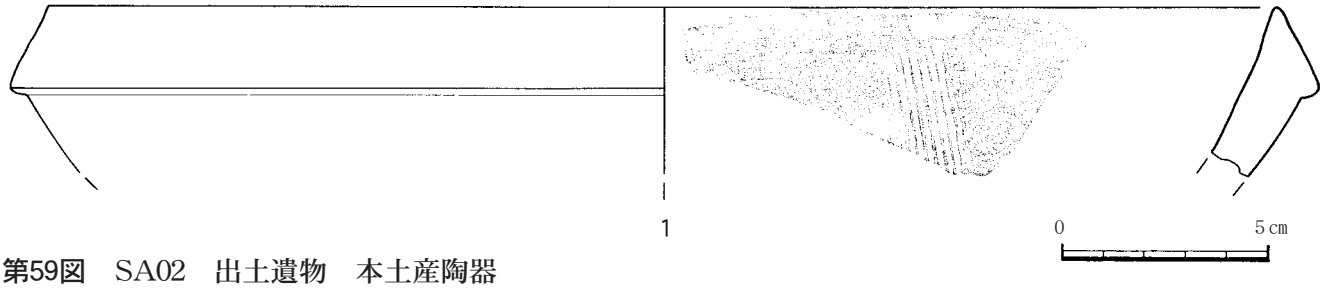
瓦（第58図３、４図版25－12、13）

高麗系瓦の小片。凸面には羽状の敲き痕が見られる。凹面には糸引き痕と布目痕が見られる。両面共に灰色で濃淡の斑がある。

大和系瓦の小片。表裏面ともに灰色で一部、浅黄橙色となる。端部は斜めに面取りが見られる。成形痕は見られない。



第58図　SA02　出土遺物　19層　黒褐色混土礫（第５礫層）青磁１　擂鉢２　瓦３、４

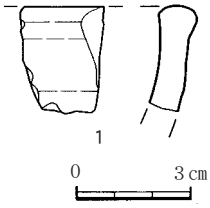


第59図　SA02　出土遺物　本土産陶器

第42表　本土産陶器観察一覧

単位：㎝

挿図番号 図版番号	分　類	器　種	部　位	口　径 器　高 高台径	観 察 事 項	出 土 地
第59図 1 図版25 14	備前系	擂　鉢	口	30.0 － －	口縁部下方に鍔が付く。５本単位の櫛描きが内面に見られる。白、黒砂粒が多く混入する。素地はにぶい黄橙色の微粒子。外面器表は橙色となる。	スー14　1層 客礫層

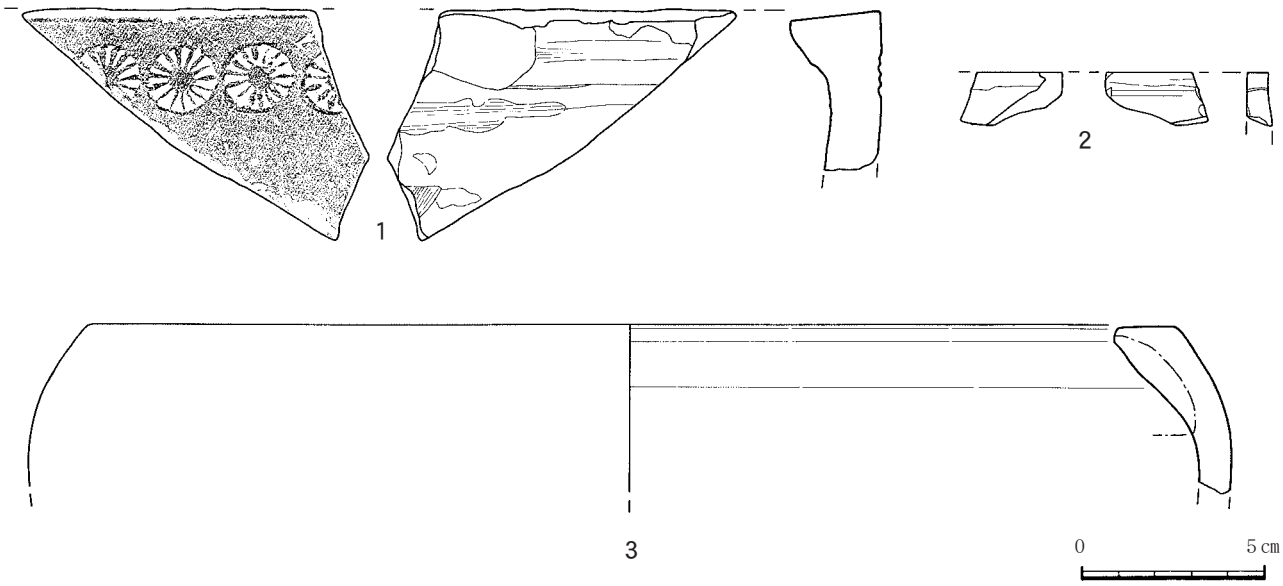


第60図　SA02　出土遺物
沖縄産陶器

第43表　沖縄産陶器観察一覧

単位：㎝

挿図番号 図版番号	器　種	部　位	口　径 器　高	観 察 事 項	出 土 地
第60図 1 図版25 15	鉢	口	－	口縁部が玉縁状となる。内外面ともに轆轤成形痕が見られる。	スー14　SD16 ８層黒色土粒混赤褐色土層

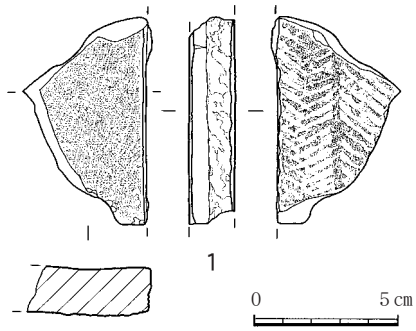


第61図　SA02　出土遺物　瓦質土器

第44表　瓦質土器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	器　種	部　位	口　径 器　高 高台径	観 察 事 項	出 土 地
第61図 1 図版25 16	火炉	口	－	口縁部は直口し内側に「L」字状となる。口唇部は平ら。外面口縁直下に菊花の印刻を横位に連続して施す。内面はナデが見られ、外面は磨きがかけられる。素地は灰色の微粒子で黒色の粒子が混入する。	スー14　SD16 ８層黒色土粒混 赤褐色土層
第61図 2 図版25 17	鉢	口	－	口縁部が直口する鉢。口唇部は平坦で、内外面ともに轆轤成形痕が見られる。灰色の微粒子で白色粒子が混入する。	スー14　SD16 ８層黒色土粒混 赤褐色土層
第61図 3 図版25 18	鉢	口	29.0 － －	内湾する鉢。口唇部は平坦に仕上げ、胴部に移行すると器壁は薄くなる。文様は施されず、内面に轆轤成形痕が見られる。素地は灰白色で微粒子、気泡が僅かに見られる。	スー14　SD16 ８層黒色土粒混 赤褐色土層



第62図　SA02　出土遺物　瓦

第45表　瓦観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	製 作 痕	色調	出土地点 出 土 層
第62図 1 図版26 1	高麗系瓦	筒部	凹面には綾杉状の敲き痕、凸面には糸引き痕、布目痕がやや不明瞭ながら見られる。	灰色	Ⅱ地区　SD16 ８層黒色土粒混 赤褐色土層

第63図　SA02　出土遺物　円盤状製品

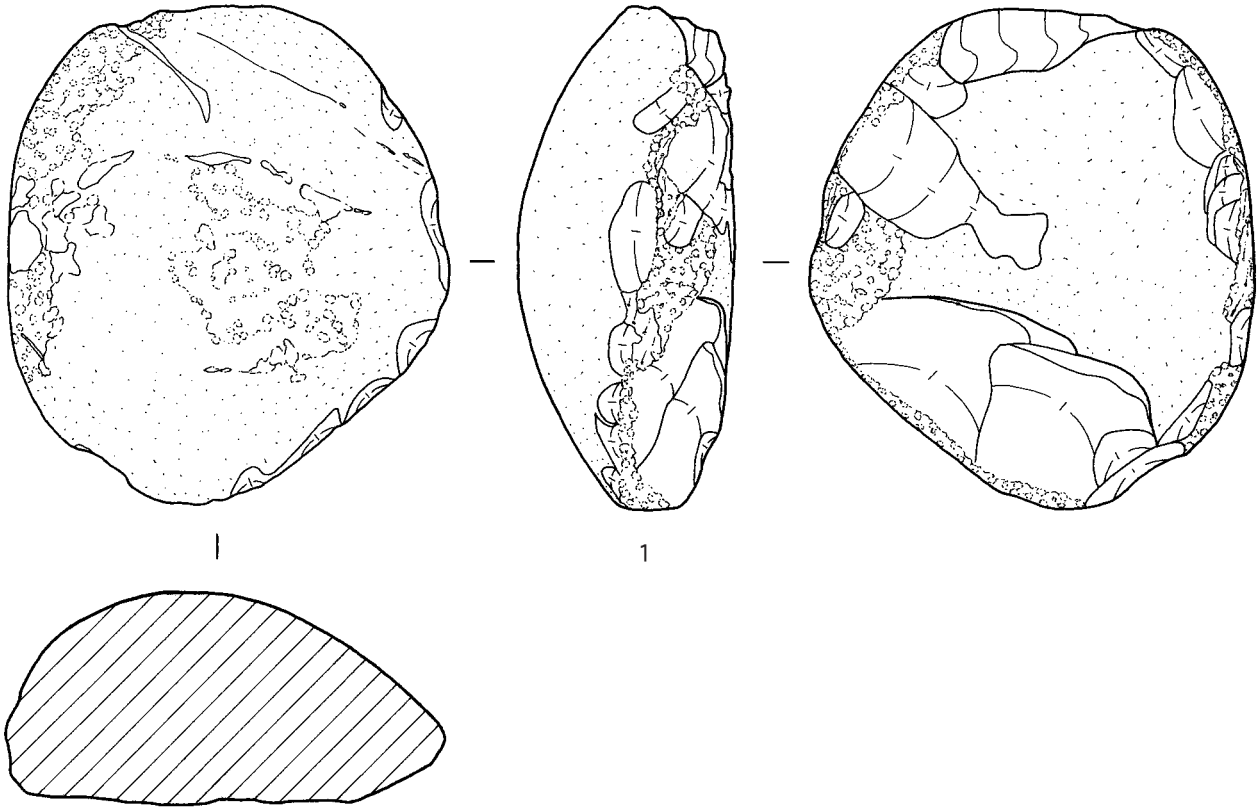
第46表　円盤状製品観察一覧

単位：mm、g

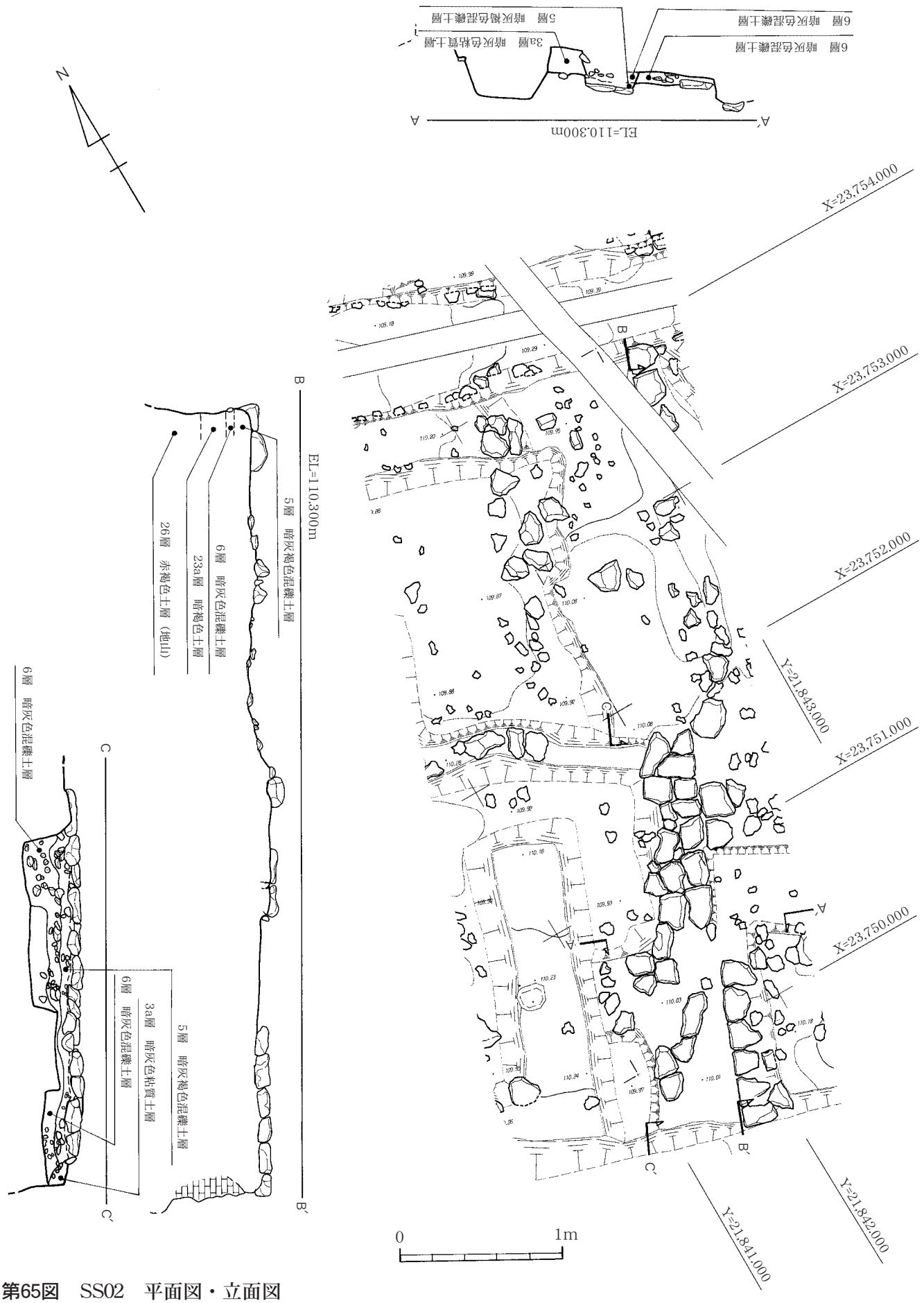
挿図番号 図版番号	素材	長径	短径	厚さ	重さ	使用部位	完・破	出 土 地
第63図１ 図版26－２	染付	16.6	14.6	2.1	0.9	胴部	完	スー14　SD16　８層黒色土粒混赤褐色土層
第63図２ 図版26－３	赤瓦	49.6	48.7	14.3	38.0	筒部	完	スー14　SD16　８層黒色土粒混赤褐色土層

石製品（第64図１　図版26－4）

石球片か。砂岩製で表面は研磨され、滑らかになる。側面と凸面の一部に敲き痕が見られるが不明瞭。残存量308.3ｇ。スー14　ＳＤ06　８層黒色粒混赤褐色土層出土。



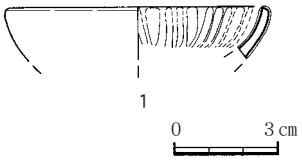
第64図　SA02　出土遺物　石製品



第65図　SS02　平面図・立面図

第47表　SS02　遺構表

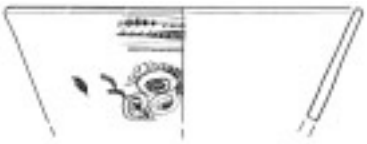
位置	地　　区	スー14　　X=23,754.000 ～ X=23,756.000。 Y=21,841.000 ～ Y=21,842.000。
	重　　複	南側をSD15により破壊される。西側は遺構上面より29cm ～ 36cmの深さで抉られ、2層が遺構上面及び破壊部分を直接覆う。
構造	形　　状	敷石遺構（石畳）。残存部中央に目地が認められ、その軸はN68°E勾配は東西軸に15°を測る。敷石表面は摩滅し滑らか。
	規　　模	遺構の残存長は2m62cmを測る。SD16の南壁断面に同遺構の残存部と思われる敷石が2基検出され、これらを含むと4m85cmとなる。
	工法など	長径3 ～ 5cm 程度の礫が混入する5層（暗灰褐色混礫土層）を基盤層とし敷石が配される。5層は6層（暗灰色混礫土層・第3礫層）の直上の層。敷石の大きさは長径13cm ～ 22cm、厚さ7cm ～ 10cmを測り、目地部分の敷石は面を揃えて向き合うように配置される。
出土遺物	青磁、染付、三彩、褐釉陶器、本土産陶磁器 沖縄産陶器、瓦、金属製品、銭貨、石器	
備考	遺構西端部は敷石面より29cm ～ 36cmの深さで遺構ごと掘削され、3a層（暗灰色粘質土層）が遺構直上及び掘削部に堆積する。6層（第3礫敷）より上面に遺構が構築されており、第2c期の遺構と考えられる。	

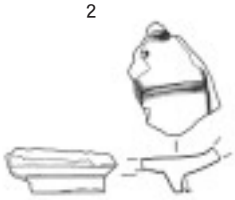


第48表　青磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	素　地	口径 器高 高台径	釉色・貫入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第66図 1 図版26 5	直口口縁皿	口	白色の微粒子。茶褐色の粒子が混入する。	7.6 — —	明緑色の失透釉。貫入は見られない。	口縁が直口する皿で、やや内湾気味となる。内面胴部に3本単位の櫛描きが見られる。	ス-13東西トレンチ①3a層灰色粘質土層



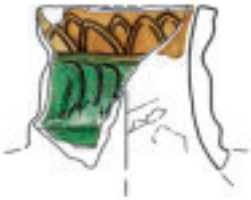


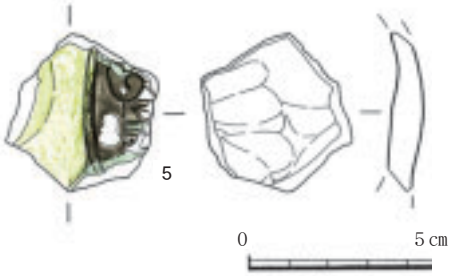
0　3 cm

第49表　染付観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 高台径	文様構成	呉須(藍色)の発色	釉色	施釉・素地・貫入など	出土地点 出土層
第66図 2 図版26 6	碗	口	12.4 — —	内面には口縁直下に圏線、外面には口縁直下に上下を界線で画した中に列点文並びにその直下に草花文が見られる。	鈍い	灰白色	素地は黄白色の微粒子。気泡が見られる。15c後～16c中。	スー13 1層客礫層
第66図 3 図版26 7	碗	底	—	内外面ともに文様が見られるが界線以外不明。	鈍い	黄白色	素地は淡白色の微粒子。気泡が見られる。外底面に回転成形痕が残る。内外面ともに細かい貫入が見られる。15c後～16c中。	ス-13中央畦東トレンチ2層客土層

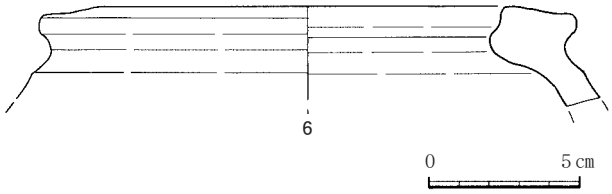




第50表　三彩観察一覧

単位：cm

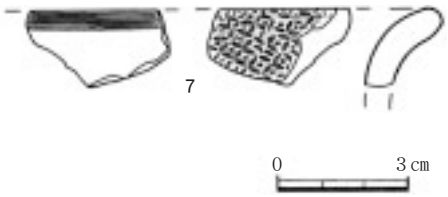
挿図番号 図版番号	器種	口径 器高 高台径	観察事項	出土地点 出土層
第66図 4 図版26 8	不明	4.5 — —	人形の置物か。素地は橙色、型抜き成形、白化粧は施されない。外面は全釉され、内面は下部のみ施釉される。釉の剥落は見られない。足下の裾部分が台座の部分と想定される。内面には指押さえ痕が残る。	Ⅰ地区スー13 1層客礫層
第66図 5 図版26 9	不明	—	水注の可能性があるが小片のため詳細は不明。外面のみ施釉され、白化粧が施される。渦巻様の文様が褐色釉、蓮弁文が黄褐色釉がそれぞれ施される。内面には指押さえ痕が明瞭に残る。	Ⅰ地区スー13 1層客礫層



第51表　褐釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	口径 器高 高台径	文様・素地など	出土地点 出土層
第66図 6 図版26 10	口	17.7 — —	口縁部の肥厚は、断面が「フ」の字状を呈し、口唇外端が僅かながら上方へ突出する。淡赤橙色の微粒子。気泡が見られる。	スー13東西トレンチ①不明

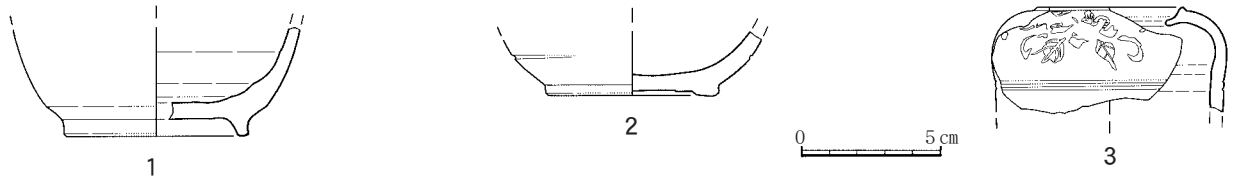


第52表　本土産陶磁器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	分類	器種	部位	口径 器高 高台径	観察事項	出土地
第66図 7 図版26 11	型紙摺り	不明	口	—	器種不明であるが、口縁部は外反する。八宝繋文状の文様が内面全体に見られる。口唇部に沿って呉須が帯状に施される。素地は白色の微粒子で大きめの気泡が僅かに見られる。	スー13中央トレンチ3a層灰褐色粘質土層

第66図　SS02　検出地区出土遺物　青磁1　染付2、3　三彩4、5　褐釉陶器6　本土産磁器

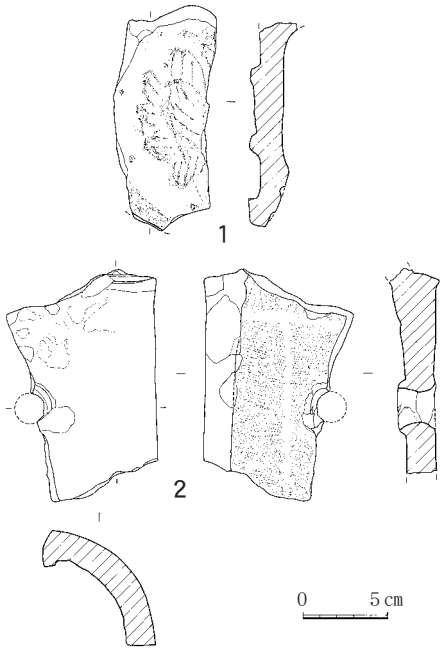


第67図　SS02　検出地区出土遺物　沖縄産陶器

第53表　沖縄産陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	器　種	部　位	口　径 器　高 高台径	観 察 事 項	出 土 地
第67図１ 図版27－1	碗	底	－ － 6.6	高台は「ハ」の字状に開く。内外面ともに轆轤成形痕が見られる。	Ⅰ地区ス－13中央畦東トレンチ２層客土層
第67図２ 図版27－2	碗	底	－ － 6.2	高台は低く、畳付は広い。外底面には回転成形痕が見られる。	Ⅰ地区ス－13中央畦東トレンチ２層客土層
第67図３ 図版27－3	不明	口縁～ 胴部	5.3 － －	口縁部には蓋受けが見られ、肩が張る。肩部を中心に草花文が絵付けされる。色素は剥落し、本来の色調を窺い知ることはできない。その下に２条の界線が見られる。素地は灰色の微粒子で白色粒子が僅かに見られる。	Ⅰ地区ス－13中央畦東トレンチ２層客土層



第68図　SS02　検出地区出土遺物　瓦

第54表　瓦観察一覧

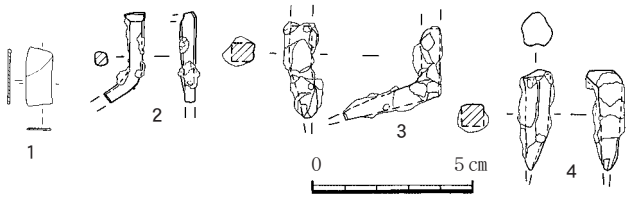
単位：cm

挿図番号 図版番号	仮称名称	部位	文　　様	製 作 痕	色調	出土地点 出 土 層
第68図１ 図版27－4	明朝系瓦 瓦軒平瓦	瓦当部	瓦当文は花心と下弁が描かれる。小片のため文様の全体構成は不明。	裏面は凹凸が見られる。縁に沿ってナデ成形が成されている。	灰褐色	スー13東西畦北東側１層客礫層瓦溜まり
第68図２ 図版27－5	明朝系瓦	筒部～玉縁部	－	凹面は布目痕が不明瞭ながら見られる。又、模骨に巻いた布の皺が明瞭に残る。凸面には工具による縦位の成形痕が見られる。一部漆喰が付着する。	橙色	スー13東西畦北東側１層客礫層瓦溜まり

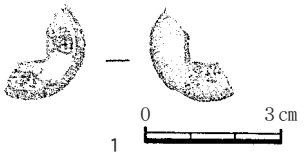
金属製品（第69図1, 2, 3, 4,　図版27－6, 7, 8, 9）

銅製の板状製品。小片で全体形状は不明。錆で全体が覆われる。厚さは１㎜。Ⅰ地区スー13③区東西トレンチ①D層直下暗褐色混砂レキ土層。

釘が３点出土しており全て鉄製である。第69図３はⅠ地区スー13④区中央畦東トレンチ出土、第69図２はⅠ地区スー13東西トレンチ①７層灰色粘質土層、第69図４はⅠ地区中央トレンチ④トレンチ10層石敷き部出土。



第69図　SS02　検出地区出土遺物　金属製品

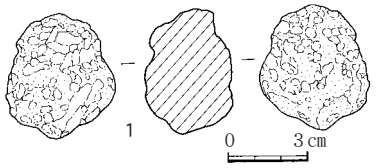


第70図　SS02　検出地区出土遺物　銭貨

第55表　銭貨観察一覧

単位：㎜、g

挿図番号 図版番号	国・王朝	銭名	判読状況		残存状況	初鋳年代	法量				出土地区
			表	裏			銭径	内径	銭厚	重量	
第70図１ 図版27－10	日　本 江戸時代	寛永 通寶	□永 通□	無	破	1697	－	－	0.9	1.1	Ⅰ地区１層客礫層



第71図　SS02　検出地区出土遺物　石器

石器（第71図１　図版27－11）

石球か。砂岩製で歪な球形を呈する。表面には凹凸が多く見られる。叩きなどの使用痕は見られない。残存量68.2ｇ。

Ⅰ④1576　Ⅰ地区中央トレンチ④トレンチ10層石敷部出土

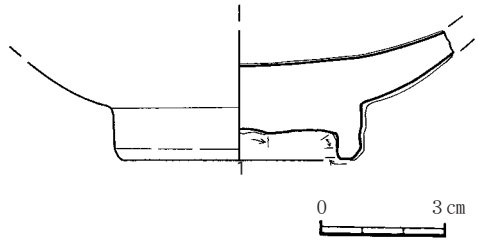
第72図　SR03　平面図・立面図及び断面図

第56表　SR03　遺構表

位置	地　　区	スー14　　X=23,756.000 ～ X=23,754.000 Y=21,845.000 ～ Y=21,846.000
	重　　複	ＳＤ 16 により南側を、コンクリート製の側溝により北側を破壊される。
構造	形　　状	根石も含め２段構造の直線的石積。石積の面は守礼門を背にし西を向く。遺構の主軸はN20°Ｗを測る。
	規　　模	遺構の残存長は主軸上で 198 ｃｍ。積石の面の長径は 20 ｃｍ前後だが、最大 36 ｃｍを測る積石が含まれる。胴の長径は 20 ～ 25 ｃｍを測る。
	工法など	６層（暗灰色混礫土層・第３礫層）を掘り込み、基盤層となる４ａ層（暗褐色混礫砂質土層）が入る。４ａ層には６～ 15 ｃｍの礫が混入される。石積みは４ａ層に設置されるが、積石の加工は粗雑で面と胴の区別を付ける程度であり、形状は歪。

出土遺物	種類		中国産青磁		中国産染付	沖縄産無釉陶器		合計
			碗	不明	不明	壷 or 瓶	火炉	
	層序		口縁	胴	口縁	胴部	口縁	
	ス-13	4a 層　暗褐色混礫砂質土層		1	1	1	1	4
	ス-13	－	1					1
	合　　計		1	1	1	1	1	5

備考	南端はＳＤ 16 北壁には認められるも対壁であるＳＤ 16 南壁には認められず、ＳＤ 16 により損失した範囲内で完結する可能性が考えられる。６層（第３礫層）を掘り込んで遺構が構築されており、第２ｃ期の遺構と考えられる。

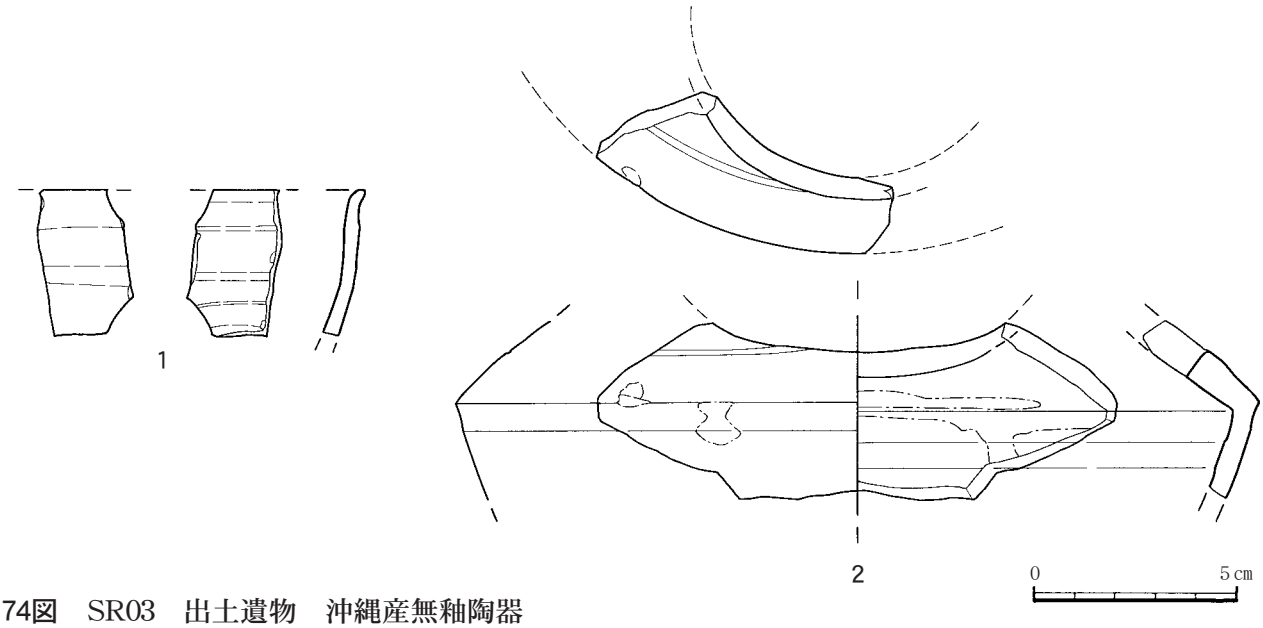


第73図　SR03　出土遺物　青磁

第57表　青磁観察一覧

単位：㎝

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	素地	口径 器高 高台径	釉色・貫入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第73図 1 図版27 12	碗底部	底	灰白色の微粒子。黒色粒子、気泡が見られる。	－ － 6.0	明緑色の失透釉。内外面ともにやや粗い貫入が見られる。	器壁は厚く、外底面の内刳りは浅い。全釉され、外底面は輪状に粗く掻き取られる。	スー13 東トレンチ①不明

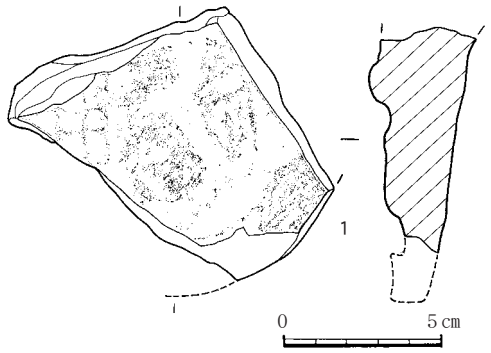


第74図　SR03　出土遺物　沖縄産無釉陶器

第58表　沖縄産無釉陶器観察一覧

単位：㎝

挿図番号図版番号	器種	部位	口径 器高 高台径	観察事項	出土地
第74図1 図版27－13	碗	口	－	外反口縁の碗。内外面ともに轆轤成形痕が見られる。	スー13東西トレンチ2層客土層
第74図2 図版27－14	火炉	口	19.6 － －	内面胴部に轆轤成形痕が明瞭に見られる。外面に朱泥が施される。	スー13 4a層暗褐色混礫砂質土層

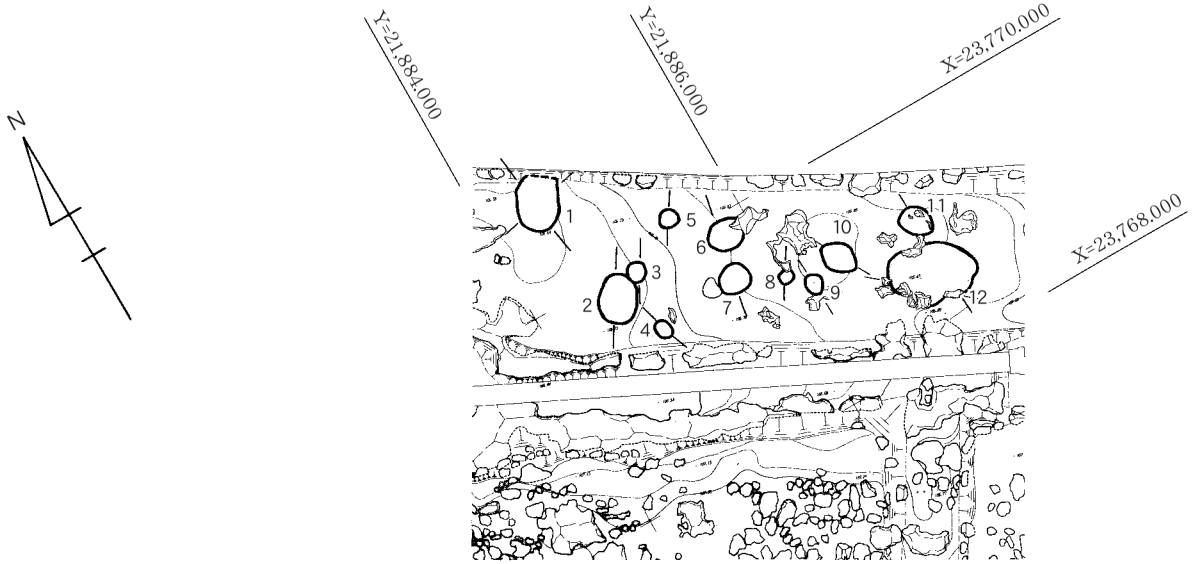


第75図　SR03　出土遺物　瓦

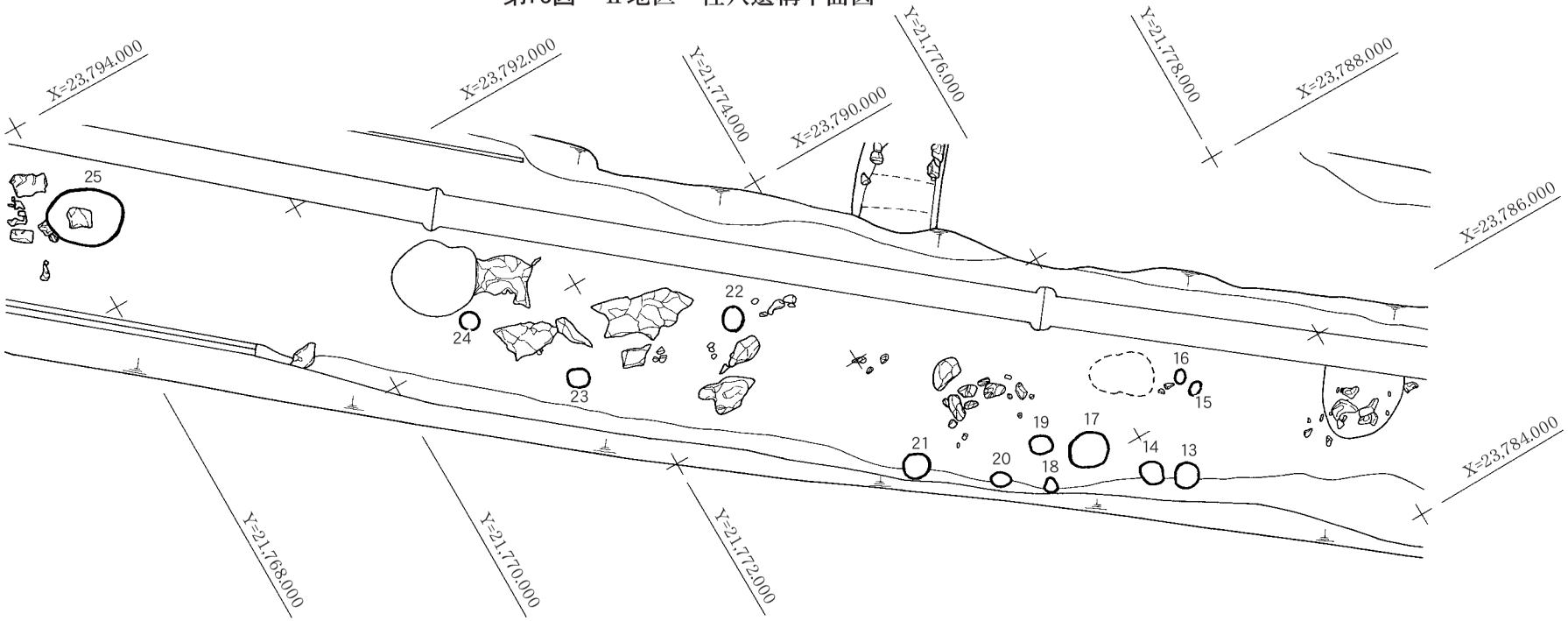
第59表　瓦観察一覧

単位：㎝

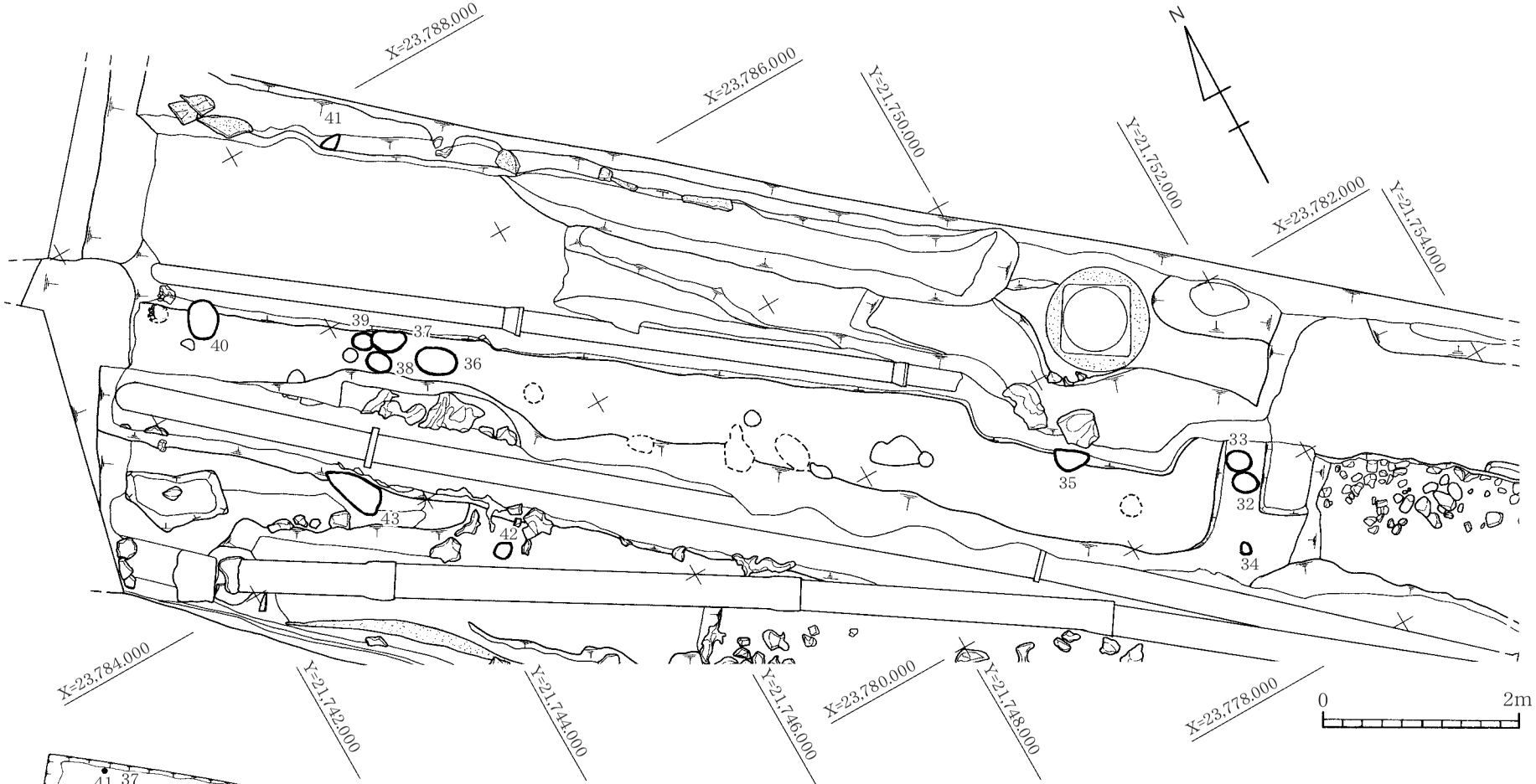
挿図番号 図版番号	名称仮称	部位	文様	製作痕	色調	出土地点 出土層
第75図 1 図版27 15	明朝系瓦 軒平瓦	瓦当部	瓦当文は花心と下弁が描かれる。小片のため文様の全体構成は不明。	裏面は凹凸が見られる。縁に沿ってナデ成形が成されている。	灰褐色	スー13東西畦北東側1層客礫層瓦溜まり



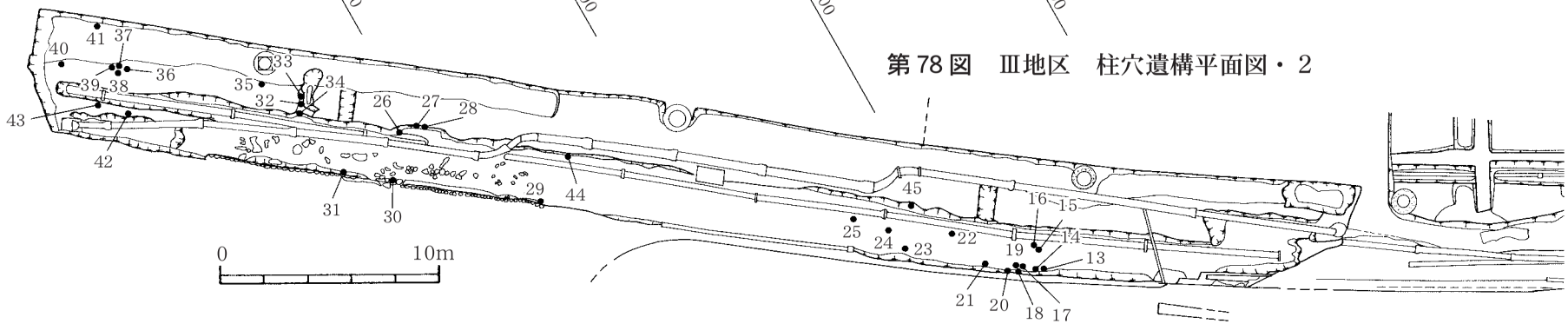
第76図　Ⅱ地区　柱穴遺構平面図



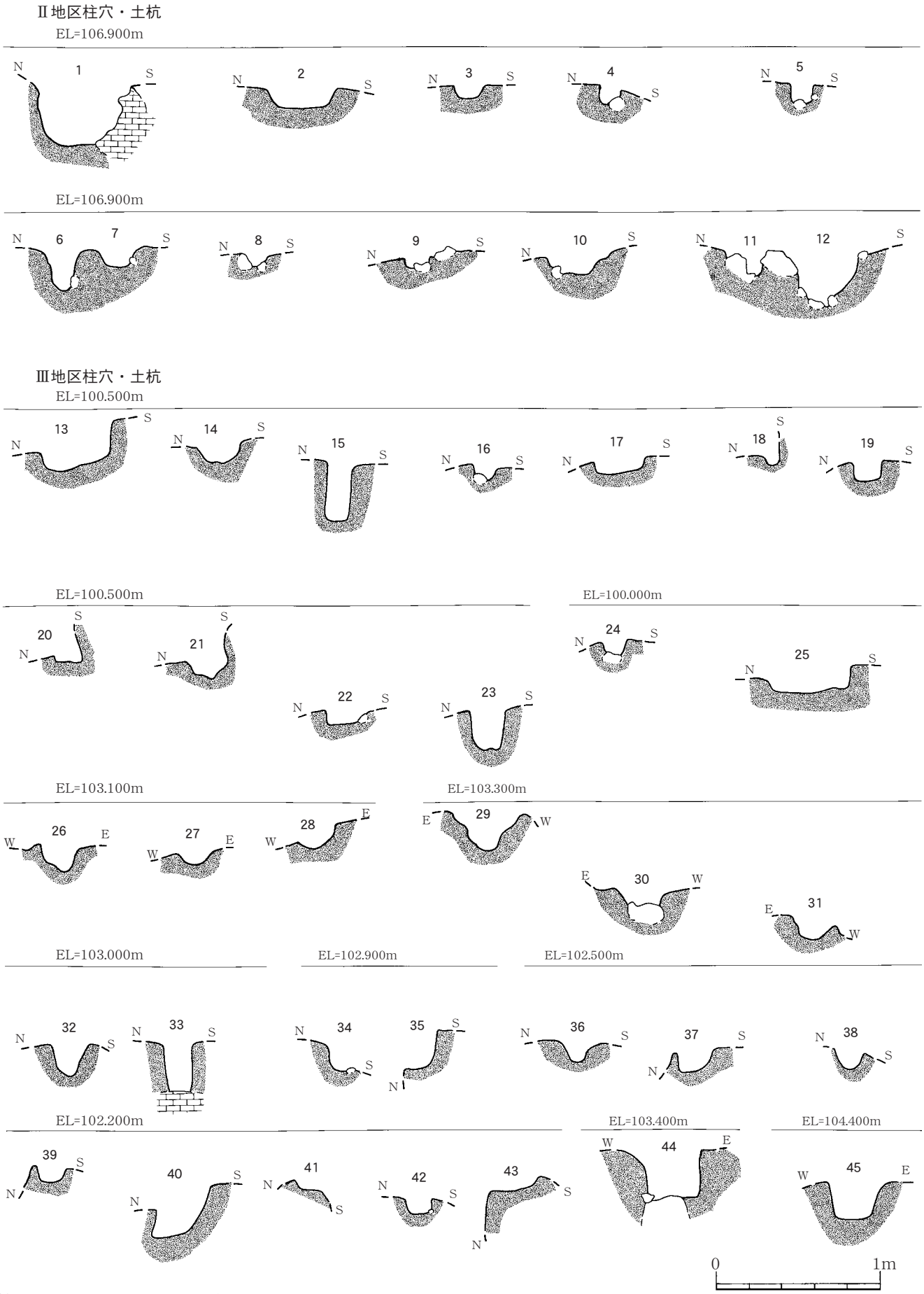
第77図　Ⅲ地区柱穴遺構平面図・1



第78図　Ⅲ地区　柱穴遺構平面図・2



第79図　Ⅲ地区　柱穴配置模式図



第80図　Ⅱ地区・Ⅲ地区柱穴・土杭断面図

第60表　柱穴遺構表

位置	地　　区	スー17 スー20・21・23・24
	重　　複	Ⅱ・Ⅲ地区検出の柱穴ともに、現代の雨水溝によって、上部を削平されている。
構造	形　　状	各柱穴、ほぼ円形
	規　　模	幅約20～60cm、深さ約10～40㎝(場所によって破壊の程度が異なる。)
	工　　法	地山層まで掘りぬき、綾門大道整備以前の生活層(第Ⅰ期 第23層)を含む。
備考	柱穴以遺構様相や目的については、今回の調査では部分的な検出の為、詳細不明である。	

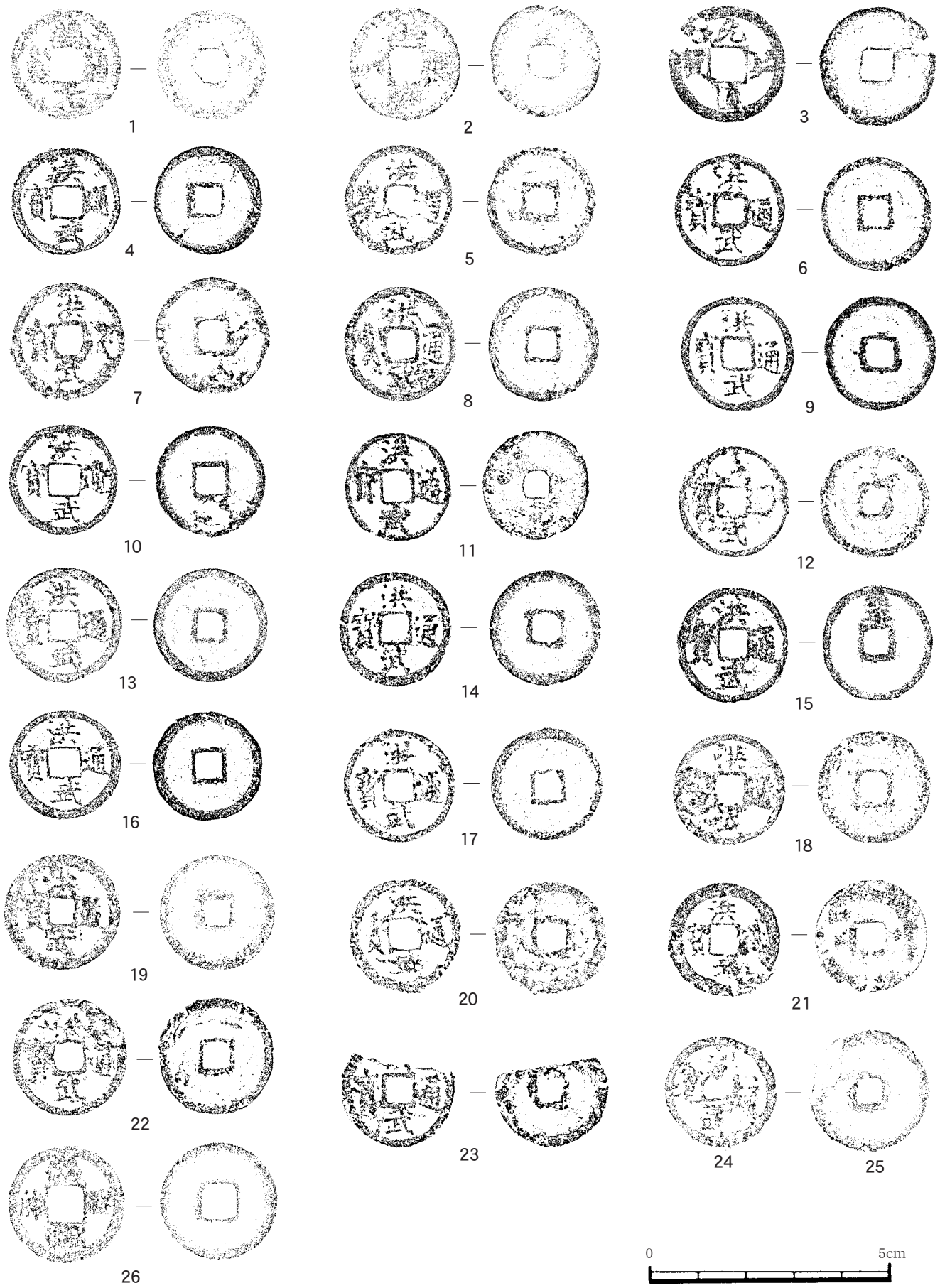
※第76～80図参照

第61表　柱穴計測表

単位：㎝

番号	長径	短径	深さ
1	－	34	－
2	39	30	－
3	13	13	－
4	14	10	－
5	14	14	－
6	26	14	26
7	24	23	12
8	11	10	6
9	13	12	6
10	31	23	12
11	22	28	16
12	75	50	32
13	23	20	22
14	23	19	12
15	11	6	36
16	12	7	8
17	33	39	8
18	12	11	－
19	20	17	－
20	18	12	－
21	23	22	－
22	21	18	8
23	18	16	24

番号	長径	短径	深さ
24	15	15	8
25	73	53	12
26	－	－	14
27	－	－	6
28	－	－	10
29	－	－	22
30	－	－	10
31	－	－	12
32	21	17	20
33	22	17	30
34	8	7	－
35	－	－	－
36	37	24	13
37	31	－	12
38	22	16	11
39	16	12	9
40	30	28	21
41	－	－	－
42	16	14	9
43	－	－	－
44	－	－	31
45	－	－	24

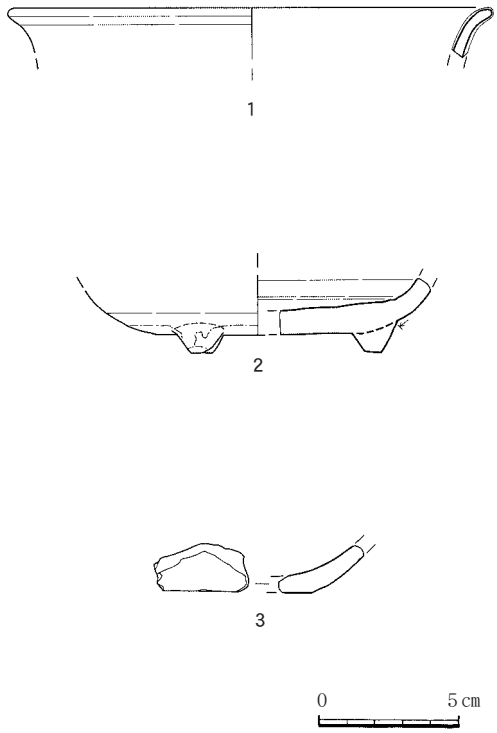


第81図　柱穴遺構出土遺物　pit 1 出土　銭貨

第62表　銭貨観察一覧

単位：㎜、g

挿図番号 図版番号	国・王朝	銭名	判読状況		残存状況	分類	初鋳年代	法量				出土地区
								銭径	内径	銭厚	重量	
第81図　1 図版28　1	中国・唐	開元通寶	開元□寶	無	完	—	845	22.8	6.7	0.8	2.4	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図　2 図版28　2	中国・唐	開元通寶	開□□□	無	完	—	845	23.1	6.3	0.9	2.0	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図　3 図版28　3	中国・北宋	元符通寶	元符通寶	無	破	58-3	1098	24.6	6.6	1.4	3.2	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図　4 図版28　4	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-4	1368	22.6	5.5	2.0	3.7	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図　5 図版28　5	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-4	1368	22.9	4.5	1.7	3.6	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図　6 図版28　6	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-1	1368	23.7	5.2	1.9	3.8	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図　7 図版28　7	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-1	1368	23.8	5.5	1.7	3.3	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図　8 図版28　8	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-1	1368	23.8	5.5	1.9	3.5	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図　9 図版28　9	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-1	1368	23.6	5.1	1.6	3.0	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 10 図版28 10	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-4	1368	23.1	6.0	1.9	3.6	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 11 図版28 11	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-4	1368	22.7	5.5	1.4	2.5	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 12 図版28 12	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-1	1368	23.1	4.7	1.6	3.0	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 13 図版28 13	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-5	1368	24.0	5.2	1.5	3.4	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 14 図版28 14	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-5	1368	23.8	5.0	1.5	4.1	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 15 図版28 15	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	北平	完	132-6	1368	23.8	5.2	1.5	3.4	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 16 図版28 16	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-4	1368	23.0	5.7	2.1	3.6	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 17 図版28 17	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-1	1368	23.6	5.3	1.8	3.7	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 18 図版28 18	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-1	1368	23.6	5.8	1.4	3.0	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 19 図版28 19	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-5	1368	24.1	5.2	1.2	3.6	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 20 図版28 20	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-4	1368	23.6	5.8	1.9	3.6	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 21 図版28 21	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-2	1368	23.4	5.3	1.5	3.4	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 22 図版28 22	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	132-5	1368	24.1	5.7	1.5	3.2	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 23 図版28 23	中国・明	洪武通寶	□武通寶	無	完	132-5	1368	23.5	4.7	1.6	2.7	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 24 図版28 24	中国・明	洪武通寶	洪武通寶	無	完	—	1368	23.3	5.6	1.9	7.3	Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 25 図版28 25	中国・明	洪武通寶	—	無	完	—	1368	24.7	5.0	1.7		Ⅱ地区ス－17 Pit 1
第81図 26 図版28 26	—	—	—	—	完	—	—	24.4	7.1	1.1	3.4	Ⅱ地区ス－17 Pit 1



第82図　柱穴遺構出土遺物
青磁・沖縄産施釉陶器・土器

第63表　青磁観察一覧

単位：㎝

挿図番号 図版番号	器種	部位	口　径 器　高 高台径	観 察 事 項	釉色・ 貫入	出土地点 出土層位
第82図　1 図版29　1	碗	口 縁	17.4 － －	口縁が外反する無文碗である。灰白色微粒子	淡緑色	セー17 Pit10

第64表　沖縄産施釉陶器観察一覧

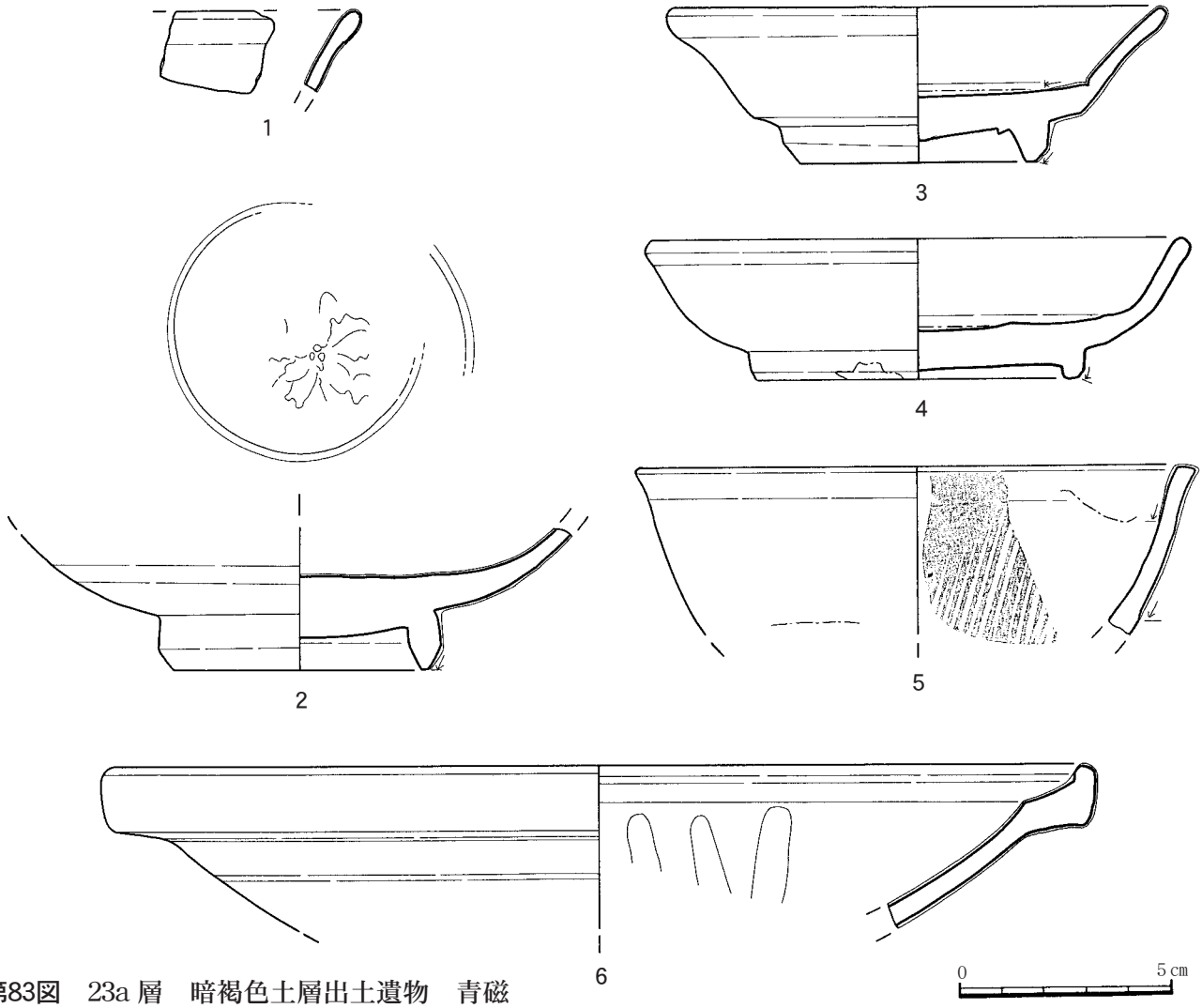
単位：㎝

挿図番号 図版番号	器種	部位	口　径 器　高 高台径	観 察 事 項	出土地点 出土層位
第82図　2 図版29　2	施釉 急須	底 部	－ － 6.7	脚がつく急須。外面胴部は瑠璃釉が施され、内面は透明釉が全釉される。	セー17 Pit12

第65表　土器観察一覧

単位：㎝

挿図番号 図版番号	器種	部位	口　径 器　高 高台径	観 察 事 項	出土地点 出土層位
第82図　3 図版29　3	壺	底部	－	底部から胴部にかけては開き気味に移行する。内面の成形は雑で凹凸がかなり見られる。素地は黄橙色の微粒子で白色砂粒が見られる。	ス-17 Pit1

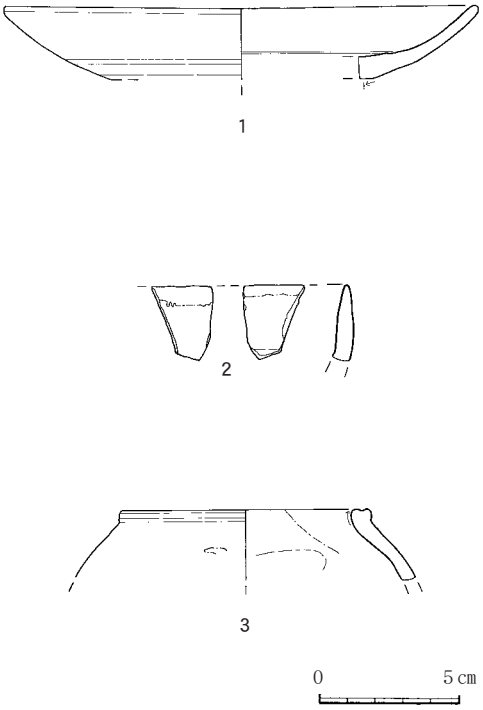


第83図　23a 層　暗褐色土層出土遺物　青磁

第66表　青磁観察一覧

単位：㎝

挿図番号 図版番号	名　称 仮　称	部位	素　　地	口　径 器　高 高台径	釉色　貫入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出 土 層
第83図 1 図 4 版29	外反碗	口	白色の微粒子。	－	淡緑色の失透釉。貫入は見られない。	口縁が玉縁状となる無文碗である。	シー 14 23 a 層暗褐色土層
第83図 2 図 5 版29	碗底部	底	灰白色の微粒子。	－ － 6.0	淡緑色の失透釉。貫入は見られない。	内底見込みに圏線と印花文を施す。	シー 14 23 a 層暗褐色土層
第83図 3 図 6 版29	腰折皿	口～底	灰白色の微粒子。	11.8 3.7 5.6	淡緑色の失透釉。貫入は見られない。	腰折れの外反口縁皿である。内底見込みに円形状の露胎部が認められる。	シー 14 23 a 層暗褐色土層
第83図 4 図 7 版29	玉縁口縁　皿	口～底	灰白色の微粒子。気泡、黒色粒子が僅かに見られる。	12.8 3.3 7.8	明緑色の失透釉。貫入は見られない。	口縁部が玉縁状となる。畳付は水平で高台は低い。内面高台内側から内底面は露胎。内底面は施釉後、円形に掻き取る。16c 前～中。	Ⅲ地区 b 不明 23 a 層暗褐色土層
第83図 5 図 8 版29	摺鉢	口	灰色の微粒子。黒色粒子が僅かに見られる。	13.2 － －	明緑色の失透釉。外面に粗い貫入が見られる。	口唇部が平らとなる。内面に櫛で溝をつくり、それぞれの幅は一定ではない。外面胴上部から内面口縁部直下まで施釉。外面は腰部、内面は櫛描きが施されるまで露胎。15c 前～中。	セ ー16中 央トレンチＳＡ 02南 側23 a 層暗褐色土層
第83図 6 図 9 版29	盤	口	灰白色の微粒子。黒色粒子が多く見られる。	23.3 － －	明緑色の失透釉。貫入は見られない。	鍔端部を上方へ撮み上げて成形する盤。内面胴部に幅広（最大幅 7 ㎜）の丸篦で蓮弁文を描く。外面頸部に丸篦で圏線を施す。15c 前～中。	セー16中央トレンチＳＡ02南側 23 a 層暗褐色土層



第84図　23a 層　暗褐色土層出土遺物
白磁・黒釉陶器・中国産陶器

第67表　白磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	素地	口径 器高 高台径	釉色　貫入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第84図 1 図版29 10	直口皿	口～胴	灰白色の微粒子。気泡が見られる。	17.0 － －	白味がかった明緑色の透明釉。口縁部周辺に細かい貫入。	直口口縁の皿。外面は胴下部、内面は内底面が露胎となる。16中～17c前か。	セ－16中央トレンチSA02南側23a層暗褐色土層

第68表　黒釉陶器観察一覧

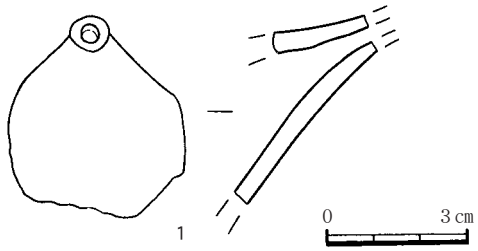
単位：cm

挿図番号 図版番号	名称・仮称	口径 器高 高台径	器形・文様・施釉などの特徴	素地	釉色　貫入	出土地点 出土層
第84図 2 図版29 11	天目碗	－	胴部は直線状に開き、口縁部で角度を変えて立つ。口唇部は尖る。	黄橙色の微粒子。	暗褐色の釉が内外面ともに薄く施される。15c。	セ－17南北畦②西トレンチ23a層暗褐色土層

第69表　中国産陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 高台径	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第84図 3 図版29 12	壺	口	橙色の微粒子。白色砂粒が多く見られる。	9.0 － －	口縁部の断面形が長方形状となる。口唇部はやや凹状となる。外面胴部には轆轤痕が見られる。	セ－16南北畦①西トレンチ23a層暗褐色土層



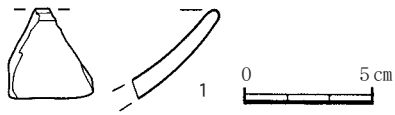
第85図　23a 層　暗褐色土層出土遺物　産地不明土器

産地不明の土器（第85図１　図版29－13）
急須の注ぎ口。器表は滑らかに仕上げられ一見、朱泥を彷彿させる。内面の成形は雑。素地は赤褐色の微粒子。タイ産の可能性がある。

第70表　産地不明白磁観察一覧

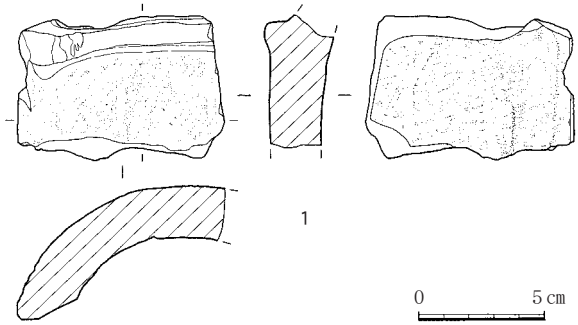
単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 高台径	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第86図　1 図版29　14	皿	口	白色 微粒子	－	釉は内外面ともに薄く施され、かなり細かい貫入が見られる。	スー15南北畦③西トレンチ23a層暗褐色土層



第86図　23a 層　暗褐色土層出土遺物
産地不明白磁

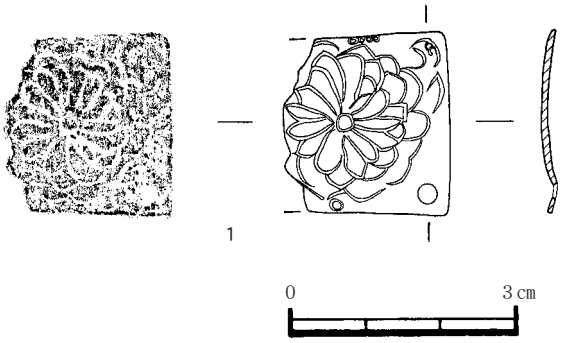
瓦（第87図１　図版29－15）
大和系瓦の小片。筒部で玉縁近く。凸面に綾杉状の敲き痕が明瞭に見られる。凹面には製作時に模骨に巻いていた布の皺痕が見られる。両面共に淡黄色となる。端部は斜めに面取りされる。



第87図　23a 層　暗褐色土層出土遺物　瓦

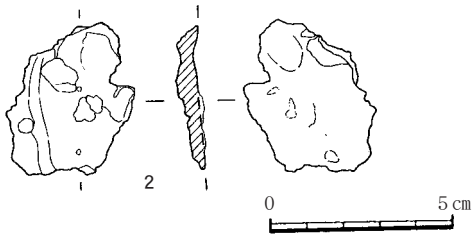
金属製品（第88図１　図版29－16）

第88図１は隅に孔が開く厚さ１㎜、幅2.4㎝ の銅製板。陰刻で菊花文を描く。Ⅱ地区⑤黒褐色土層（礫混じり下）出土。



金属製品　（第88図２　図版29－17）

胴魂。火を受けたためか原形を留めていない。上部には湯玉のような滓が見られる。



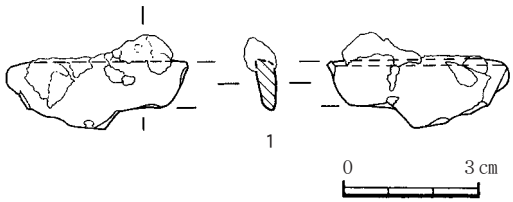
第88図　23a 層　暗褐色土層出土遺物　金属製品

第71表　暗褐色土層遺物出土表

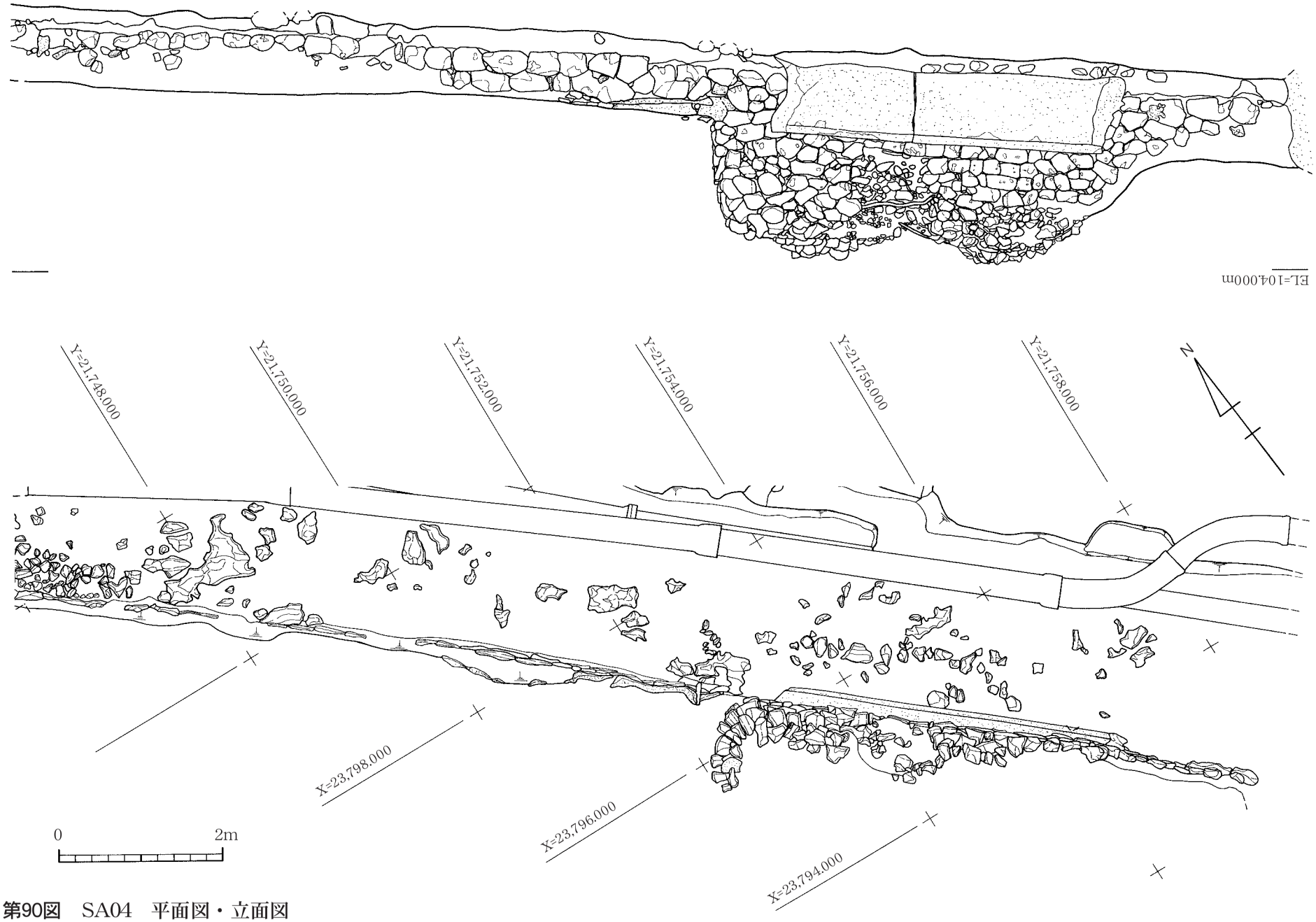
層序 ＼ 種類		中国産青磁								中国産白磁				中国産染付	タイ産褐釉陶器	中国産褐釉陶器			その他の輸入陶磁器		グスク土器	大和系瓦	磚	円盤状	金属製品		合計
		碗		皿		盤	すり鉢	不明		碗		皿	不明	不明	壷	壺		不明	天目碗	産地不明水柱		灰	灰	褐釉	釘	不明	
		口縁	胴	口縁	底	口縁	口縁	口縁	胴	口縁	胴部	口縁	胴	口縁	口縁	胴部	底部	胴部	胴部	注ぎ口	胴部	丸					
Ⅰb地区	スー14　南北畦①西トレンチ								1							2									2		5
Ⅰb地区	スー14　5mライントレンチ					1		2	6																		9
Ⅰb地区	スー15　南北畦③西トレンチ		1						1																		2
Ⅱ地区	スー16　南北畦①西トレンチ	3			1	1			8	2		1	2	1	1	5	2	1								1	29
Ⅱ地区	スー16　南北トレンチ								1				1			1											3
Ⅱ地区	セー16　中央トレンチ					1	1	1	4							3						1		1		1	13
Ⅱ地区	セー16　東トレンチ		1					1	2		1	3				5				1							14
Ⅱ地区	セー17　南北畦③西トレンチ	1		1															2		1		1				6
Ⅱ地区	SD16	1																									1
合計		5	2	1	1	3	1	4	23	2	1	4	3	1	1	16	2	1	2	1	1	1	1	1	2	2	82

金属製品（第89図１　図版29－18）

刀子か。先端部の形状はナイフの先端に見られるように弧を描く。錆が全体を覆い、本来の形状は不明。Ⅱ地区セ－16⑤区南北畦②西トレンチ。25ｂ層暗橙褐色土層



第89図　25b 層　暗橙褐色土層出土遺物　金属製品



第90図　SA04　平面図・立面図

第72表　SA04　遺構表

位置	地　　区	スー23 第90図参照
	重　　複	地表に露出している野面積みの部分は、戦後に積み直したもので、木の根の影響により部分的に崩れている。石積みは東西に伸びるが、東西延長部共に、戦後の開発によって、ほとんど残存していない状況である。
構造	形　　状	東西に直線的に延び、残存部の長さは東西10 m。根石部分は布積み、地表露出部は野面積みである。 SA04の幅は、埋没している上、調査範囲外のため不明。 SA04の根石からの高さは、木の根の影響による石積み崩落と戦後の積み直しで、原形を留めず不明。
	工法など	ほぼ地山まで削平した後、布積みで外面の石を積み上げている。裏込め石は、調査範囲外で発掘を行っていない為、不明である。綾門大道の北側を担う石牆（せきしょう）のSA03は、礫を含む造成層（10 a層）で石積みを安定させているが、SA04は、北側を現代の雨水溝によって破壊されている為、不明。しかし、直接的でないにしろⅢ地区からも10 a層と考えられる層が確認できる事から、SA03と同じ工法で構築された可能性も十分に考えられる。
備考	天界寺跡近辺に位置し、根石部分の構築工法が、SA03に類似する事から、天界寺と綾門大道の石牆（せきしょう）であったと考えられるが、綾門大道の北端（SA03）は相方積みで、南端（SA04）は布積みであるという差異が見られる。	

第３節　小括

平成11年度発掘調査地区は配管埋設や道路整備等の戦後の開発により、包含層・遺構はもとより場所によっては基盤岩である石灰岩をも掘削されていた。特にⅠ地区スー12･スー13･セー13、Ⅱ地区セー17･セー18と南側全域、Ⅲ地区の南北両側はかなりの損壊を受けており、Ⅲ地区とⅡ地区との直接的な繋がりは確認できなかった。そのような状況ではあったが、残存部の層序の一致から本年度の発掘調査ではⅠ地区からⅢ地区を通しての時期別の層序把握を行うことができ、第１期：綾門大道建造以前（22～26層）、第２期：綾門大道期（４層～21層）、第３期：戦後の整備等による客土層（１層～３層）と変遷して行くことが確認できた。第２期は細分可能で、第２ａ期：綾門大道建造より拡張前（18～21層）、第２ｂ期：Ⅰ・Ⅱ区の北側（シー13～16、スー15～17）にのみ認められる綾門大道拡張による造成層（８層～17層）、第２ｃ期:綾門大道拡張後（４層～７層）となる。検出された遺構は、時期別では第１期の遺構が柱穴遺構、第２ａ期の遺構がＳＡ01、SS03、第２ｂ期の遺構がＳＡ02、ＳＡ04、第２ｃ期の遺構がＳＳ02、ＳＲ03と考えられる。

第１期の遺構であるⅡ地区とⅢ地区から出土した柱穴遺構からは、その位置から、綾門大道周辺施設との関連が考えられ、Ⅱ地区柱穴１出土の銭貨50点と土器の底部片１点は、地鎮もしくはその他の目的でピットに埋納された可能性が考えられる。また、Ⅲ地区柱穴遺構は、東西に２つのグループで分かれており、天界寺跡（註沖縄県立埋蔵文化財センター 2001）で確認された柱穴遺構の検出箇所も、今回の調査と同じような位置にあるといった共通性が見られる（第 119 図）。柱穴遺構の時期については、総じて綾門大道整備以前（第１期）の生活層（23層：暗褐色土層）を含土とする事から、これらの柱穴遺構は、綾門大道を拡張・整備する以前に、何らかの目的で掘り込まれたものと考えられる。しかし、戦後の開発による柱穴上部の破壊、調査区の制限による柱穴遺構の部分的な検出では、柱穴の様相や目的を完全に把握するには至らなかった。

第２ａ期の遺構となるＳＡ01は、その構築と関係する18層から年代の判明する遺物の出土はないものの、構築時の掘り込みが認められるＳＡ01南側の19層では15世紀前期～中期の泉州窯系の青磁碗や高麗系・大和系瓦が出土し、ＳＡ01に被る遺構北側の８層では15世紀後期～16世紀中期の青花盤や16世紀代の褐釉陶器が出土することから､15世紀中期から16世紀に構築されたと考えられる。８層･10ｃ層などの２ｂ期に関わる層がＳＡ01の北側のみにあり、それらがＳＡ01に被ることから拡張以前の綾門大道北端部を構成するものと考えられ、構成する積石の成形の荒さや19層との関係から、大道北端の土留めと考えられる。遺構の主軸や年代観・積石等を比較すると平成10年度に検出されたＳＡ01と同一の遺構である蓋然性が極めて高いが、石積の構成等が異なる部分が遺構西半分に認められ、一部に時期・性格の違いのある可能性が考えられる。

第２ｂ期の遺構ＳＡ02は拡張期の基礎部と考えられる遺構で、造成土である８層から14世紀後期から15世紀中期の青花瓶が出土するも､15世紀後期の遺物を中心とすることから構築された時期も同時期と考えられる。遺構の性格として、堅く締まった基盤を造成部の境界に構築することにより、造成部の境界面の剥離や陥入・沈降を防ぐためではないかと推察され、傾斜面での造成・拡張を行うための工法の一つである可能性も考えられる。ＳＡ04は、天界寺と綾門大道の石牆（せきしょう）を考える上で重要な遺構であるが、発掘調査外であった為、根石の幅や裏込めの状況が確認できす、ＳＡ04東西延長部も戦後の開発によって破壊を受け、更に北側も現代の雨水溝によって地山まで破壊されていた為、綾門大道の北端を担う石牆（せきしょう）であるＳＡ03と南端を担うＳＡ04との比較は、困難な状況であった。しかし、地山を削平して根石は配置する共通性、綾門大道の南端の石牆（せきしょう）は布積み（ＳＡ04）で、北端は相方積み（ＳＡ03）という特徴も確認できた。

第２ｃ期の遺構となるのは６層上部の遺構であるＳＳ02･ＳＲ03で、綾門大道拡張後に構築された。ＳＳ02は６層上部に基盤層である１ｃｍ～４ｃｍ前後の礫を含む５層を敷き、畳石を配置する工法であることが確認できた。また、沖縄県立博物館所蔵の「冠船之時御座構之図　柵封御規式之時守礼門并御城御座構之図」（図版 118）にて綾門大道に石畳道のあったことが知られているが、当該遺構の検出によりそれを確認できたことは大きな成果といえよう。ＳＲ03は６層を掘りこんでの構築であり古写真（図版17）に写る蹴上げ部分の可能性が考えられる。しかし、遺構を挟んで前後の部分が残存していないことや写真資料のため蹴揚の正確な位置が不明なことから、確定することはむずかしい。主軸に関して述べると、ＳＳ02がN68°E、ＳＲ03がN20°E°、現在の守礼門基壇がN21°E°と、ＳＲ03と守礼門基壇の角度は近いもののＳＳ02は異なることが判る。

今後、綾門大道とその周辺施設を含めた首里の町並みを明らかにする為、未調査地区の調査や天界寺跡の調査報告を関連させ全体的な様相を解明していく事が、課題となる。

Ⅴ章　平成12年度調査区

第１節　層序と遺構

第１項　層序

平成12年度の調査は、平成11年度に行った城西小学校敷地内にある首里城公園案内板西側の試掘成果を基に、案内板東側の調査を行った。本項では、平成11年度の試掘区を「案内板西区」、平成12年度の調査区を「案内板東区」と表記し、平成12年度の発掘調査地区として一括して扱う。また、層序ついて、SA03南側は、平成11年度調査区の層序に対応させて算用数字を用い、SA03北側は、客土をⅠ層として、プライマリーな層をⅡ～Ⅵ層で表記した。

案内板西区（第93図）

地表に露出していた石積み（以下SA03）の様相を把握する為に、SA03の南北にトレンチを設定して試掘を行った。

南側トレンチからは、SA03の裏込め石が確認できたが、南端にあったであろう綾門大道側に面を持つ石積みは確認できなかった。

北側のトレンチは、地表から約－60㎝程度が傾斜地に流れ込んだ客土（Ⅰ層）で、第Ⅱ層（平成11年度10ａ層に対応）、第Ⅲ層（褐色小混礫土層）、第Ⅳ層（淡黒色混礫土層）、第Ⅴ層（平成11年度13層に対応）で構成されていた。Ⅱ・Ⅲ層はSA03を構築する際に石積みを安定させるため入れ込んだと考えられる礫層、Ⅳ層は北側傾斜地に流れ込んだ層、Ⅴ層はSA03・SS03の土盤になる層である。

案内板東区（第91、92図）

平成11年度試掘で確認したSA03の範囲を確認する為、SA03の東西方向に２本、南北方向に３本のトレンチを設定した。

① SA03南側

平成11年度調査区で確認した第８層（黒色土粒混赤褐色土層）、第10ａ層（褐色混礫土層）、第13層（淡褐色粘質土層）、第14層（白褐色細礫層）、第23層（暗褐色土層）、第26層（地山）で構成される。本地区は、琉球石灰岩の岩盤が北側に向かって下る傾斜地となっており、SA03を構築していく段階で、綾門大道整備以前の生活層（第Ⅰ期）である第23層が、ほぼ地山まで削平されたと考えられる箇所、岩盤の窪みを埋める為に造成土を厚く堆積させた箇所のような層堆積の差異が場所によって見られる。

綾門大道の変遷について、８層が綾門大道第２ｂ期（綾門大道拡張後）、10ａ層が綾門大道第２ａ期（綾門大道拡張前）、23層が綾門大道第１期（綾門大道整備以前）に相当すると考えられる。

② SA03北側

第Ⅰ層（客土）、第Ⅱ層（平成11年度第10ａ層に対応）、第Ⅲ層（褐色小混礫土層）、第Ⅵ層（平成11年度26層に対応）で構成される。

綾門大道の変遷について、Ⅰ層が綾門大道第３期（沖縄戦後）、Ⅱ・Ⅲ層が綾門大道第２ａ期（綾門大道拡張後）の時期に相当すると考えられる。

第２項　遺構

案内板西区

① SA03（第93図，第73表，図版13－７、８、14、15）

SA03は、北側に面をもつ石と、その内側に詰め込まれた裏込めで構成された相方積みの石積みである。

石積みの範囲については、綾門大道側（南側）に面する石積みもあったと考えられるが、残念ながら現代の雨水溝によって完全に破壊されおり、確認はできなかった。また、SA03東側も首里城公園の案内板によって破壊されており、西側も沖縄戦時に設営されたと考えられるトーチカによって破壊されていた。

SA03は、綾門大道拡張以前の層であるⅤ層上に構築されており、綾門大道の変遷でいう第２ｂ期に相当する

遺構である。

② SS03（第93図，第47表，図版14－1、3）

SS03は、石畳とそれを囲う縁石で構築される遺構で、SA03北側から検出されている。

SS03の範囲については、北側は残存状況が悪く、西側も木の根の影響や沖縄戦時に設置されたトーチカで撹乱を受けている状況であった。

SS03は、SA03が積まれているⅤ層に構築されている事から綾門大道の変遷でいう２ａ期（綾門大道拡張前）以後の時期に相当する綾門大道北側に位置した施設との関連が考えられる遺構である。

SS03に伴う出土遺物

染付（第103図，第90表，図版33－8）

SS03のⅤ層から、15C後半～16中頃のものと考えられる中国産青花の瓶が出土している。外面に草花文が施されている事が特徴である。本項で扱った資料の詳細は、第90表の観察一覧に記した。

③トーチカ（第104図，第91表）

沖縄戦時に設置されたと考えられるトーチカが、案内板西地区のSA03西側と現在の城西小学校校門の間から確認されている。本遺構の設置時に、SA03及びSS03は、部分的に破壊を受けたと考えられる。トーチカの詳細は、第104図と第91表に記した。

案内板東区

① SA03（第91図，第73表，図版13、14、15）

案内板西区から確認されたSA03を、より明確に確認することができた。SA03は、東西に直線的に延び、東端は現在の守礼門のほぼ真下にある琉球石灰岩に接続、西端は首里城公園案内板によって破壊される箇所まで続いている。上部は完全破壊されており、SA03の北端も、部分的に木の根などの影響で崩落している状況で、正確な幅の確認は困難であった。

SA03の工法について考察すると、地山近く（場所によっては地山まで）まで削平した後、外面の石を相方で積み、裏込め石を詰めて石積み下部を構築、礫を含む造成層（第10ａ層）で、その下部を安定させた後、場所によっては、更に幅狭く外面の石を相方で積み、裏込め石を詰めて石積み上部を構築、SA03南側（綾門大道側）は、礫を含まない造成層（第８層）上部を安定させている。この事から、綾門大道の北端を担う石牆であるSA03は、綾門大道の拡張整備を行う際に整備以前の生活層（綾門大道第Ⅰ期）を削平、その後、岩盤の窪みを造成層で埋め立てて、石積みの安定と路面の確保を行ったと考えられる。

SA03は、綾門大道変遷の第２ｂ期（綾門大道拡張後）の時期に相当する遺構である。

SA03に伴う出土遺物

①青磁（第94図１～12，第76表，図版30－1～12）

中国産の青磁が出土している。出土した青磁は、碗・皿・盤が確認できた。各器種別の出土数は、碗28点、皿９点、盤４点、不明１点であった。出土数の詳細は第75表の集計表に記した。

第94図１は、15C前半～後半頃のものと考えられる碗の口縁部で、外面に蓮弁文、内面に草花文が施されている。同図２・４は、15C前半～中頃のものと考えられる玉縁口縁の碗で、佐敷タイプと呼ばれているものである（沖縄県教育委員会1980）。内面には、陽印花文が施されている。同図３は、15C前半頃のものと考えられる直口の碗で、外面に雷文、内面に片切り彫りによる文様が施されている。同図５は、15C後～16前半のものと考えられる碗で、外面に蓮弁文、内面に草花文が施されている。同図６は、15C前半～中頃のものと考えられる口縁部が外側へ僅かに折れる碗である。同図７は、15C前半～中頃のものと考えられる口縁部が外反する碗である。同図８は、14C後半～15C中頃のものと考えられる碗の底部で、外面に蓮弁文、内面に圏線と印花文が施されている。同図９は、14C後半～15C中頃のものと考えられる口縁部が折れて外反する皿である。同図10は、15C前半～15C中頃のものと考えられる口縁部が外反する皿である。同図11は、15C後半のものと考えられる鍔縁状の口縁部をもつ盤で、内面に蓮弁文が施されている。同図12は、15C中頃のものと考えられる鍔縁状の口縁部をもつ盤で、内面に蓮弁文が施されている。本項で扱った資料の個々の詳細は、第76表の観察一覧に記した。

参考文献

『佐敷グスク』沖縄県教育委員会1980年

②白磁（第95図１～３，第77表，図版31－１～３）

中国産の白磁が出土している。出土した白磁からは、碗・皿が確認できた。各器種別の出土数は、碗１点、皿４点であった。出土数の詳細は第75表の出土表に記した。

第95図１は、15C中頃～後半のものと考えられる全形が伺える皿である。同図２は、15C中頃～後半のものと考えられる皿の口縁部である。同図３は、15C中頃～後半のものと考えられる皿の底部である。本項で扱った資料の個々の詳細は、第77表の観察表に記した。

③染付（第96図，第78表，図版31－４）

中国産の染付が出土している。出土した染付は、碗・瓶が確認できた。各器種別の出土数は、碗３点、瓶１点であった。出土数の詳細は第75表の出土表に記した。

第96図１は、16C中頃～17C前半のものと考えられる碗の底部で、外面に二条の圏線、内面に二条の圏線と草花文が施されている。本項で扱った資料の詳細は、第78表の観察一覧に記した。

④黒釉陶器（天目）（第97図，第79表，図版31－５、６）

中国産の天目の碗が３点出土している。出土数の詳細は第75表の出土表に記した。

第97図１は、15Cのものと考えられる碗の口縁部である。本項で扱った資料の詳細は、第79表の観察一覧に記した。

⑤中国産褐釉陶器（第98図１、2，第79表，図版31－７、８）

中国産褐釉陶器の急須１点、壷40点、タイ産褐釉陶器７点が出土している。出土数の詳細は第75表の出土表に記した。

第98図２は、16Cのものと考えられる壺の底部であるが、全形が伺えない為、詳細は不明である。本項で扱った資料の個々の詳細は、第81表の観察一覧に記した。

⑥本土産陶器（第98図３，第81表，図版31－９）

本土産陶器の甕が出土している。詳細は、第80表の観察一覧に記した。

⑦沖縄産施釉陶器（第98図４，第82表，図版31－10）

沖縄産施釉陶器の碗４点、壺１点、急須１点が出土している。出土数の詳細は第75表の出土表に記した。

第98図４は、急須の口縁部である。本項資料の個々の詳細は、第82表の観察一覧に記した。

⑧沖縄産無釉陶器（第98図５～６，第83表，図版31－11、12）

沖縄産無釉陶器の皿１点、鉢４点、瓶１点、壷２点が出土している。出土数の詳細は第75表の出土表に記した。

第98図５は、全形が伺える平底の皿である。同図６は、口縁部が水平に外反する壺である。本項で扱った資料の個々の詳細は、第83表の観察一覧に記した。

⑨陶質土器（第98図７，第84表，図版31－13）

第98図７は、口縁部外面に亀甲文を施す火炉である。沖縄で見られるアカムンとは異なる素焼きに近い質で、天界寺跡（Ⅰ）（沖縄県立埋蔵文化財センター2001）で類例資料が報告されている。本項で扱った資料の詳細は、第84表の観察一覧に記した。

参考文献

「天界寺跡（Ⅰ）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第２集2001年

⑩カムイやき（第98図８，第85表，図版32－14）

第98図は、胴部の叩き目が特徴的な徳之島のカムイやき（類須恵器）の壷である。本項で扱った資料の詳細は、第85表の観察一覧に記した。

⑪瓦（第99図１～５，第86表，図版31、33－１）

高麗瓦が５点、大和古丸瓦が３点出土している。出土数の詳細は第74表の出土表に記した。

第99図１は、高麗瓦の角部、同図２は側面部である。同図３は大和古丸瓦の筒部、同図４は側面部である。本項で扱った個々の資料の詳細は、第86表の観察一覧に記した。

⑫円盤状製品（第100図１，第87表，図版33－２）

第100図は、タイ産褐釉陶器を２次加工した円盤状製品と考えられる資料である。出土数の詳細は第75表の出土表に記した。本項で扱った資料の詳細は、第87表の観察表に記した。

⑬銭貨（第101図，第88表，図版33－３、４）

寛永通宝が２枚出土している。本項で扱った個々の資料の詳細は、第88表の観察一覧に記した。

⑭金属製品（第102図，第89表，図版33－５～７）

角釘が３点、出土している。本項で扱った個々の資料の詳細は、第89表の観察一覧に記した。

小　結

出土遺物からSA03の時期を推察すると、８層にかかるSA03上部は14C後～15C、10ａ層にかかるSA03下部は15Cの範囲内に収まる事からおおよそ15～16C頃を考えられる。

SA03に伴う綾門大道整備以前（第Ⅰ期）の遺物

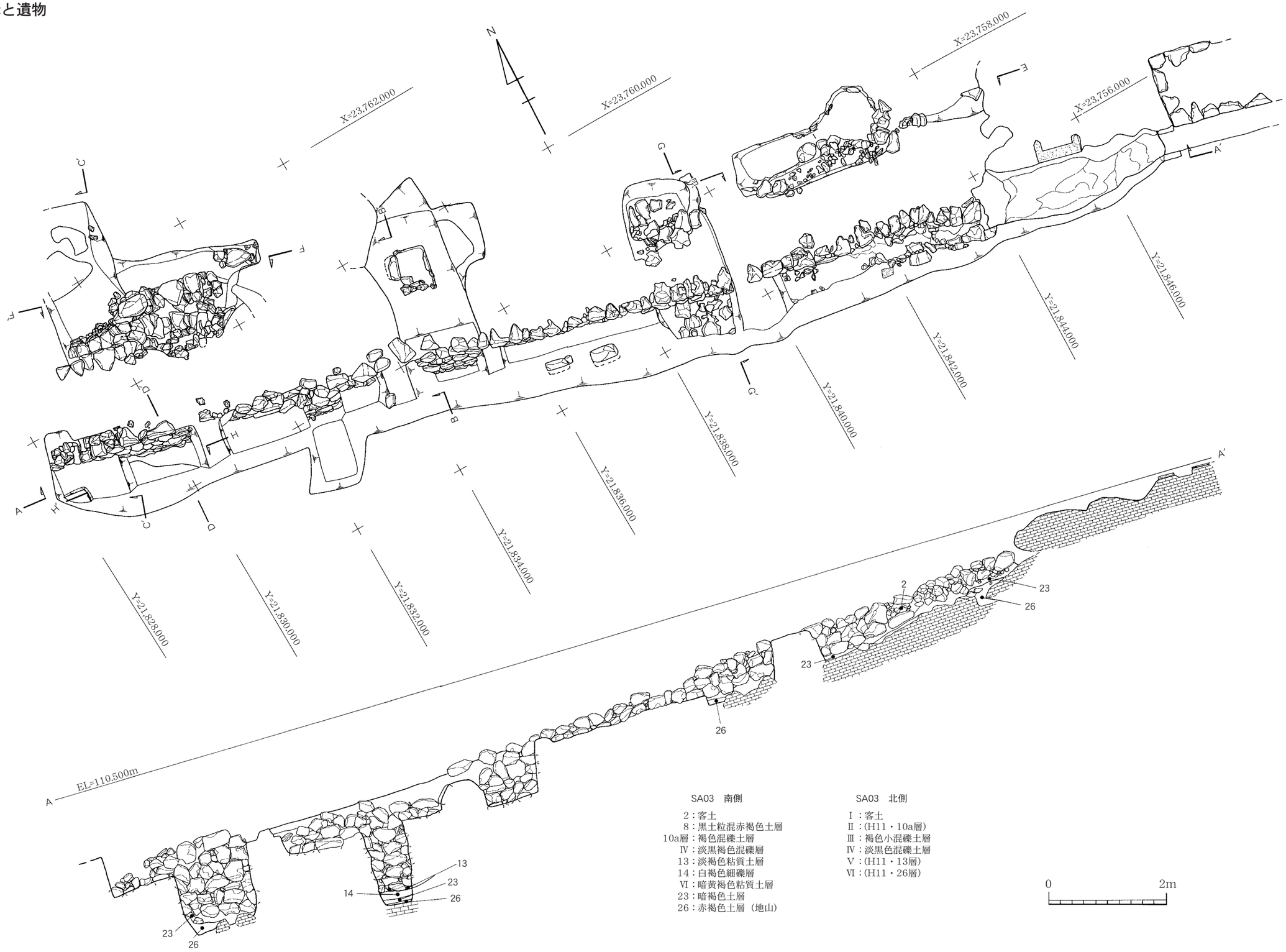
①青磁（第83図１～３，第66表，図版29－４、５、６）

綾門大道整備以前（第Ⅰ期）の生活層（23ａ層）から、中国産の青磁が出土している。出土した青磁からは、碗・皿の器種が確認できた。各器種別の出土数は、碗２点、皿１点で、詳細は第75表の出土表に記した。

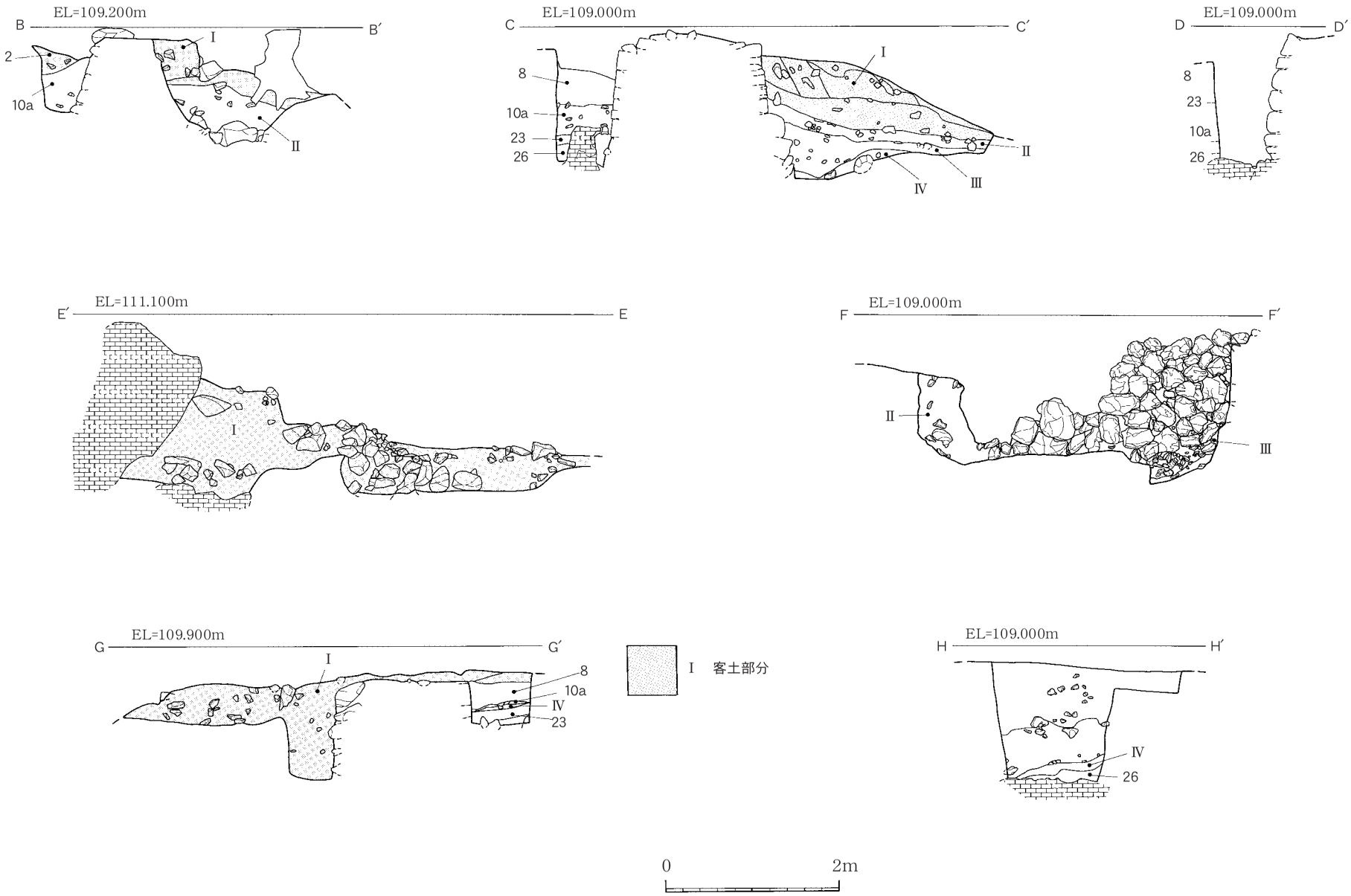
第83図１は、15C頃のものと考えられる玉縁の口縁部をもつ碗である。同図２は、15C頃のものと考えられる碗の底部で、内底面に圏線と印花文が施されている。同図３は、15Cのものと考えられる腰折れ外反口縁の皿である。本項で扱った資料の詳細は、第66表の観察一覧に記した。

小　結

出土遺物からSA03構築以前（綾門大道整備前：Ⅰ期）の時期を推察すると、15C前半の範囲内に収まる。



第 91 図　SA03　案内板東区　平面図・断面図



第92図　SA03　案内板東区　立面図及び断面図

第93図　SA03・SS03　案内板西区　平面図・立面図及び断面図

第73表　SA03 遺構表

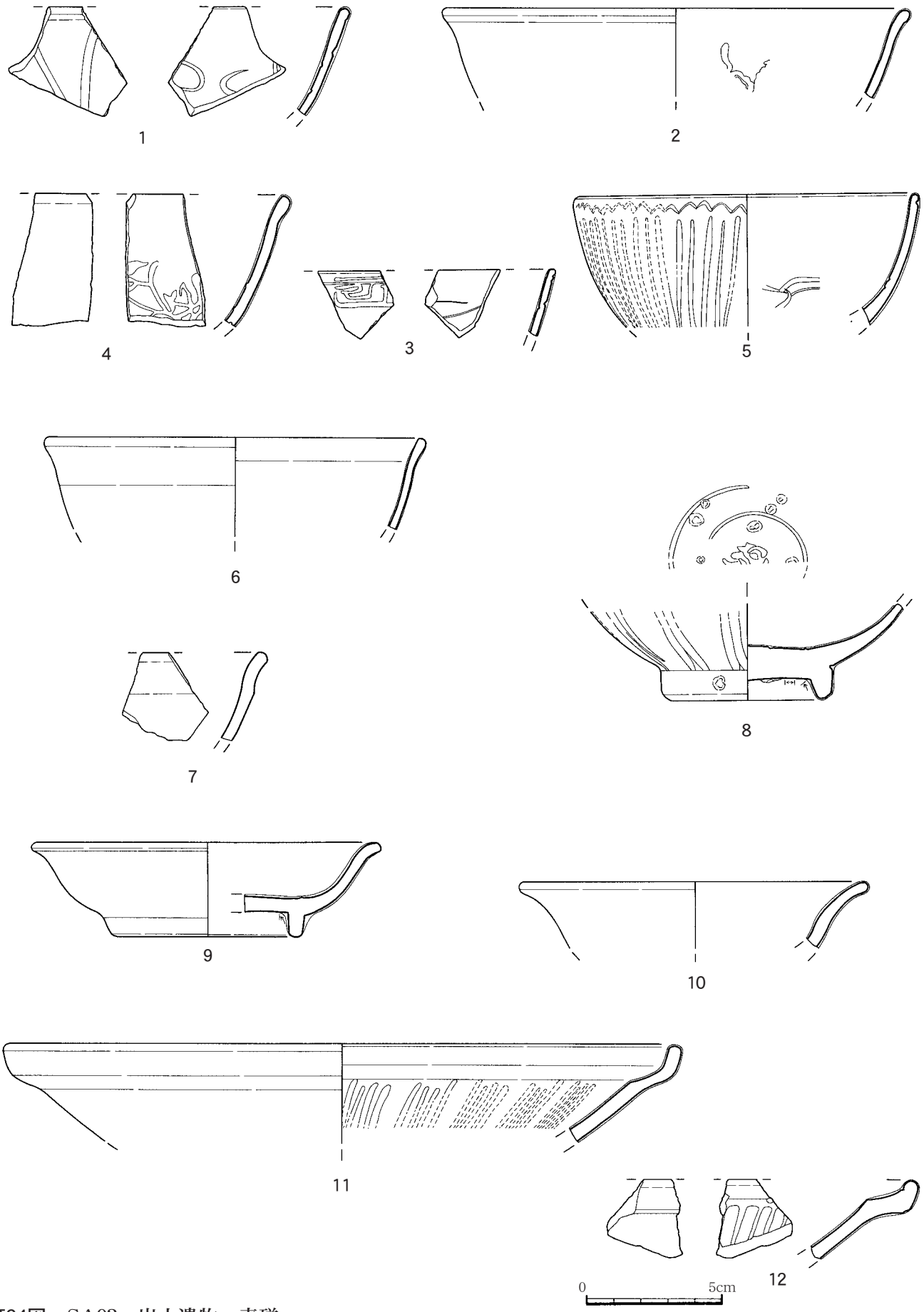
位置	地　　区	シー 13 ～ 17　（第 92 図参照）
	重　　複	シー 15 ～ 16 区間は、首里城公園の案内板により、ほとんどが破壊されている。シー 16 から西側は、沖縄戦時に設営されたトーチカによって破壊されている。SA03 の北側は、木の根などの影響により、部分的に崩落または浮き上がっている。
構造	形　　状	ほぼ直線的形状。相方積み。
	規　　模	現存する石積みは、東西約 25.5 m、幅約 1.8 mで、高さは上部が破壊されている為、詳細は不明。
	工　　法	ほぼ地山まで削平した後、相方積みで外面の石を積み上げ、その内側に裏込めの石を詰め、礫を含む造成層（10a 層）で石積みを安定させている。場所によっては、上部と下部の 2 段構造綾門大道路面側（南側）のになっており、琉球石灰岩の地形に合わせて、2 回に分けた構築もしくは増築したようである。SA03 上部は、礫を含まない造成層（8 層）で石積みを安定させ、その造成層に礫を敷いて路面を整備したようである。
出土遺物	第 75 表　出土表　参照	
備考	8 層および 10a 層の出土遺物から、SA03 の構築時期は 15 ～ 16C の範囲内に収まるようである。	

第74表　SS03　遺構表

位置	地　　区	シー 15　　X ＝ 23,766.000 Y ＝ 21,820.000　　第 93 図参照
	重　　複	遺構の北側は破壊を受け、残存状況が悪く、遺構も戦後に植林された木の根などの影響によって、部分的に歪みが生じている。
構造	形　　状	ほぼ長方形の縁石がＬ字状に並び、その内側に、個々の形状に合わせた石畳が敷かれている。石畳はほぼ平坦にしかれているが、木の根などの影響を受けていない南北断面を観察すると、北側の下り傾斜地に合わせて、僅かに勾配している。
	規　　模	北側は残存状況が悪く、西側も木の根やトーチカ設置による攪乱の為、詳細は不明。
	工法など	第Ⅴ層（平成 11 年度 13 層に対応）に、ほぼ長方形の琉球石灰岩で縁石を組み、その内側に、個々の形状に合わせた琉球石灰岩を敷いて石畳としている。
出土遺物	第 75 表　出土表　参照	
備考	SA03 の石積みから僅かに離れた北側に位置し、SA03 が積まれる以前の層から検出されている事から、SS03 は綾門大道拡張整備以前に、綾門大道の北側に位置した施設と関連が考えられる。	

第 75 表　SA03・SS03・暗褐色土層遺物出土層別集計表

出土地＼種類	遺構の名称	中国産青磁											中国産白磁			染付			天目		中国産褐釉			ﾀｲ産褐釉	沖縄産施釉						沖縄産無釉				陶質土器	瓦質土器	ｶﾑｲヤキ	ｸﾞｽｸ土器	瓦					セン	円盤	金属製品	銭貨	石器	合計
		碗			皿				盤			不明	碗	皿		碗		瓶	不明	碗		壺			壺	碗		壺	急須	不明		皿	鉢	瓶		不明	火炉	揺り鉢	壺	甕	高麗		大和古								
																																								平		平	丸							
		口	底	胴	口～底	口	底	胴	口	底	胴	胴	胴	口	底	口	底	胴	胴	口	底	口	底	胴	胴	口	胴	胴	口	胴	底	口～底	胴	胴	胴	胴	口	胴	口		灰	赤	灰	灰	赤			釘			
シー 13 トレンチ①東側石積の南側 第 8 層：(9 層の直上)（造成層）	SA03	2		2		1																																	1												6
シー 13 トレンチ①東側石積の南側 第 8 層：(9 層の直上)（造成層）	SA03																						7	1																										8
シー 13 トレンチ①東側石積の南側 第 8 層：(9 層の直上)（造成層）	SA03																			1																														1
シー 14 トレンチ③　第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03	1	1		1				1																																	1								5
シー 14 トレンチ②石積の南側 第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03	2		2				1															2									4				1	1		1	1										15
シー 14 トレンチ①西側石積の南側 第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03																																							1										1
シー 14 トレンチ①②間石積の南側 第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03			4										1			1						8	2																										16
シー 14 トレンチ③西側石積の南側 第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03			1			1																1																											3
シー 14 トレンチ③　第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03		1	1		1		1		1		1		1		1							8						1												1	1		1		1				21
シー 14 トレンチ③石積の南側 第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03																																												1					1
シー 14 トレンチ①石積の南側 第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03																																														1			1
シー 14 トレンチ③石積の南側 第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03																																													1				1
シー 14 トレンチ③　第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03			1																																															1
シー 14 トレンチ③東側石積の北側　第 10a 層：褐色混礫土層	SA03	3							1					1			1						1	1							1																				9
シー 14 トレンチ③東側石積の北側　第 10a 層：褐色混礫土層	SA03																				1	1	1																												3
シー 14 トレンチ③東側石積の北側　第 10a 層：褐色混礫土層	SA03																		1						2	1	1			1										1										7
シー 14　5 m ライントレンチ延長部 第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03	1									1				1								4	1																	1	1									10
シー 14　5 m ライントレンチ延長部 第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03						1																																											1
シー 14　5 m ライントレンチ延長部 第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03																										1																				1			2
シー 14　5 m ライントレンチ延長部　第 10a 層：褐色混礫土層	SA03																						1																												1
シー 14 トレンチ③西壁　第 10a 層：褐色混礫土層	SA03																						5																												5
シー 14　5 m ライントレンチ延長部　第 4 層：淡黒褐色混礫土層	SA03	1																																																	1
シー 14　5 m ライントレンチ延長部　第 14 層：白褐色細礫	SA03																	1																																	1
シー 15 トレンチ③東側石積の南側 第 8 層：黒土粒混赤褐色土層（造成層）	SA03			2									1																							1															4
シー 15 トレンチ③石積の南側　第 10a 層：褐色混礫土層	SA03																																											1							1
城西小試掘②トレンチ　第 10a 層：褐色混礫土層	SA03																																															2			2
城西小試掘ＳＡ 03 側トレンチ　第 10a 層：褐色混礫土層	SA03																																					1													1
城西小試掘北トレンチ　第 10a 層：褐色混礫土層	SA03																																																	2	2
城西小北試掘トレンチ暗黄褐色粘質土層（第 5 層）	SS03																	1					1		1	1						1	2														1			8
シー 14 トレンチ①②間大道縁石南側　第 23 層：暗褐色土層	暗褐色土層		1																																																1
北Ⅱ地区 pit 郡⑩　第 23 層：暗褐色土層	暗褐色土層	1																																																	1
西側　第 23 層：暗褐色土層	暗褐色土層	1																																																	1
アスファルト溝北壁　第 23 層：暗褐色土層	暗褐色土層				1																																														1
第 23 層：暗褐色土層	暗褐色土層				1																																														1
合　計		12	3	13	3	2	2	2	2	1	1	1	1	3	1	1	2	2	1	1	1	1	1	38	7	2	2	1	0	2	1	1	4	1	2	1	1	1	1	2	3	2	2	1	1	1	2	3	2	2	143

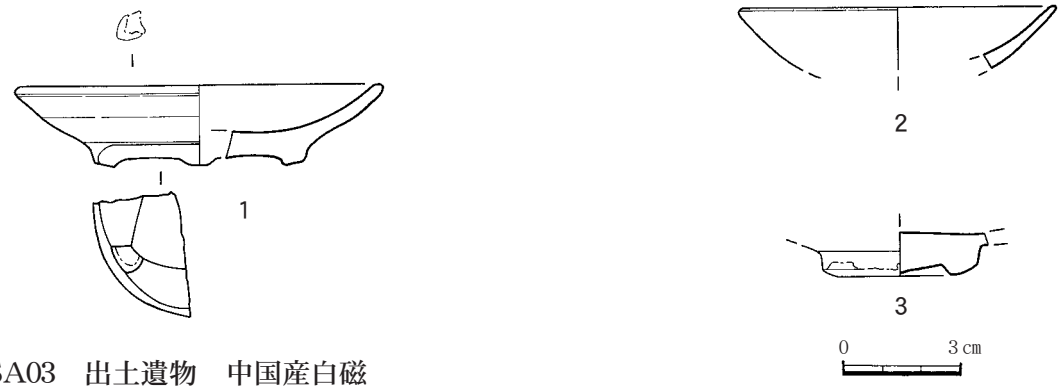


第94図　SA03　出土遺物　青磁

第76表　青磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	器形・文様などの特徴	素地	釉色	出土地層序
第94図 1 図版30 1	碗	口縁	― ― ―	口唇が丸みを帯びた直口口縁である。外体面は幅広の蓮弁を施し、内体面に片切り彫りの草花文を施す。	白色微粒子	淡灰緑色	シー14トレンチ③第8層黒色土粒混赤褐色土層
第94図 2 図版30 2	〃	口縁	17.4 ― ―	やや玉縁の端反口縁である。外体面は無文、内体面に陽印花文をほどこす。	灰白色でやや微粒子	淡緑色	シー13トレンチ①東側石積北側（大道側）第8層黒色粒混赤褐色土層
第94図 3 図版30 3	〃	口縁	― ― ―	口縁外体面に雷文帯を廻らし内体面に片切り彫りによる文様を施している。	白色微粒子	灰緑色	シー14トレンチ5mライントレンチ延長部第23層暗褐色土層
第94図 4 図版30 4	〃	口縁	― ― ―	玉縁口縁で、外体面は無文、内体面に陽印花文をほどこす。	灰白色でやや微粒子	淡緑色	シー14トレンチ②第8層黒色土粒混赤褐色土層
第94図 5 図版30 5	〃	口縁	12.8 ― ―	内灣ぎみの直口口縁である。外体面に弁先のずれる細線蓮弁文を施し、内体に片切り彫りの草花文を施す。	白色微粒子	淡緑色	シー14トレンチ③石積南側（大道側）第10 a層褐色混礫土層
第94図 5 図版30 6	〃	口縁	14.1 ― ―	胴から逆八字に開きながら立ち上がり口縁で一旦窄まり口唇部でやや肥厚しながら開く。無文	灰白色でやや微粒子	淡灰緑色	シー14トレンチ③石積南側（大道側）第10a層褐色混礫土層
第94図 7 図版30 7	〃	口縁	― ― ―	胴から逆八字に開きながら立ち上がり口縁で一旦窄まり更に外に開く。無文	灰白色でやや微粒子	淡灰緑色	シー13トレンチ①東側石積北側（大道側）第8層黒色土粒混赤褐色土層
第94図 8 図版30 8	〃	底部	― ― 6.4	高台は外面から三角に面取りし、外底面を蛇の目状に釉剥ぎしている。外体面に幅広の蓮弁文、内底面見込みに圏線と印花文を施している。	白色微粒子	淡緑色	シー14トレンチ③第8層黒色土粒混赤褐色土層
第94図 9 図版30 9	皿	口縁 ～底	13.0 3.55 7.0	腰折れの外反口縁皿である。無文	白色微粒子	青緑色	シー14トレンチ③第8層黒色土粒混赤褐色土層
第94図 10 図版30 10	〃	口縁	13.0 ― ―	無文、外反口縁である。	白色微粒子	青緑色	シー14トレンチ③西側第8層黒色土粒混赤褐色土層
第94図 11 図版30 11	盤	口縁	25.2 ― ―	口縁が鍔縁状をなす。口唇は丸みを帯びる。内体面に4本の櫛目による蓮弁文を施している。	白色微粒子	青緑色	シー13トレンチ①東側石積北側（大道側）第8層黒色土粒混赤褐色土層
第94図 12 図版30 12	〃	口縁	― ― ―	口縁は口唇部をつまみあげるような鍔縁状をなす。内体面に比較的幅広の櫛目による蓮弁文を施している。	白色微粒子	淡緑色	シー14トレンチ③石積南側（大道側）茶褐色混礫土層第10a層褐色混礫土層

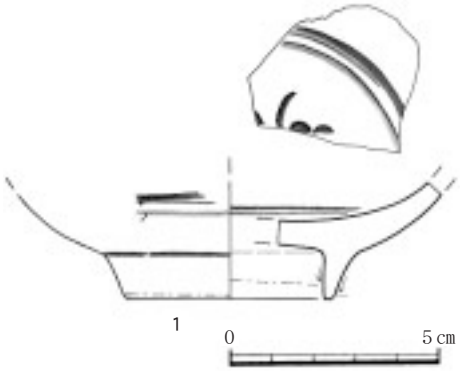


第95図　SA03　出土遺物　中国産白磁

第77表　中国産白磁観察一覧

単位：㎝

押図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	素　地	釉色・施釉状況	出土地層序
第95図 1 図版31 1	皿	口縁	9.5 2.05 5.4	口縁は直口を呈し、内底に目痕が認められる。底部は抉り高台を成す。	灰白色でやや荒目。	灰白釉を全面に施釉。	シー14トレンチ③石積南側（大道側）第10層褐色混礫土層
第95図 2 図版31 2		口縁	8.2 — —	直口口縁	白色で粗粒子。	黄白色。	シー14トレンチ①②間石積南側第8層黒色土粒混赤褐色土層
第95図 3 図版31 3		底部	— — 4	高台は外面から三角状に面りしている。	白色でやや荒目。	黄白色釉は高台脇まで施ほしている。	シー14トレンチ5ライントレンチ延長部第8層黒色土粒混赤褐色土層

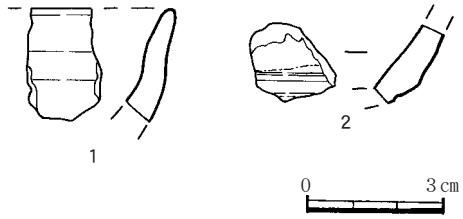


第96図　SA03　出土遺物　染付

第78表　中国産染付観察一覧

単位：㎝

押図番号 図版番号 遺物番号	器種	部位	底径	文様・成形等の特徴	呉須の発色	釉色	出土地
第96図 1 図版31 4	碗	底部	— — 4.8	外体面に二乗の圏線を巡らす、内底見込みに二乗の圏線と草花文を施している。	淡い青	青みがかった透明釉	シー14トレンチ③石積南側(大道側)

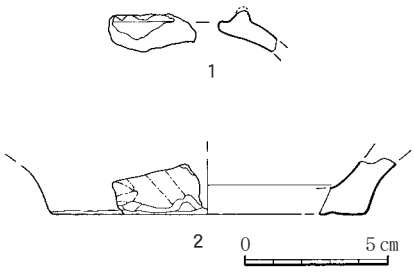


第97図　SA03　出土遺物　黒釉陶器（天目）

第79表　黒褐陶器（天目）観察一覧

単位：㎝

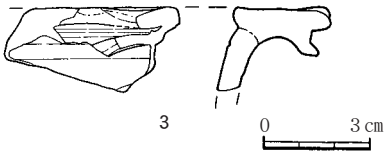
押図番号 図版番号 遺物番号	器種	部位	器形	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	出土地
第97図 1 図版31 5	碗	口縁	直口	—	胴上部で一旦内側に屈曲し開きながら口縁に至る。天目碗である。	シー13トレンチ①東側石積北側（大道側）第8層黒色土粒混赤褐色土層
第97図 2 図版31 6	碗	胴部	—	—	腰部は露体し屈曲する天目碗。	シー14トレンチ③東側石積北側層不明



第80表　中国産褐釉陶器観察一覧

単位：cm

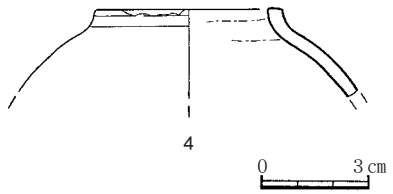
押図番号 図版番号	器種	部位	器　　形	口径 器高 底径	出　土　地
第98図 1 図版31 7	急須	口縁	口縁に蓋のかかりがある内灣し、丸みのあるものである。	－ － －	シー 14 トレンチ③ 東側石積北側 層不明
第98図 2 図版31 8	壺	底部	外体面は底部からの立ち上がりに箆削り痕が認められる。	－ － 11.1	第Ⅱ層



第81表　本土産陶器観察一覧

単位：cm

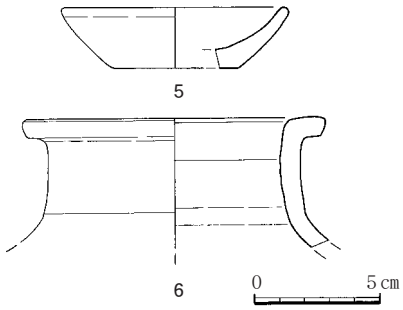
押図番号 図版番号	産地	器種	部位	口径	文様・成形等の特徴	出土地層序
第98図 3 図版31 9	薩摩	甕	口縁	－	肩の張る甕、口縁を外面に張り出し口唇部に波状のひだ飾りを施している。素地は明褐色の微粒子で白色砂粒が多くみられる。	城西小地区 北トレンチ 第Ⅳ層



第82表　沖縄産施釉陶器観察一覧

単位：cm

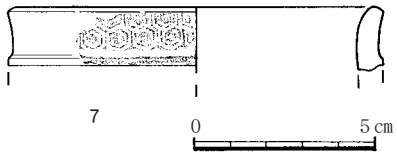
押図番号 図版番号	器種	部位	器　　形	口径 器高 底径	出　土　地
第98図 4 図版31 10	急須	口縁	口縁部は胴部から上に引き上げる様に立ち上がる。胴部は内灣し、丸みのあるものである。	5.2 － －	北トレンチ第Ⅱ層



第83表　沖縄産無釉陶器観察一覧

単位：cm

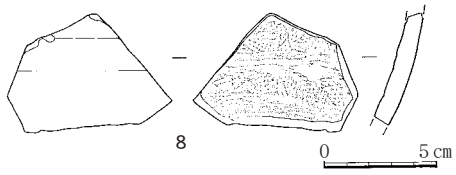
押図番号 図版番号	器種	部位	器　　形	口径 器高 底径	出　土　地
第98図 5 図版31 11	皿	口縁～底	直口平底の皿である。	9.0 2.4 5.0	シー 14 トレンチⅢ 石積南側（大道側） 第 10a 層
第98図 6 図版31 12	壺	口縁	頚部は肩から直に立ち上がり口縁で外側に折り曲げる。	12.0 － －	北トレンチ 第 13 層



第84表　陶質土器観察一覧

単位：cm

押図番号 図版番号	器種	分類	器　　形	口径 器高 底径	出　土　地
第98図 7 図版31 13	火炉	口縁	口縁部は胴部から直に立ち上がる。口唇は舌状を成す。頚部に突帯廻らし口縁外面に線彫りの亀甲文を施している。	10.4 － －	シー 14 トレンチ② 石積南側（大道側） 第 8 層

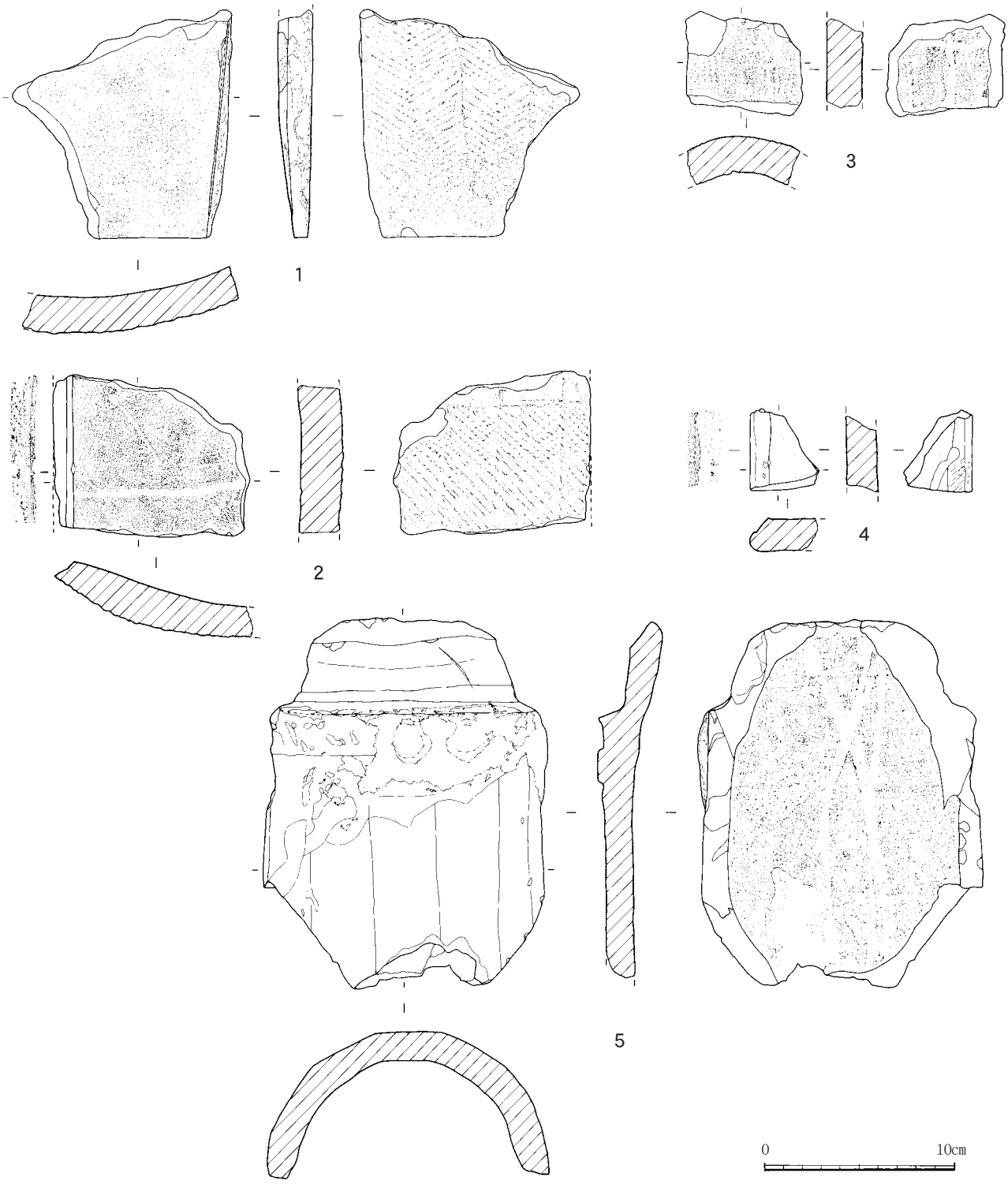


第85表　カムィヤキ観察一覧

単位：cm

押図番号 図版番号	器種	部位	器　　形	口径 器高 底径	出　土　地
第98図 8 図版31 14	壺	胴部	胴部内面に羽状の圧痕が見られる。	－ － －	シー 13 トレンチ①東側石積北側（大道側） 第 8 層

第98図　SA03　出土遺物　中国産褐釉陶器・本土産陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・陶質土器・カムィヤキ

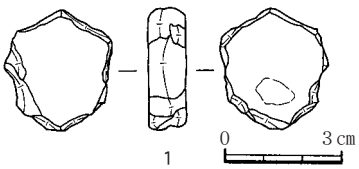


第99図　SA03　出土遺物　瓦

第86表　瓦観察一覧

単位：cm

挿図番号図版番号	器　種	部　位	出土地　層序
第99図1　図版32　1	高麗系平	狭端　角部	シー14トレンチ①西側石積南側 第8層
第99図2　図版32　2	高麗系平	側　面	シー14トレンチ②石積南側（大道側）第10ａ層
第99図3　図版32　3	大和古瓦丸	筒　部	シー15トレンチ③石積南側（大道側）第10ａ層
第99図4　図版32　4	大和古瓦平	側　面	シー14トレンチ③ 第8層
第99図5　図版33　1	明朝系瓦丸	側　面	シー14トレンチ③第8層

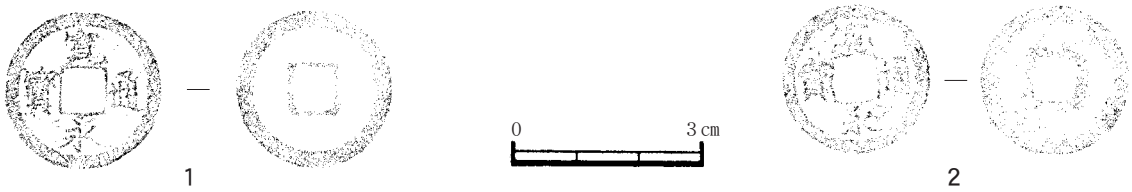


第100図　SA03　出土遺物　円盤状製品

第87表　タイ産褐釉陶器製円盤状製品観察一覧

単位：mm、g

挿図番号 図版番号	残存状況	法量				出土地
		縦径	横径	厚さ	重さ	
第100図 1 図版33　2	完　品	30.8	25.8	9.5	10.3	シー 14 トレンチ③ 層不明

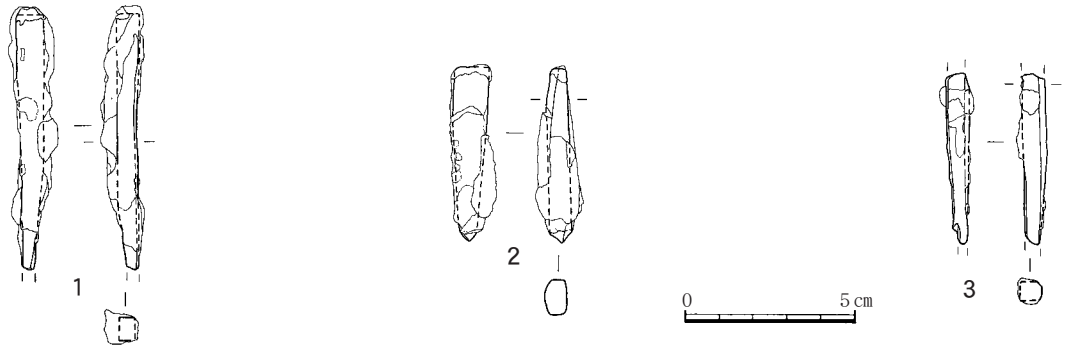


第101図　SA03　出土遺物　銭貨

第88表　銭貨観察一覧

単位：mm、g

挿図番号 図版番号	国名	古銭名	種類	残存状況	法量						初鋳年代	出土地　層序
					縦　径		横　径		厚さ	重さ		
					外径	内径	外径	内径				
第101図 1 図版33　3	日本	寛永通宝	Ⅲ期	完品	24.6	6.41	24.6	6.1	1.0	2.9	1697 ～ 1747 1767 ～ 1781	SA03 －北側 ②トレンチⅡ層
第101図 2 図版33　4	日本	寛永通宝	Ⅲ期	完品	23.3	6.13	23.3	1.3	1.3	3.1	1697 ～ 1747 1767 ～ 1781	SA03 －北側 ②トレンチⅡ層

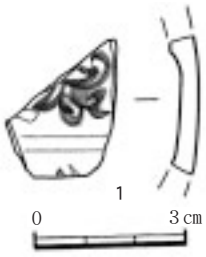


第102図　SS03　出土遺物　金属製品

第89表　金属製品観察一覧

単位：cm　（　）は残存長

挿図番号 図版番号	素　材	種類	残存状況	法量				出 土 地　　層 序
				縦	横	厚さ	重さ	
第102図 1 図版33　5	鉄製品	角釘	破損	(7.8)	1.1	0.8	15.7	シー 14 トレンチ①第８層
第102図 2 図版33　6	鉄製品	角釘	完品	5.78	1.08	1.0	12.9	シー14　5ｍライントレンチ延長部第８層
第102図 3 図版33　7	鉄製品	角釘	破損	(5.1)	0.7	0.6	5.7	案内板西区　北トレンチⅤ層



第103図　SS03　出土遺物　染付

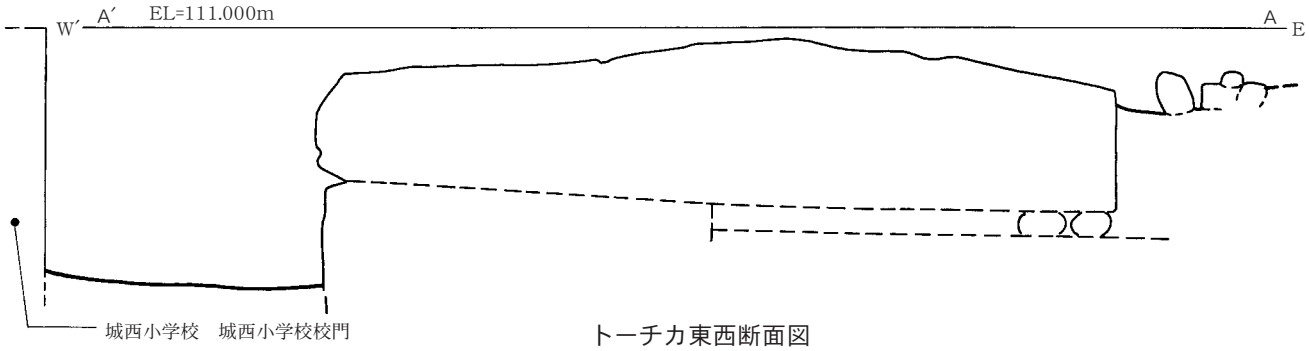
第90表　染付観察一覧

単位：cm

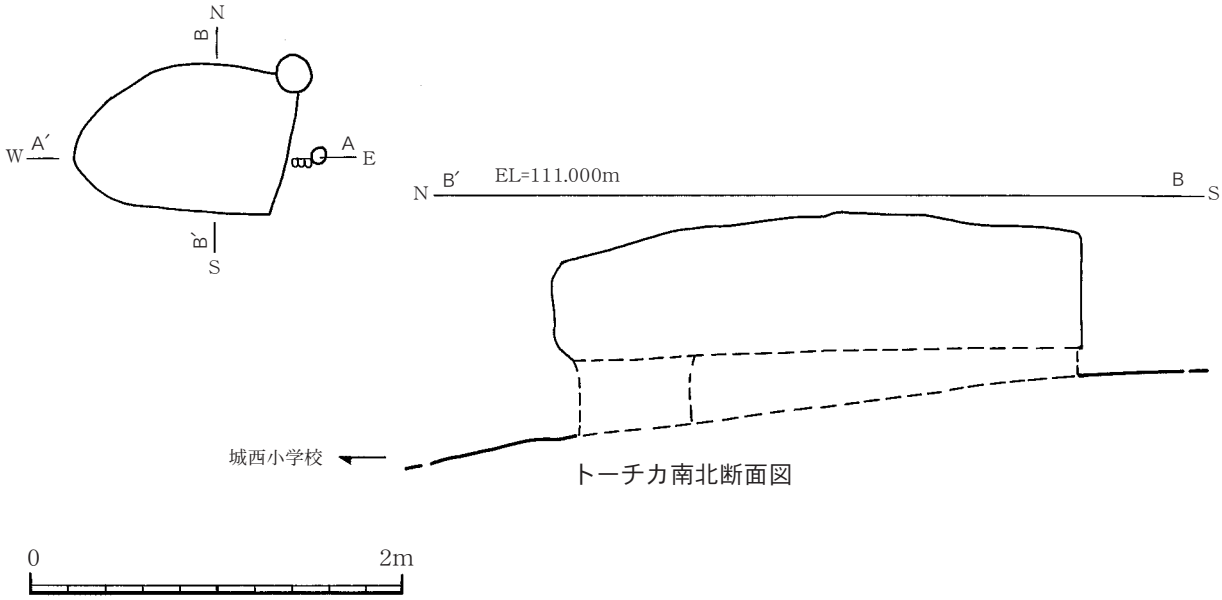
押図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	呉須の発色	釉色	出土地層序
第103図 1 図版33　8	瓶	胴部	—	外体草花文	黒ずむ	透明	シー 14 トレンチ③北トレンチⅤ層

第91表　トーチカ遺構表

位置	地　　区	シー16
	重　　複	ほぼ完全な状態で残存している。
構造	形　　状	平面台形状
	規　　模	東西最大径　10m　、　南北最大径　6 m
	工　　法	岩盤を削り整え、その上にセメントで固めた構築物を配置している。北側に面して入り口らしきものの箇所が確認できるが、小石混ざりのセメントで塞がれている状況である。
備考	首里城地下の 32 軍壕との関連が考えられるが、詳細は不明である。戦争遺跡の保存・活用を考える上で、重要な遺構である。	



トーチカ東西断面図



トーチカ南北断面図

第104図　トーチカ断面図

第３節　小括

平成12年度の調査は、SA03を通して、綾門大道の整備以前（Ⅰ期）の時期が15C、拡張の時期（２ａ～２ｂ期）が15C後半～16C前半になるという事や綾門大道北端を担う石牆（せきしょう）の構築工法を押さえる事ができた。

また、首里城公園案内板の西側のSS03は、綾門大道整備以前の層（Ⅴ層）から検出されている為、綾門大道の北側にあった施設を考える上で重要な遺構であった。

今後は、未調査地区の調査によって、SS03や平成12年度の銭貨出土柱穴１、SA04の様相や目的を明らかにしていき、綾門大道および周辺施設の解明に繋げていく事が、課題である。また、SA03西側にある沖縄戦時のトーチカは、首里城地下にある32軍壕と併せて、戦争遺跡の観点から、今後の保存・活用を考えていかなければならない遺構である。

Ⅵ章　遺構出土の動物遺体

第１節　脊椎動物

本遺跡の遺構より出土した脊椎動物遺体には陸生哺乳類、家畜獣ブタ、ウシ、ウマ、鳥類キジ科ニワトリがあり、ほかに魚類フエフキダイ科ハマフエヒキ・ヨコシマクロダイ、ハタ科などの哺乳綱２目３科３種、鳥綱１目１科１種、硬骨魚綱１目２科３種が出土している。以下にこれらの種名リスト及び出土一覧を揚げた。

脊椎動物遺体種名一覧

脊椎動物　Phylum VERTEBRATE

11年度		
Ⅰ　硬骨魚綱		CIass Osteichlhyes
	• スズキ目	Order Perciformes
	a フエギダイ科	Family Lethrinidae
	ハマフエキ	*Lethrinus nebulosus*
	b ハタ科	Family Serranidse
	属・種不明	Gen.　et sp.　Indet
Ⅱ　鳥綱		Class Aves
	• キジ目	Order Galliformes
	キジ科	Family Phasianidae
	ニワトリ	*Gallus gallus var.　domesticus*
Ⅲ　哺乳綱		CIass Mammalia
	• 寄蹄目	Order Perissodactyla
	ウマ科	Family Equidae
	• 偶蹄目	Order Artiodacyla
	イノシシ科	Family Suidae
	ブタ	*Sus scrofa var.　domesticus*
	ウシ科	Family Bovidae
	ウシ	*Bos taurus*
12年度		
Ⅰ　哺乳綱		CIass Mammalia
	• 寄蹄目	Order Perissodactyla
	ウマ科	Family Equidae
	ウマ	*Equus caballus*
	• 偶蹄目	Order Artiodacyla
	イノシシ科	Family Suidae
	ブタ	*Sus scrofa var.　domesticus*
	ウシ科	Family Bovidae
	ウシ	*Bos taurus*

11年度

第92表　魚類出土一覧

出土地					ＳＡ01	ＳＡ02	－
					セー16 北側トレンチ	スー14　SD16	スー14 南北畦①トレンチ
種目			部位		間層暗渇混礫土層	8層黒色土粒混赤渇色土層	23ａ層暗褐色土層
スズキ目	フエフキダイ科	ハマフエフキ	前上顎骨	R			1
		ヨコシマグロダイ	破片	不明			
	ハタ科	種不明	前上顎骨	L		1	
科・種不明			背鰭棘		1		
			脊椎骨			1	1

第93表　ニワトリ出土一覧

部位		右／左	出土地			個数
中足骨	遠位端破片	左	SA02	スー145mライントレンチ東西畦北側	14層白褐色細礫層	1

第94表　ウマ歯出土一覧

部位		右／左	出土地			個数
上顎骨	P3 or 4	右	SA02	スー14SD16	8層黒色土粒混赤渇色土層	1
	M1 or 2	左	SA02	スー14SD16	8層黒色土粒混赤渇色土層	1
	M2	右	SA02	スー145mライントレンチ東西畦北側	不明	1

第95表　ウマ出土一覧

部位 ＼ 出土地		SA02			SA02			SA02		
		スー145mライントレンチ東西畦北側			スー14SD16北側			スー14SD16		
		8層黒色土粒混赤渇色土層			8層黒色土粒混赤渇色土層			8層黒色土粒混赤渇色土層		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
上腕骨	近位端							1		
橈側手根骨	完存		1							
踵骨	骨体								1	
基節骨	完存				1					

第96表　イノシシ or ブタ出土一覧

部位 ＼ 出土地		ＳＡ01			ＳＡ02			ＳＡ02			－		
		セー16北側トレンチ			スー145mライントレンチ			スー14SD16			スー145mライントレンチ		
		8層 黒色土粒混赤渇色土層			8層 黒色土粒混赤渇色土層			8層 黒色土粒混赤渇色土層			23ａ層 暗渇色土層		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
肋骨	破片			1									1
上腕骨	骨体							①					
脛骨	近位部～遠位骨端欠					1							

凡例　○：破片

第97表　イノシシ or ブタ歯出土一覧

部位		右／左	出土地			個数
上顎骨	M1	右	—	スー16　南北断面南北トレンチ	23ａ層　暗褐色土層	1
下顎骨	M1		柱穴遺構	セー17　南北畦③西トレンチ	黒褐色混礫土層	1

11年度

第98表　ウシ歯出土一覧

部　位		右／左	出　土　地			個数
下顎骨	Ｍ１	右	ＳＡ02	スー14SD16	８層黒色土粒混赤渇色土層	1

第99表　ウシ出土一覧

部位＼出土地		SA02 スー14 SD16 南壁			SA02 スー14 5mライントレンチ			SA02 スー14 SD16 北壁			SA02 スー14 SD16 南壁			ー　セー16 南北畦②西トレンチ			ー　セー 16SD16		
		８層黒色土粒混赤渇色土層			東西畦北側８層黒色土粒混赤渇色土層			８層黒色土粒混赤渇色土層			８層黒色土粒混赤渇色土層			23a 層暗渇色土層			23a 層暗渇色土層		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
肩甲骨	破　　片										1								
福手根骨	完　　存				1														
大腿骨	骨頭のみ		1																
	近位骨端																	①	
	近位部～遠位端																	1	
脛　骨	近　位　部														①				
	近位部～遠位端							1											

凡例　○：破片

第100表　ウシ or ウマ出土一覧

部位＼出土地		ＳＡ02			ＳＡ02			ＳＡ02			ー		
		スー14　SD16			スー145ｍライントレンチ 東西畦北側			スー145ｍライントレンチ 東西畦北側			スー14 南北畦① 西トレンチ		
		８層 黒色土粒混赤渇色土層			８層 黒色土粒混赤渇色土層			14 層 白褐色細礫層			23a 層 暗褐色土層		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
肋　骨	（破片）			2			1			1			2

12年度

第101表　ウマ出土一覧

部　位		右／左	出　土　地			個数
肩甲骨	遠位端	右	ＳＡ03	東スー13 トレンチ① ８層	黒色土粒混赤褐色土層	1

第102表　ウシ歯出土一覧

部　位		右／左	出　土　地			個数
上顎骨	Ｐ２	左	ＳＡ03	東スー14 トレンチ③ ８層	黒色土粒混赤褐色土層	1

第103表　ブタ歯出土一覧

部　位		右／左	出　土　地			個数
下顎骨	dm4 M1.2	右	ＳＡ03	東スー13 トレンチ①　８層	黒色土粒混赤褐色土層	1

第104表　ブタ出土一覧

部　位		右／左	出　土　地			個数
焼骨	近位部～遠位部	左	ＳＡ03	東スー14 トレンチ③ 10a 層	褐色混礫土層	1

Ⅶ章　攪乱層出土の遺物

本章では近代以降の攪乱層から出土した遺物を報告する。

平成10年から12年まで３ヵ年にわたって調査され、大量の遺物が出土していることはすでに述べた。よって前章で報告した遺構に伴う遺物は全体出土量の極めて一部であり、それら遺物以外にも注目すべき遺物は多く確認されている。また、青磁、白磁、染付、その他の輸入陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、陶質土器、瓦質土器、土器、瓦、塼、円盤状製品、銭貨、金属製品、玉、石器、貝製品、骨製品、獣骨、貝類とその種類は多岐におよんでおり、遺物量は相当数に上る。

これらを踏まえて本章において報告する遺物は前章のように遺構の性格を判別する材料にはならないものの、今後の調査でその重要性が明示されてくると考えられる遺物のみを選別して報告する。

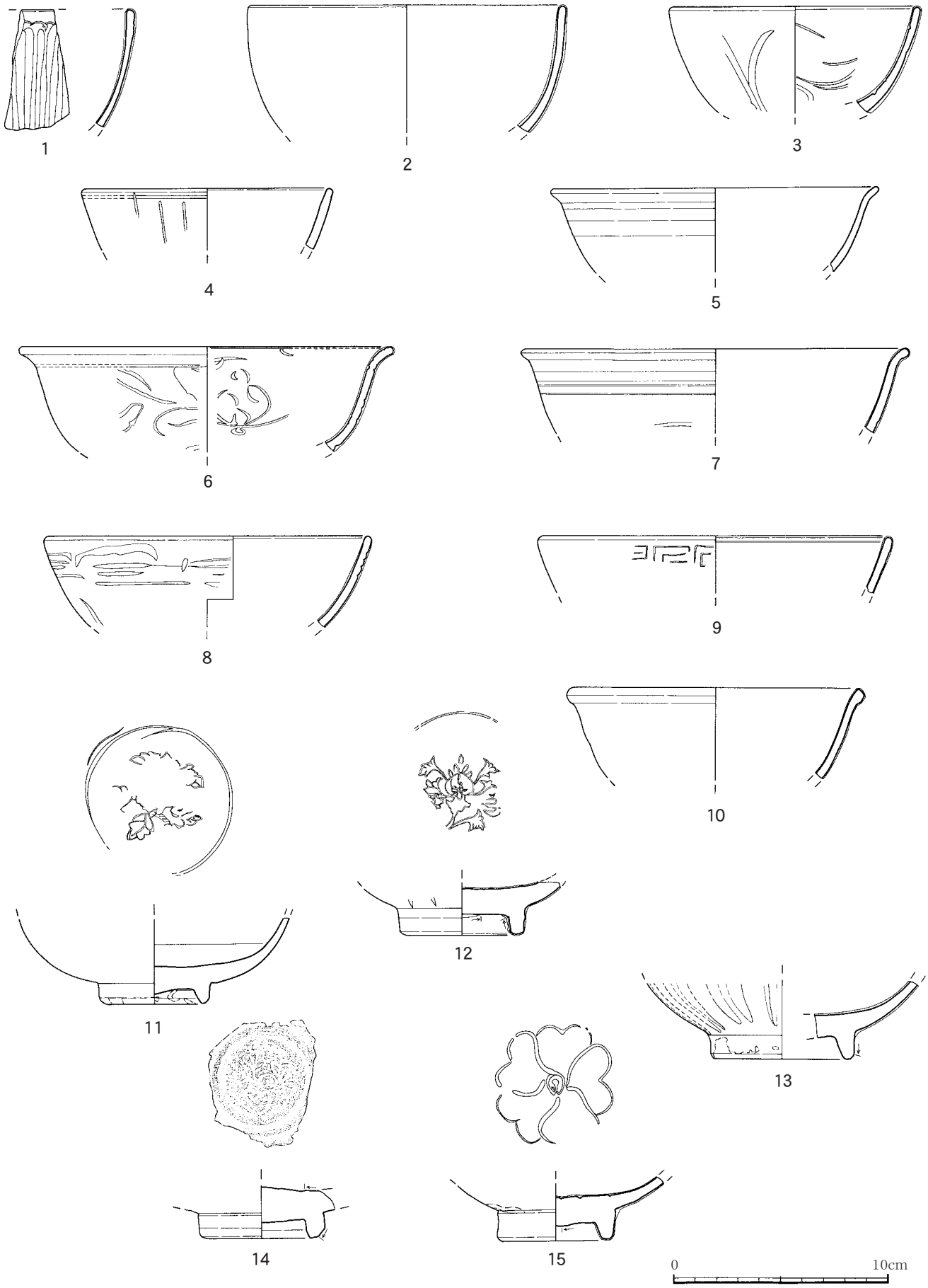
なお攪乱層からの出土であるため、出土年度ならびに出土地区に関しては割愛し、また中世相当期または近世でも前半頃に相当する遺物が多い。点数においてもある程度まとまって出土している青磁、白磁、染付、その他の輸入陶磁器、本土産陶磁器等は図化を行い、それ以外の沖縄産陶器、陶質土器、瓦、瓦質土器、円盤状製品、金属製品、玉、石器等は写真図版のみにとどめた。

第１節　青磁

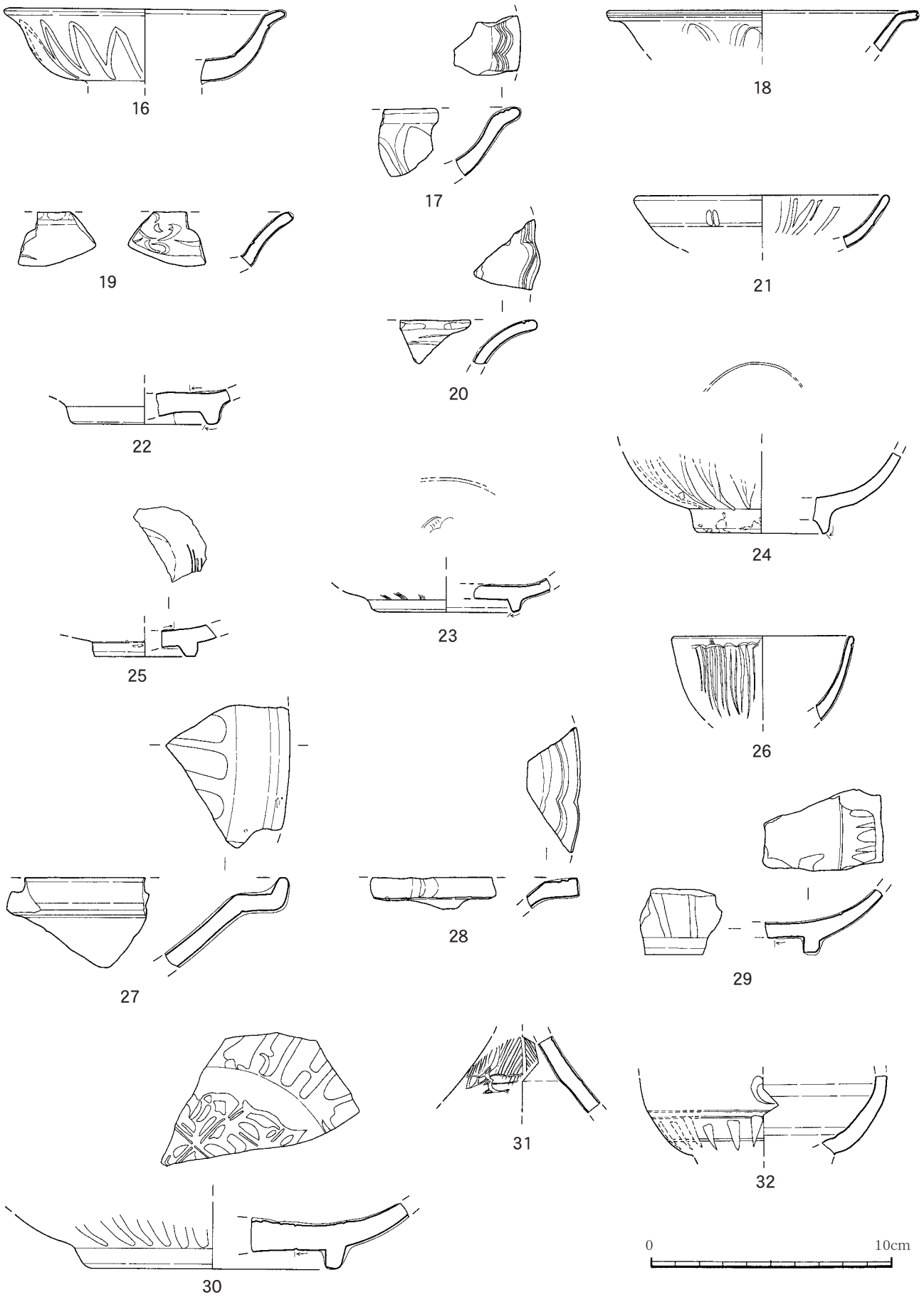
青磁は碗、皿、盤に関しては全容が窺えるもの、杯、瓶、摺鉢、蓋に関しては小片も含めて全資料、総計45点を報告する。

碗に関しては無鎬蓮弁文碗、雷文帯碗、刻花文碗、無文外反碗、玉縁口縁碗、線刻細蓮弁文碗、とバリエーションは多様である。皿は口折皿、外反皿、直口皿に大別することができ、文様は蓮弁文や櫛描文、菊花文、草花文が見られる。盤は端部を折り上げるもの、稜花となるものがあり、文様は篦描の蓮弁文、印花文が見られる。杯、瓶、蓋、擂鉢に関しては１ないし２点のみの確認で何れも小片である。また、これら以外に水注の把手と見られる資料が１点確認されている。

これらは14世紀後半から16世紀代までと幅があり、綾門大道以前に存在した集落において使用されていたと見られる資料があることも想定される。また、近代以降の補修の際に、周辺から運んできた土砂に混入していた資料も含まれている可能性も考えられる。



第105図　青磁（碗）



第106図　青磁（皿・杯・盤・瓶）

第105表　青磁観察一覧（１）

単位：cm

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	素　　地	口　径 器　高 高台径	釉色・貫入	器形・文様・施釉などの特徴
第105図 1 図版36 1	細刻線蓮弁文碗	口	灰白色の微粒子	－	明緑色の失透釉。貫入は見られない。	直口口縁の碗。口縁部の器壁は厚く、胴部は薄い。文様は内外面共に見られる。外面は丸彫りで描かれた細刻線蓮弁文が配される。弁先と弁間は対応せず、弁幅も一定ではない。
第105図 2 図版36 2	直口碗	口	灰色の微粒子。黒色粒子が多く見られる。	15.0 － －	緑色の透明釉。	微外反しているが直口口縁の範疇に含まれると思われる。文様は見られない。
第105図 3 図版36 3	無鎬蓮弁文碗	口	白色の微粒子で黒色粒子がわずかに混入。	11.8 － －	明緑色の失透釉。貫入は見られない。	外面に片切彫りの蓮弁文、内面には片切り彫りで刻花文が見られる。釉は両面に厚く施される。
図版36 4	無鎬蓮弁文碗	口	灰白色の微粒子で黒色粒子、気泡がわずかに混入。	14.2 － －	明緑色の失透釉。貫入は見られない。	胴部に片切彫りの蓮弁文が見られる。口縁直下で立ち上がりの角度が変わり、外反する。釉は両面に厚く施される。
第105図 4 図版36 5	細刻線蓮弁文碗	口	白色の微粒子。	11.8 － －	緑色の失透釉。貫入は見られない。	直口口縁の碗。外面に弁先が略された蓮弁文が見られる。弁間は櫛描で表現される。
第105図 5 図版36 6	無文外反碗	口	白色の微粒子で気泡がわずかに見られ、黒色粒子が混入。	15.4 － －	やや黄味がかった緑色の失透釉。貫入は見られる。	器壁は薄く、釉は内外面ともに薄く施される。
第105図 6 図版36 7	刻花文碗	口	白色の微粒子で黒色粒子、気泡がわずかに混入。	17.6 － －	青緑色のやや透明度のある釉。貫入は見られない。	内外面ともに片切彫りの刻花文が見られる。胴部にかけてはやや膨らみを有しながら移行する。釉は両面に厚く施される。
図版36 8	直口碗	口	白色で黒色粒子がわずかに混入。	－	やや白味がかった緑色の失透釉。貫入は見られない。	直口口縁の碗。釉は内外面に薄く施される。
第105図 7 図版36 9	雷文帯碗	口	白色の微粒子で黒色粒子、気泡がわずかに混入。	18.2 － －	やや黄味がかった緑色の失透釉. 胴部に細かい貫入が見られる。	外反碗で口縁直下に不明瞭ながら帯状文と横線文が２条見られる。釉は内外面ともにやや薄く施される。
第105図 8 図版36 10	雷文帯碗	口	白色の微粒子で気泡がわずかに見られ、黒色粒子が混入。	15.4 － －	青緑色のやや透明度のある釉。貫入は見られない。	直口する碗。外面口縁直下には崩れた雷文帯が見られる。胴部には片切彫りで蓮弁が描かれていたと考えられる。釉は両面に厚く施される。
第105図 9 図版36 11	雷文帯碗	口	灰白色の微粒子で黒色粒子がわずかに混入。	16.6 － －	深緑色の透明釉。細かい貫入が見られる。	縦横の沈線で構成される雷文が描かれた直口碗。透明釉は内外面に薄く施される。
第105図 10 図版36 12	玉縁口縁碗	口	灰白色の微粒子で気泡が見られる。	14.0 － －	白味がかった緑色の失透釉。貫入は見られない。	文様は見られない口縁が玉縁状となる碗。釉は内外面ともに薄く施され、一部に釉が掛からないところも見られる。

第106表　青磁観察一覧（２）

単位：cm

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	素　　地	口　径 器　高 高台径	釉色・貫入	器形・文様・施釉などの特徴
第105図 11 図版37 13	碗底部	底	灰白色の微粒子。	－ － 4.6	白味がかった緑色の失透釉。胴部に粗い貫入が見られる。	高台から胴部へは膨らみを有しながら移行する碗。高台下部は斜めの面取りが見られ、畳付は尖る。外面は無文で内底面には圏線と印花文が見られる。高台と胴部との接続部には溝が入り、釉が溜まる。
図版37 14	碗底部	底	橙色の微粒子で白・黒色砂粒が見られる。	－ － 6.1	白味がかった緑色の失透釉。貫入は見られない。	畳付から外底面にかけて露胎。文様は見られない。
第105図 12 図版37 15	碗底部	底	灰白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。	－ － 5.8	青緑色の透明釉。貫入は見られない。	内底面に花文、外面に片切彫りの蓮弁文が見られる。高台には陽圏線が一条見られる。釉は外底面が蛇の目釉剥ぎされているのを除いて全釉されている。
図版37 16	碗底部	底	白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。	－ － 5.6	白味がかった緑色の失透釉。貫入は見られない。	文様は見られない。釉は外底面が蛇の目釉剥ぎされているのを除いて全釉されている。内底面には釉掻きした際に削られた粘土屑が付着する。
第105図 13 図版37 17	碗底部	底	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。	－ － 6.7	青緑色の失透釉。粗い貫入が内外面ともに見られる。	高台は「ハ」の字状に開き、高台下部は内外面ともに斜めの面取りが見られる。外面胴部に幅の狭い鎬蓮弁文を配する。内底面は露胎で畳付は釉が雑に施される。14c 中。
第105図 14 図版37 18	碗底部	底	橙色の微粒子で白色砂粒が見られる。	－ － 5.8	白味がかった緑色の失透釉。貫入は見られない。	内底面に印花文、外底面には陰圏線が見られる。高台と胴部の接続部には溝が入る。内底面は釉が掻き取られ、畳付けから外底面までは露胎となる。
第105図 15 図版37 19	碗底部	底	灰白色の微粒子。	－ － 5.5	灰緑色の透明釉。細かい貫入が内外面共に見られる。	ハート形の弁を有した花文を内底部中央に描く。高台部と胴部の接続部には稜が見られる。釉は高台外面と内底面の一部が露胎となる。轆轤痕が明瞭に残こる。
第106図 16 図版38 20	口折皿	口 ～胴	灰白色のやや粗い粒子。気泡が見られる。	11.8 － －	青緑色の透明釉。細かい貫入が内外面ともに見られる。	口縁部が水平に折れる皿。鋸歯状の蓮弁文が胴部に見られる。内底面には圏線が一条見られる。15c 前～中。
第106図 17 図版38 21	口折皿	口 ～胴	白色の微粒子。	－	青緑色の失透釉。口唇部と内面に細かい貫入が見られる。	口縁部が水平に折れる皿。鍔上面に３本単位の櫛描きで波状文を描く。外面には片切彫りの蓮弁文が見られる。15c 前～中。
第106図 18 図版38 22	口折皿	口	灰白色の微粒子。	13.0 － －	白味がかった緑色の透明釉。貫入は見られない。	口縁部が水平に折れる皿。外面に片切彫りの蓮弁文が見られる。14c 後～ 15c 中
図版38 23	外反皿	口	白色の微粒子。	11.0 － －	黄味がかった緑色の透明釉。外面に粗い貫入が見られる。	口縁部は緩やかに外反する。文様は見られない。15c 前～中。
第106図 19 図版38 24	外反皿	口	白色の微粒子。気泡が多く見られる。	－	緑色の透明釉。粗い貫入が内外面ともに見られる。	口縁部は緩やかに外反する。外面には唐草文か。内面には片切彫りの草花文が見られる。15c 前～中。
第106図 20 図版38 25	外反皿	口	白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。	－	緑色の透明釉。貫入は見られない。	輪花皿で口縁部近くに２本単位の、櫛描きの波状文が見られる。外面胴部には片切彫りで草文状の文様が見られる。15c 前～中

第107表　青磁観察一覧（３）

単位：cm

挿図番号 図版番号	名称・仮称	部位	素　　地	口　径 器　高 高台径	釉色・貫入	器形・文様・施釉などの特徴
図版38 26	外反皿	口	白色の微粒子。黒色粒子気泡が僅かに見られる。	－	黄味がかった緑色の失透釉。粗い貫入が内外面ともに見られる	口縁部が玉縁状に外反する皿。胴部へは膨らみを有しながら移行する。文様は見られない。15c 中～後
第106図 21 図版38 27	直口皿	口	白色の微粒子。	10.5 － －	緑色の透明釉。貫入は見られない。	外面には縦位の丸彫り沈線が２条、内面には弁先の無い菊文を叉状工具で描く。16c 中～後
図版38 28	直口皿	口	灰白色の微粒子。	6.6 － －	青緑色の透明釉。粗い貫入が内外面ともに見られる。	口唇部は丸くおさめる。外面口縁直下に界線と蓮弁文が見られる。16c 中～後。
図版38 29	直口皿	口	白色の微粒子。黒色粒子が僅かに見られる。	－	緑色の透明釉。粗い貫入が内外面ともに見られる。	菊花形皿で型成形である・外面には弁間を示す縦位の沈線が見られる。15c 前～中
第106図 22 図版38 30	皿底部	底	灰白色の微粒子。白色粒子が混入。気泡が僅かに見られる。	－ － 6.2	青緑色の失透釉。貫入は見られない。	高台の断面形は台形状となる。釉は外底面の一部まで施されるものの、畳付までしか施されない部分も見られるなど一定ではない。内底面は全釉した後に輪状に掻き取る。15c 中～後。
第106図 23 図版38 31	皿底部	底	白色の微粒子。黒色粒子が見られる。	－ － 6.2	緑色の失透釉。粗い貫入が一部見られる。	高台の断面形は台形状となる。釉は外底面の一部まで施されるものの、畳付までしか施されない部分も見られるなど一定ではない。縦位で２条の沈線が見られる。おそらく蓮弁文の下部と考えられる。内底面に圏線が見られる。14c 後～ 15c 中。
図版38 32	皿底部	底	白色の微粒子。黒色粒子、気泡が僅かに見られる。	－ － 6.6	緑色の失透釉。貫入は見られない。	高台は低く、内刳りも浅い。釉は全釉されており、外面は厚く施している。外面は胴部と高台の、接続部の胎部に沈線が見られ、内底面には陽圏線が１条見られる。
第106図 24 図版38 33	皿底部	底	灰色の微粒子。気泡が多く見られる。	－ － 5.6	青緑色の失透釉。貫入は見られない。内面は明瞭な貫入が見られる。	底部から胴部にかけては急な立ち上がりを見せる。高台はやや高く、内刳りは浅い。胴部に丸彫りで幅の狭い蓮弁文を配する。釉は畳付周辺において一部、施されない部分もあるが、大方施釉している。15c 前～中。
第106図 25 図版38 34	皿底部	底	白色の微粒子。黒色粒子が見られる。	－ － 4.2	緑色のやや透明度のある釉。貫入は見られない。	高台の断面形は台形状となる。内底面に陽圏線、外面の胴部と高台部との境目に陰圏線が見られる。外底面の釉は全釉した後に輪状に掻き取る。15c 前～中。

第108表　青磁観察一覧（４）

単位：cm

図版番号	名称・仮称	部位	素　　地	口　径 器　高 高台径	釉色・貫入	器形・文様・施釉などの特徴
第106図 26 図版39 35	杯	口 ～胴	灰白色の微粒子。黒色粒子気泡が僅かに見られる。	7.6 － －	青緑色の失透釉。貫入は見られない。	口縁部から胴部にかけては直線状となり、底部近くで緩やかに移行する。外面に櫛描蓮弁文。弁先のみ片切彫りとなる。16c 中～後。
第106図 27 図版39 36	鍔縁盤	口	灰白色の微粒子。黒色粒子が見られる。	－	緑色のやや透明度のある釉。貫入は見られない。	鍔の折り上げが明瞭。文様は幅広の箆状工具による蓮弁を、１本１本間隔を開けて配される。鍔と胴部の境目、外面には帯状の陰圏線が見られる。14c 後～ 15c 前。
第106図 28 図版39 37	鍔縁盤	口	灰白色の微粒子。黒色粒子気泡が僅かに見られる。	－	緑色の透明釉。貫入は見られない。	口縁部に２本単位での箆描の文様が見られる。縁は輪花状となる。鍔と胴部の境目には、内面に明瞭な稜が、外面に帯状の陰圏線が見られる。14c 後～ 15c 前。
第106図 29 図版39 38	盤底部	底	白色の微粒子。黒色粒子が見られる。	－	緑色の透明釉。細かい貫入が内外面ともに見られる。	高台は内傾し、畳付外面際を斜位に面取る。内面胴部には丸箆で間隔を開けた蓮弁文を描く。外面には丸彫りで弁間を描く蓮弁文が見られる。釉は外底面施釉後、円形状に掻き取る。15c 前～中。
第106図 30 図版39 39	盤底部	底	灰白色の微粒子。茶褐色粒子、気泡が見られる。	－ － 10.8	緑色の失透釉。貫入は見られない。	高台際から腰部が膨らまず口縁部へ移行する盤。高台は内傾し、斜位に面取る。文様は内底面に印花文と胴部に片切彫りで文様が見られるが構図不明。外面には丸彫りの蓮弁文が見られる。釉は外底面施釉後、円形状に掻き取る。14c 後～ 15c 前。
第106図 31 図版39 40	瓶	頸部	灰白色の微粒子。黒色の微粒子が見られる。	－	白味がかった緑色の透明釉。貫入は見られない。	直線状に立ち上がる瓶の頸部。外面には歪な花弁状の文様。内面には横ナデ成形痕が見られる。15c。
第106図 32 図版39 41	瓶	頸	浅黄橙色の微粒子。気泡がわずかに見られる。	－	深みがかった緑色の失透釉。細かい貫入が見られる。	瓶の胴下部。縦長の逆三角形状の文様を横位に並べる。その上部に唐草文か。内面には成形痕が明瞭に見られる。
図版39 42	擂鉢	胴	灰白色の微粒子。気泡がわずかに見られる。	－	深みがかった緑色の失透釉。細かい貫入が見られる。	内面には擂り目が密に見られる。摺り目が相互に切り合う。
図版39 43	把手		白色の微粒子。黒色粒子が混入する。	－	緑色の失透釉。粗い貫入が見られる。	断面形は楕円形状となり、外面には丸彫りで沈線が見られる。15c。
図版39 44	蓋	縁	白色の微粒子。	－	緑色の失透釉。貫入は見られない。	壺の蓋。鍔部分と思われる。箆描きで縁近くまで文様を配すが小片のため構図不明。釉は上面に施され、下面は露胎である。14c 後～ 15c 中。
図版39 45	蓋	縁	白色の微粒子。黒色粒子気泡が混入する。	－	青緑色の失透釉。粗い貫入が見られる。	鍔縁が持ち上がり、波状となる。下面に沈線が１条見られる。釉は上面と下面の縁に施される。15c 前～中。

第２節　白磁

撹乱層より出土した白磁は碗、小碗、皿、杯、瓶などがある。時期的には15世紀後半～16世紀代を主とするが、17･18世紀まで下るのもある。以下に各器種について略述し、個々の詳細は、観察表に記す。

１　碗（第107図１～４）

碗は４点図化した。口縁部の形態でみると、外反口縁碗のみであり、第107図１は胴部上位で一旦窄まり、それから外反するものである。第107図２は胴部は直線的で口縁部端で外反するものである。

底部は、特徴的なものを図化した。

２　小碗（第107図５～９）

小碗は５点図化した。第107図５～８の口縁部の資料は全て外反するものである。その中で第107図６は口唇部を輪花状に成形するものである。底部は１点のみ図化した。

３　皿（第107図10～22）

皿は比較的多く、口縁形態からⅠ類とⅡ類に分類した。

Ⅰ類－直口口縁皿（第107図10～14）。器肉が薄いもの（第107図10･11･14）と厚いもの（第107図12･13）がある。

Ⅱ類－外反口縁皿（第107図15･16）。胴部から口縁部へ緩やかに外反するものである。

底部は文様や高台形態などの特徴的なものを図化した。

４　杯（第107図23～25）

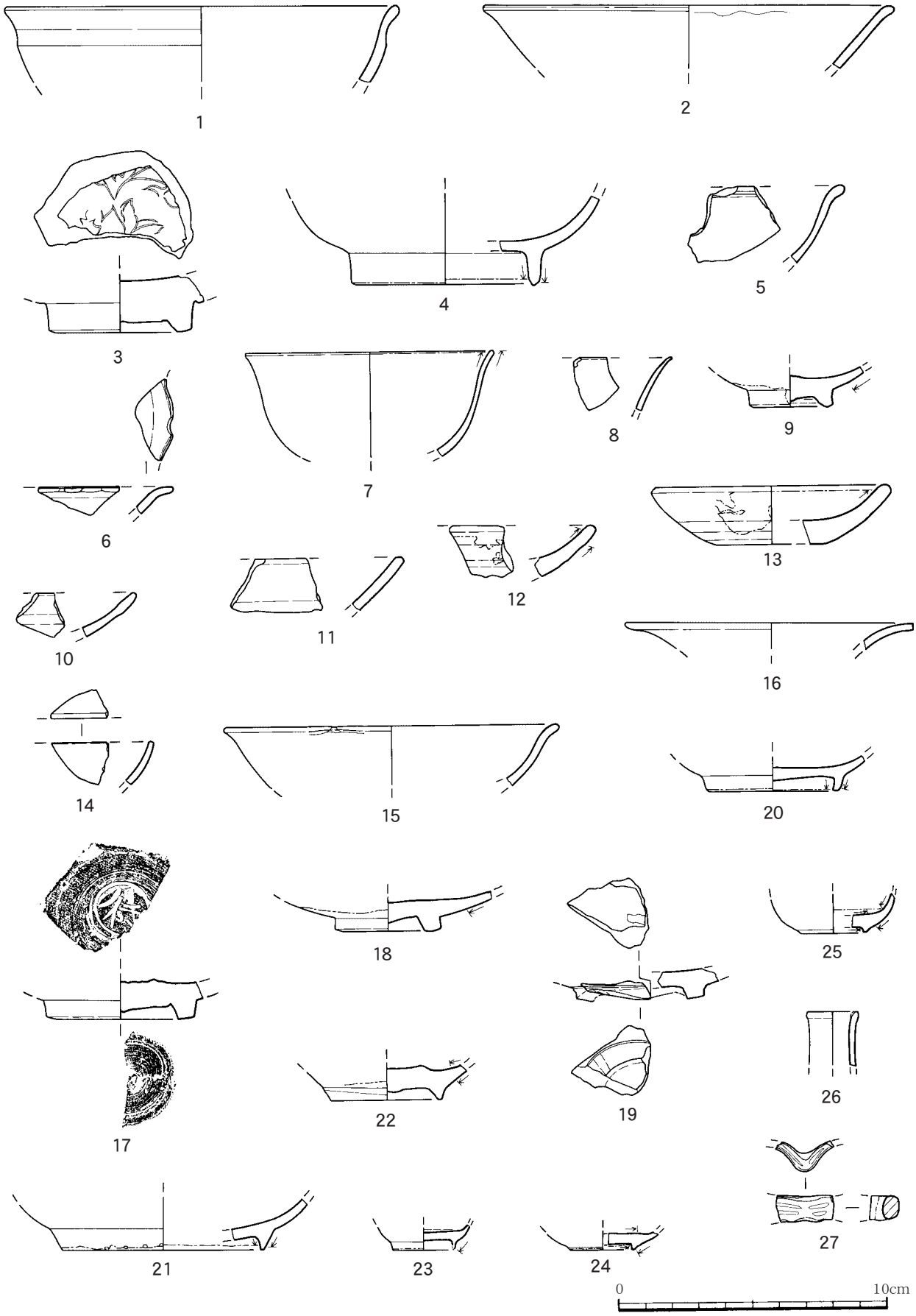
杯は底部のみであった。第107図24･25は高台が短いため碁笥底状の形態をしている。

５　瓶（第107図26）

瓶は１点図示した。瓶の頸部から口縁部にかけての資料であり、口縁部端で僅かに外反する。

６　耳（第107図27）

瓶、若しくは壺の耳である。外面及び側面に陰線により文様が施される。



第107図　白磁（碗・小碗・皿・杯・瓶）

第109表　白磁観察一覧（１）

単位：cm

押図番号 図版番号	器種･分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素　　地	釉色・施釉状況・貫入等
第107図1 図版40 1	碗	口	14.8 － －	胴部上位で窄ませ、それから口縁部へ至る。内面口縁部に陰線あり。内外面ともに轆轤跡あり。	淡灰白色。	透明釉。貫入無し。
第107図2 図版40 2		口	15.4 － －	口縁部端で外反する。文様は無し。	淡灰白色で黒色粒子を含む。	淡灰色釉。貫入無し。
第107図3 図版40 3		底	－ － 5.4	削り出しにより成形される。見込に草花文？を施す。	灰色。	見込にのみ施釉。細かい貫入がある。
第107図4 図版40 4		底	－ － 7.1	比較的高い高台から胴部へ至る部分である。文様は無し。	淡灰白色。	僅かに青味を帯びる。貫入は無し。
第107図5 図版40 5	小碗	口	－ － －	口縁部端を外反させる。	灰白色。	淡灰色釉。貫入無し。
第107図6 図版40 6		口	－ － －	外反口縁で、口唇部を輪花状にする。	灰白色。	淡灰色釉。貫入無し。
第107図7 図版40 7		口	9.4 － －	あまり外に開かず、胴部から口縁部にかけて緩やかに外反する。	白色。	白色釉。貫入無し。
第107図8 図版40 8		口	－ － －	薄手で外反する。	淡灰白色。	白色釉。貫入無し。
第107図9 図版40 9		底	－ － 3.2	高台は若干開き気味に作られ、畳付に稜をもつ。	乳白色。	白色釉を外底以外に施釉。貫入無し。
第107図10 図版40 10	皿／Ⅰ	口	－ － －	胴部が若干内湾する。外面に轆轤跡あり。	白色。	透明釉。口縁部に細かい貫入がある。
第107図11 図版40 11		口	－ － －	胴部から口縁部へ直線的に至る。	乳白色。	透明釉を薄く施釉。口唇部は無釉。細かい貫入がある。
第107図12 図版40 12		口	－ － －	器肉は厚く作られる。外面に轆轤跡がある。	灰色。	黄緑色釉を内面口縁部より下位に施釉。
第107図13 図版40 13		口	9.0 2.2 4.2	平坦な底部から直線的に口縁部へと至る。器肉は厚い。外面に轆轤跡がある。	乳白色。	黄灰色釉を内面胴部より下位に施釉。
第107図14 図版40 14		口	－ － －	口唇部を平坦にする。	乳白色。	白色釉。全体に細かい貫入がある。
第107図15 図版40 15	皿／Ⅱ	口	12.6 － －	口縁部は稜花状に形成している。	灰色。	淡灰色釉。貫入無し。
第107図16 図版40 16		口	11.0 － －	胴部から口縁部へ緩やかに外反する。内面口唇部で釉が溜まる。	灰白色。	白色釉。貫入無し。

第110表　白磁観察一覧（２）

単位：cm

押図番号 図版番号	器種･分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素　　地	釉色・施釉状況・貫入等
第107図17 図版40 17	皿	底	－ － 5.6	削り出しにより成形される。見込に「得」銘。	灰白色。	灰白色釉を見込みに僅かに施釉する。
第107図18 図版40 18		底	－ － 4.0	高台を「ハ」字状に作る。外面に轆轤跡あり。	乳白色。	透明釉を外面は胴部、内面は全面に施釉。細かい貫入あり。
第107図18 図版40 19		底	－ － 4.8	見込に目痕あり。高台には削られた痕がみられる。	白色。	白色釉を内面に施す。
第107図20 図版40 20		底	－ － 5.0	高台は内側に傾むけて作られる。比較的薄手。	白色。	白色釉を畳付以外に施釉。内外面ともに細かい貫入がある。
第107図21 図版40 21		底	－ － 7.6	内底は窪むように作られる。畳付に砂？が付着。	白色。	白色釉を畳付以外に施釉。内外面に僅かに貫入がある。
第107図22 図版40 22		底	－ － 4.2	高台を「ハ」字状に作る。見込は中心部を一段高くする。	灰白色で黒色粒子を含む。	白色釉を高台、外底、見込以外に施す。
第107図23 図版40 23	杯	底	－ － 2.4	高台からわずかな腰を経て胴部へ至る。	白色。	白色釉を畳付以外に施釉。
第107図24 図版40 24		底	－ － 2.4	僅かな高台で碁笥底状の底部である。	白色。	白色釉。外面は畳付以外に施釉し、内面は見込を蛇の目釉剥ぎにする。
第107図25 図版40 25		底	－ － 2.4	僅かな高台で碁笥底状の底部である。	白色。	白色釉。外面は畳付以外に施釉し、内面は見込を蛇の目釉剥ぎにする。
第107図26 図版40 26	瓶	口	1.9 － －	垂直的な頸部から口縁部端で僅かに外反する。	白色。	白色釉。貫入無し。
第107図27 図版40 27	瓶 or 壺	耳	－ － －	外面及び側面に陰線を施す。	白色。	淡青白色釉。

第３節　染付

撹乱層出土の染付は碗、皿、小碗、杯、瓶蓋などが検出されている。時期的には15世紀～17世紀代のものが主体であるが､18世紀の資料もある。以下に各器種について略述し、観察表に詳細を記す。

１　碗（第108図１～10）

碗は口縁部形態によりⅠ類とⅡ類に分類した。

Ⅰ類－外反口縁碗。口縁部が外反するもので、口縁部端が外反するもの（第108図１・２）と胴部から口縁部にかけて緩やかに外反するもの（第108図３）に細分類できる。

Ⅱ類－直口口縁碗。胴部から口縁部にかけて直線的に至るもの（第108図４）

底部は文様などに特徴があるものを図化した。第108図５は見込にラマ式連弁を描くものであり、第108図７は腰折碗の底部である。

２　皿（第109図11～18）

皿は８点図化し、口縁部及び底部形態によりⅠ類～Ⅳ類に分類した。

Ⅰ類－外反口縁皿。口縁部が緩やかに外反するもの（第109図11）と端反のもの（第109図12）。

Ⅱ類－直口口縁皿。口縁部は直口し、底部が碁笥底のもの（第109図13･６）。

Ⅲ類－外反する口縁の端を摘み上げるもの（第109図14）。

Ⅳ類－輪花皿。口唇部に抉りを入れて輪花状に作るもの（第109図15）。

底部は文様及び形態について特徴のあるものを図化した。

３　小碗（第110図19･20）

小碗は口縁部と底部の２点を図化した。第110図19は口縁部片であり、胴部から口縁部へ直線的に至るものである。第110図20は底部片であり、胴部に唐草文を廻らし、外底面に銘を記すものである。

４　杯（第110図21～23）

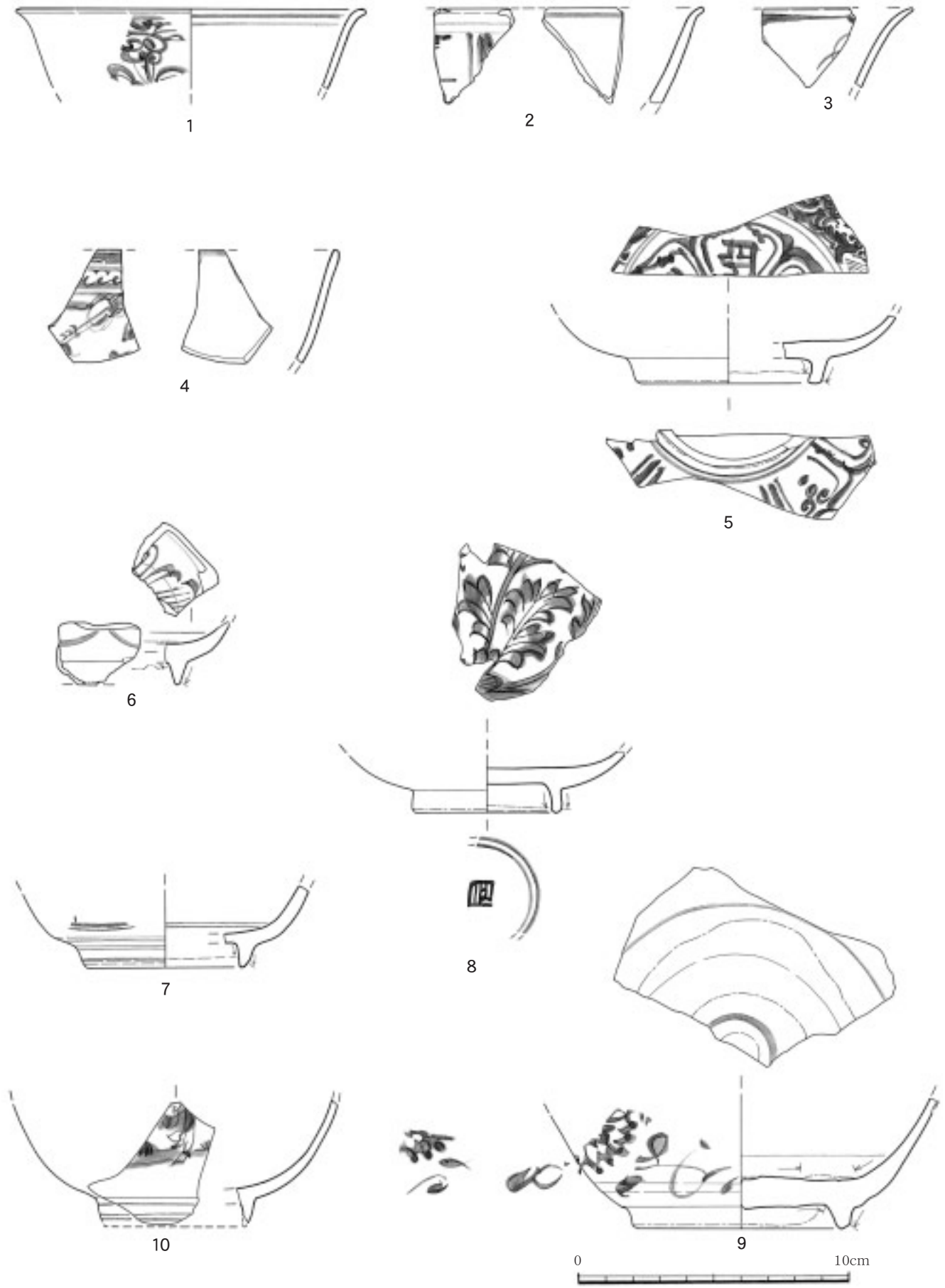
杯は４点図化した。第110図21は腰折杯であり、胴部に如意頭繋文を廻らすものである。

５　瓶（第110図24～28）

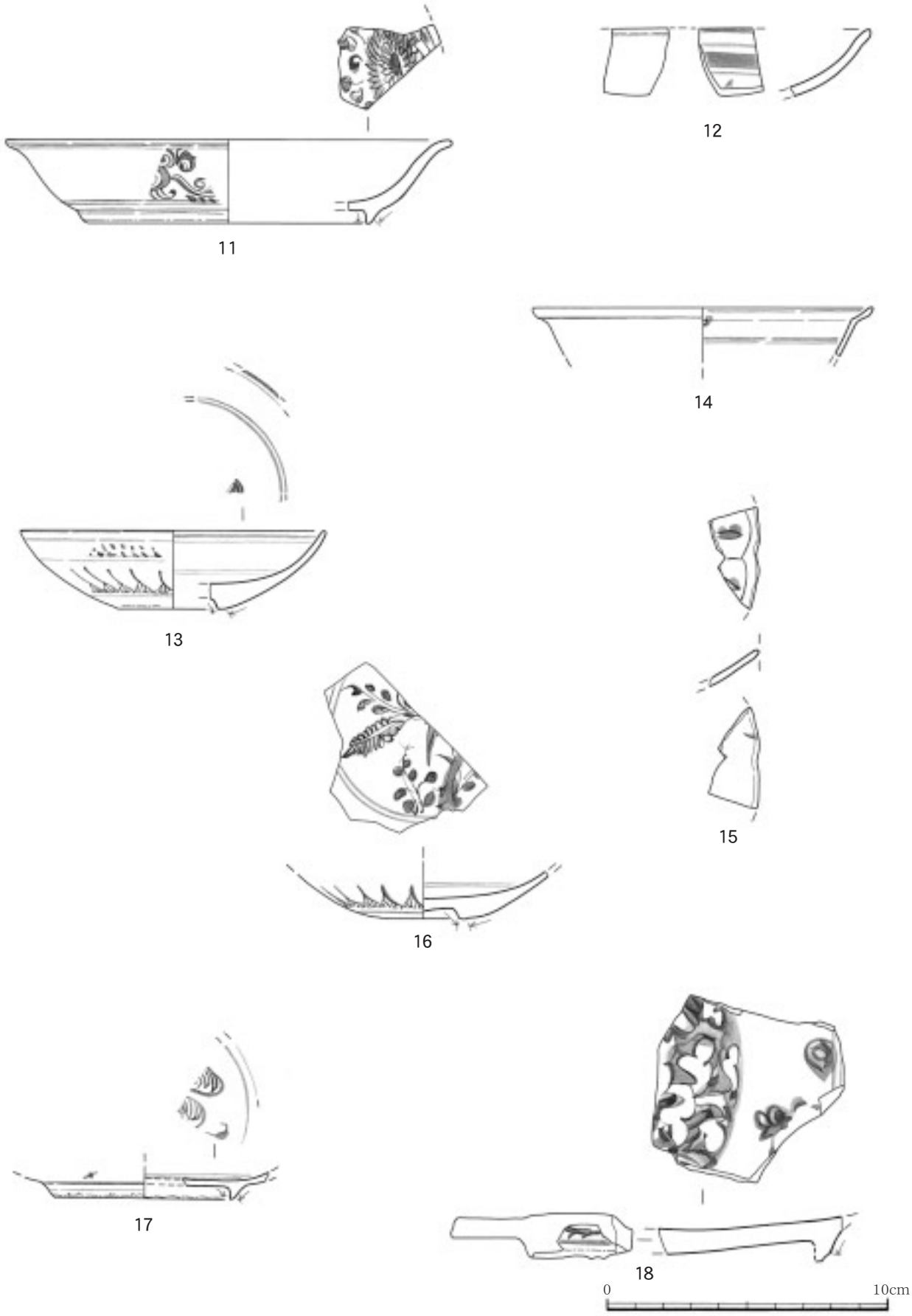
瓶は口縁部２点、胴部３点を図化した。胴部の資料が比較的古手のもので15世紀後半～16世紀中葉にあたるものである。口縁部は外反するもの（第110図24）と外反する口縁部の端を立てるものがある（第110図25）。

６　蓋（第110図29）

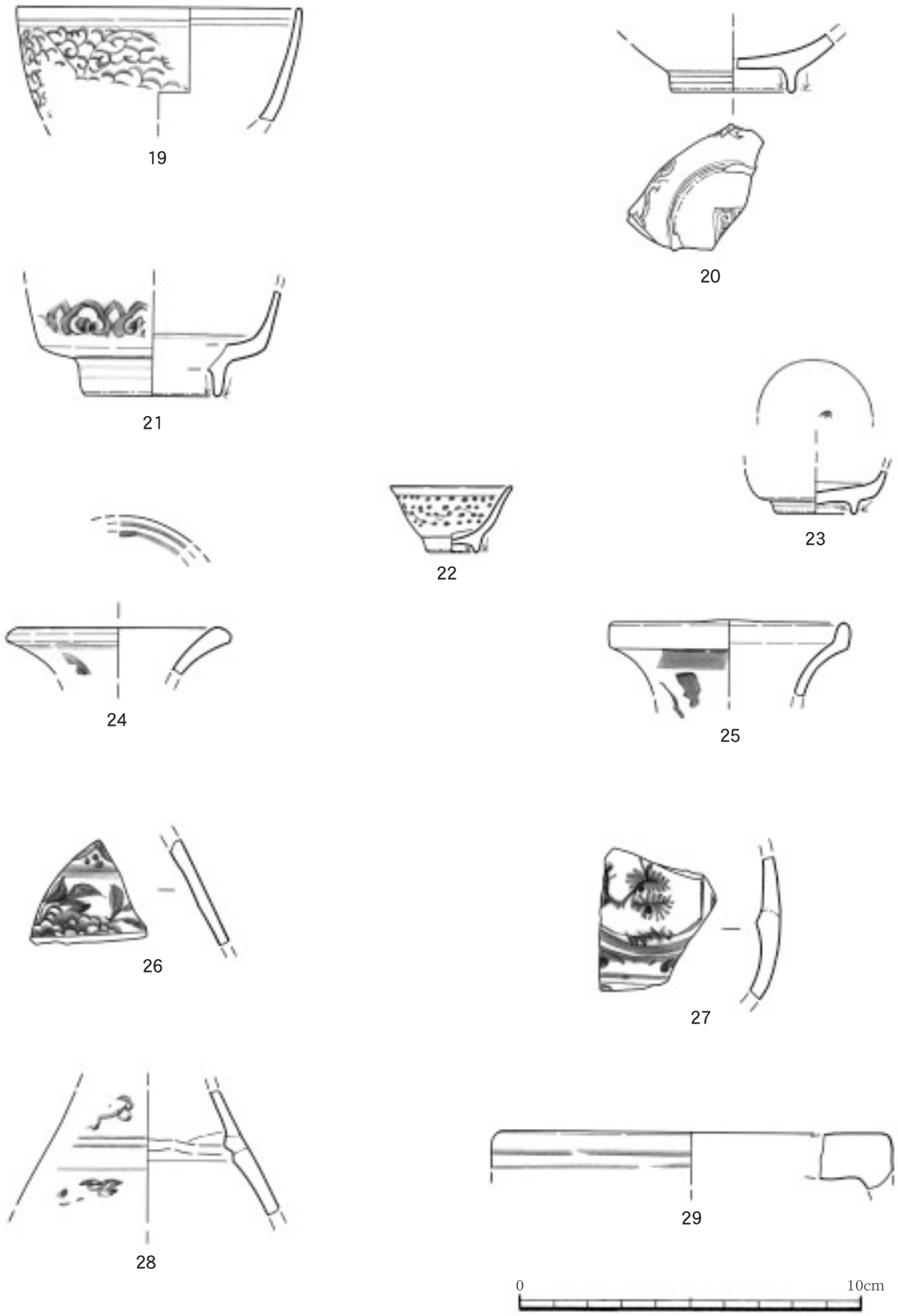
蓋の破片を１点のみ図化した。比較的厚めである。



第108図　染付（碗）



第109図　染付（皿）



第110図　染付（小碗・杯・瓶・蓋）

第111表　染付観察一覧（１）

単位：cm

押図番号 図版番号	器種･分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素　　地	釉色・施釉状況・貫入等
第108図１ 図版41 1	碗	口	13.0 － －	外面口縁部に圏線、胴部にアラベスク文、内面口縁部に圏線を施文する。	白色。	白色釉で貫入は入らない。
第108図２ 図版41 2		口	－ － －	外面口縁部に圏線、胴部に寿字文、内面口縁部に圏線を施文する。	淡灰白色で黒色粒子を含む。	青灰色釉で貫入は入らない。
第108図３ 図版41 3		口	－ － －	外面口縁部から胴部にかけて山水文？を施文する。	灰白色。	透明釉、貫入は入らない。
第108図４ 図版41 4		口	－ － －	外面口縁部に波濤文、胴部に樹文？、内面口縁部に圏線を施す。	白色。	淡灰白色釉で貫入は入らない。
第108図５ 図版41 5		底	－ － 6.7	外面胴部にラマ式蓮弁文、内面胴部に波濤文？、見込にラマ式蓮弁文を施す。	淡灰白色。	白色釉で貫入は入らない。畳付無釉。
第108図６ 図版41 6		底	－ － －	腰折碗。外面胴部にアラベスク文、見込に十字花文を施文する。呉須の発色は弱い。	乳白色で黒色粒子を含む。	青灰色で貫入は入らない。外面は高台まで施釉。
第108図７ 図版41 7		底	－ － 5.8	腰折碗。外面胴部にアラベスク文、腰及び高台に圏線。内面見込に圏線。	白色。	淡青灰白色釉で貫入は入らない。畳付無釉。
第108図８ 図版41 8		底	－ － 5.6	見込に草花文、外底に圏線及び銘を施文する。	白色で緻密。	白色釉で貫入は入らない。畳付無釉。
第108図９ 図版41 9		底	－ － 7.5	胴部と高台の境に一旦平坦面を作る。外面胴部に印花及び草文、内面胴部及び見込に圏線を施文。呉須の発色は弱い。	乳白色。	灰色釉を薄く施釉。見込は蛇の目釉剥ぎで畳付無釉。貫入は入らない。
第108図10 図版41 10		底	－ － －	外面胴部に人物文、高台に圏線を施す。	白色で緻密。	白色釉で貫入は入らない。
第108図11 図版41 11	皿	口～ 底	16.0 3.0 10.2	外面口縁部及び高台に圏線、胴部に唐草文。内面口縁部に圏線、胴部に菊文。	淡灰白色。	白色釉で貫入は入らない。畳付無釉。
第109図12 図版42 12		口	－ － －	端反口縁部。外面口縁部に圏線、内面口縁部及び胴部に圏線を施す。	白色。	白色釉で貫入は入らない。
第109図13 図版42 13		口～ 底	11.0 12.2 4.0	碁笥底皿。外面口縁部に波濤文、胴部に芭蕉文、内面口縁部及び胴部に圏線、見込に芭蕉文を施文する。	白色。	淡青灰白色釉で貫入は入らない。畳付無釉。
第109図14 図版42 14		口	－ － －	外反する口縁部の端部をさらに引上げる。外面口縁部及び内面に圏線を施す。	白色。	白色釉で貫入は入らない。
第109図15 図版42 15		口	－ － －	輪花皿。内面胴部に蓮弁状の文様、口唇部に縦位文様を施す。	白色。	白色紬で貫入は入らない。
第109図16 図版42 16		底	－ － 3.2	碁笥底皿。底部の仕上げは雑である。外面胴部に芭蕉文、見込に圏線及び花鳥文。	白色。	淡青白色紬で貫入は入らない。畳付無釉。
第109図17 図版42 17		底	－ － 6.4	外面高台に圏線、見込に圏線及び玉取獅子文を施す。	白色。	淡青白色紬で貫入は入らない。畳付無釉。
第109図18 図版42 18		底	－ － －	外底に櫛による蓮弁文？、見込に草花文？を施文する。呉須の発色は弱い。	灰色。	黄灰色釉で貫入は入らない。畳付無釉。

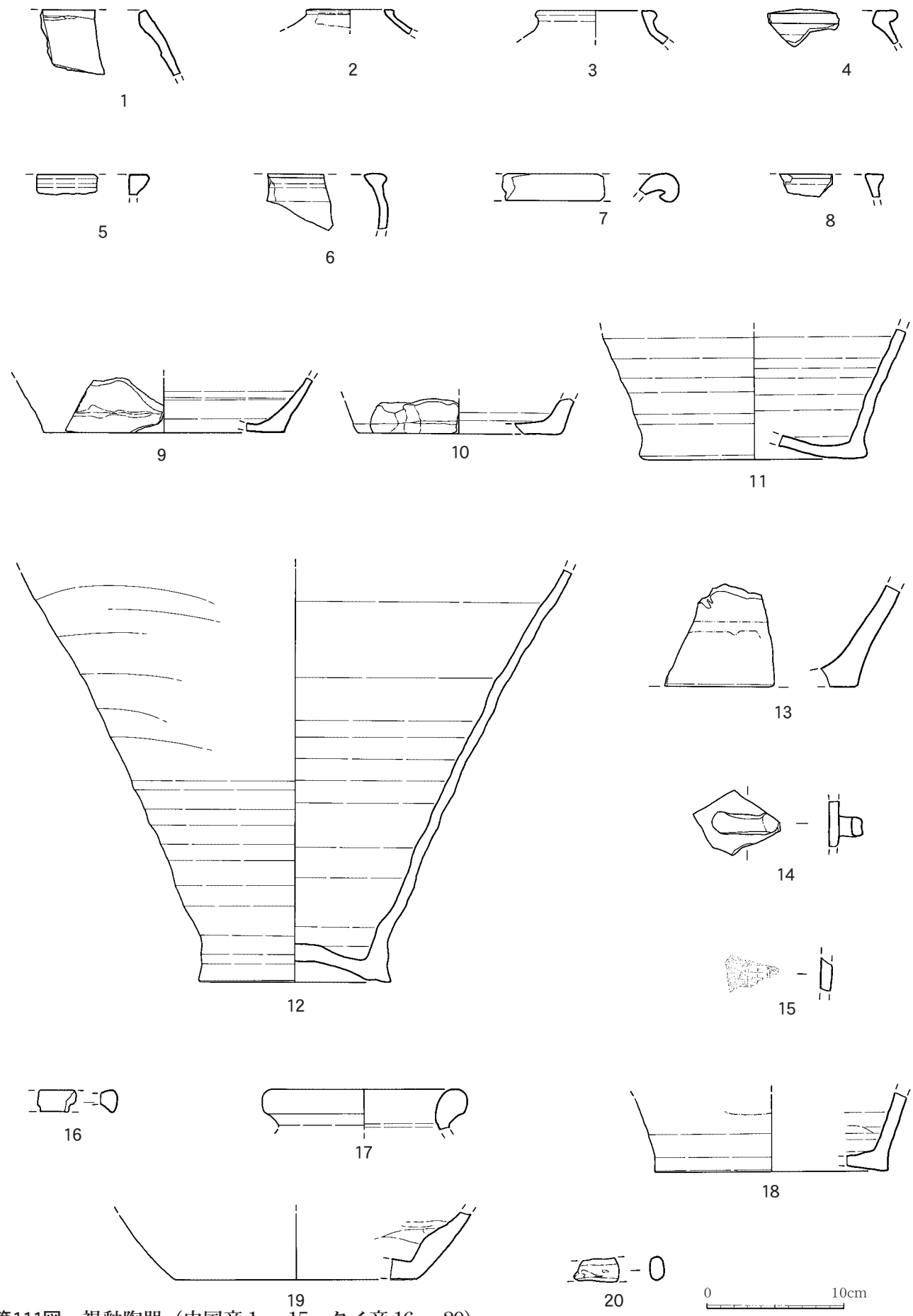
第112表　染付観察一覧（２）

単位：cm

押図番号 図版番号	器種･分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素　　地	釉色・施釉状況・貫入等
第110図19 図版43 19	小碗	口	8.4 － －	外面口縁部に圏線、胴部に唐草文、内面口縁部に圏線を施文する。	白色。	白色釉で貫入は入らない。
第110図20 図版43 20		底	－ － 3.6	外面胴部に唐草文、高台に圏線、外底に銘を施す。	白色。	白色釉で貫入は入らない。
第110図21 図版43 21	杯	底	－ － 4.1	腰折杯。外面胴部に如意頭繋文、高台に圏線、見込に圏線を施す。	白色。	白色釉で貫入は入らない。畳付無釉。
第110図22 図版43 22		口～底	3.6 1.95 1.5	胴部と高台際に圏線を施し、その間に列点文を施文する。	白色。	白色釉で貫入は入らない。畳付無釉。
第110図23 図版43 23		底	－ － 2.6	腰が折れる。高台外面及び見込に圏線を施す。	淡灰白色。	淡灰白色釉で貫入は入らない。
第110図24 図版43 24	瓶	口	6.6 － －	口縁部は緩やかに外反する。外面口縁部に圏線、頸部に草花文？、内面口縁部に圏線を施す。	淡灰白色。	白色釉で貫入は入らない。
第110図25 図版43 25		口	7.1 － －	口縁部は一旦外反させ、それから摘み上げる。外面口縁部に圏線、頸部に草文？を施す。	白色。	淡青白色で貫入は入らない。
第110図26 図版43 26		胴	－ － －	外面胴部に四方襷文及び唐草文を施文する。	淡灰白色。	白色釉で貫入は入らない。
第110図27 図版43 27		胴	－ － －	ラマ式連弁により区画された内に松文を施文する。	乳白色。	白色釉で貫入は入らない。
第110図28 図版43 28		胴	－ － －	外面胴部に圏線及び唐草文を施文する。	淡灰白色。	青灰白色で貫入は入らない。
第110図29 図版43 29	蓋	甲	11.8 － －	外面に圏線を施す。	乳白色。	青白色で粗い貫入が入る。

第４節　褐釉陶器

褐釉陶器の大半は壺が占めており、少数ではあるが鉢、擂鉢が確認されている。壺は大型のものと小型のものが見られ、小型のものは茶壺と想定される。とりわけ口縁部はバリエーションが見られ、内湾するもの、口唇部が水平で外反するもの、口唇部が水平で内湾するもの、「ク」の字状に外反するものが見られる。類例資料が乏しいものとして「上宝」と印款がなされた胴部資料が確認されている。この２文字のみで構成されるのか下方に続くのか今後の資料増加を待つところである。出土資料の大半が中国産であるが、タイ産も全体数から見ると少数であるが確認された。今後の調査成果も踏まえて５点図化した。



第111図　褐釉陶器（中国産１～15・タイ産16～20）

第113表　中国産褐釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	分類	部位	口径 器高 底径	釉　色	器面調整	形態・文様・素地など
第111図1 図版44 1	鉢	口	－ － －	－	内面に横位の成形痕が見られる。外面に器面調整の痕は見られない。	口縁部は内面方向に玉縁状となる。素地は青灰色の微粒子で黄、白色の砂粒が混入する。器表は外面が淡橙色、内面は橙色となる。15c。
第111図2 図版44 2	壺	口縁部	6.4 － －	黄褐色。口唇部と内面は露胎となる。	口唇部は水平となり、外面口縁下部は横ナデが見られる。	口縁断面は三角形状となる。淡橙色の微粒子で赤色の粗粒子が見られる。16c。
第111図3 図版44 3	壺	口縁部	8.9 － －	オリーブ黄色	外面には丁寧な横位成形痕が見られる。内面には器面調整の痕は見られない。	口縁部の断面形は三角形状となる。素地は黄白色の微粒子で白色砂粒が見られる。16c。
第111図4 図版44 4	壺	口縁部	－ － －	口唇部は灰褐色、胴部は浅黄橙色。	内外面ともに成形痕は見られない。	口縁部は「フ」の字状を呈する。黄橙色の微粒子。白、茶色の粗粒子が見られる。16c。
第111図5 図版44 5	壺	口縁部	－ － －	明褐灰色。内面口縁下は露胎となる。	内外面ともに丁寧に仕上げる。	口唇部は水平ではなく、やや凹状となる。あまり肩が張らない壺と考えられる。16 ～ 17c。
第111図6 図版44 6	壺	口縁部	－ － －	灰黄褐色	内外面ともに丁寧に仕上げる。	口縁部の肥厚は、断面が「フ」の字状を呈し、口唇内端が僅かに上方へ突出する。頸部は短く、なで肩となる。素地は橙色の微粒子で白色砂粒が僅かに見られる。16c。
第111図7 図版44 7	壺	口縁部	－ － －	－	全体的に丁寧な器面成形が成されている。	口縁部は「ク」の字状に折り込まれる。素地は赤褐色の微粒子。白色の粗粒子が見られる。16c か。
第111図8 図版44 8	壺	口縁部	－ － －	灰褐色。	内外面ともに丁寧に仕上げる。	口縁部は外側に突出し、口唇部は水平となる。素地は橙色の微粒子。白色粒子が多く見られる。
第111図9 図版44 9	壺	底～胴	－ － 15.2	釉は見られない。	内面に横位の成形痕が見られる。外面に凹凸有り。	底部はくびれ平底状となる。胴部へはやや緩やかに立ち上がる。青灰色の微粒子で白色粒子が僅かに見られる。
第111図10 図版44 10	壺	底部	－ － 17.6	にぶい赤褐色。外底以外は全釉される。	内面に横位成形痕が見られる。	底部から胴部にかけては直線的に移行する。素地は黒褐色の微粒子。白、黒色砂粒が多く見られる。16 ～ 17c か。
第111図11 図版44 11	壺	底部	－ － 16.8	オリーブ褐色。外面と底面の一部に施釉される。内面は露胎。	内外面ともに横位の横位成形痕が見られる。外底に煤が一部付着する。	底部はくびれ平底となる。外底中央は上げ底状となる。素地は灰白色の微粒子。白、黒色粒子並びに砂粒が一部見られる。16c 中～17c 前。
第111図12 図版44 12	壺	底部～ 胴部	－ － 14.1	内外面ともにオリーブ黄色。	外面には横位成形痕が底部にいくほど明瞭に見られる。	底部から胴部にかけては直線状に移行し、底部はくびれ平底状となる。素地は灰白色の微粒子で白、黒、茶色の粒子が見られる。16c。
第111図13 図版44 13	壺	底部	－ － －	オリーブ黄色。外面と胴下部の一部に施釉され、それ以外は内外面ともに露胎。	外面には横位成形痕、内面には方向の一定しない成形痕が明瞭に見られる。	底部から胴部にかけては外反しながら移行する。素地はにぶい橙色の微粒子。白色砂粒が見られる。16 ～ 17c。
第111図14 図版44 14	壺	耳	－ － －	黒褐色。	－	断面形は楕円形状となる。素地は灰黄色の微粒子で白、黒色粒子が見られる。16c。
第111図15 図版44 15	器種 不明	胴	－ － －	にぶい黄橙色	－	「上宝」の印款が見られる。

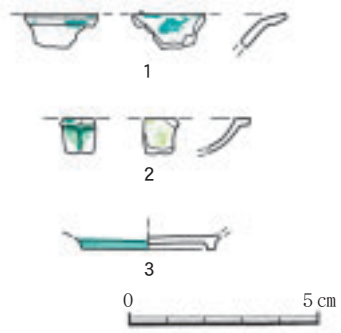
第114表　タイ産褐釉陶器観察一覧

単位：cm

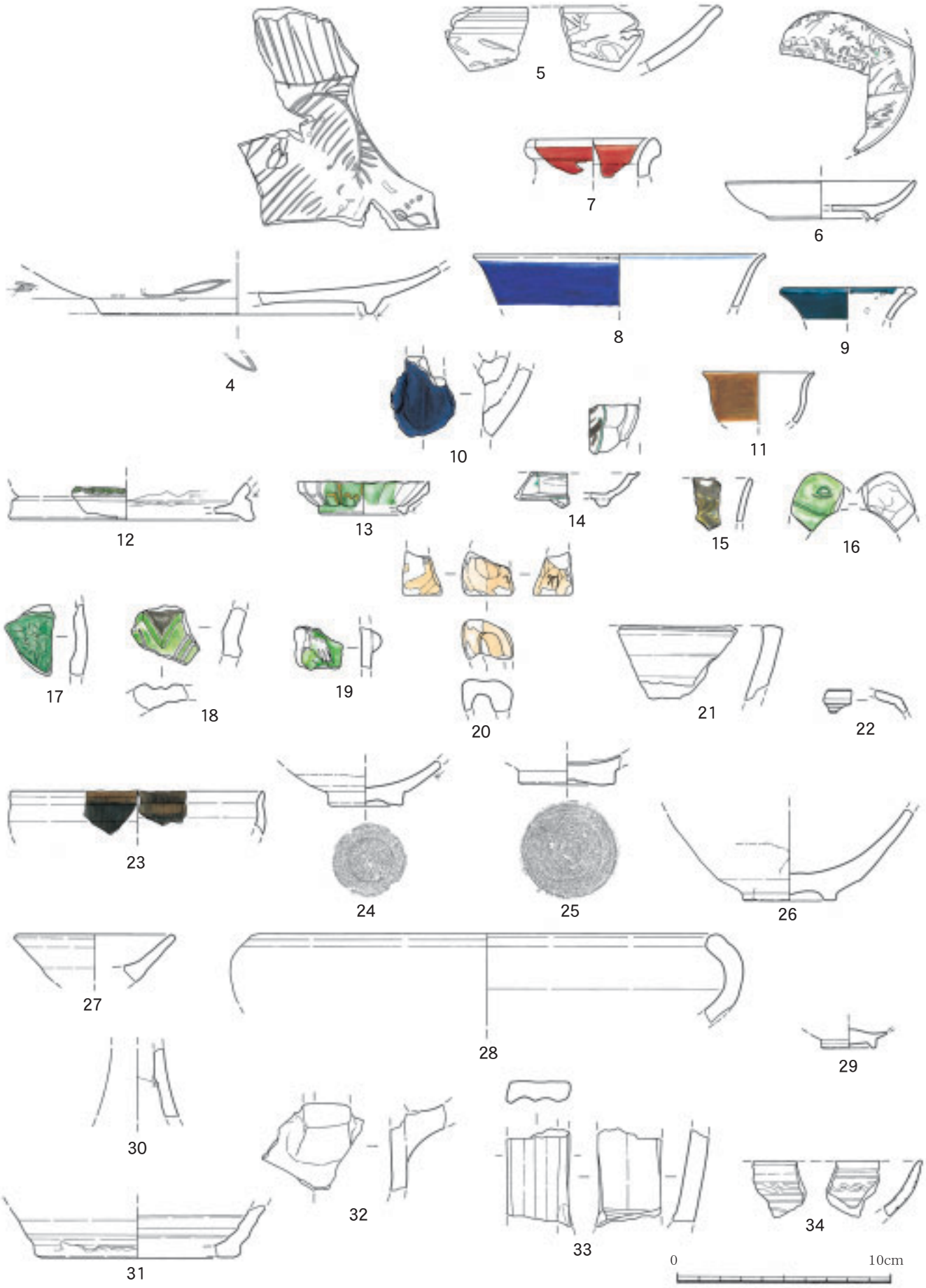
挿図番号 図版番号	分類	部位	口径 器高 底径	釉　色	器面調整	形態・文様・素地など
第111図16 図版44 16	壺	口縁部	－ － －	黒褐色	－	口唇部が上方へ立ち上がる口縁部。器壁の厚さから小型の壺か。釉はほとんど剥落している。素地は褐灰色の微粒子で白色粒子が見られる。
第111図17 図版44 17	壺	口縁部	15.0 － －	褐色	－	口縁部は玉縁状となる。短頸壺で肩の張るタイプと考えられる。素地は灰白色の微粒子で黒色粒子が多く見られる。
第111図18 図版44 18	壺	底部	－ － 17.2	黒褐色。胴下部まで施釉。内面、底面は露胎。	内外面ともに横位の成形痕が見られる。外底は雑な撫で仕上げで凹凸が見られる。	底部から胴部へは直線状に立ち上がる。底部は胴部より薄いつくりとなっている。赤褐色の微粒子で白、黒色粒子が僅かに見られる。16c。
第111図19 図版44 19	壺	底部	－ － 17.6	－	内外面ともに横位の成形痕が見られる。内面の成形は粗く、外面は丁寧な仕上げで器表は滑らかになる。	底部から胴部へは直線状に立ち上がる。底部と胴部との境には明確な稜が見られる。外底面には目跡が確認される。
第111図20 図版44 20	壺	耳	－ － －	内外面ともにオリーブ黒色。	－	断面形は楕円形状となる。素地は暗灰黄色の微粒子で黄、白色の砂粒が混入、気泡も見られる。15～16c。
図版44 21	壺	耳	－ － －	黒褐色。	－	断面形は楕円形状となる。灰黄色の微粒子で白、赤色粒子が見られる。施釉は薄く、一部露胎となるところも見られる。16c。

第５節　その他の輸入陶磁器

第１節から第４節まで報告した以外での輸入陶磁器として釉裏紅、瑠璃釉染付、宜興窯、粉青沙器、鉄釉、翡翠釉、瑠璃釉、緑釉、三彩、翡翠三彩、色絵が得られた。全て中国産でその大半が小片で確認された。このうち器形を窺うことのできる34点を図化し、報告する。



第112図　その他の輸入陶磁器（１）



第113図　その他の輸入陶磁器（２）

第115表　その他の輸入陶磁器観察一覧

単位：cm

図	番号	種類	器種	部位	口径	器高	底径	観察事項
第112図（図版45）	1	翡翠釉	皿	口	－	－	－	口縁部が輪花状となる皿。白化粧を施した後にライトブルーの釉を施す。胴部には鎬蓮弁文を配する。釉の剥落が著しい。
	2	翡翠釉	皿	口	－	－	－	口縁部が外反する皿。外面の口縁直下に段を有する。施釉は１と同様で、釉の剥落が著しい。
	3	翡翠釉	皿	底	－	－	3.5	高台は断面形が逆台形状となる。釉の剥落は著しく、釉下の白化粧は露出する。高台内面を除いて全釉されている。器壁は薄く、小皿になると思われる。
第113図（図版45）	4	色絵	皿	底	9.0	27.5	4.8	内傾する高台を有する皿。文様は内外底面並びに外面胴部に見られるが彩色は全て剥落している。外面胴部には唐草文、内底面には葉状の文様が見られるが小片のため全体構成は不明。畳付を除いて全面薄く施釉され、細かい貫入が全体的に見られる。
	5	色絵	皿	口	－	－	12.8	口縁が直口する碗。内面のみ文様が見られる。小片のため全体構成は不明であるが文様は曲線で構成されるものとみられる。内外面ともに青白色の釉を薄く施す。素地は青白色の微粒子。
	6	色絵	皿	口～底	－	－	－	口縁部が直口する皿。文様の彩色は全て剥落している。山水楼閣と見られる文様を僅かに窺い知ることができる。全体的に透明釉が施されている。
	7	釉裏紅	壺・瓶	口	6.4	－	－	口縁部が玉縁状となる壺か瓶。外面は釉が剥落している。釉は鈍い赤色で、器表には細かい貫入が見られる。素地は灰白色で白色の砂粒が混入する。
	8	瑠璃釉染付	碗	口	13.8	－	－	外反口縁の杯。内側口縁直下に呉須で一条の界線が描かれる。素地は青白色で密。
	9	瑠璃釉	瓶	口	6.4	－	－	口縁が外反する瓶の口縁部。瑠璃釉が外面から内面口縁部下まで施され、釉垂れが見られる。瑠璃釉施され留部分は厚く、それ以外は青白色の釉が薄く施される。
	10	瑠璃釉	急須	注口	－	－	－	注口と身の接続部近くと考えられる。内面は瑠璃釉が厚く施され、外面は青白色の釉が薄く施される。素地は青白色の微粒子。
	11	鉄釉	杯	口	5.3	－	－	外反口縁の杯。外面に褐色の釉。内面はやや青味がかった釉を薄く施す。素地は密で黒色の微粒子が僅かに混入する。
	12	緑釉・三彩	壺	底	－	－	12.0	高台を有する小型の壺か。高台は低く、外底面への抉りは浅い。胴部に緑色の釉薬が残存する。
	13	緑釉・三彩	皿	口～底	6.2	1.55	4.1	稜花皿の口縁部。口縁は直口し、高台の断面形は台形状となる。鎬蓮弁状の文様が胴部に見られる。素地は白色の微粒子。
	14	翡翠鉄彩	皿	口	－	－	－	稜花皿の口縁部。内面に花弁状の型取りが見られる。釉は剥落が著しく、外面に翡翠釉が僅かに見られ、内底面には翡翠釉、鉄彩で文様が描かれる。弧を３つ連結させた形状の足が取り付く。
	15	中国産陶器	杯	口	－	－	－	口縁部が外反する杯か。泥釉を施した後に草花文が色付けされる。
	16	緑釉・三彩	水注	頭	－	－	－	鶴ないし鴨形水注の頭部。型作りで成形後、張り合わせる。外面は緑釉、内面は露胎。内面には型にはめた際の指圧痕が残る。素地は淡黄灰色の微粒子。
	17	緑釉・三彩	瓶	胴	－	－	－	置物の破片か。胴部資料であるが全形が窺えないほど小片で詳細は不明。外面は緑釉が施され、内面は露胎、素地は淡黄灰色の微粒子。
	18	緑釉・三彩	水注	底	－	－	－	長胴丸水注の底部。型押しによる蓮弁文を配する。外面に緑釉と黄釉、内面は露胎。
	19	三彩・緑釉	不明		－	－	－	緑釉と黄釉が見られる。魚の鰭に似た張り付け文様が見られる。
	20	三彩・緑釉	不明	底	－	－	－	置物の下部か。張り付け文様に線状の墨描きがなされる。白化粧の上に釉を施す。
第113図（図版46）	21	宜興窯	鉢	口	－	－	－	口唇部が平坦で直口する鉢か。内外面共に工具による回転整形痕が見られる。
	22	宜興窯	急須	胴	－	－	－	「く」の字状に屈曲する急須の肩に相当する部分か。内面には成形痕、外面には３条の沈線が見られる。
	23	天目	碗	口	11.8	－	－	天目茶碗の吸い口部分。内外面ともに黒褐色の釉、そして口縁部は茶褐色の釉薬が施される。
	24	天目	碗	底	－	－	3.5	高台内部の抉りは低く、つくりはやや雑。外面胴部、内底面にはオリーブ黄色の釉が薄く施される。
	25	天目	碗	底	－	－	4.6	高台は低く、外底面は「の」の字状に浅く抉られる。内底面は黒褐色の釉がやや厚く施される。
	26	黒釉陶器	碗	底	－	－	4.2	高台は低く、断面形は台形状となる。横位成形痕が明瞭に見られる。釉は内底面と畳付まで施される。
	27	黒釉陶器	皿	口	7.6	－	－	口縁部が外反する皿。器表には砂粒が付着し、凹凸が激しい。胴部は直線的に口縁部へ移行する。
	28	黒釉陶器	鉢	口	21.5	－	－	浅鉢か。胴部の大きく外側に膨らみ、口縁部は内弯するは釉色は褐色から黒褐色と斑が見られる。細かい貫入が外面に見られる。
	29	中国産陶器	小杯	底	－	－	2.6	高台は低く、胴部への立ち上がりがやや急な杯。器表の内底面中央は隆起する。褐釉陶器か。
	30	黒釉陶器	瓶	頸	－	－	－	長頸壺の頸部。外面は黒褐色の釉が施され、内面は黄褐色の釉が頸上部まで施される。
	31	黒釉陶器	鉢	底	－	－	－	横位の成形痕が明瞭に見られる鉢。釉は内面のみに薄く施される。
	32	中国産陶器	水注	肩	－	－	9.4	大型の水注の肩部と把手の接続部。内外面ともに褐色の釉が薄く施される。把手の断面形は長方形状となる。褐釉陶器か。
	33	中国産陶器	把手		－	－	－	側面は面取られ、外に面する部分には断面形が波状の凹凸となる形状に仕上げている。褐釉陶器か。
	34	粉青沙器	碗	口	－	－	－	口縁部が僅かに外反する碗。内外面共に２条の界線間に逆「S」字を横に倒した簡略化された雷文帯を描く。釉下には白化粧がなされている。素地は灰色で密。

第６節　本土産陶磁器

今回の調査により肥前・備前・砥部・関西・瀬戸・美濃などを産地とする様々な種類の本土産陶磁器が出土している。器種は碗・小碗・猪口・小杯・皿・鉢・徳利・蓋・壺・擂鉢などが確認され、時期的には近代以降に位置付けられる資料が大半を占める。以下に各々の分類概念を記し、個別の観察所見は第117表に示す。

１．白磁（第114図１）

器形は直口口縁を呈する碗で、口唇部を稜花状に成形する。内外面とも文様は確認されない。

２．染付（第114図２～15）

碗　口縁部が直口するもので、外面に鳳凰文などを施す。外底に銘が確認されるものもある（２～５）。

小碗　口縁部を垂直に立ち上げるもの（６）と、内湾器形を呈するもの（７）がある。６は外面に矢羽文を施し、７は両面全体に散らし菊花文を施す。

猪口　削り出しの底部から胴部をほぼ垂直に立ち上げるもの。外面に蔓草文を施す（８）。

小杯　外反口縁を呈する型造りのもの。外面に芭蕉文などを施す（９）。

鉢　平面観が八角形を呈する角鉢である。両面に日足文を施す（10）。

徳利　徳利は全形の特徴から胴部の張りが弱いラッキョウ形（11～13）と、張りの強い瓢箪形（14）とに分類される。いずれも外面に文様が施され、ラッキョウ形は網目文、瓢箪形は草花文を主文様とする。

蓋　蓋表を上方に膨らませるもので、端部を内側に折り曲げ外端に削りを入れる。外面に三友文を施す（15）。

３．印判手及び近・現代陶磁器（図版48:22～40）

型紙摺り

碗　Ⅰ類：腰部の張りが強く口縁部が外反するもの。外面全体に点描文や微塵唐草文を施し、その中に種々の文様を配する（22～36）。

Ⅱ類：Ⅰ類と同様に腰部の張りが強いが口縁部が直口するもの。外面全体に点描文を施すもの（27）と花弁文を施すものがある（28）。

Ⅲ類：高台からやや内湾気味に斜上方に立ち上がるもの。外面に宝相華唐草文を施す（29）。

皿　波状口縁で高台を蛇の目凹形に成形するもの。内面に微塵唐草文を施す（30）。

小皿　内湾器形を呈する型造りの小皿である。内面は点描文の地に桜花散らしが施される（31）。

蓋　蓋表をドーム状に膨らませるもので、頂部には高台形の撮を有する。外面に花弁文を施す（32）。

銅版転写

小皿　型紙摺りの小皿と同様の器形を示す。内面全体に種々の文様を施す（33～35）。

その他の印判手

小碗　口縁部が直口するもの。外面に細蓮弁文（36）や花弁文（37）などを施す。

皿　型紙摺りの皿と同様の器形を呈するもの。呉須などで文様を施す（38）。

染　付

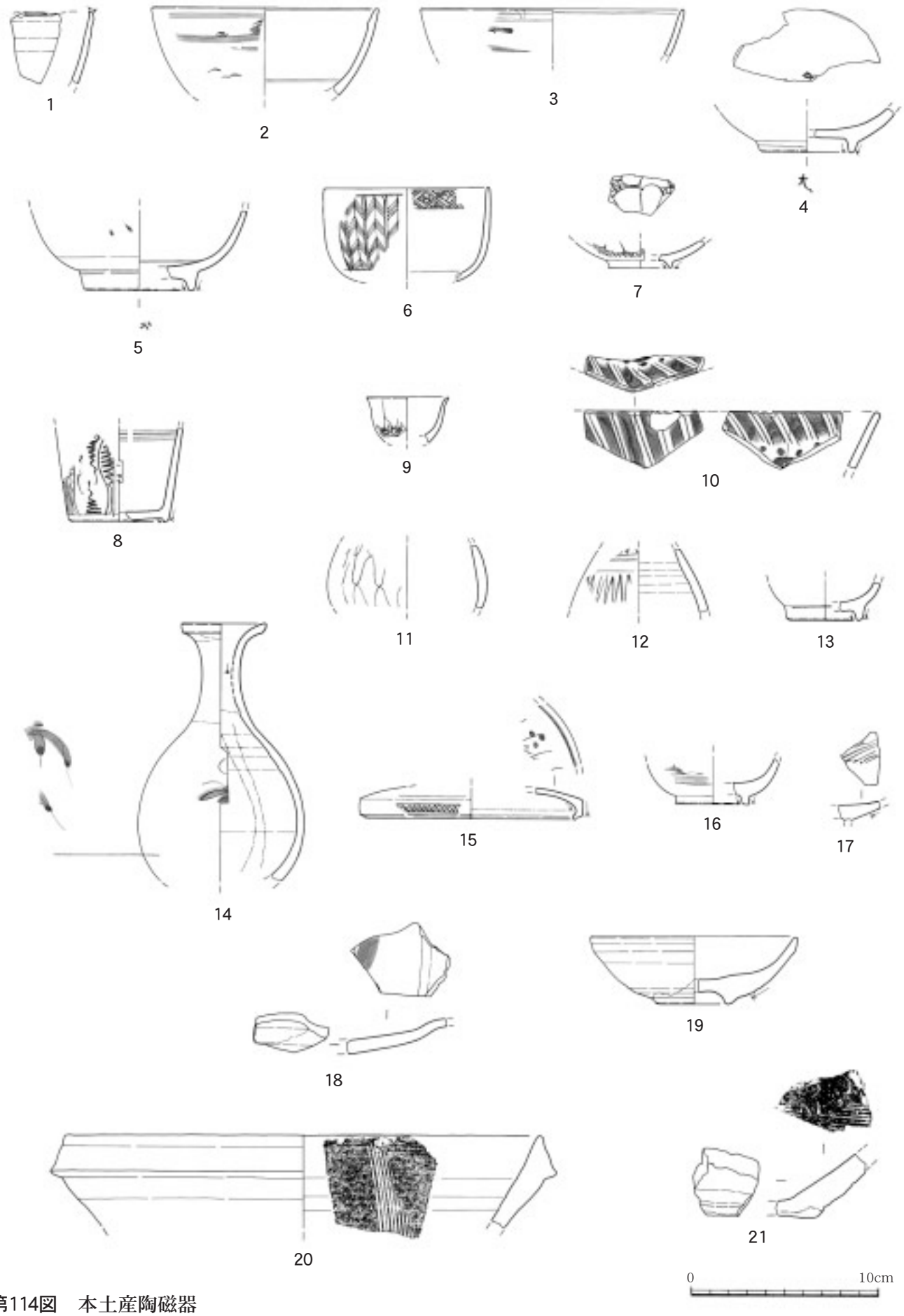
小碗　腰部が強く張り口縁部が外反するもの。外面に吉祥字を施す（39、40）。

４．陶器（第114図16～21）

小碗　腰部が丸みを帯びるが口縁部を欠くため全形は不明。外面に呉須で文様を施す（16）。

皿　皿は直口口縁を呈するもの（17）、胴部中位で立ち上がる角度を変える変形皿（18）、碁笥底状の底部を持つ粗雑な皿（19）の３つを図化した。17と18はいずれも内面に鉄絵で文様を施すが、19は無文である。

擂鉢　平底の底部から逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁部下端を断面三角形に成形するもの。内面に擂目が確認される（20、21）。



第114図　本土産陶磁器

第116表　本土産陶磁器観察一覧

単位：cm

図	番号	種類	器種・分類	部位	口径	器高	底径	観　察　事　項
第114図（図版47）	1	白磁	碗	口	－	－	－	稜花口縁。口錆。外面に轆轤痕が残る。（国産　18c ～ 19c ？）。
	2	染付	碗	口	12.2	－	－	外面に二重圏線、雲龍文（山水文？）、内面に圏線、内底に二重圏線を巡らす。（肥前　1650 ～ 1670 年代）。
	3			口	14.2	－	－	外面に二重圏線、鳳凰文？、内面に圏線を巡らす。呉須の発色は悪い。（肥前　1650 ～ 1670 年代）。
	4			底	－	－	4.7	外面に圏線、外底に「大明？」の銘、内底に二重圏線、花文を施す。（肥前　1650 ～ 1670 年代）。
	5			底	－	－	5.8	外面に圏線、外底に銘（判読不可）、内底に二重圏線を巡らす。外面の文様は不明。内面に石灰が付着する。（肥前　1650 ～ 1670 年代）。
	6		小碗	口	8.6	－	－	外面に矢羽文、圏線、内面に四方襷文を施す。（肥前　18c 後半～ 19c 初）。
	7			底	－	－	3.4	両面とも氷裂文地に散らし菊花文を施す。透明釉の発色は不良。（肥前　19c 初）。
	8		猪口	底	－	－	5.4	外面に蔓草文、圏線、内面に圏線を数条巡らす。（肥前　18c 後半）。
	9		小杯	口	4.4	－	－	外面に芭蕉文と渦文の組み合わせを施し、その下に圏線を巡らす。（肥前　1650 年代）。
	10		鉢	口	－	－	－	両面ともに日足文？を施す。（肥前　18c ～ 19c ？）。
	11		徳利	胴	－	－	－	胴部の張りが弱い。外面に幅広の網目文を施す。（肥前　18 世紀？）。
	12			胴	－	－	－	胴部の張りが弱い。外面に鋸歯文と網目文を施し、両者を圏線で区画する。（肥前　18c 前半？）。
	13			底	－	－	4.1	胴部の張りが弱い。外面に圏線を巡らす。外面に被熱の痕あり？（肥前　18c ？）。
	14			口	4.5	－	－	胴部の張りが強い。外面に竹文？が施され、その下に圏線を巡らす。（肥前　18c ？）。
	15		蓋	庇	(外径) 12.0	－	(内径) 11.3	外面に三友文？、圏線、菱繋ぎ文を施す。（肥前？　18 世紀後半～ 19 世紀）。
	16	陶器	小碗	底	－	－	4.0	外面に呉須で山水文？を施す。沖縄産の可能性あり。（国産　18c ～ 19c）。
	17		皿	胴	－	－	－	京焼風陶器。透明釉を内底から外面腰部まで施釉。内底に鉄絵で山水文を施す。（肥前　17c 末～ 18c 後半）。
	18			胴	－	－	－	大皿。両面に灰釉を施釉。内面に鉄絵で文様を施すが詳細は不明。（肥前　17c）。
	19			底	11.2	3.7	4.1	灰釉を内底から外面胴部まで雑に施釉。外面に削り調整痕が残る。碗の可能性あり。（唐津　16c 末～ 17c 初）。
	20		擂鉢	口	25.7	－	－	無釉陶器。内面に 10 本櫛の擂目を施す。色調は外面橙色、内面鈍黄褐色。両面に轆轤痕が残る。（備前　16c）。
	21			底	－	－	－	無釉陶器。内面の擂目の本数は不明。色調は橙色。外面に削り調整痕が残る。（備前？　16c）。
図版48	22	型紙摺り	碗／Ⅰ	口	－	－	－	外面は点描文地に円形窓絵（中に鶴）、松文、内面は鋸歯形窓絵内に花弁文を施す。
	23			口	－	－	－	外面は点描文地に松文、内面は松文を施す。
	24			口	－	－	－	外面は短斜線文地に松文、内面は円形窓絵内に福・寿字を施す。
	25			底	－	－	－	外面は微塵唐草文地に松文、圏線、内底に圏線、花文？を施す。内底に目跡が 1 ヶ所残る。
	26			底	－	－	－	外面に花弁文、内底に鶴文？を施す。内底に目跡が 1 ヶ所残る。
	27		碗／Ⅱ	口	－	－	－	外面は点描文地に菱形連続窓絵（中に花弁文）、内面は菱形窓絵内に菊花文を施す。
	28			口	－	－	－	外面に圏線、点描文？＋散らし梅花文の組み合わせを施す。内面の文様は不明。
	29		碗／Ⅲ	口～底	－	－	－	外面に宝相華唐草文、圏線、外底に銘（判読不可）を施す。
	30		皿	口	－	－	－	口藍。外面に龍文、圏線、内面は微塵唐草文地に笹・松文を施す。
	31		小皿	底	－	－	－	内面は点描文地に散らし菊花文を施す。
	32		蓋	撮～庇	－	－	－	外面に圏線、牡丹文、内面に雷文、三友文を施す。
	33	銅版転写	皿	口～底	－	－	－	口錆。内面に四方襷文、青海波文、葉文などを施す。
	34			口～底	－	－	－	口錆。内面に桐文、唐草文などを施す。
	35			底	－	－	－	内面に藤花文、雲文、花弁文？などを施す。
	36	印判手その他	小碗	口	－	－	－	外面に細蓮弁文？を施す。
	37			口	－	－	－	外面に花弁文を施す。
	38		皿	底	－	－	－	外面に二重圏線、内面に竹葉文？、内底に二重圏線を巡らす。内底の文様は不明。高台内面にアルミナ？が付着する。
	39	染付	小碗	口	－	－	－	口錆。外面に吉祥字？を施す。
	40			底	－	－	－	外面に吉祥字？、内底に文様（銘？）を施す。

第７節　沖縄産施釉陶器

器の表面に釉薬をかける陶器で、「上焼（ジョウヤチ）」とも呼ばれる。今回は25点の写真を掲載した。器種には碗、小碗、杯、皿、鉢、壺、瓶、花生け、急須、鍋、火取、煙管がある。個々の遺物については観察表に記載した。

第117表　沖縄産施釉陶器観察一覧（１）

単位：cm

図版番号	器　種	部　位	口径 底径 器高	観　察　事　項
図版 49 1	碗	口～底	13.2 6.2 5.9	素地：黄色。 釉薬：内面は白化粧。外面は呉須・施釉による花文を挟み込んで白化粧。
図版 49 2	碗	口～底	13.6 6.6 5.8	素地：黄白色。 釉薬：白色釉をフィガキー。
図版 49 3	小碗	口～底	8.6 3.6 4.1	素地：黄色。 釉薬：全面に白化粧。見込は蛇の目釉剥ぎ。畳付にアルミナ付着。外面は面取りされ、口縁部は外反する。
図版 49 4	皿	口～底	8.2 4.0 2.7	素地：黄色。 釉薬：内面には呉須・褐色釉の文様、外面には飛び散った呉須が付着し、これらを白化粧が挟み込む。見込みは蛇の目釉剥ぎ。畳付にアルミナ付着。直口縁。
図版 49 5	皿	底	－ 3.5 －	素地：黄色。 釉薬：内面には呉須による圏線があり、内・外面とも白化粧。内・外面に貫入あり。見込みは蛇の目釉剥ぎ。畳付にアルミナ。
図版 49 6	鉢	口	19.0 － －	素地：黄灰色。 釉薬：内面は白化粧、外面は黒褐色釉。内面に貫入あり。
図版 49 7	鉢	底	－ － －	素地：黄色。 釉薬：内面は白化粧。外面は黒褐色釉。見込みは蛇の目釉剥ぎ。内面に貫入あり。畳付にアルミナ付着。
図版 49 8	杯	底	－ 1.8 －	素地：黄灰色。 釉薬：内面は褐色釉、外面は褐色釉薬。底部外面は露胎。
図版 49 9	杯	底	－ 3.2 －	素地：暗赤褐色。 釉薬：内・外面とも暗褐色釉。高台内は露胎。
図版 49 10	火取	口	－ － －	素地：白灰色。 釉薬：内面は露胎、外面は黒色釉と暗緑色釉を塗り、飛鉋文様。
図版 49 11	壺	口	－ － －	素地：黄色。 釉薬：内・外面とも黒褐色釉で、口縁部平坦面は露胎。
図版 49 12	壺	底	－ 11.6 －	素地：黄色。 釉薬：内・外面とも黒褐色釉で、畳付～高台内は露胎。
図版 49 13	壺	耳	－ － －	素地：黄灰色。 釉薬：内面は暗褐色釉、外面は黒褐色釉。
図版 49 14	瓶	口	3.6 － －	素地：灰白色。 釉薬：外面～頸部内面に暗黄緑色の釉。釉薬の表面はざらざらする。
図版 49 15	瓶	底	－ 4.4 －	素地：黄灰色。 釉薬：外面には黄灰色釉で、白い粉をまぶしたような釉調。内面と高台内は露胎。

第118表　沖縄産施釉陶器観察一覧（２）

単位：cm

図版番号	器種	部位	口径 底径 器高	観察事項
図版 49 16	急須	口	9.0 － －	素地：白黄色 釉薬：内面は白化粧土、外面は呉須文をはさんで白化粧。外面に貫入あり。
図版 49 17	急須	口	－ － －	素地：黄色 釉薬：内面と口唇部は露胎、外面は青白色と緑褐色の釉薬。
図版 49 18	急須	底	－ － －	素地：黄灰色 釉薬：内・外面とも白化粧土のち灰色釉。底部外面には灰色釉はない。内・外面に貫入あり。
図版 49 19	急須	胴	－ － －	素地：黄色 釉薬：暗緑色釉をはさんで白化粧。内・外面に貫入あり。注口内面の穴は２個。
図版 49 20	急須	蓋	－ － －	素地：黄色 釉薬：内面は白化粧土、外面は白化粧。外面に貫入あり。つまみの直径は1.4cm。
図版 49 21	急須	蓋	7.2 － －	素地：黄灰色 釉薬：かえり部～内面は露胎。外面には暗緑色の象嵌。
図版 49 22	鍋	口	－ － －	素地：灰白色 釉薬：内面緑褐色釉、外面は緑褐色釉。受け部は露胎。
図版 49 23	鍋	蓋	11.6 5.0 3.8	素地：黄色 釉薬：内面は白化粧土、外面は黒褐色釉。口唇部とつまみ部平坦面にアルミナ。口縁部外面は露胎。
図版 49 24	花生け	底	－ － －	素地：黄色～橙色 釉薬：内面は黒褐色釉、外面は黒褐色釉のち線刻部分に緑・青白色の釉薬。
図版 49 25	煙管	火皿	－ － －	素地：灰白色 釉薬：内面に明黄褐色釉。外面に明黄褐色と緑釉。

第８節　沖縄産無釉陶器

「荒焼（アラヤチ）」とも呼ばれる、高温で焼かれた陶器である。基本的に釉薬はかけられないが、泥釉などがかけられることもある。

今回は38点の写真を掲載した。器種には碗、杯、皿、鉢、擂鉢、壺、瓶、甕である。るつぼと思われる薄手の容器が２点あるが、特に溶着物はなく決め手にかける。個々の遺物については観察表に記載した。

第119表　沖縄産無釉陶器観察一覧（１）

単位：cm

図版番号	器種	部位	口径 底径 器高	観　察　事　項
図版 50 1	碗	口	－ － －	素地：明赤褐色。白色粒を少し含む。 色調：内面は明赤褐色、外面は暗褐色。底部外面はヘラ削り。ロクロの回転方向は上から見て左回り。直口縁。
図版 50 2	碗	口	－ － －	素地：赤灰色。 色調：内面は赤灰色、外面は暗褐色。直口縁。
図版 50 3	碗	口	11.8 － －	素地：明赤褐色。 色調：内面は明赤褐色、外面は暗褐色。外面に線刻文様。
図版 50 4	碗	底	－ 6.4 －	素地：赤褐色。 色調：内面は赤褐色、外面は黒褐色。底部外面は削り。蛇の目高台。
図版 50 5	碗	底	－ 6.4 －	素地：赤灰色。 色調：暗黄褐色、外面は黒褐色。
図版 50 6	皿	口	－ － －	素地：赤灰色。 色調：内面は青灰色、外面は灰褐色。直口縁。
図版 50 7	皿	底	－ 6.0 －	素地：赤褐色、白色粒をやや多く含み、黒色粒・赤褐色粒を少し含む。 色調：内面は赤褐色、外面は橙色。
図版 50 8	擂鉢	口	－ － －	素地：暗赤褐色。 色調：内・外面とも暗赤褐色。擂り目は１cm あたり９本。擂り目上端は撫で消し。口縁部断面形は逆Ｌ字。
図版 50 9	擂鉢	口	－ － －	素地：明赤褐色。 色調：内面は明赤褐色、外面は暗褐色。擂り目は１cm あたり６本で、上端部は撫で消される。
図版 50 10	擂鉢	口	－ － －	素地：明赤褐色。 色調：内・外面とも黒褐色。擂り目は１cm あたり５本。上端部は撫で消される。
図版 50 11	擂鉢	底	－ 9.4 －	素地：明赤褐色。 色調：内・外面とも明赤褐色。擂り目を施した工具の幅は2.5cm で、擂り目は 10 本。擂り目は上から見て右回りに施される。
図版 50 12	鉢	口	－ － －	素地：明赤褐色。 色調：内面は暗褐色。外面は明赤褐色。外面に波状文。口縁部断面形は逆Ｌ字形。
図版 50 13	鉢	口	－ － －	素地：明赤褐色。 色調：内面は黒褐色、外面は灰赤色。外面には波状文と、直径1.1cm の貼り付け珠文。口縁部断面形は逆三角形。
図版 50 14	鉢	口	20.0 － －	素地：明赤褐色。 色調:内･外面とも明赤褐色。外面に貼り付け文。口縁部断面形は逆Ｌ字形。口縁部内面に煤のようなものが付着。
図版 50 15	鉢	口	34.0 － －	素地：赤褐色。 釉薬：内面は無釉、外面は褐色の自然釉。口縁部断面形は逆Ｌ字。
図版 50 16	鉢	口	－ － －	素地：明赤褐色。 色調：内面は明赤褐色、外面は赤褐色。外面は波状文。口縁部断面形は逆三角形。
図版 50 17	鉢	口	34.0 － －	素地：赤褐色。 釉薬：内面は露胎、外面は黒褐色釉と波状文。
図版 50 18	鉢	底	－ 37.2 －	素地：明赤褐色。 色調：内・外面とも明赤褐色。

第120表　沖縄産無釉陶器観察一覧（２）

単位：cm

図版番号	器種	部位	口径 底径 器高	観察事項
図版 51 19	火炉	口	― ― ―	素地：赤褐色で、白色粒を少し含む。 色調：内・外面とも褐灰色。
図版 51 20	火炉	口	1.8 ― ―	素地：赤褐色。 色調：内面は赤褐色で、外面は褐色。
図版 51 21	火炉	口	― ― ―	素地：赤褐色。 色調：内面は赤褐色、外面は褐色。
図版 51 22	火炉	口	― ― ―	素地：明赤褐色。 色調：内面は明赤褐色、外面は橙色。
図版 51 23	火炉	底	― 12.4 ―	素地：赤褐色。 色調：内・外面とも赤褐色。逆三角形の足が３か所につく。
図版 51 24	瓶	口	14.0 ― ―	素地：赤褐色。 色調：内・外面とも暗褐色。口縁部断面形は逆Ｌ字形。
図版 51 25	瓶	口	― ― ―	素地：赤褐色。 色調：内・外面とも暗褐色。直口縁。
図版 51 26	瓶	口	8.4 ― ―	素地：明赤褐色で、白色粒を少し含む。 色調：内・外面とも明赤褐色。
図版 51 27	瓶	底	― 6.4 ―	素地：赤褐色で、白色粒を少し含む。 色調：内面は暗褐色、外面は明赤褐色～赤褐色。底部内・外面は削り。轆轤は上から見て左回り。
図版 51 28	壺	口	8.4 ― ―	素地：赤褐色。 色調：内面とも暗赤褐色で、外面は赤褐色。口縁部断面形は逆Ｌ字形。
図版 51 29	壺	口	16.0 ― ―	素地：赤褐色で、白色粒を少し含む。 色調：内・外面とも灰赤色。玉縁口縁。
図版 51 30	壺	底	― ― ―	素地：赤褐色で、白色粒を少し含む。 色調：内面は明赤褐色、外面は黄褐色。
図版 51 31	壺	底	― ― ―	素地：赤褐色。 色調：内面は褐灰色、外面は暗黄褐色。内・外面とも削り。
図版 51 32	甕	口	― ― ―	素地：明赤褐色。 色調：内・外面とも明赤褐色。玉縁口縁。
図版 51 33	甕	蓋	― ― ―	素地：明赤褐色。 色調：明赤褐色地に暗褐色泥釉。
図版 51 34	壺 もしくは 瓶	耳	― ― ―	素地：暗赤褐色。 色調：内・外面とも暗赤褐色。
図版 51 35	壺 もしくは 瓶	耳	― ― ―	素地：暗赤褐色。 色調：内・外面とも暗赤褐色。
図版 51 36	るつぼ？	口	― ― ―	素地：灰白色。 色調：内面は青灰色、外面は灰白色。直口縁。溶着物なし。
図版 51 37	るつぼ？	底	― ― ―	素地：灰白色。 色調：内・外面とも灰白色。底部は１cm ほどでっぱり、切断面が残る。溶着物なし。
図版 51 38	杯	口～底	3.2 1.5 1.6	素地：褐色。 色調：内・外面とも褐色。型と手捏ねによる整形。平面形はおむすび型で、外面には３つの人面らしきものがある。

第９節　瓦質土器（図版52－１～６）

灰色～黄褐色を呈した軟質焼成のものを瓦質土器とした。図版に示したものについて、個別に述べる。

１は火炉の口縁部。平面形は円形で、内面の突起は三方向に取り付くものと思われる。色調は褐灰色。

２はいわゆる植木鉢の口縁部である。外面には、口縁部から２条の波状突帯文、その下に牡丹唐草文が施されている。色調は浅黄色。

３は外面にはかなり崩れた花菱文がスタンプされる浅鉢の底部である。あまり類例は見られないが、いわゆる奈良火鉢の範疇からは外れている。色調は浅黄色。

４は菊花文がスタンプされた浅鉢の口縁部である。菊花文からは奈良火鉢の範疇に近いと思われる。平面形は直線的であることから方形と思われる。色調は灰色であり、本土産と思われる。

５は擂鉢である。口縁部が残存しており、注口部にあたる。口縁部から２．５ｃｍ下がったところで、強めの稜が見られる。色調は灰色で、本土産と思われるが、産地までは確定できない。

６は鍋等の把手と思われる。色調は灰色。

第10節　陶質土器（図版53－１～16）

橙色を呈した軟質焼成のものを陶質土器とした。器種は、鉢、急須、火炉、皿、碗、蓋などが出土している。以下、器種ごとに述べていく。

１は碗の口縁部である。口縁端面は平坦である。ヨコナデが明瞭である。

２・３は皿である。３は底部で高台は低い。

４～７は火炉である。４・５は平面が円形をなすものである。８は短い脚が付いた平面が方形をなす底部である。６は底部である。

７は鉢の口縁部で、波状文が施される。

９・10はいわゆるフライパン状鍋である。９は体部で、外面には煤が付着する。10は把手で、色調が外面黄橙、断面黒色で、他のものと違い、沖縄産ではない可能性もある。

11・12は鍋である。11は体部から横上方に開く口縁部、12は耳である。

13・14・15は急須である。13は注口と体部、14は上げ底状の底部、15は蓋である。

16は煙管の火皿である。

第11節　カムィヤキ（図版54－４）

壷の頸部に近い胴部破片が１点出土した。外面は波状と平行の沈線文からなる文様を施し、内面は轆轤引きの篦削り痕が顕著にみられる。器色は灰色。胎土は白色粒子が混入し、生焼けのサンドイッチ状を成す。

第12節　土器（図版54－1～３）

土器は口縁部、底部資料計３点を報告する。何れも焼成は堅地で宮古島のパナリ焼きに近い。今回報告を割愛する胴部に関してもそのほとんどの資料に関しては焼成が堅地であった。

第121表　土器観察一覧

図版番号	名称・仮称	部位	口径 器高 底径 (cm)	胎土・混和材	器面調整痕	焼成具合	色　調 ①器外面 ②器内面	備　考　等
図版54 2	壺	口		砂質／細砂粒･赤色土粒、白色粒子を混和する。	丁寧な成形。磨きに似たナデ成形を内外面ともに施す。	良好で堅緻	①黒褐色 ②にぶい橙色	口頸部の屈曲は緩やかなカーブを描く。口唇部は丸味を帯び、ナデ肩となる。
図版54 1	器種不明	底		砂質／大粒の石灰石粒･灰色砂粒を大量に混和する。	外面器表において特に認められない。内面器表は剥落し、調整痕は認められず。	比較的良好	①明赤褐色 ②明赤褐色	底部から胴部からかけて緩やかに移行する。
図版54 3	壺	口		泥質／透明鉱物粒（石英か）、赤色土粒、白色微粒子を混和する。器面には小孔が認められる。	外面器表は剥落し、調整痕は認められず。内面は丁寧なナデ仕上げ。	良好で堅緻	①橙色 ②橙色	口頸部の屈曲は緩やかなカーブを描く。やや肩の張るタイプ。

第13節　円盤状製品

撹乱層より出土の円盤状製品は７点の写真を掲載した。素材別にみると、中国産の青磁、染付、褐釉陶器、本土産陶器、沖縄産無釉陶器に分かれる。

製作の際の打割調整は、胴部の資料については内面からの打割ものと内外面から打面されているものがある。底部の資料については内面から打割されているものである。

個々の詳細については観察表に記す。

第122表　円盤状製品観察一覧

単位：mm、g

図版番号	素　材	法　量				観　察　事　項
		長径	短径	厚さ	重さ	
図版54－１	中国産青磁	25.6	22.1	5.3	4.7	内外面から打割調整される。若干楕円形。胴部を使用。
図版54－２	中国産染付	11.3	11.0	3.0	0.6	外面からの打割調整。胴部を使用。
図版54－３	中国産褐釉	37.3	36.0	7.7	15.5	内外面から打割調整される。胴部を使用。
図版54－４	中国産青磁	76.7	75.7	20.3	157.	外面から雑に打割調整。底部を使用。
図版54－５	中国産褐釉	59.7	53.9	9.8	40.7	内外面から打割調整されるが、外面からが多い。胴部を使用。
図版54－６	本土産陶器	53.0	52.0	13.5	38.0	内外面から打割調整されるが、外面からが多い。底部を使用。
図版54－７	沖縄産無釉	63.2	61.3	11.6	48.9	外面から打割調整される。胴部を使用。

第14節　瓦

瓦はほとんどが小片で、残存度の高い資料並びに製作痕が明瞭に残る資料を優先に報告する。瓦当の文様が窺える資料は軒平瓦で２点、軒丸瓦で４点確認されており、何れも明朝系瓦である。製作痕に関しては綾杉状や斜位状の敲き痕並びに布目、糸引き痕が窺える。これらは高麗系瓦、大和系瓦に顕著に見られる。これらの他には印刻が見られる資料が１点得られている。

第115図　瓦（高麗系１～３・大和系４～６・明朝系７～13）

第123表　瓦観察一覧

挿図番号 図版番号	器　種		文　様	製　作　痕	色　調
第115図 図版１	高麗系	平	－	凸面に綾杉状の敲き痕が一部重なりながら見られる。凹面には糸引き痕が斜位に見られる。	凸面は灰色、凹面は灰白色となる。
第115図 図版２		平	－	凸面に綾杉状の敲き痕が一部重なりながら見られる。凹面には糸引き痕が斜位に見られる。	灰色。
第115図 図版３		平	－	凸面に綾杉状の敲き痕が一部重なりながら見られる。やや敲き目が擦れた状況となる。凹面には糸引き痕が斜位に、布目痕と布が縒れた皺が明瞭に残る。	青灰色。
第115図 図版４	大和系	丸	－	凸面に斜位の敲き痕が見られる。凹面は凹凸が見られ、横位の溝が２条見られる。	黄橙色。
第115図 図版５		丸	－	凸面は摩耗しており製作痕は確認できず。凹面は縦２条、横１条の溝が見られる。	明黄褐色。
第115図 図版６		平	－	斜位の糸引き痕が凸面に見られる。糸引き痕は約５ ㎜ ほど間隔を有して入れている。	灰オリーブ色。
第115図 図版７	明朝系	軒丸	瓦当の文様は摩耗が激しく、文様の全体構成は不明瞭。花弁を僅かに窺うことができる。	裏面には凹凸が見られる。	浅黄色。
第115図 図版８		軒丸	牡丹状で花心は五角形状で内部に格子を刻む。全体的に雑な表現となる。珠文の間隔は広い。	裏面には凹凸が見られ、規則性の見られない成形痕が明瞭に残る。	黄橙色。
第115図 図版９		軒丸	花弁は簡略化され、全体に回るように配置される。	裏面には方向不定の撫で成形が入る。瓦当の端部は端正なつくりとなる。	橙色。
第115図 図版10		軒丸	９と同範か。花心は凸形となる。全体的な文様の表現は雑。	裏面には布目と撫で成形が見られる。	黄橙色。
第115図 図版11		軒平	瓦当の文様は摩耗が激しく、文様の全体構成は不明瞭。両側の葉は三角形状の輪郭に葉脈を描く。	表裏面並びに側面には漆喰が付着する。裏面には凹凸が見られ、規則性の見られない成形痕が明瞭に残る。	黄橙色。
第115図 図版12		軒平	文様中央部分には格子を刻む楕円形状の花心とその下に房状の文様が見られる。葉は三角形状の輪郭に葉脈を描く。	表裏面並びに側面には漆喰が付着する。裏面には横位の撫で成形が見られるが、下部は方向不定の撫でがなされている。	橙色。
第115図 図版13		平	丸に大の字が書かれた印刻が見られる。	－	灰色。

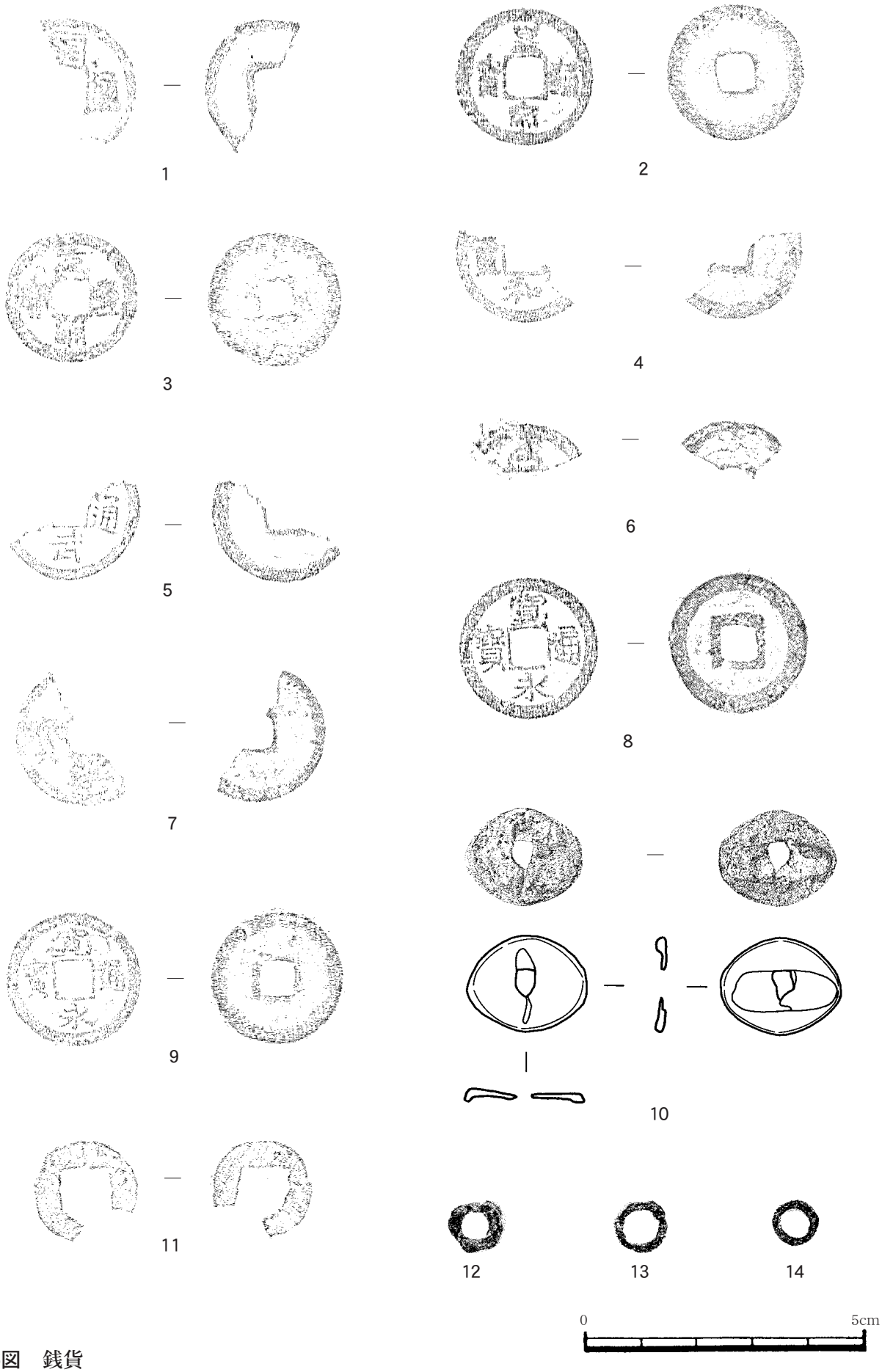
第15節　銭貨

銭貨は総計29点出土している。内訳は近世以前の有文銭が14点、無文銭が６点、近・現代銭が７点、不明が２点であった。最も古いものは開元通宝（初鋳845年）で新しい物では現行貨幣が出土した。出土した資料のほとんとが細片で判読できたものは開元通宝、政和通宝、元豊通宝、皇宋通宝、洪武通宝、永楽通宝、寛永通宝と７種類の有文銭が確認された。完形では有文銭が４点、無文銭では３点確認されている。

第124表　銭貨観察一覧

単位：mm、g

挿図番号 図版番号	国・王朝	銭　名	判読状況		残存状況	分類	初鋳年代	法　量			
			表	背				銭径	内径	銭厚	重量
第116図１ 図版58 1	中国・唐	開元通寶	開□通□	無	破	－	845	－	－	1,2	1,8
第116図２ 図版58 2	中国・北宋	皇宋通寶	皇宋通寶	無	完	－	1038	24.8	6,7	1,2	5,5
第116図３ 図版58 3	中国	元豊通寶	元豊通寶	－	完	－	北宋 1078	23,7	5,7	1,3	3,6
第116図４ 図版58 4	中国・北宋	政和通寶	□和通□	無	破	－	1111	－	－	1,4	1,9
第116図５ 図版58 5	中国	洪武通寶	□武通□	不明	破	－	明（1368）	－	－	1,6	2,0
第116図５ 図版58 6	不明	元＿通寶	元□□□	不明	破	－	近世前期？ （模鋳銭）	－	－	1,3	0,9
第116図７ 図版58 7	中国・明	永楽通寶	□楽通寶	無	破	－	1408	－	－	1,2	1,7
第116図８ 図版58 8	日本	寛永通寶	寛永通寶	無	完	Ⅰ期	1636 ～ 1781	25,0	6,2	1,1	3,2
第116図９ 図版58 9	日本	寛永通寶	寛永通寶	無	完	Ⅲ期	1697 ～ 1747 1767 ～ 1781	23,5	6,1	1,0	2,6
第116図10 図版58 10	日本	雁首銭	－	－	完	－	江戸	21,1 17,2	4,9	1,4	2,2
第116図11 図版58 11	日本	無文銭	－	－	破	－	江戸	18,0	8,4	0,6	0,6
第116図12 図版58 12	日本	輪銭	－	－	完	－	江戸	9,6	4,7	0,5	0,2
第116図13 図版58 13	日本	輪銭	－	－	完	－	江戸	8.8	6.3	0,6	0,0
第116図14 図版58 14	日本	輪銭	－	－	完	－	江戸	8,2	5,0	0,6	0,0



第116図　銭貨

第16節　金属製品（図版57、58－16～22）

銅板（図版 57 － 5 、6 ）

６つの突起状のものが見られる銅板。残存量0.５g、厚さ１㎜。

飾り金具の一部か。鋲が１つ附属する。残存量5.５g、厚さ１㎜、鋲の長さ９㎜。

棒状製品（図版 57 － 1 、2 ）

断面形が円状を成す直径７㎜の銅製品。鍍金がなされ、両端部には一回り径の小さい棒状の突起が見られる。それぞれ径は異なり、径の大きい方は屈曲する。残存量11.９g。

一定間隔で突起が見られ、断面形が長方形状となる銅製品。残存量0.８g、厚さ１㎜。

ヘアピン状製品（図版 57 － 9 ）

U字状のヘアピンと考えられる。断面形は縦１㎜、横４㎜の長方形状となる。先端へいくほど漸次細くなっていくが、先端部は欠損しており不明。残存量2.５g。

座金具（図版 57 － 7 ）

直径１㎝の真円形で楕円形状の孔を中央に穿つ。残存量0.３g、孔径６㎜。

鋲（図版 57 － 8 ）

芯並びに頭の断面が円形となる鋲。残存量0.08g、全長11㎜、芯の厚さ２㎜。頭の直径25㎜。

覆輪（図版 57 － 3 ）

断面形がU字状となる銅製品。武具の覆輪の可能性が挙げられるがあくまで推測の域を出ない。残存量5.５g、厚さ15㎜。

簪（図版 57 －11、12）

青銅製。竿部のみ現存。断面形は六角形で稜は明瞭に見られる。先端部の六角形錐は陵が不明瞭となる。先端部から２㎝のあたりで屈曲する。残存量8.５g、長さ11.8㎝。

煙管（図版 57 －13～15）

青銅製の吸口。一部欠損しているが、全形を窺うことができるほど残存状況は良好。羅宇接続部にいくほど幅が広くなる。断面形は真円形となる。動量21ｇ全長33㎜。

青銅製の吸口。ラッパ状に羅宇接続部にいくほど幅が広くなる。筒状にした際の合わせ目を明瞭に窺うことができる。重量22ｇ全長3.9㎝。

青銅製の雁首。火皿中身を刳りぬいた半円形状。錆化が進みあわせて一部欠損する。重量4.９g厚さ２㎜、火皿の口径12㎝。

指輪（図版 57 －10）

外径1.7㎝、内径1.4㎝の指輪。幅は４㎜で断面形は蒲鉾状となる。残存量17ｇ

鉄釘（図版 58 －16～22）

出土している鉄釘の大半が角釘である。錆化か進んでいるため不明瞭ではあるが、断面形は正方形状のものと長方形状のものが見られる。長短並びに芯部分の幅が様々なものが出土しており分類するのは困難である。頭の形状に関してはＬ字状のものと、Ｔ字状のものが見られる。Ｌ字状のもの（図版58－18、19、22）は頭の厚みが薄くなるもの（図版58－19）と芯の幅で屈曲するもの（図版58－18、22）が見られる。Ｔ字状のもの（図版58－6、17、21）は明瞭にＴ字状となるのではなく、突起部の反対側が僅かに外に反る形状を呈する。

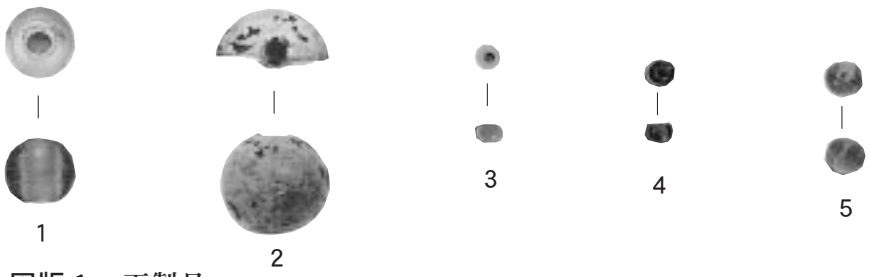
第17節　玉製品

玉製品は５点出土した。形態から分類すると、丸玉が完形品１点、欠損品１点、小玉は完形品２点、欠損品１点で、材質はガラス製４点、石製１点となっている。

第125表　玉製品観察一覧

法量：㎜、g

図版番号	高さ	直径	孔径	残存重量	色調	形態	材質	観察事項
図版１ 1	10	11.4	4	2.1	半透明の黄色	丸玉	ガラス	内部に気泡が目立つ。孔の縁が一部欠けている。螺旋状の筋が明瞭に観察できるため、巻き付け技法により作られたと思われる。
図版１ 2	16.5	8.3	3	3.5	焦茶色	丸玉	石　製	半分が欠損している。色調は焦茶だと思われるが、剥落して素地が露出し焦茶と灰色のまだらになっている。孔は貫通しておらず、表面に螺旋状の筋が観察できる。
図版１ 3	1.2	2.2	1	計測できず	青色	小玉	ガラス	なめらかで光沢のある表面。
図版１ 4	1.3	2.1	0.5	計測できず	群青色	小玉	ガラス	左右で若干高さが異なる。表面はなめらかだが、内部に気泡が観察できる。
図版１ 5	2.9	3.2	1	計測できず	水色	小玉	ガラス	側面が一部欠損。孔の位置が中心から若干ずれている。内部に気泡が観察できる。



図版１　玉製品

第18節　石器・石製品・石造製品

石製品は殆どが破片で器種または全形を推測できないものが多いが、推測できるもので硯１点、砥石２点、石球２点が確認された。

その中で特筆すべきは珊瑚石製の石製品である。破片であるため用途が不明であるが、材料に珊瑚石を使用している事から宗教的な目的に使用されたものと思われる。因みに首里城京の内地区の調査や新石垣空港予定地内における遺跡分布調査で珊瑚石製の香炉が確認されている。

石造製品は破片のものが多く全形、用途を把握することはできないが、全ての表面に装飾もしくは加工痕が確認される。また石橋の一部と思われる資料が１点確認される。

第126表　石器・石製品・石造製品観察一覧

単位：cm、g

図版番号	器種	石　質	法　量				備　　考
			全長	幅	厚さ	重さ	
図版 59 1	硯	赤色頁岩	4.38	20.50	0.77	7.1	表面に細かい傷が幾つか見られる。器形不明。
図版 59 2	砥石	頁岩（赤色頁岩に近い）	4.20	1.70	0.80	9.5	表裏両面、側面に研磨が施されているので小型の砥石と思われる。
図版 59 3	砥石	頁岩	3.92	0.87	0.61	5.0	表面、側面に比べ裏面は研磨が粗い。
図版 59 4	石器	粘板岩	4.28	2.20	0.32	5.7	表裏両面、両側面に研磨が施されている。小型の砥石と思われる。
図版 59 5	石器	頁岩	2.10	2.87	0.70	7.0	用途不明。薄手。
図版 59 6	石器	砂岩	6.21	6.48	－	218.6	形態は楕円形で比較的細かく成形されている。
図版 59 7	石器	砂岩	4.80	5.14	4.03	112.6	用途不明。表面は丁寧に成形されている。
図版 59 8	石球	砂岩	5.12	5.10	3.91	113.3	球状を意識した形態、雑に成形されている為所々に敲打痕が見られる。
図版 59 9	石球	砂岩	4.94	5.59	4.70	142.4	球状。雑に成形されている。
図版 59 10	石製品	珊瑚	14.1	9.57	7.42	881.0	用途不明。ノミの痕が見られる。材料に珊瑚を使用している事から香炉の可能性も考えられる。
図版 60 11	石造製品	砂岩	6.43	7.05	3.04	219.8	形態不明。何らかの石彫製品と思われる。
図版 60 12	石造製品	砂岩	8.20	3.68	5.78	171.1	形態、用途共に不明。表面に装飾の加工痕が見られる。
図版 60 13	石造製品	砂岩	5.34	5.85	3.87	189.4	形態、用途共に不明。表面に装飾の加工痕、裏面にノミの痕がそれぞれ見られる。
図版 60 14	石造製品	青石（輝緑岩）	8.11	7.37	4.57	529.5	形態、用途共に不明。表面が緩やかな弧を描いている。
図版 60 15	欄干飾り？	砂岩	25.00	22.50	8.70	6600.0	平面形が如意頭形で側面に漆喰が付着している。裏面は加工されていない。

第19節　貝製品

撹乱層より出土した貝製品はヤコウガイ製杓子状製品１点、敲打などの加工痕は認められるが製作途上と思われるもの、あるいは製品の製作に伴い排出される廃材と思われるヤコウガイが５点、イモガイ製玉、イモガイ製品が各１点、ボタン状製品の計９点５種である。

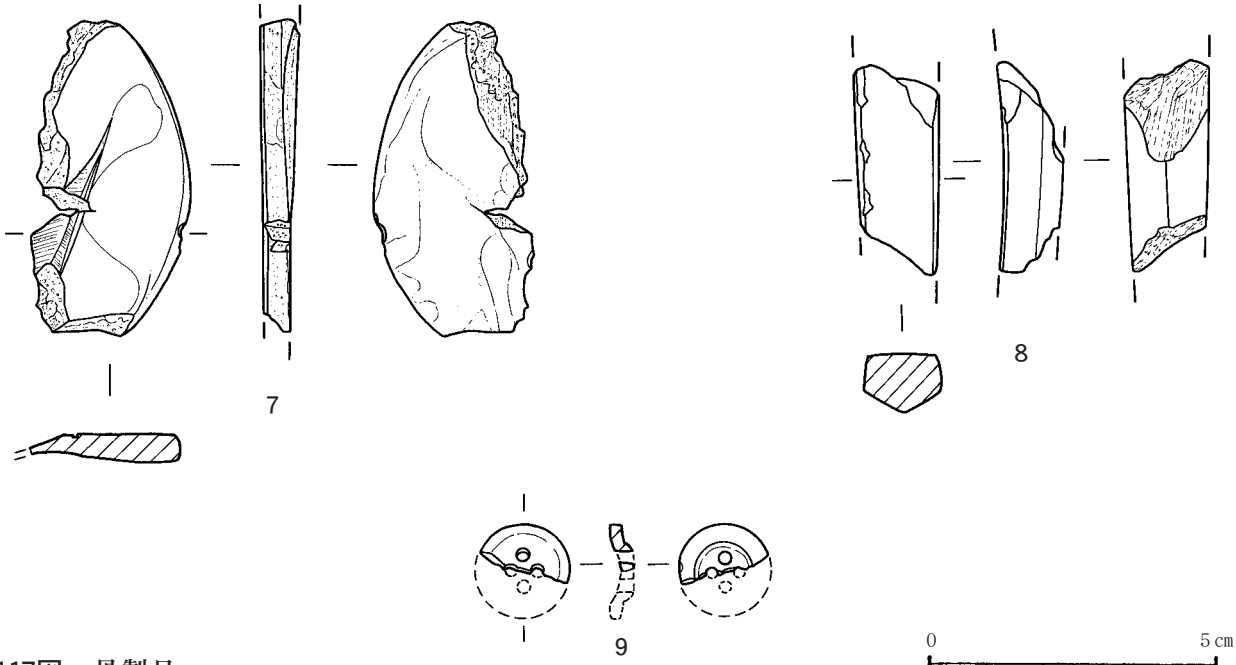
第127表　貝製品観察一覧

単位：㎝、ｇ（　）残存長、重さ

図版番号	種　類	縦長 横長 厚さ 重さ	観　察　事　項	出土地点
図版 61 1	ヤコウガイ製杓子状製品	(5.0) 2.82 0.46 (12.2)	柄部分と思われる。側面を敲打整形により方形に仕上げているが、研磨は見られず、未製品の可能性が高い。身部の形状は破損ため不明。	Ⅱ地区北側
図版 61 2	加工痕のあるヤコウガイ	(8.23) (4.47) 2.6 78.1	ヤコウ貝製杓子状製品の製作に伴い出る廃材と思われる。体層の一部を残し、殻頂部から体層まで割り取られている。体層部分に敲打により約１ｃｍ程の孔を穿がっている。	案内板東区シー15ﾄﾚﾝﾁ③
図版 61 3	加工痕のあるヤコウガイ	(3.65) (3.21) 0.63 7.7	体層部の結節部を敲打により取り除いた破片で図版61－２と同じ性質の物と思われる。	南側セー15④Ｂ間畦 SD01
図版 61 4	イモガイ製品	2.08 1.25 1.40 2.10	体層部に敲打による孔を穿ち、体層部内を空洞に仕上げている。	Ⅱ地区南側
図版 61 5	イモガイ製品（玉）	1.46 1.57 0.60 1.30	イモガイの体層上部から螺塔を利用、殻頂部に穿孔し孔の周辺を研磨し仕上ている。	南側セー15B
図版 61 6	ボタン状製品	(1.11) (1.76) 0.12 0.4	平面形が円形状を成し断面形は扁平な隅丸方形を呈するものである。表面に縁部より径が小さい円状の刻線を施し更に中央に４個の円形の孔を穿っている。近現代の遺物である可能性が高い	Ⅰ地区スー14⑥区

第20節　骨製品

骨製品は棒状製品が１点、豚の下顎骨を扁平状に研磨加工した製品（用途不明製品）が１点、ボタン状製品が１点の計３種３点が出土している。いずれも小破片で全形を窺がえるものは得られなかった。



第117図　骨製品

第128表　骨製品観察一覧

単位：㎝、ｇ（　）残存長、重さ

挿図番号 図版番号	種　　類	縦長 横長 厚さ 重さ	観　察　事　項
第 117 図 8 図版 61 7	棒状製品	(3) 1.36 1.02 4.7	表面は丁寧な研磨が施され、断面形が五角形の棒状の製品である。破片であるため全体形は不明であるが棒状の先に箆もしくはブラシなどが付く製品の柄部の可能性がある。
第 117 図 7 図版 61 8	用途不明 製品	(5.4) (2.6) 0.4 (6.5)	ブタの右下顎骨を扁平に研磨加工したものである。加工は下顎骨の外面と縁部に限られ内面には及んでいない。製品の用途は不明。研磨面の所々に刃物痕を残している。
第 117 図 9 図版 61 9	ボタン状 製品	(0.8) (1.57) 0.2 (0.4)	平面形が円形状を成し断面形は皿様な窪みを持つ、外面の凸面は段状を成す．縁内に辺円よりやや小さい円の刻線を施し更に中央に４個の円形の孔を穿っている。近現代の遺物である可能性が高い。

Ⅷ章　総　括

平成10年度から12年度までの３ヵ年実施した綾門大道発掘調査の調査成果に関しては前章までに詳述した。本章では今一度、これらの成果を整理するとともに、いくつかの問題点を挙げ、まとめにかえていきたい。

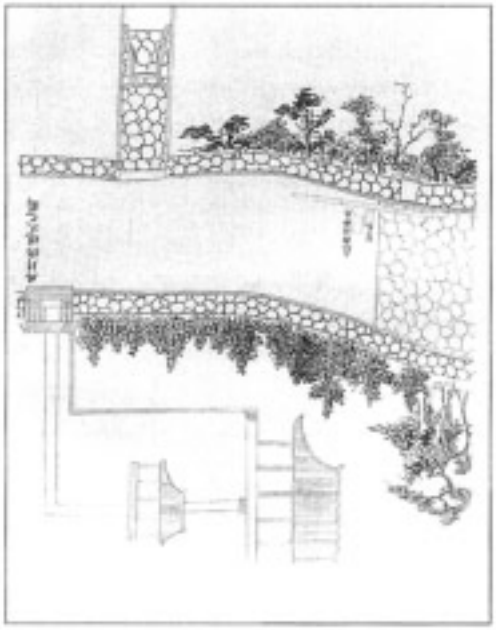
「序」でも触れたが今回の調査は守礼門から首里城公園管理センターまでの、かつて「綾門大道」と呼称された区域の東半分が発掘調査対象区域である。また過去に調査区の北側において同センター並びに那覇市教育委員会による天界寺跡の発掘調査が実施されており、この周辺におけるかつての状況が広範囲にわたって確認されつつある。歴史的経緯から見ると、14世紀前半頃には集落がこの周辺に広がり（那覇市教育委員会2000）、15世紀以降において天界寺や龍潭など周辺の景観整備が成されるとともにかつての集落は廃絶あるいは移動していったと見られる。15世紀後半頃には現在見られる規模の綾門大道が完成したと見られ、その後には大、小規模な道の修復が行われたと考えられる。また綾門大道は単に首里の都市整備に係る公道としての役割だけではなくⅡ章で触れたように中国からの冊封使が那覇から首里城への登城ルートとしての役割も担われていた。このような性格を有する綾門大道は琉球処分後はその役割を終えたが道そのものとしては現在も首里城への観光道として利用に供されている。今回の調査においては近世以前における綾門大道の様相についていくつか明確になった点を以下に提示していきたい。

１）綾門大道以前

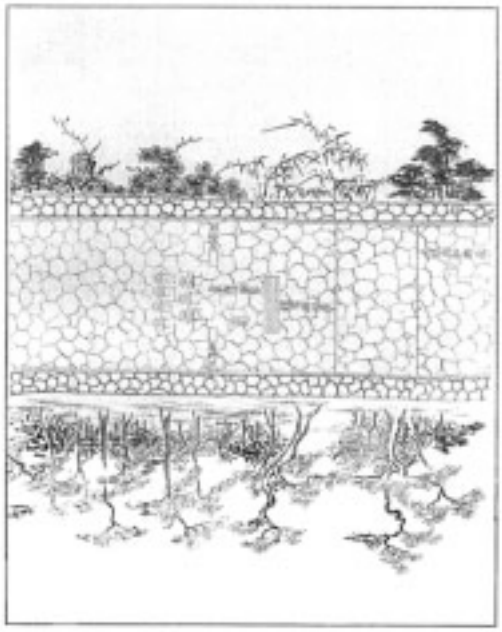
まず綾門大道が成立する以前の周辺状況であるが、天界寺創建以前にその場所に占地していた集落の北端に相当する。平成11年度調査区内のⅡ，Ⅲ区で確認された柱穴は当該調査区内の地山にあたる赤土層に掘り込まれており、とりわけⅡ地区ではグスク土器ならびに銭貨が大量に一つの柱穴内から出土している。銭貨は洪武通宝、開元通宝、元符通宝が出土していることから、14世紀後半～15世紀代の埋納遺構かと考えられる。赤土層に柱穴が掘り込まれている状況は天界寺跡の発掘調査においても見られ、おそらく周辺の諸施設が造営される以前にあった集落の北端に配された、掘立柱建物の一部であると思われる。第119図にⅢ地区の状況とこれまで確認された柱穴並びにそれと時期を同じくするとされる遺構図をあわせてみた。柱穴は主に西側、つまり平成8, 9年度に沖縄県教育委員会が調査を行った旧天界寺西区（沖縄県立埋蔵文化財センター2002）においてとりわけ顕著である。それら柱穴に混じって円弧状に小溝を廻らす遺構が６基確認されている。報告書においては「天界寺の創建時の遺構か」とし、判然としない部分が多いものの、少なくとも天界寺創建以前には掘立柱建物が複数棟配置されていたと考えられる。調査区の中央部分（那覇市教育委員会1999）においては天界寺の基壇遺構等で破壊を受けているものの、平成11年度調査区内のⅢ地区は柱穴の密集状況を旧天界寺西区と相対的に比較すれば集落の中心部から離れた縁辺部と想定される。

２）綾門大道の変遷

次に綾門大道の造成時期とその後の改変状況について触れていきたい。まず、最も古い時期に相当する綾門大道の遺構として平成11年度に検出されたSA01がある。北側に面を有した土留め状の石積み遺構で、その石の控え側（南側）には第５礫層とされるSA01の基礎部分となる包含層が確認されている。また、そこからは青磁、本土産陶器、高麗系瓦、大和系瓦が出土しており、その時期は15世紀前半とされる。『球陽』では1428年に国門（中山門）を創建しているとあり、時期としては近いので、国門と共に綾門大道も造られたと考えるのにはこれらの資料は示唆的である。このSA01を埋め殺して道を北側に拡張した層が平成11年度調査区内のⅠ区で確認された造成層である。この包含層からは青磁、染付、褐釉陶器、金属製品、銭貨、石製品、沖縄産陶器が出土している。沖縄産陶器は図化されていない小片も多く出土しており、ある程度まとまった場所から出土している。分層によりその状況を明確に確認することは叶わなかったがおそらく近世における小規模な補修の結果として、近世の遺物がまとまって出土しているものと考えられる。基本的にそれら近世の遺物を省くと概ね15世紀後半の遺物が主体を占めることから、この時期に綾門大道の北側において大規模な造成が行われたと言える。この造成層は堅く締められており、層を細分するに至らなかったが一部において版築状に造成されている部分も見られた。造成層にかかってSA03が見られるため現在見られる道の北端はこの時期に設定されたと考えられる。因みにこ



（1）



（2）

（福島　1998）

の造成層の基礎を成すのが第４礫層で大和系瓦１点が出土している。先の造成層の上には非常に多くの土、砂が幾重にも薄く堆積しており、それらから幾度も小規模な補修が行われていたと思われる。そして第３礫層と呼ばれる包含層が広がり、その上部に後で述べる石畳が敷設されている。この礫層は平成10年度調査区の西側のSS01（b）で下面が15世紀後半～16世紀、上面が17世紀後半～18世紀頃に細分することができることから近世の前半頃に大規模な改修が行われていることが示唆される。そして最後にクチャ層が平成11年度調査区内Ⅰ，Ⅱ区のほぼ全域から確認されている。そのクチャ層から出土した遺物にはガラス瓶や鉄塊が多量に含まれていることから、戦後に琉球大学建設に伴う周辺整備の際に持ち込まれた造成層に相当する。やや距離は離れるが、このクチャ層は首里城継世門跡等（沖縄県立埋蔵文化財センター2002）からも確認されていることから広範囲にわたって戦後、敷かれていたことが窺える。このようにまず現在見られる道より南に道の北辺が造られた段階、それを埋めて北側に拡張した段階、そして小規模な補修が何度も行われる段階、最後は戦後の造成段階と大きく４段階に分けることができる。

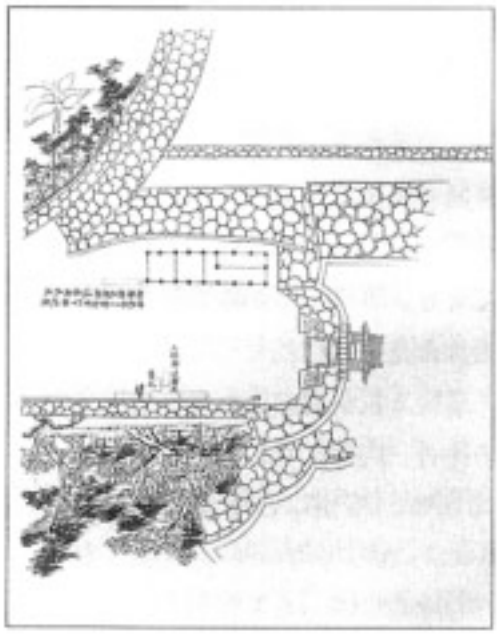
３）出土遺構について

平成11年度調査区内Ⅰ地区で確認されたSS02に関しては調査期間中、その性格に関して不明な点が多く、その遺構の性格付けについては難航した。と言うのは、これまでにおける守礼門の古写真に写る綾門大道に石畳・蹴上げは見られず、聞き取り調査においても砂利敷きであったとの証言を得ていたためである。しかし、『冠船之時御座構之図』所収「冊封御規式之時守礼門并御城御座之図」（第118図）において守礼門から天界寺近くまで石畳を敷いてある状況が確認される（福島1998）。この史料を見る限りにおいては南北方向に段、すなわち蹴上げを２段設けており、SS02に見られる南北方向で西側に面を有する石列は御座構の東側に見られる蹴上げに相当すると思われる。加えて調査後であるが戦前に首里第二尋常高等小学校（現在跡地に那覇市立城西小学校）へ修学していた現首里繁多川在住の屋宜宣正氏によると道の中央部は砂利敷きで両端は石畳が敷かれ、かつての天界寺あたりまで続いていたとの証言を得た。このことからも綾門大道の一部は石畳であったことが解る。

綾門大道の両側を画していた石牆は北側ではSA03として根石部分は比較的良好に残存していた。加えてSA03はあいかた積みで聞き取り調査の証言とも合致した。古写真では昭和の初め頃にこのSA03の上部は撤去されていたことが窺見することができる（図版17）。一方でSA03に向かい合う南側を画していた石牆は南側の石牆想定ラインに合致するSR01に相当すると考えられる。構築時期は15世紀代で守礼門付近の厳密な道幅を確認することができた。ちなみに南側の石牆は切石積みであったとの聞き取り証言が得られた。

綾門大道周辺の、性格不明の遺構もいくつか確認することができた。まずは南側の状況であるが平成10年度調

（3）



（4）

査区内のSX02からは青石の砕片が多く出土していることから守礼門等の礎石並びに礎盤を整形する際に出た石滓を土坑内に廃棄した跡と考えられる。土坑内出土石材の接合を試みたものの接合できたのは僅かであった。

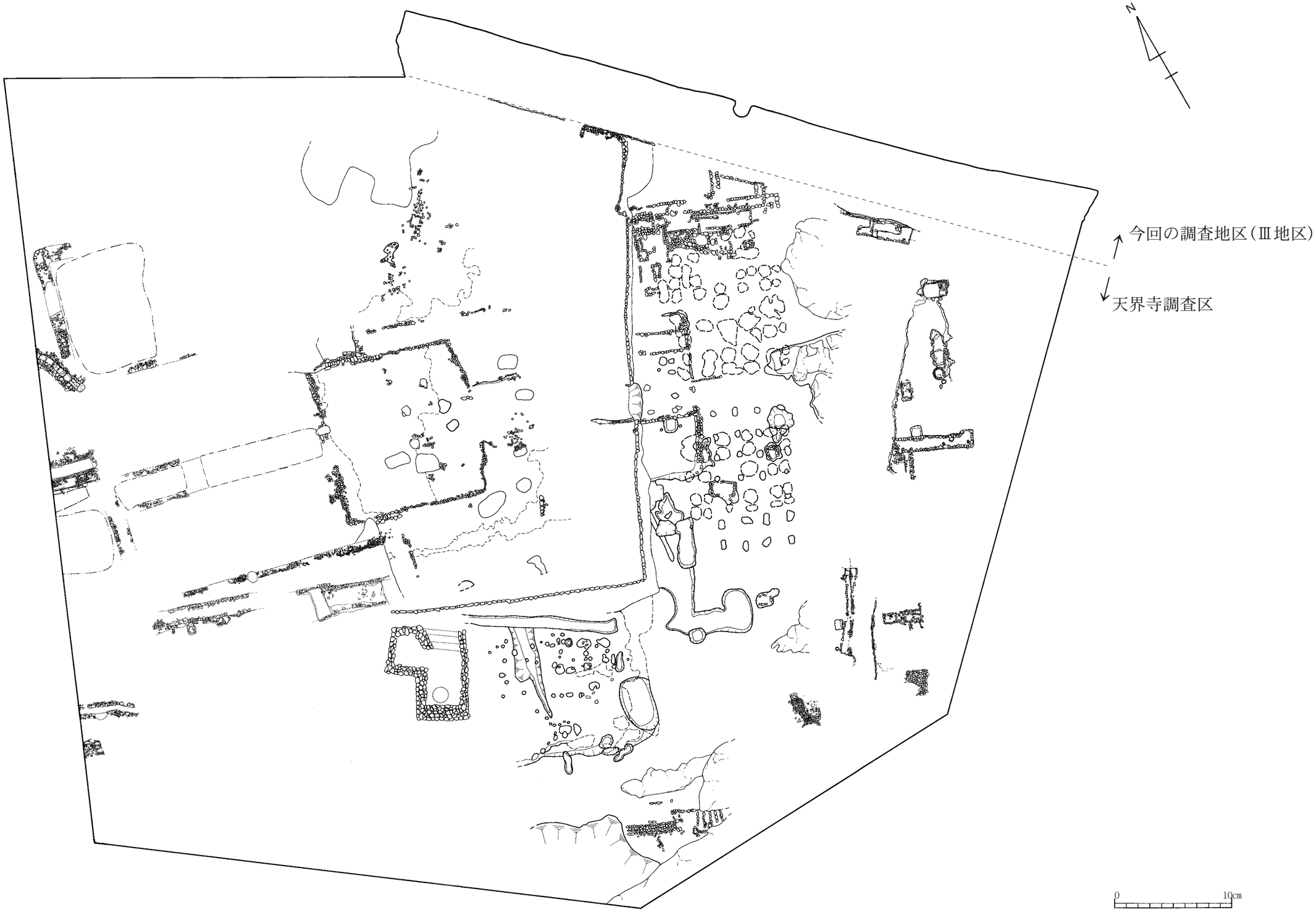
4）石牆について

平成11年度調査区内Ⅲ区の南側には天界寺と綾門大道の間を画する石牆が確認されている。第120図はこれまで沖縄県教育委員会と那覇市教育委員会による発掘調査で確認された天界寺に関係すると考えられる遺構とⅢ地区の状況とをあわせた遺構図である。北東－南西方向に天界寺跡を横切る石積みが那覇市教育委員会による発掘調査で確認されているが、その北端は屈曲しながら先の天界寺と綾門大道の間を画する石牆へと続く。既刊の報告書においてその石積みの年代等については触れていない（那覇市教育委員会2000）が、今回の調査で地山ないしは綾門大道以前の暗褐色土層か直上に根石が据えられていることからその構築年代はおそらく15世紀頃になるものと思われる。天界寺に関係する他の遺構との関係を考慮に入れつつこの石積みの性格は今後、考察を行っていく必要がある。そして過去、当センターが刊行した報告書（沖縄県立埋蔵文化財センター2001）においては天界寺の東側つまり平成11年度調査区内Ⅱ、Ⅲ地区南側は1644～1661年に天界寺が復旧した際に開かれた場所として想定しているが、その際に隣接する綾門大道にも改変が加えられたのかといった問題が出てくる。今回の調査では残念ながらその周辺にあったと思われる遺構並びに造成層が戦後の攪乱によって判然としなかった。但し、天界寺東側において地山である石灰岩が隆起しているのに対応して綾門大道平成11年度調査区のⅠ区、Ⅱ区との間の地山が隆起しているという地質状の共通点は少なくとも見られた。この点も含めて綾門大道と天界寺との関係を今後、検証していく必要がある。ついでに道の北側では、綾門大道の北側を画する石牆、SA03の北に接するSS03についても若干、触れておく。かつてこの場所に御細工所が存在していたが、SS03から出土している染付から時期的にはそれより古くなるので両者の関係性は窺うことはできない。今回の調査では平坦に造成され、石畳が敷かれるという状況が綾門大道の北側直下に見られたことのみを確認するにとどまった。

5）道路舗装について

平成11年度においては「サントー」と呼ばれる当時における道路舗装の実態を解明するための花粉分析、植物珪酸体分析、脂質分析、赤外分光分析を実施した。紙数の都合で詳細な分析結果に関しては割愛させて頂くが、平成11年度調査区Ⅰの各層から採取した土壌の中に粘着材として使用したとするネナシカズラの成分が含まれているかを分析した。結果としてその痕跡を指摘する成果を得ることはできなかった。既に沖縄戦直前の道路整備によって綾門大道の上面は削平されてしまったのか、全く別の舗装方法が存在していたのか、何れかを考えることができる。

第119図　天界寺跡及び守礼門周辺地区下層遺構



第120図　天界寺跡及び守礼門周辺地区上層遺構

６）今後の課題

上記のように綾門大道並びにその周辺の状況をまとめてみたが、具体的な綾門大道の、各所における道幅や「サントー」と呼ばれる舗装の実態、古写真や聞き取り調査においてもその性格を把握することのできないSR02、SR03、SA01、SX01～05、SS01といった石列、石積み遺構、土坑等、綾門大道に関する問題点は未だに山積している。戦前の綾門大道を知る古老からの更なる聞き取りや文献資料からのアプローチも今後、必要となってくるのは言を待たない。

【参考文献】

「天界寺跡」『那覇市文化財調査報告書』第42集　那覇市教育委員会　1999
「天界寺跡」『那覇市文化財調査報告書』第43集　那覇市教育委員会　2000
「天界寺跡（Ⅰ）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第２集　沖縄県立埋蔵文化財センター　2001
「天界寺跡（Ⅱ）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第８集　沖縄県立埋蔵文化財センター　2002
「首里城跡　継世門周辺地区発掘調査報告書」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第９集　沖縄県立埋蔵文化財センター　2002
福島清「冊封儀式に見る建築像（上）」『首里城研究』№.３　首里城研究会　1998
真栄平房敬「中山門」『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社　1983

巻首、巻末写真資料引用文献

『青い目が見た大琉球』ニライ社　1987
『写真集　沖縄　失われた文化財と風俗』那覇出版社　1984
田辺泰『琉球建築大観』琉球建築大観刊行会　1937
『写真集　首里城』那覇出版社　1987
『首里城京の内展』沖縄県立埋蔵文化財センター　2001
『首里城公園基本設計』沖縄県土木建築部　1988
野々村孝夫『首里城を救った男』ニライ社　1999

図　　版

図版２　上：平成10年度調査区から首里城を望む
　　下：守礼門現況（東から）

1．平成10年度調査区全景（東から）

2．アスファルト除去後

3．SX04・SX05（南から）

4．SX04(北東から)

5．SX05(南西から)

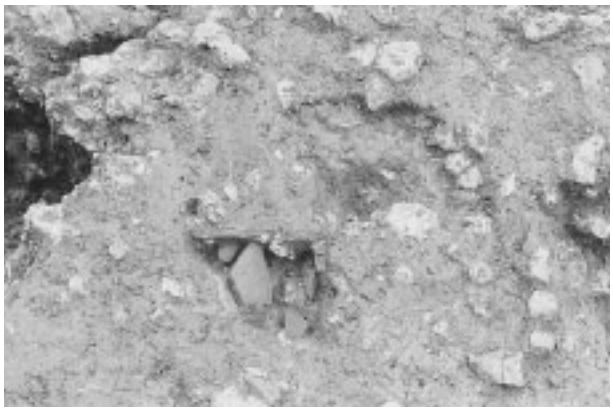
6．同（北東から）

7．SX04・SX05（南から）

8．SX02（北から）

図版３　　遺構検出状況（１）

1．SX02（東から）


2．同

3．同（西から）

4．SR01(a)上面

5．同(南から)

6．SA01（西から）

7．同（北から）

8．同（南から）

図版４　　遺構検出状況（２）

1．SS01（b）東側（西から）

2．SR02（北から）

3．同周辺（西から）

4．同（東から）

5．同（西から）

6．同南側（北西から）

7．同周辺（南東から）

8．同周辺（南東から）

図版５　　遺構検出状況（３）

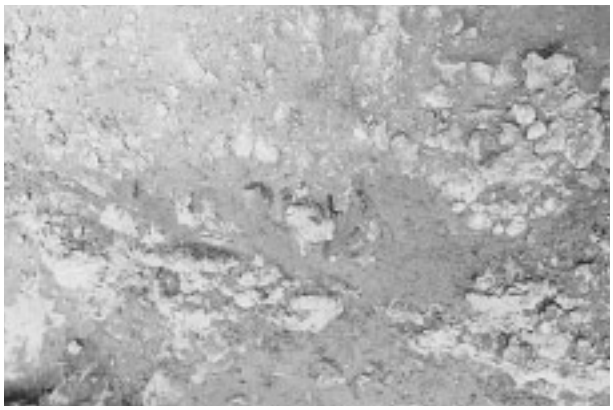
1．獣骨検出状況

2．SS01（b）層序（南壁）

3．同西側（北壁）

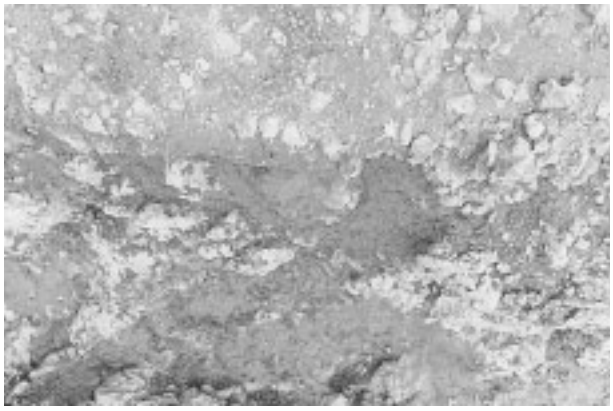
4．同東側（同）

5．SX01　層序（南から）



6．同上面

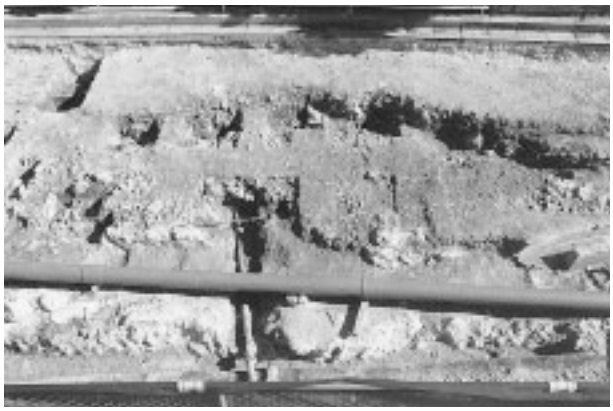
7．同層序（遺物検出後）



8．同上面（同）

図版６　　遺構検出状況（４）

1．SS01（b）東側（南から）



2．同西側（同）

3．同全景（西から）

4．同全景（東から）

5．同西側層序状況（西壁）

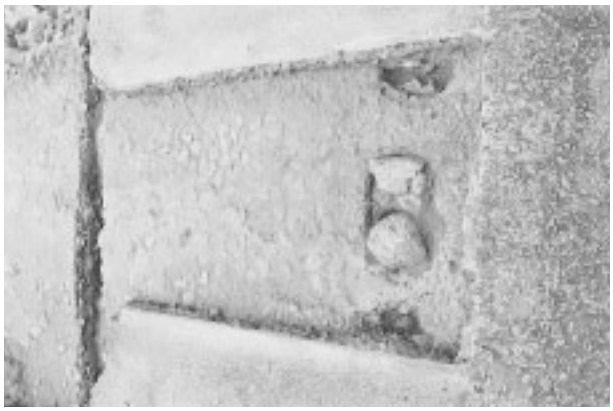
6．同西側層序状況（東壁）

7．SA01（西から）

8．SS01（南から）

図版７　　遺構検出状況（５）

1．平成 11 年度Ｉａ地区全景（西から）



2．Ｉａ地区中央トレンチ（東から）

3．Ｉａ地区中央トレンチ断面図（北壁）

4．同中央トレンチ（南壁）

5．Ｉ地区スー 14 第１、２、３、５礫層（西から）

6．SR03 上面（西から）

7．同正面（西から）

8．同（南から）

図版８　　遺構検出状況（６）

1．SR03（南から）

2．SA02 正面①（北から）

3．同正面②（北から）

4．同層序（西から）

5．SS02（西から）

6．SS02 上面（南から）

7．同（南から）

8．同（西から）

図版９　　遺構検出状況（７）

1．SA02 層序（西から）

2．同正面③（北から）

3．同（南から）

4．同層序（東壁）

5．SA01　SD16　北側層序（北西から）

6．SA01 下部層序（東壁）

7．同北側層序（西壁）

8．Ⅲ地区柱穴①

図版10　　遺構検出状況（8）

1．Ⅲ地区柱穴②

2．同③

3．同④

4．SA04　正面①（北から）

5．同正面②（北から）

6．同正面③（北から）

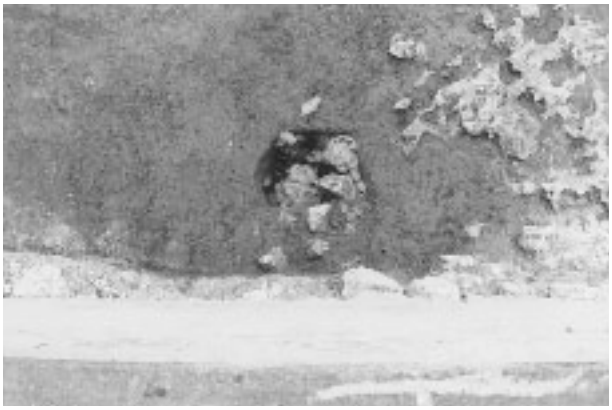
7．同正面④（北から）

8．同正面⑤（同図面４、５のコンクリート壁除去後）

図版11　　遺構検出状況（９）

1．Ⅲ地区柱穴⑤

2．柱穴１検出直後


3．同半裁

4．染付台付き杯出土状況（SA02）

5．同

6．青磁皿出土状況（造成層）

7．獣骨出土状況①

8．同②

図版12　　遺構検出状況（10）

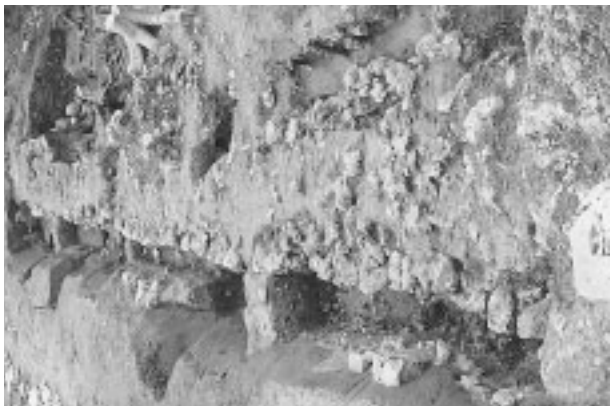
1．案内板東区 SA03 内面①（東から）

2．同②（南から）

3．同③（南から）

4．同④（南から）

5．同⑤（東から）


6．案内板東区 SA03 全景（西から）

7．案内板東区 SA03 外面①（北から）

8．同外面①（北から）

図版13　　遺構検出状況（11）

1．案内板西区 SA03・SS03

2．案内板西区 SA03 正面（北から）

3．案内板西区 SA03・SS03　正面（北から）

4．案内板西区 SA03 裏込め状況（東から）

5．同外面層序①（東壁）

6．同外面層序②（西壁）

7．案内板西区 SA03 外面（北から）

8．案内板東区 SA03 外面②（北から）

図版14　　遺構検出状況（12）

1．案内板東区 SA03 内面⑤（南から）

2．案内板東区 SA03 外面③（北から）

3．案内板東区 SA03 裏込め状況（東から）

4．案内板東区 SA03 復元状況（北から）

5．案内板西区 SA03 下層層序（北から）

6．案内板西区（北壁）

7．案内板西区（東壁）

8．案内板東区 SA03 調査終了後（西側）

図版15　　遺構検出状況（13）

1．不発弾出土直後

2．不発弾撤去状況①

3．同②

4．防護ネット設置状況

5．台風被害状況

6．発掘作業状況

7．実測作業状況

8．発掘作業員の皆さん

図版16　　遺構検出状況（14）

1．大正期頃（沖縄県土木建築部 1993）

2．同

3．昭和初め頃（那覇市立教育研究所 2001）

4．同（那覇出版社 1987）

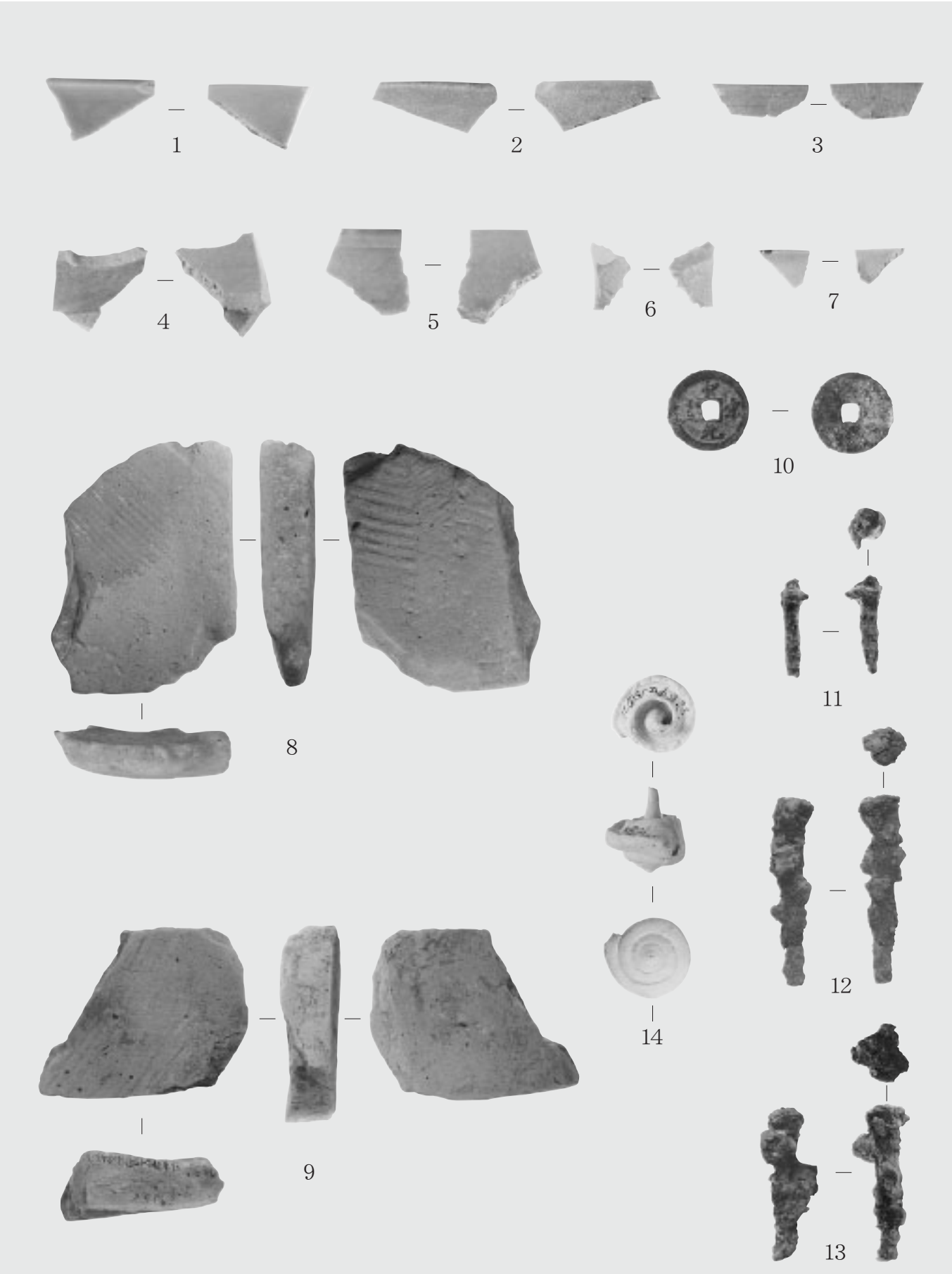
5．昭和 10 年代（ニライ社 1999）

6．同（琉球建築大観刊行会 1937）

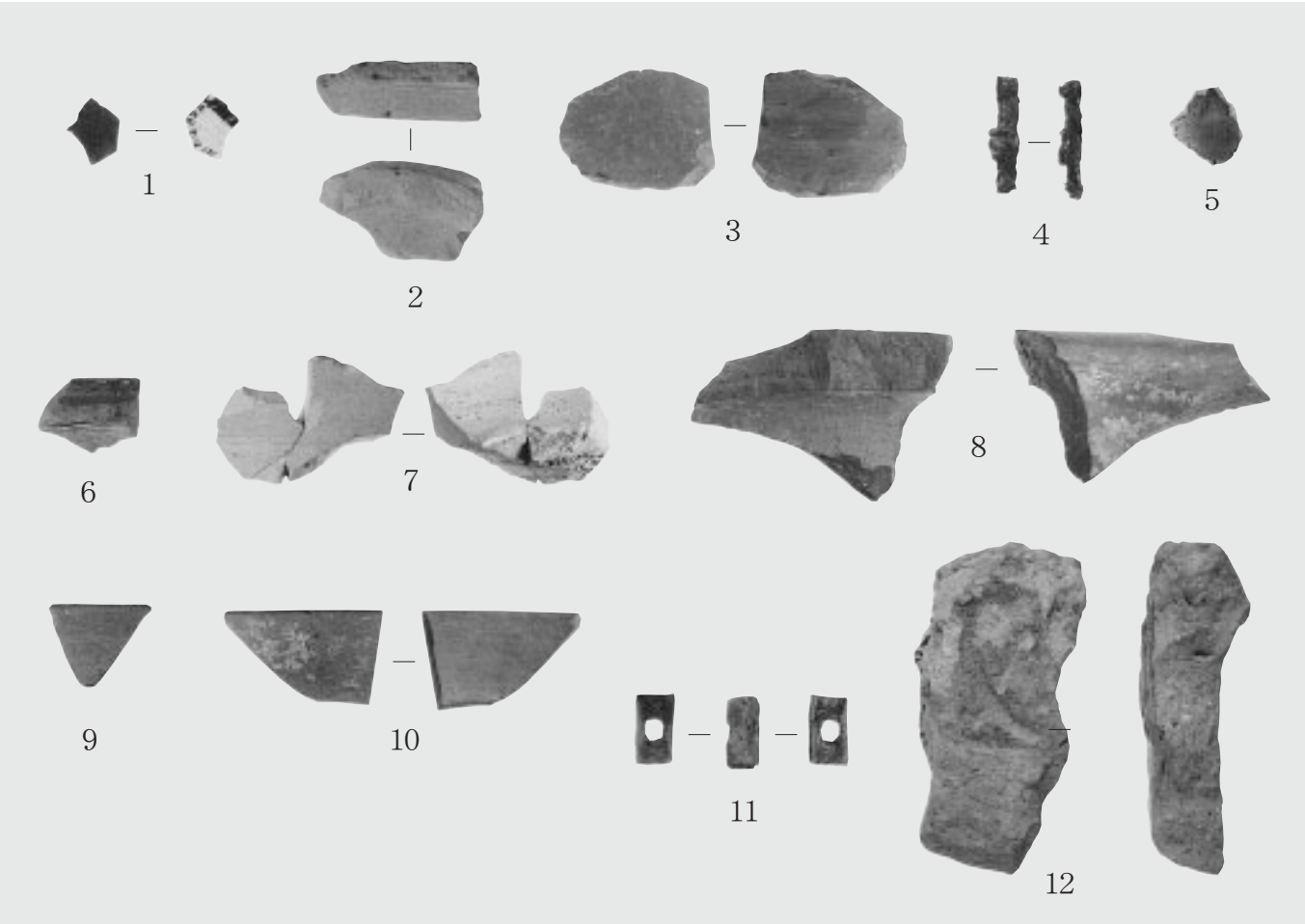
7．昭和 12 年の修復後（那覇出版社 1987）

8．現在の守礼門

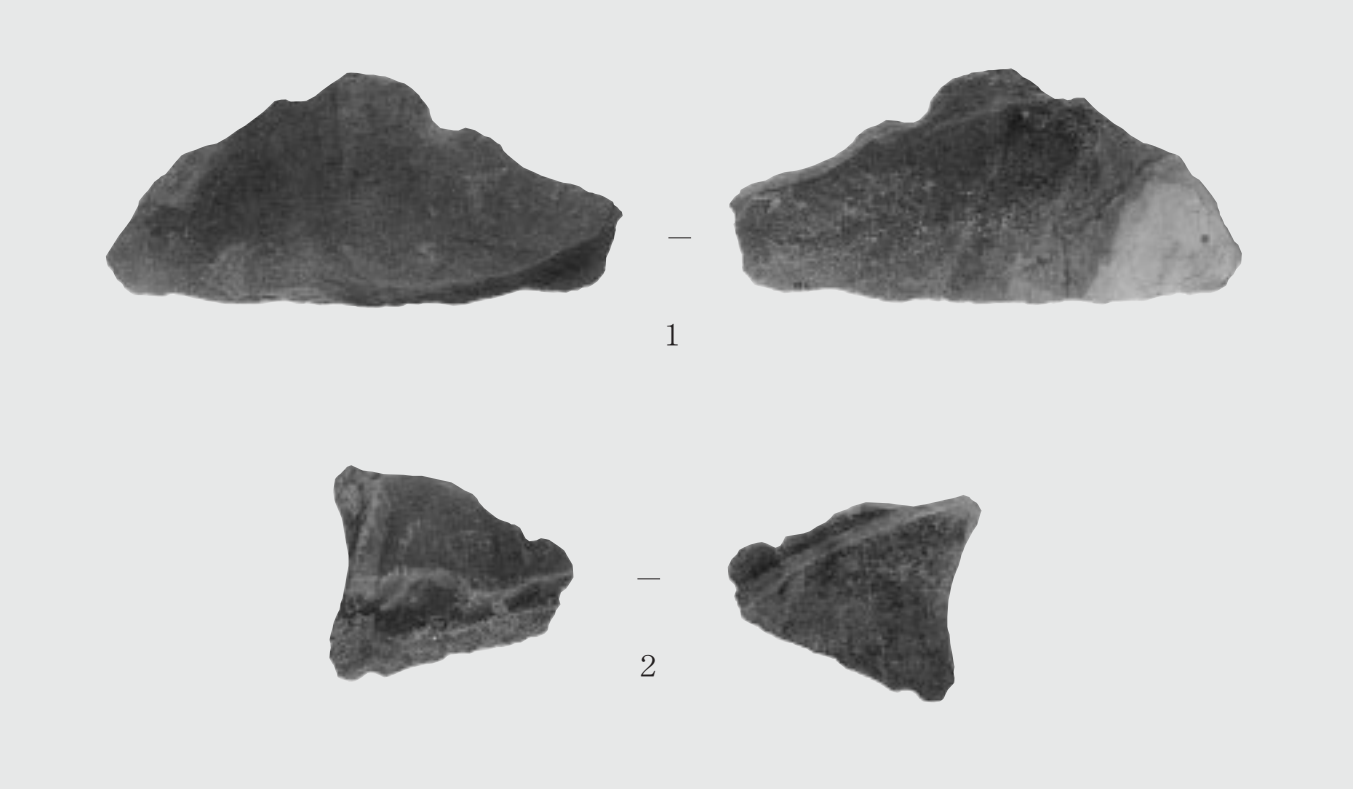
図版17　　守礼門古写真



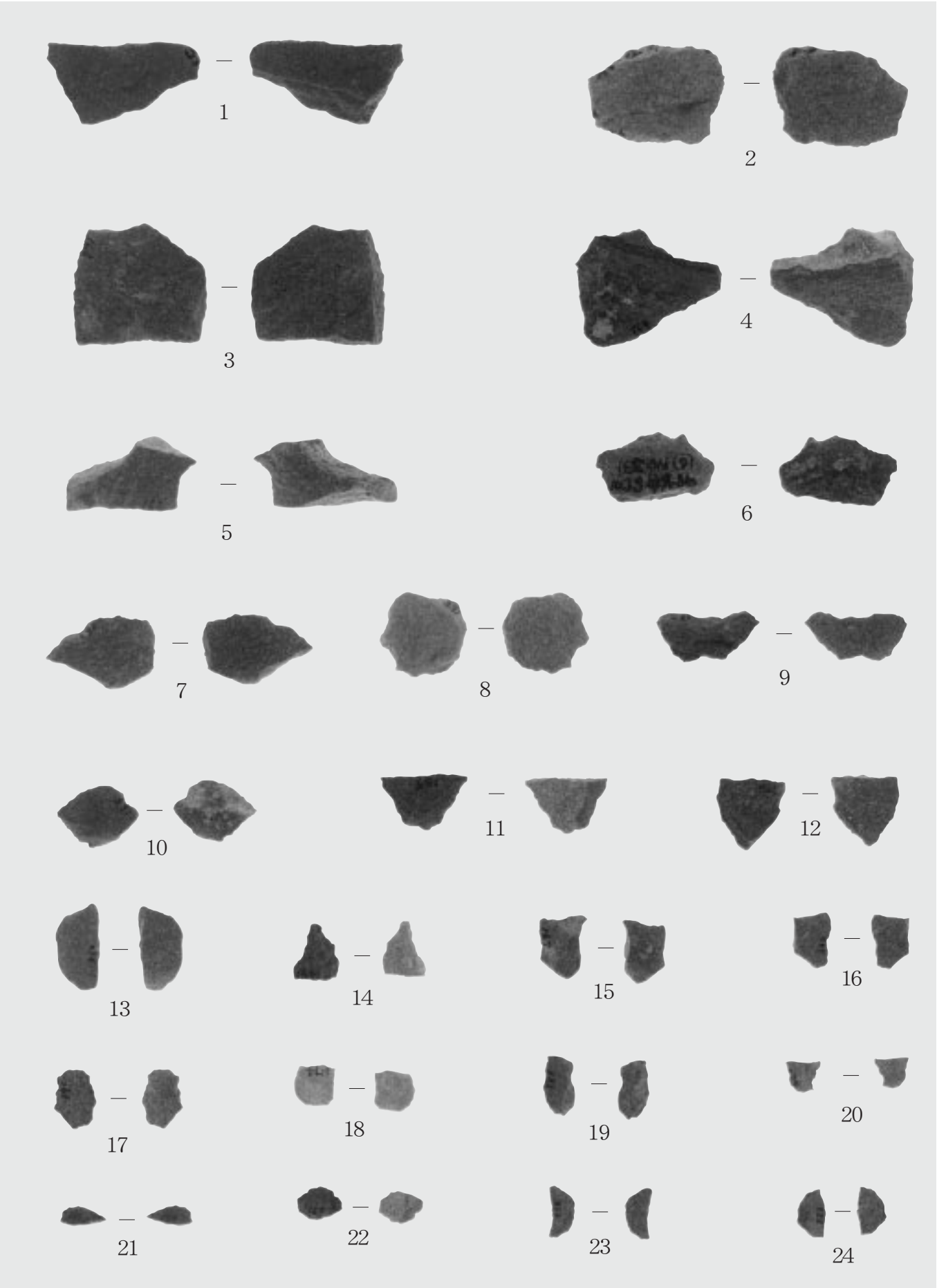
図版18　SA01 出土遺物・青磁 1 ～ 5　白磁 6、7　瓦 8、9　銭貨 10
・鉄製品 11 ～ 13　貝製品 14



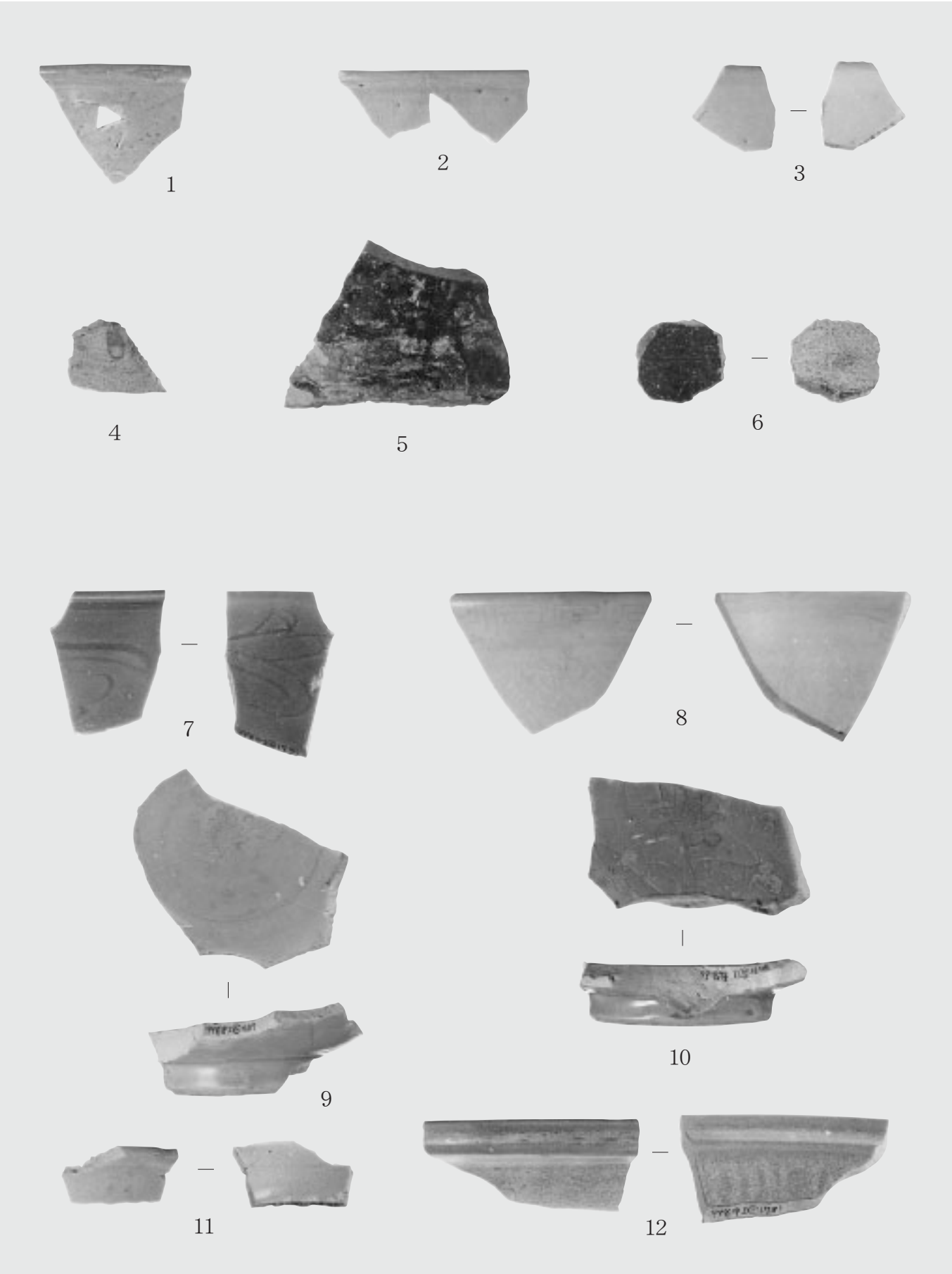
図版19　SX01 出土遺物・（黒釉陶器 1　陶質土器 2　円盤状製品 3　鉄製品 4　褐釉陶器 5、6　沖縄産施釉陶器 7　沖縄産無釉陶器 8 ～ 10　青銅製品 11　瓦 12



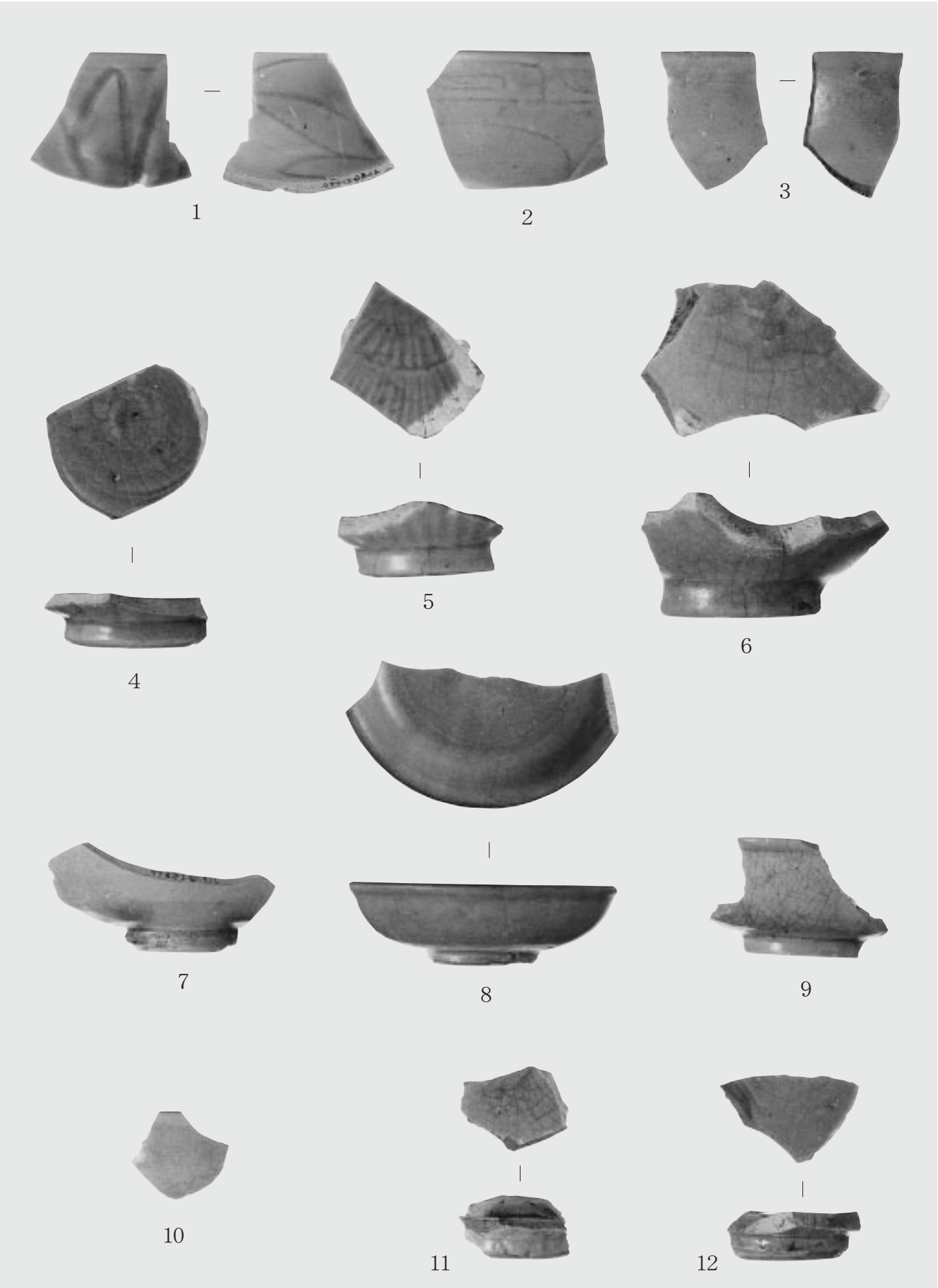
図版20　SX01 出土遺物・石材（1）



図版21　SX01 出土遺物・石材（２）

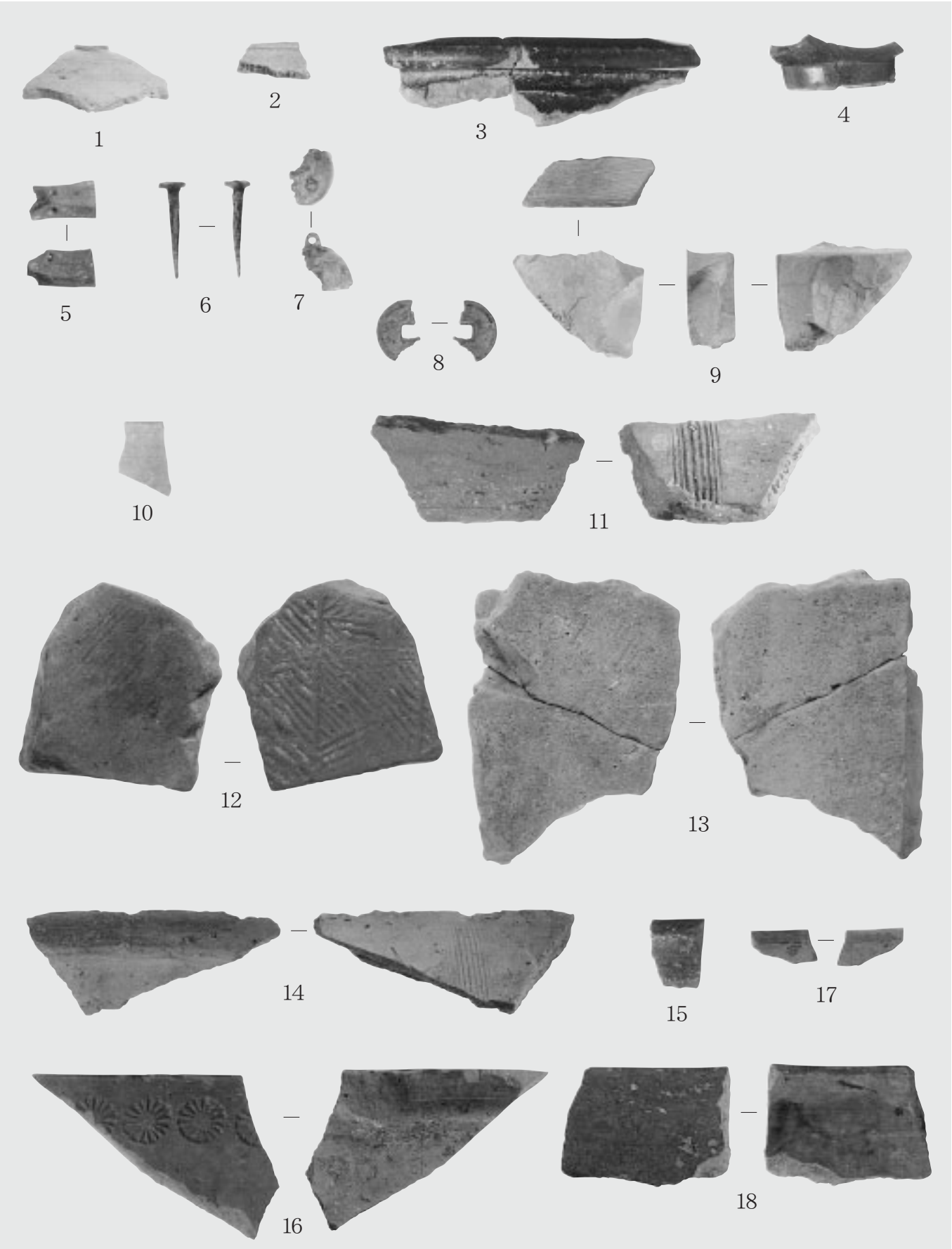


図版22　SA01　検出トレンチ出土遺物・青磁１、２　白磁３　褐釉陶器４、５　円盤状製品６
SA02　出土遺物・８層黒色土粒混赤褐色土層（造成層）青磁７～12



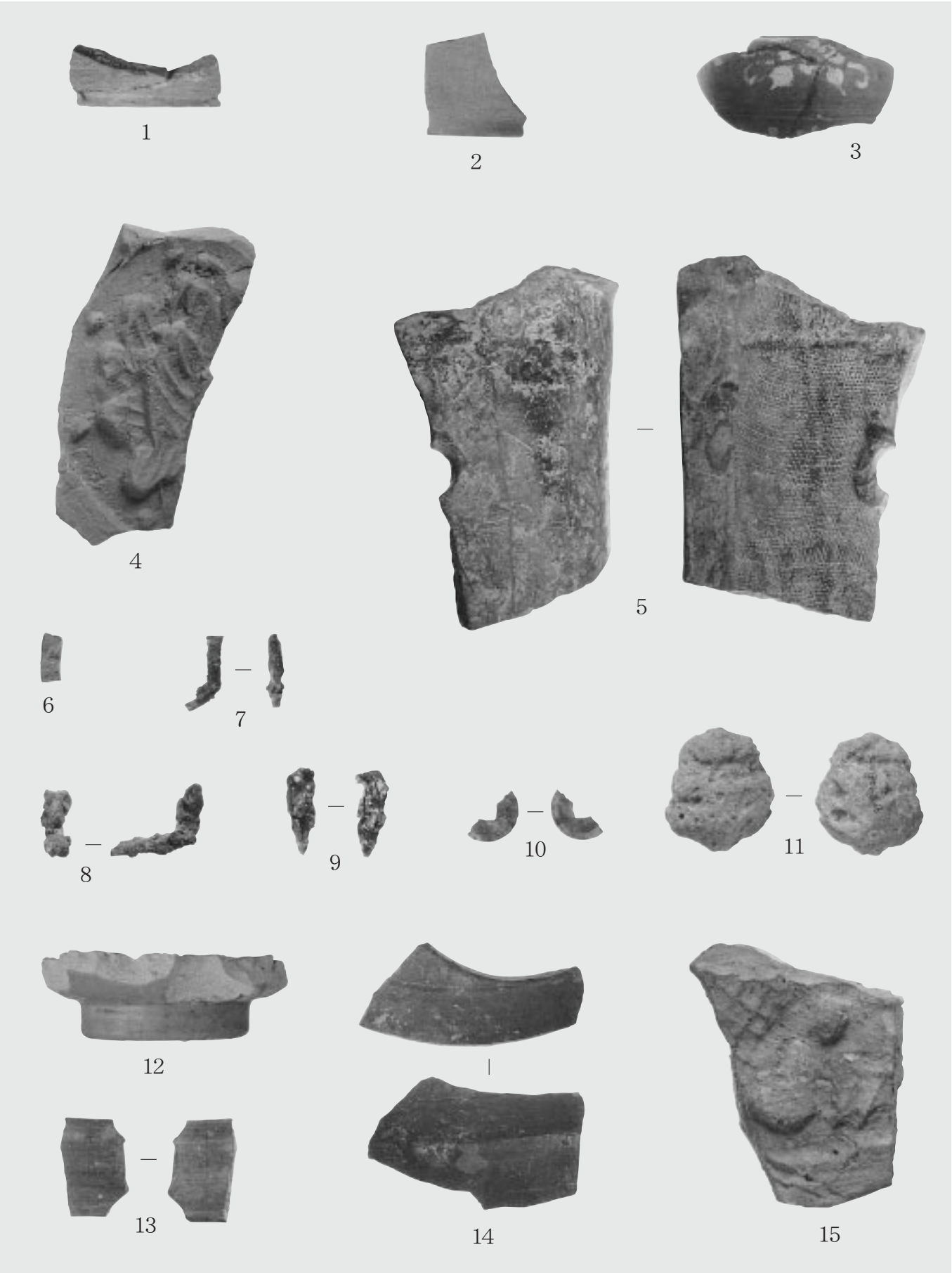
図版23　SA02　出土遺物・８層黒色土粒混赤褐色土層（造成層）青磁

図版24　SA02　出土遺物・８層黒色土粒混赤褐色土層（造成層）青磁１、２、３　染付４、５
SA02　出土遺物・染付６、７　褐釉陶器８、９　半練 10

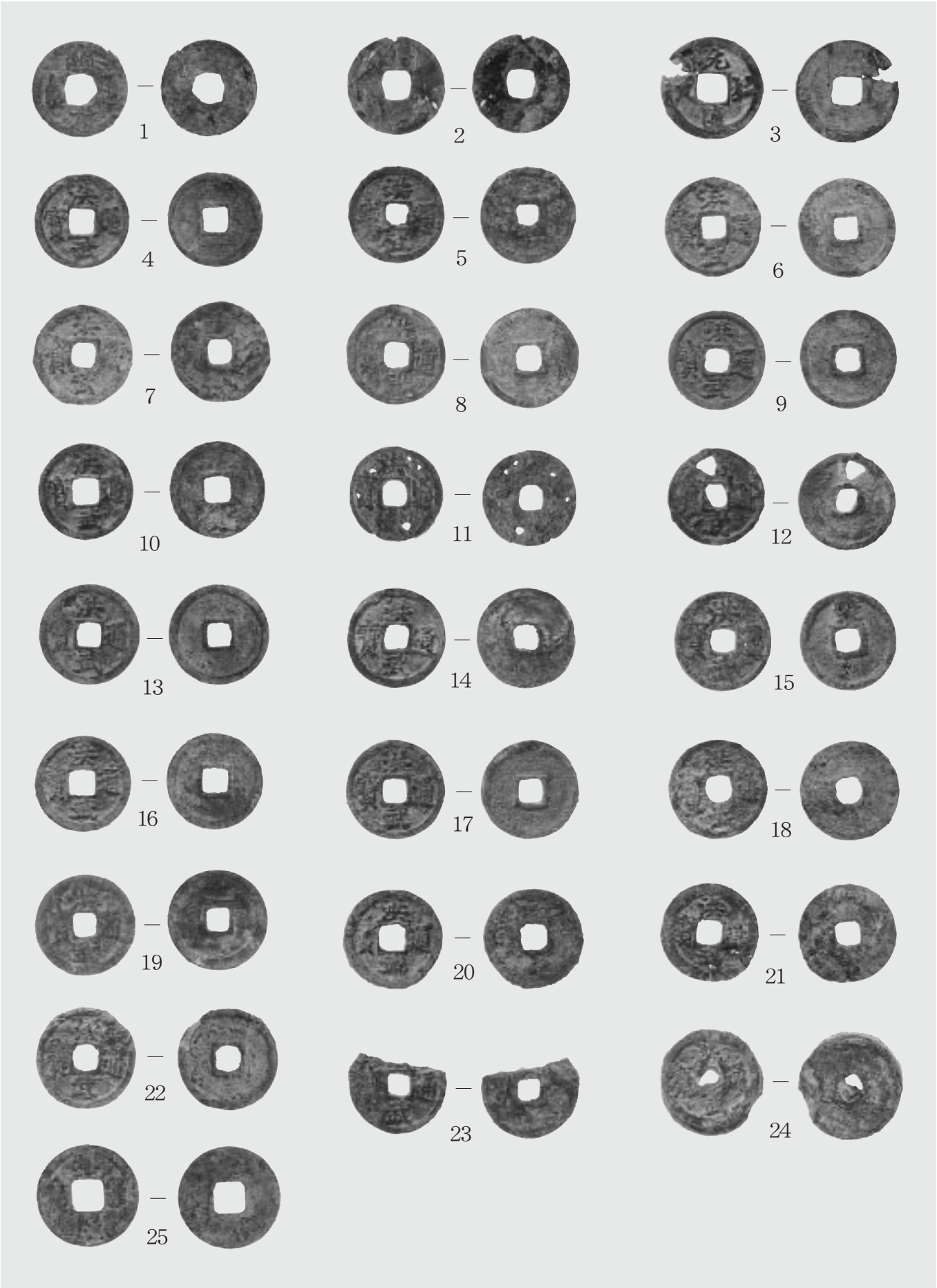


図版25　SA02　出土遺物・中国産陶器１　褐釉陶器２、3　沖縄産陶器４　煙管５　金属製品６、7　銭貨８　石器９
SA02　出土遺物・19 層　黒褐色混土礫層（第５礫層）青磁 10　摺鉢 11　瓦 12、13
SA02　出土遺物・本土産陶器 14　沖縄産陶器 15　瓦質土器 16、17、18

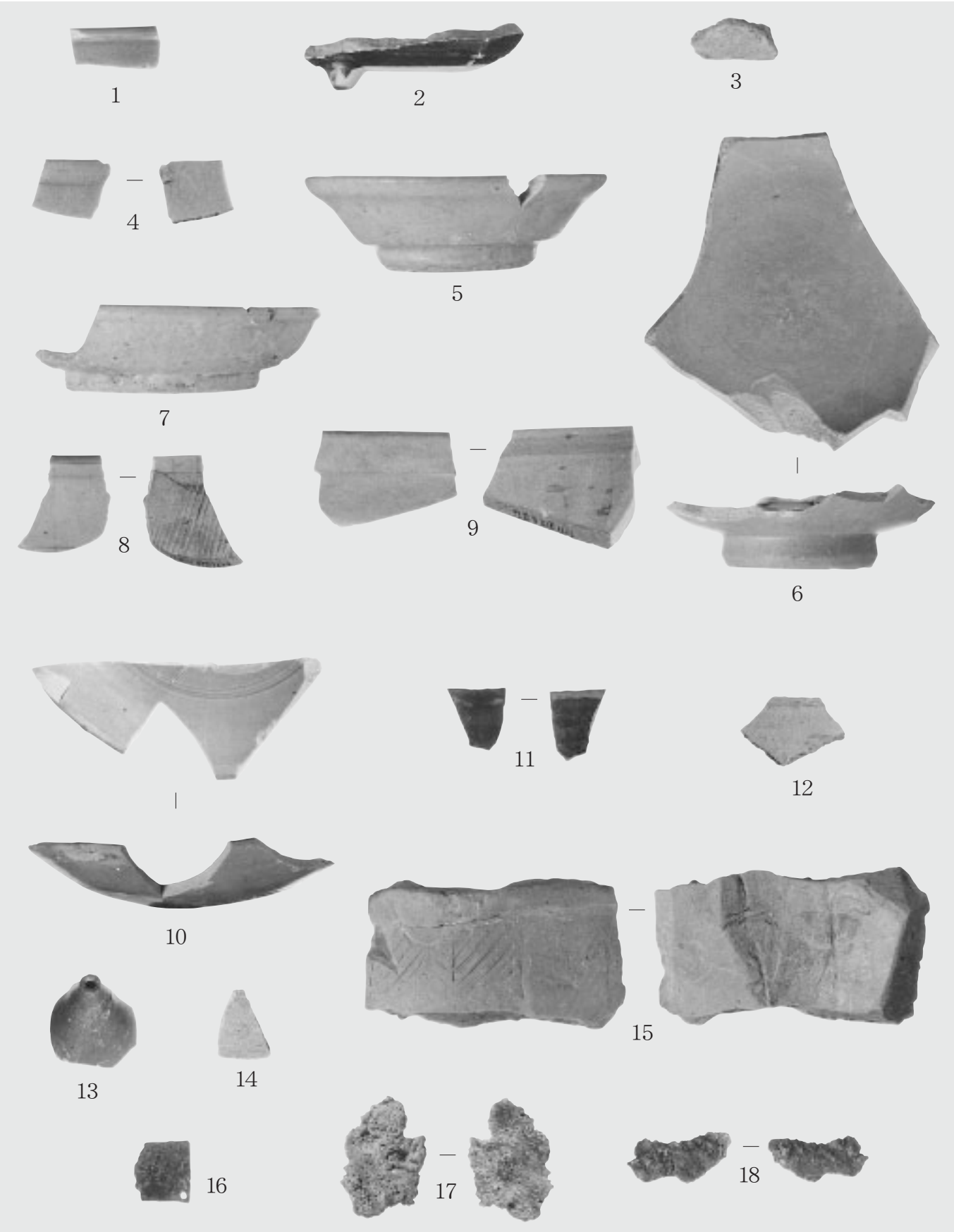
図版26　SA02　出土遺物・瓦１　円盤状製品２、３　石製品４
SS02　検出地区出土遺物・青磁５　染付６、７　三彩８、９　褐釉陶器 10　本土産磁器 11



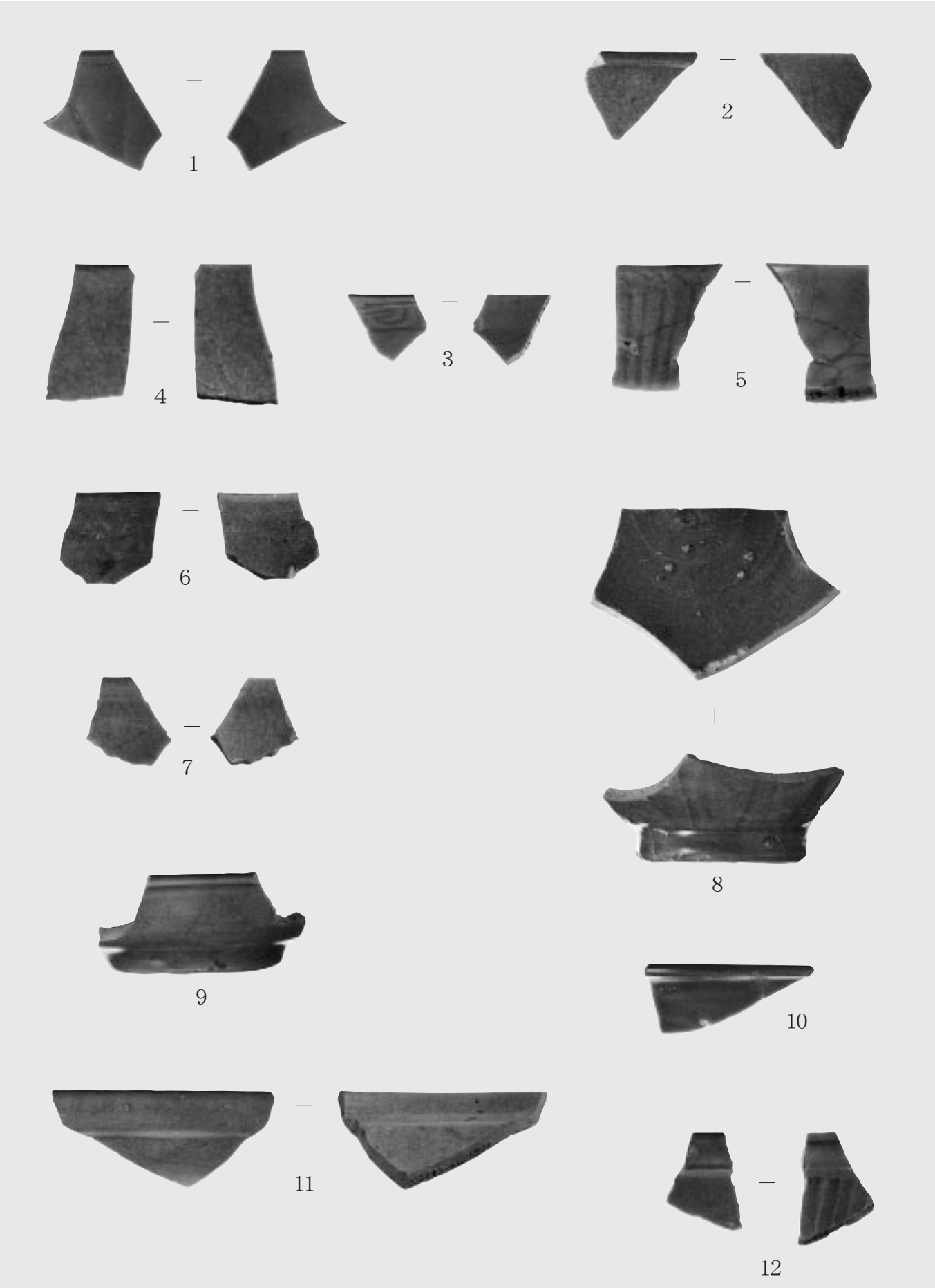
図版27　SS02　検出地区出土遺物・沖縄産陶器１、２、３　瓦４、５　金属製品６、７、８、９　銭貨10　石器11
SR03　出土遺物・青磁12　沖縄産陶器13、14　瓦15



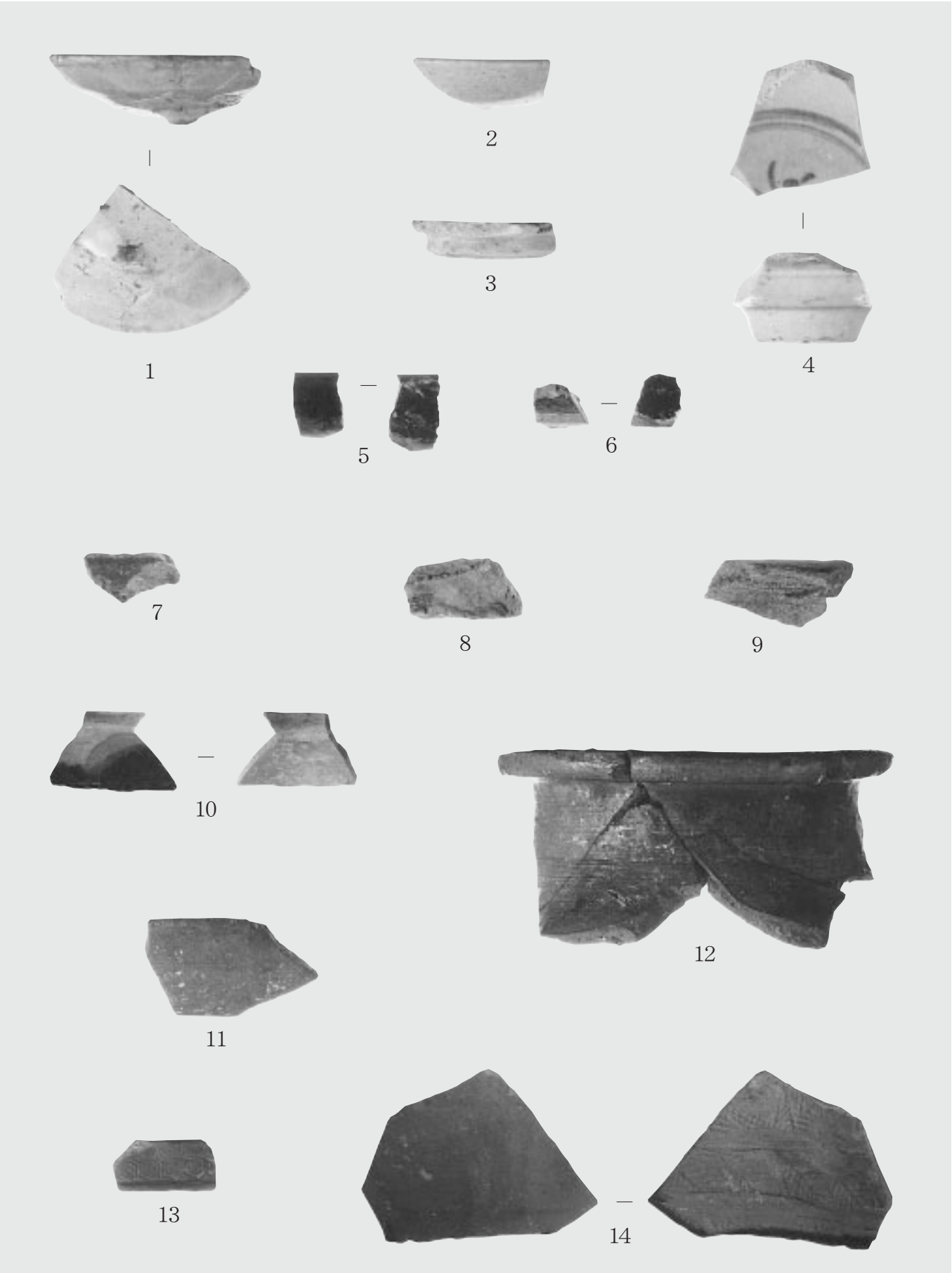
図版28　　柱穴遺構出土遺物・pit 1出土　銭貨



図版29　柱穴遺構出土遺物・青磁 1　沖縄産施釉陶器 2　土器 3
23a 層　暗褐色土層出土遺物・青磁 4 ～ 9　白磁 10　黒釉陶器 11
中国産陶器 12　土器 13、白磁 14　瓦 15　金属製品 16、17
25b 層　暗橙褐色土層出土遺物・金属製品 18



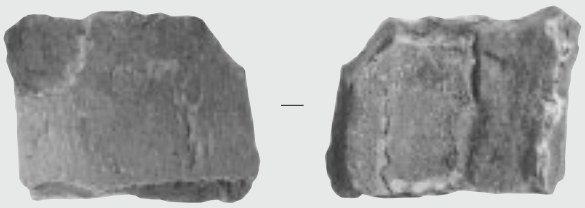
図版30　SA03　出土遺物・青磁



図版31 SA03 出土遺物・中国産白磁１、２、３　染付４　黒釉陶器５、６　中国産褐釉陶器７、８　本土産陶器９
沖縄産施釉陶器10　沖縄産無釉陶器11､12　陶質土器13　カムイヤキ14

1

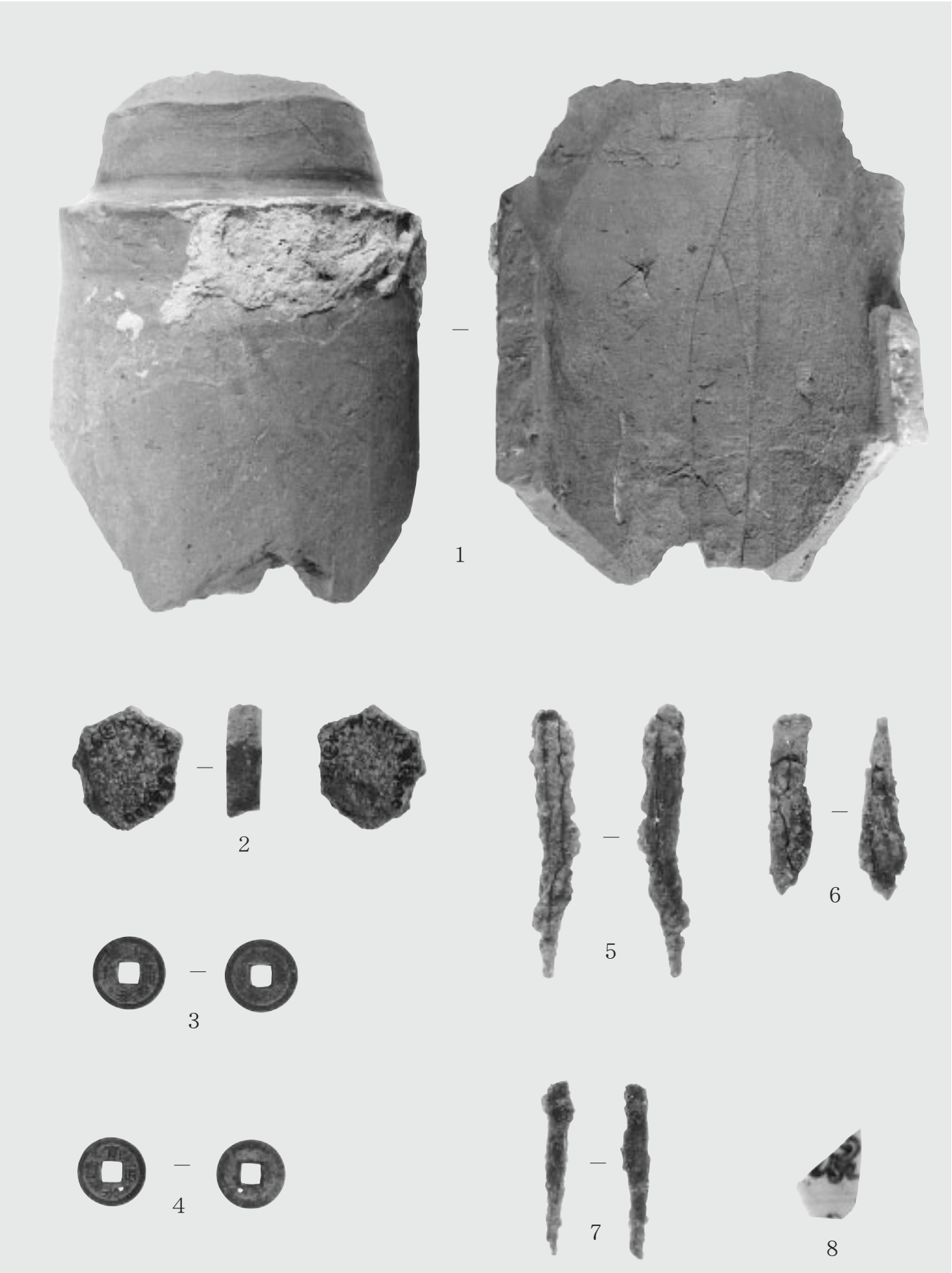
2



3

4

図版32　SA03　出土遺物・瓦



図版33　SA03　出土遺物・瓦１　円盤状製品２　銭貨３、４　金属製品５、６、７
SS03　出土遺物・染付８

図版34　骨（1）　魚類（1～4）　ニワトリ（5）　イノシシｏｒブタ（6～8）　ブタ（9・10）　ウシ(11)　ウマ(12)

平成11　1.脊椎骨　2.背鰭棘　3.フエキダイ科　ハマフエフキ右歯骨

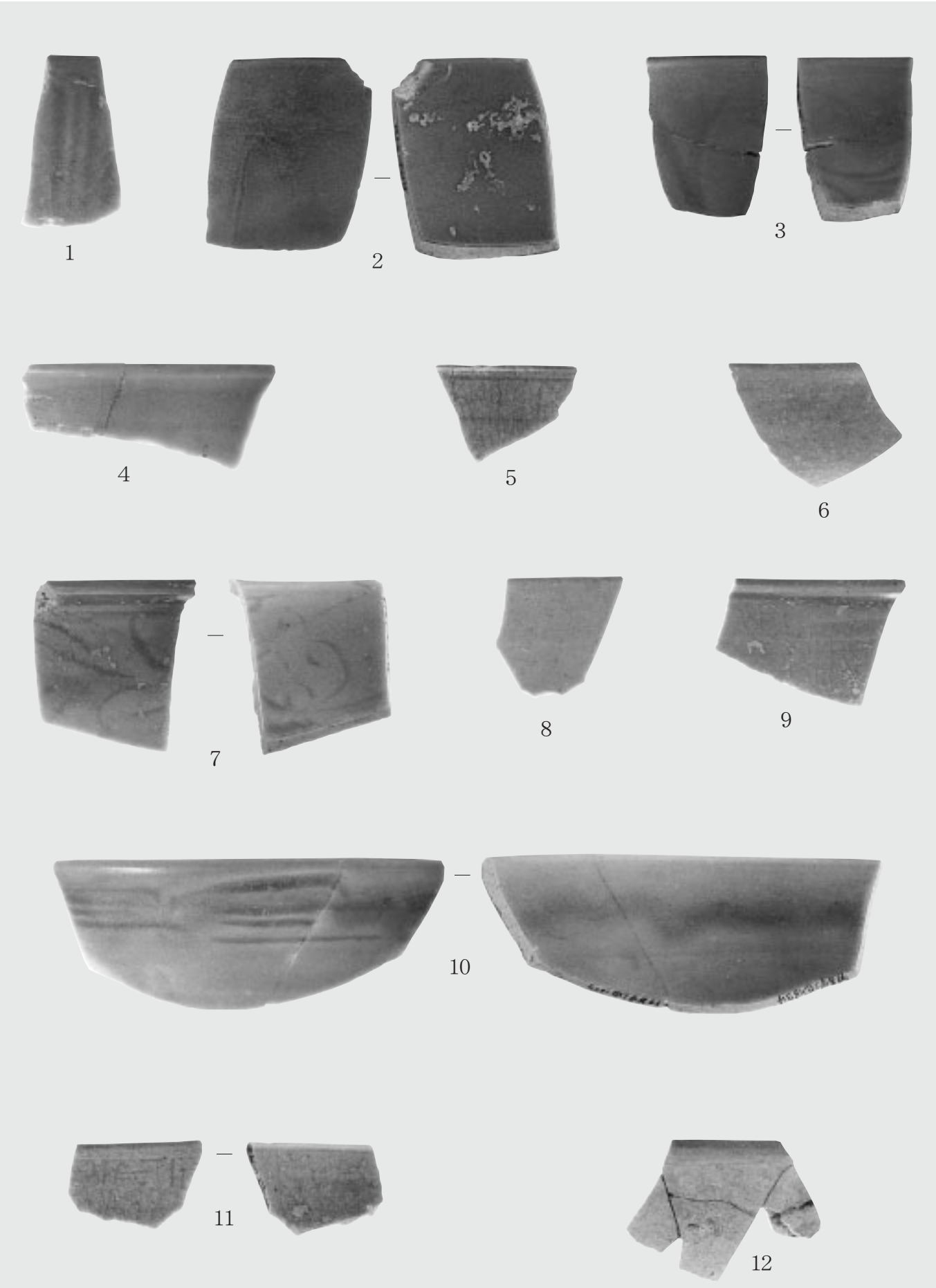
4.ハタ科 左前上顎骨　5.左　中足骨　6.右 上顎骨M^1　7.左 下顎骨M_1

8.左 脛骨

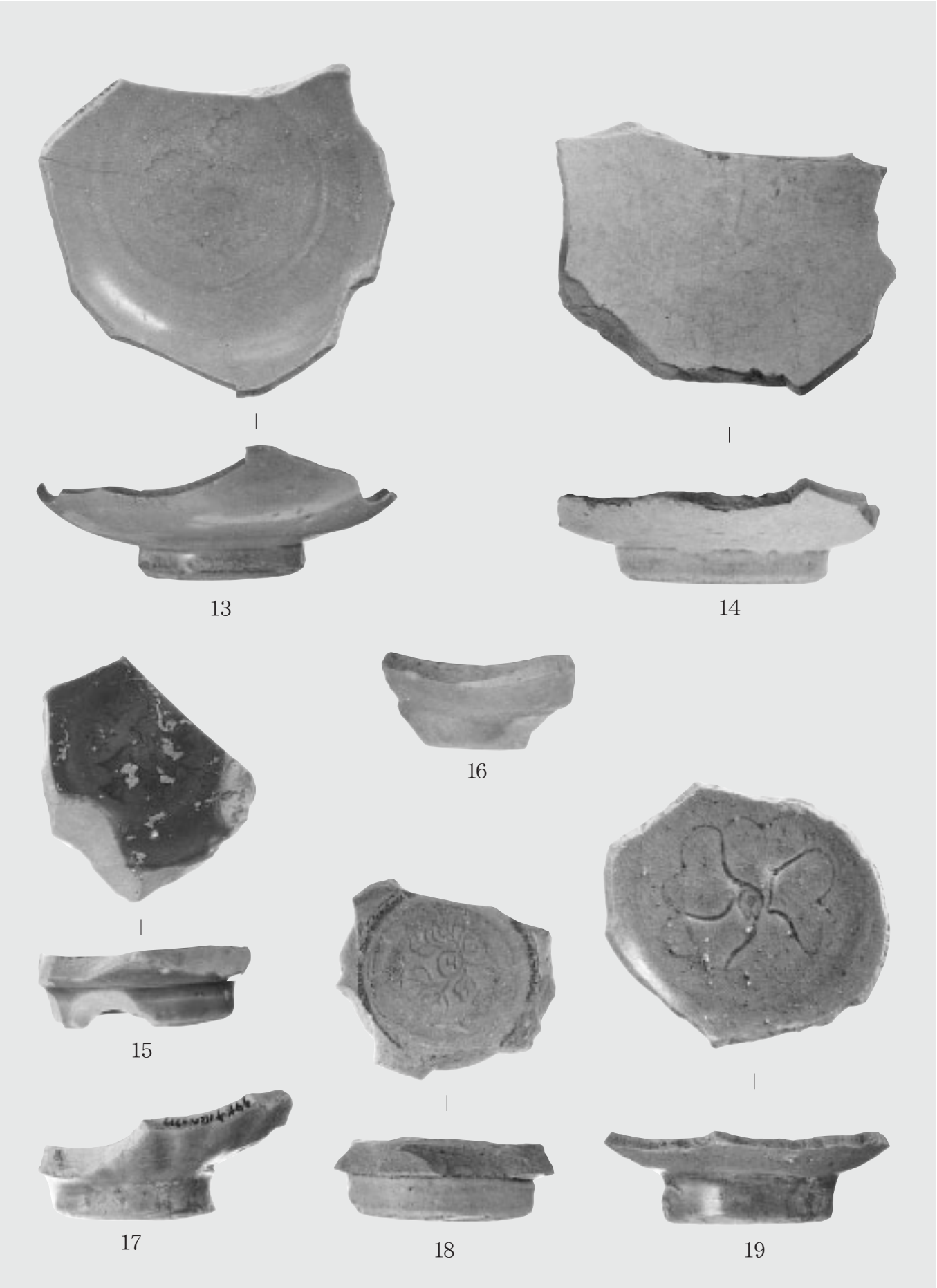
平成12　9.右 下顎骨 dm4　$M_{1\cdot2}$　10.左焼骨　11.左 上顎骨 P^2　12.肩甲骨

図版35　骨（2）　ウマ（1～7）　ウシ（8～12）

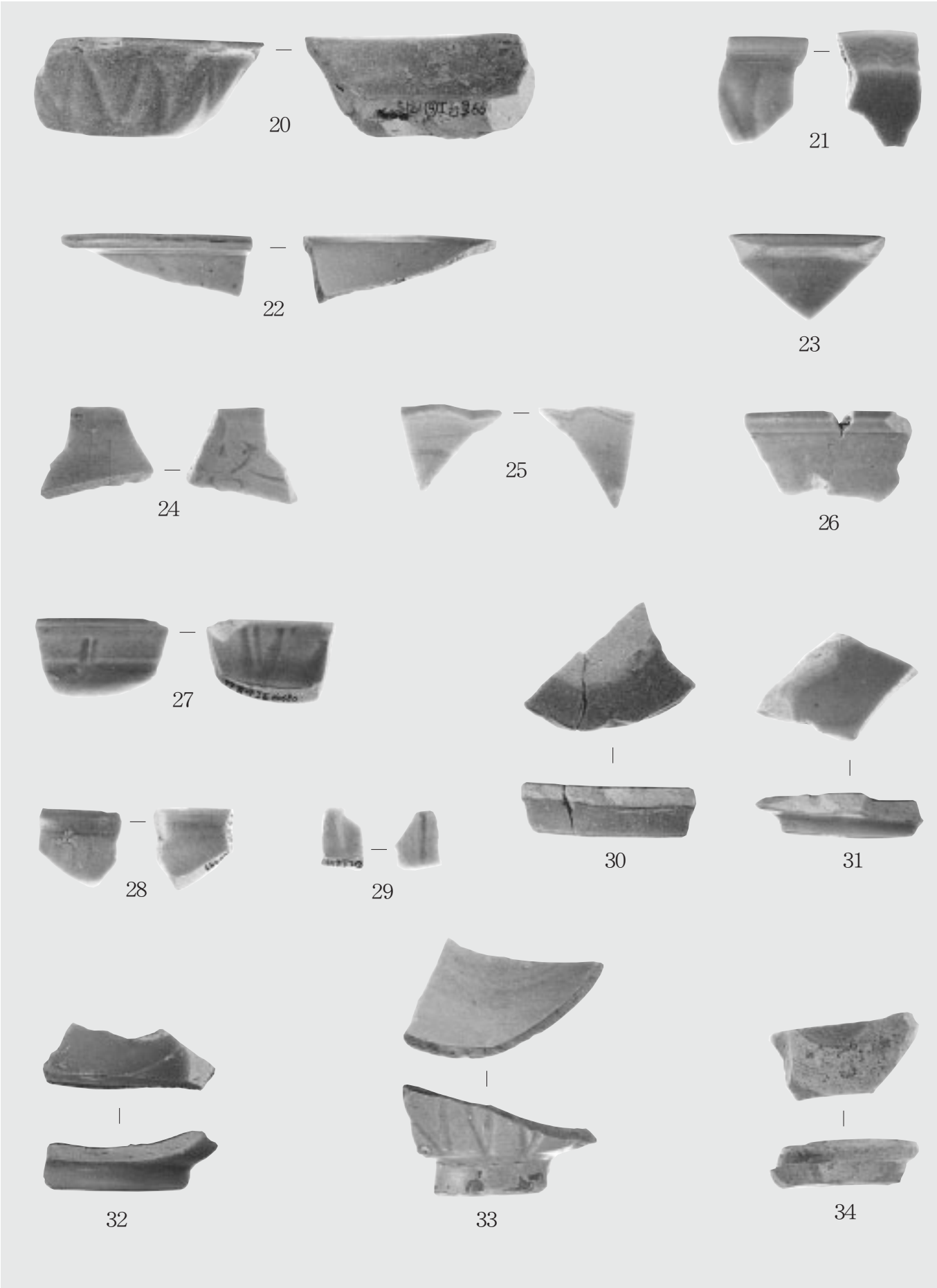
平成11　1．右　上顎骨　p 3～4　2．左　上顎骨　M 1～2　3．右　上顎骨　M^2
4．右　上腕骨　5．左　橈側手根骨　6．左　踵骨　7．右　基節骨
8．右　下顎骨M_1　9．右　肩甲骨　10．右　福手根骨　11．右　大腿骨
12．右 頸骨



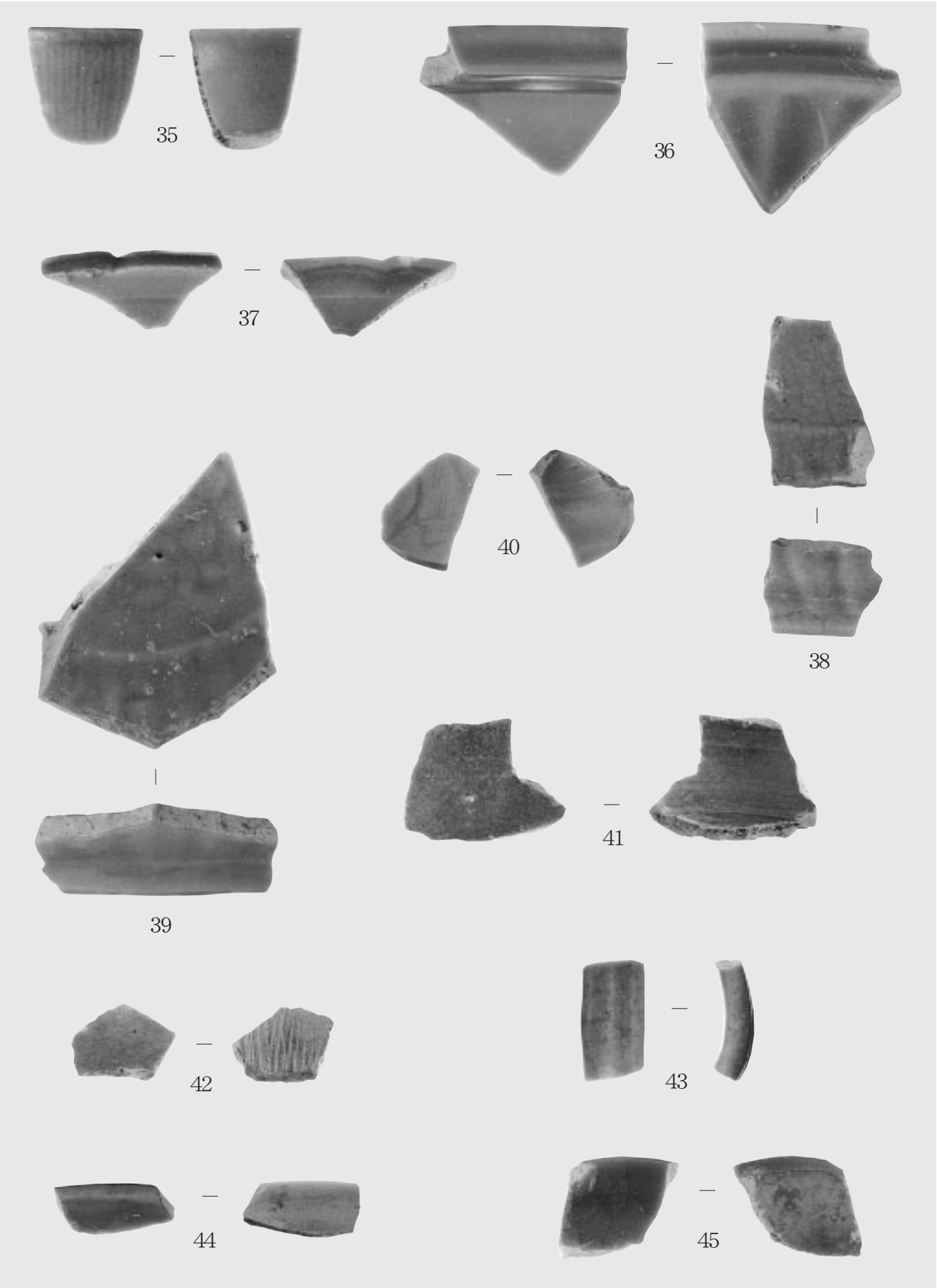
図版36　青磁（1）



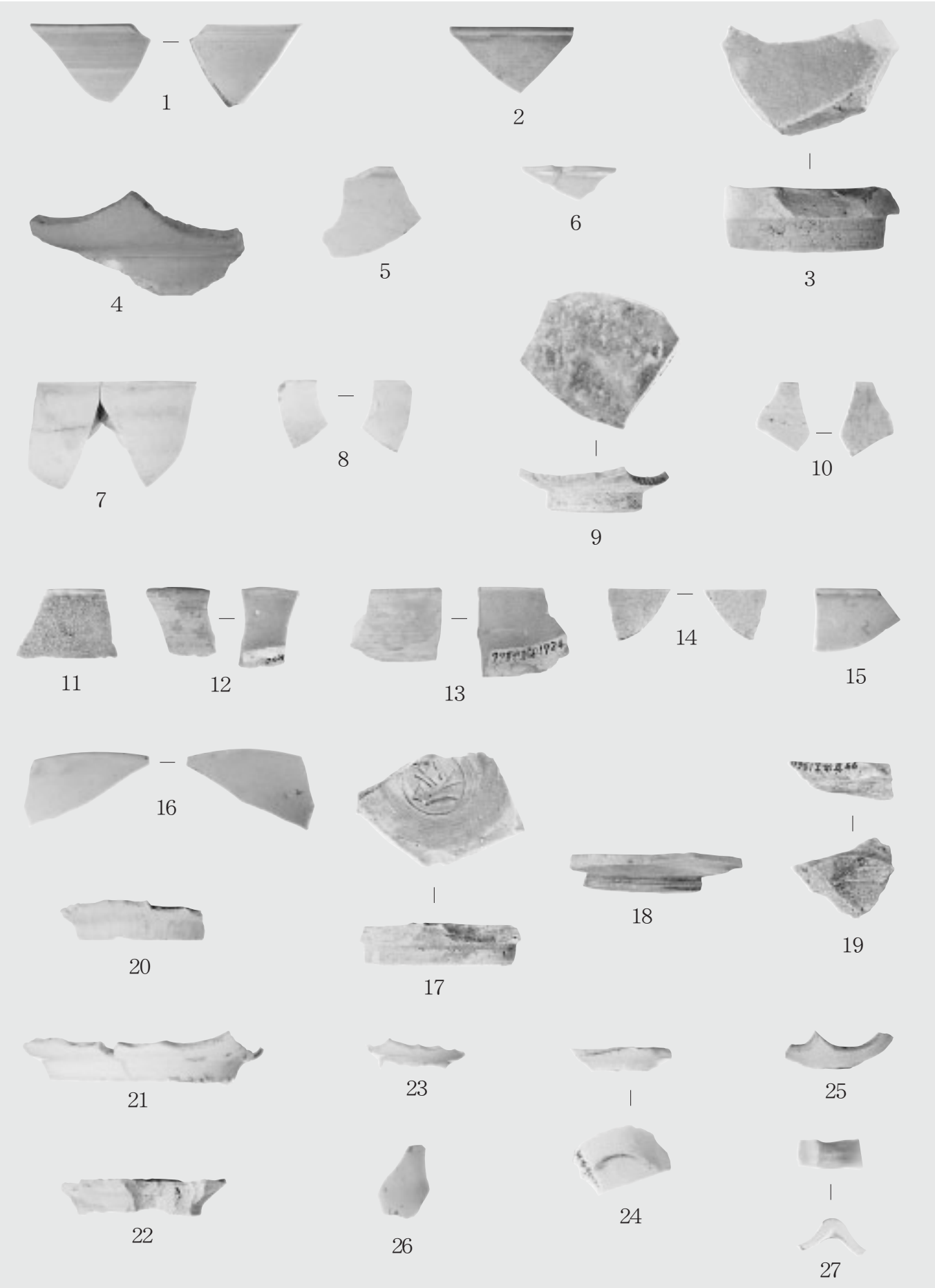
図版37　青磁（2）



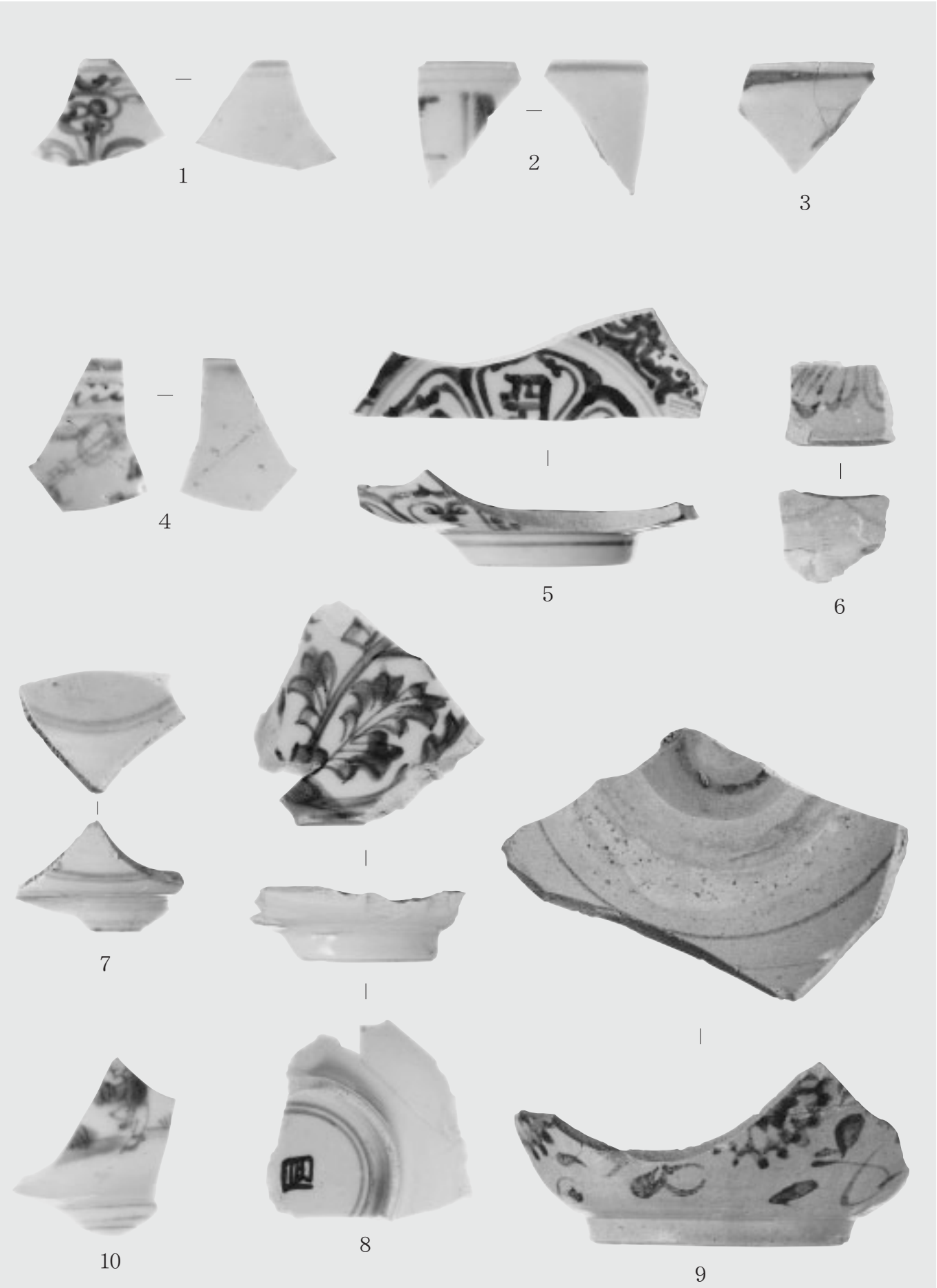
図版38　青磁（３）



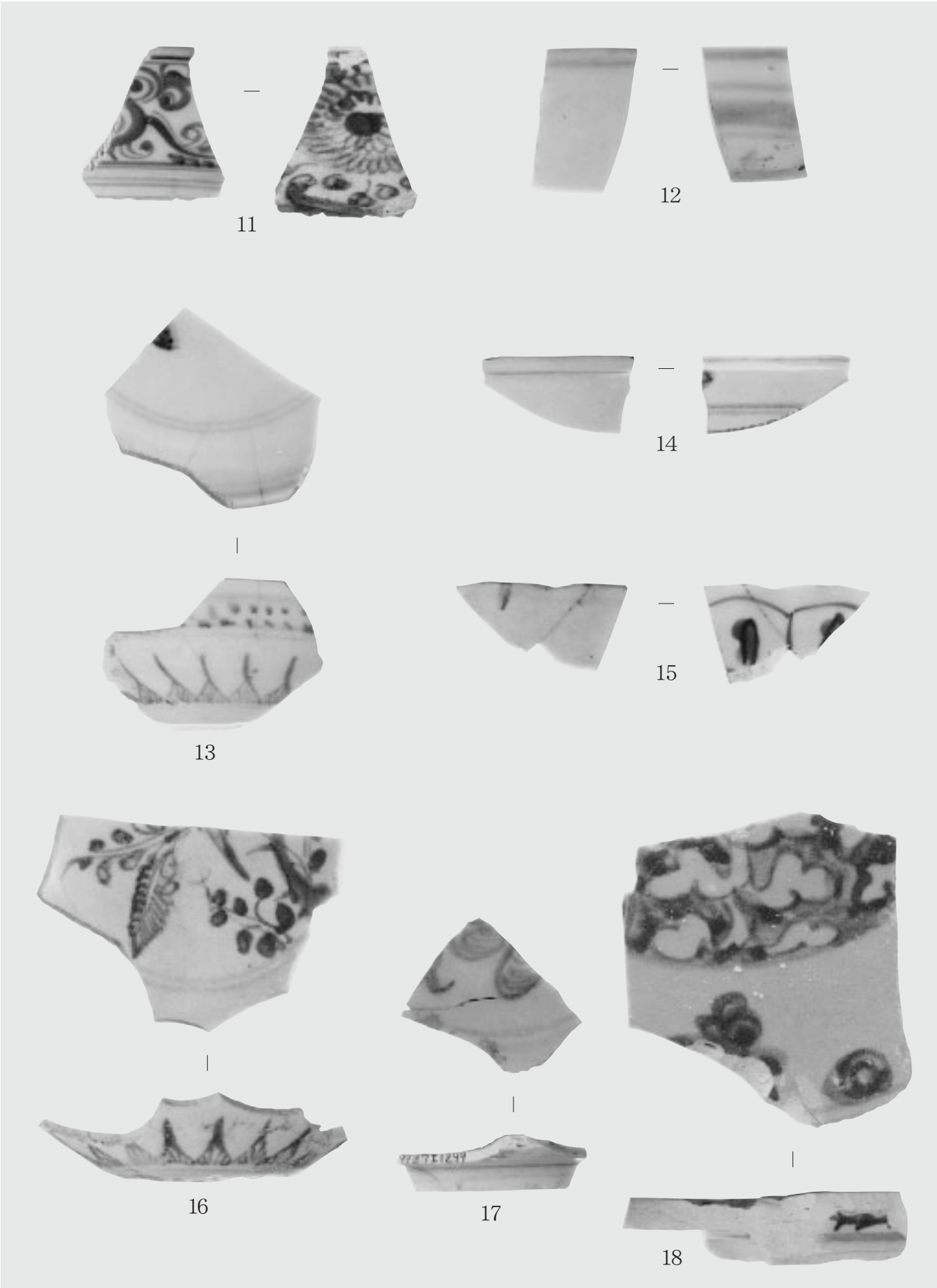
図版39　青磁（4）



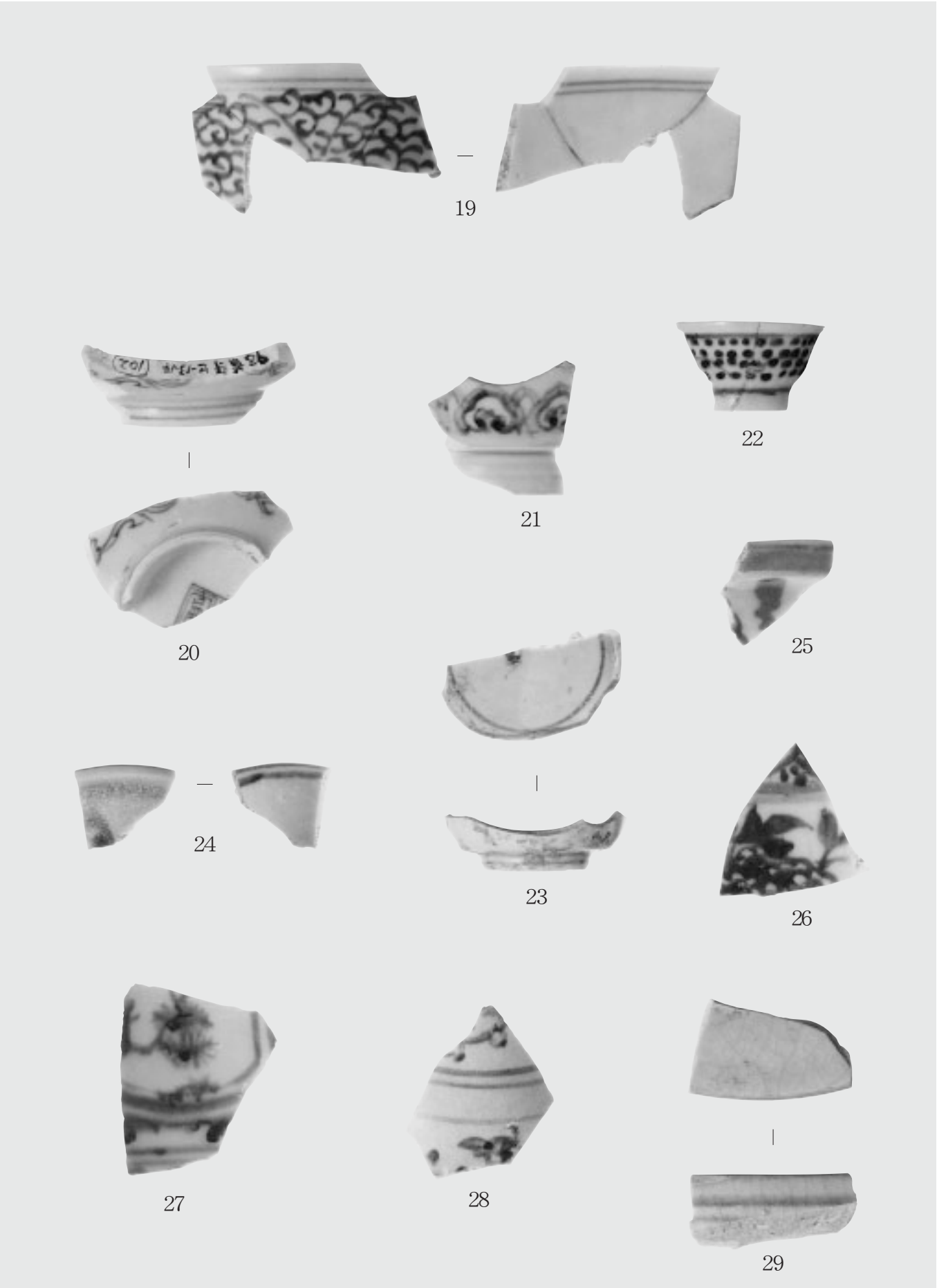
図版40　白磁



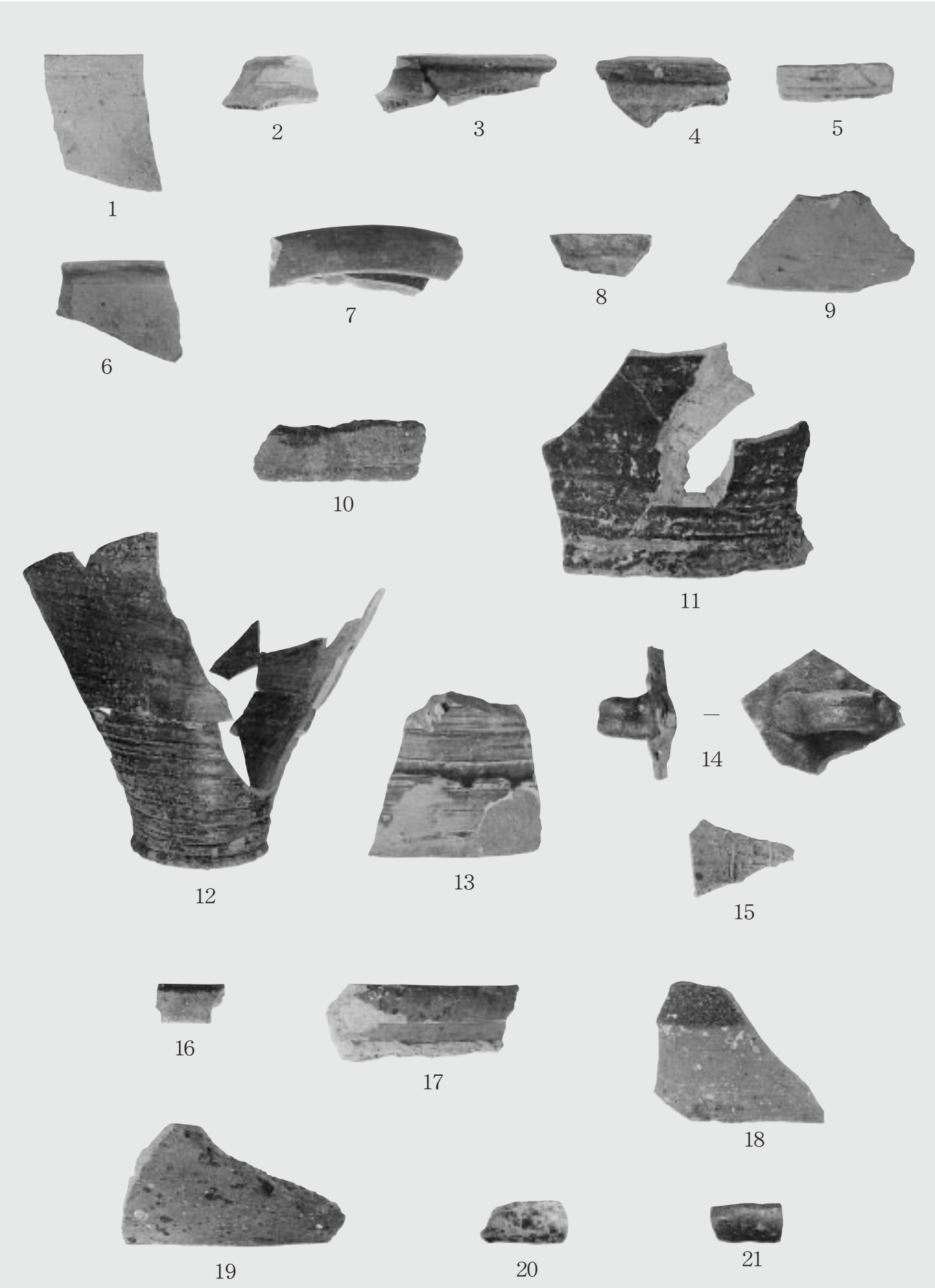
図版41　染付（碗）



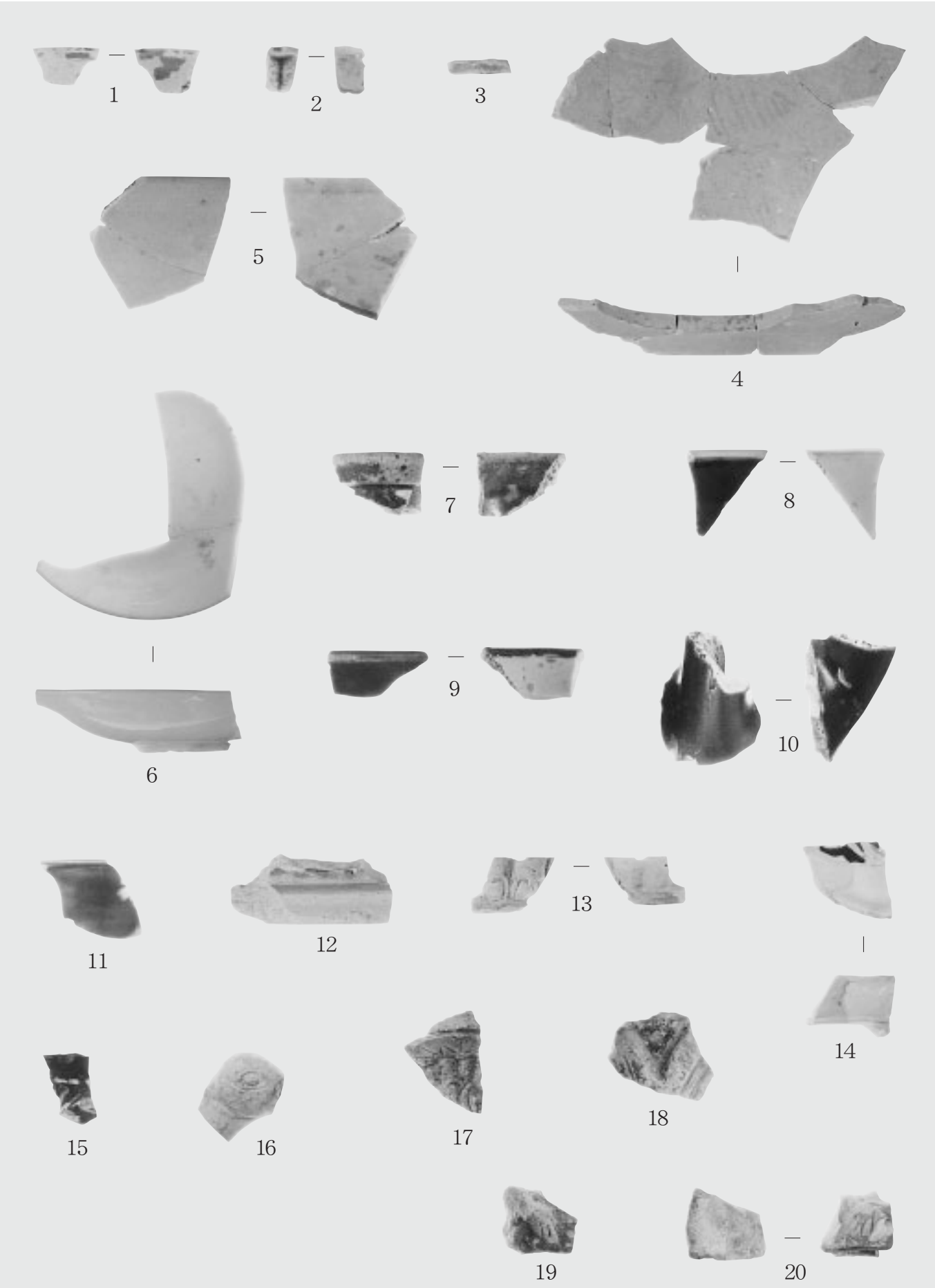
図版42　染付（皿）



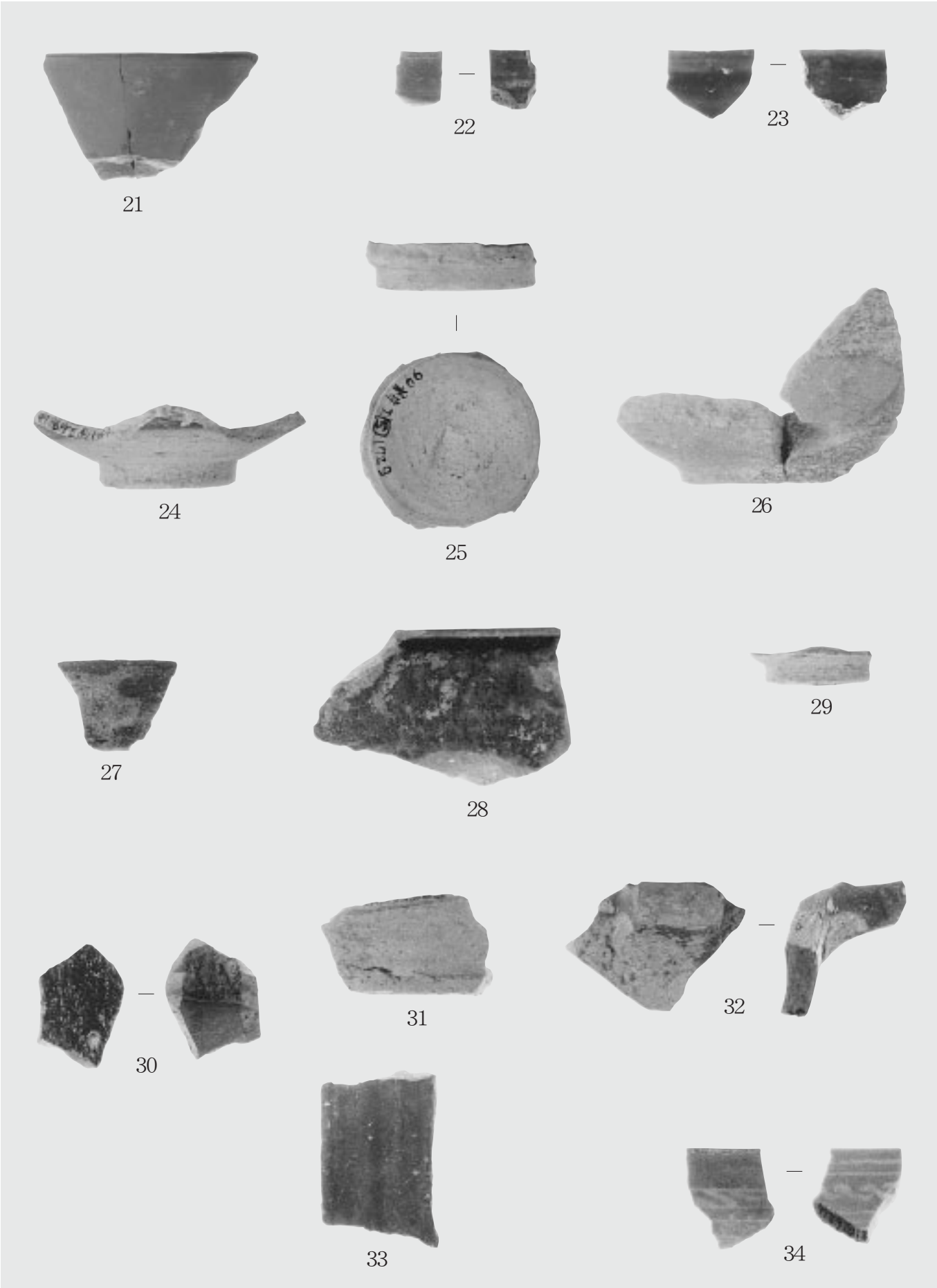
図版43　染付（小碗・杯・瓶・蓋）



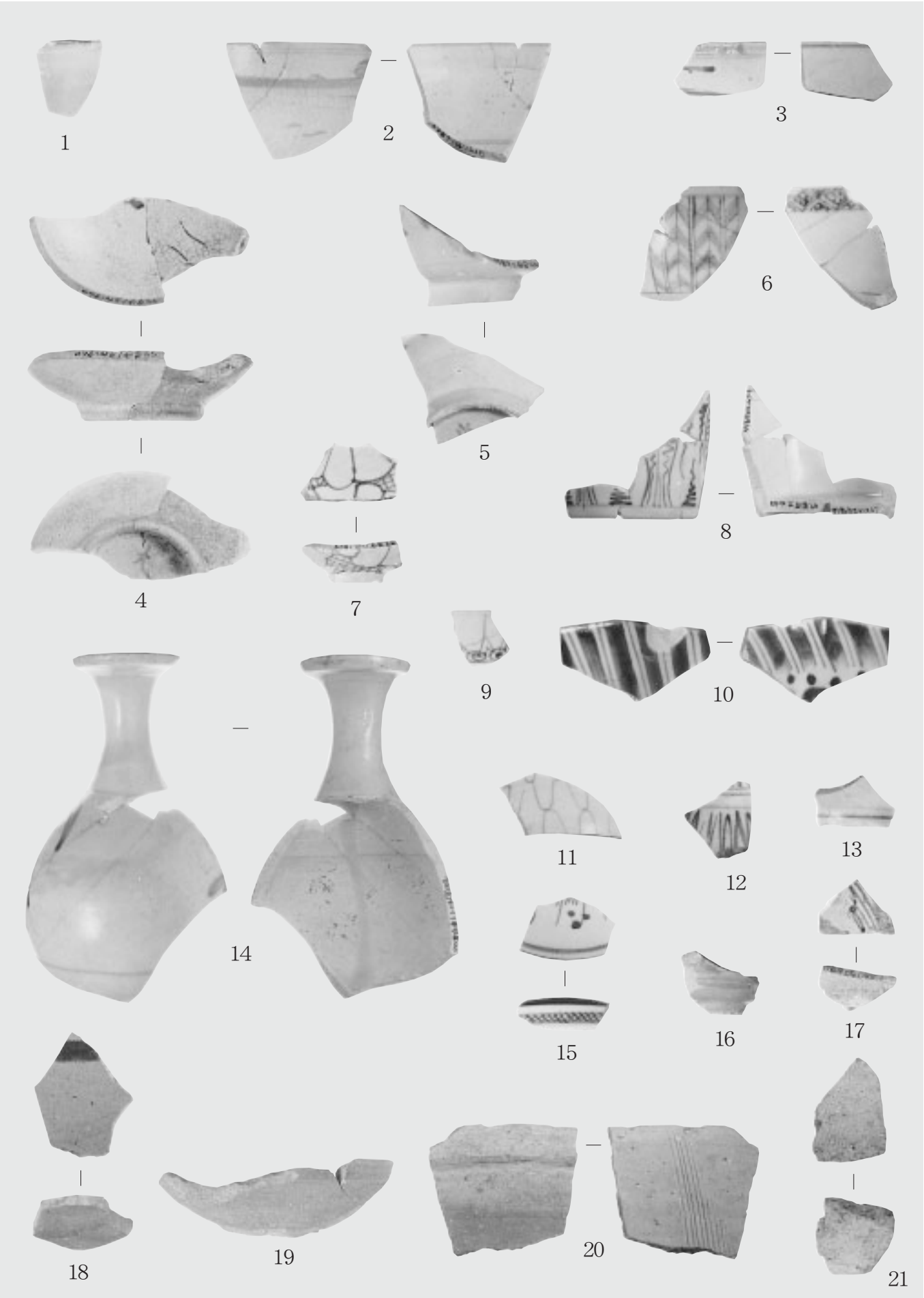
図版44　褐釉陶器（中国産1～15・タイ産16～21）



図版45　その他の輸入陶磁器（1）

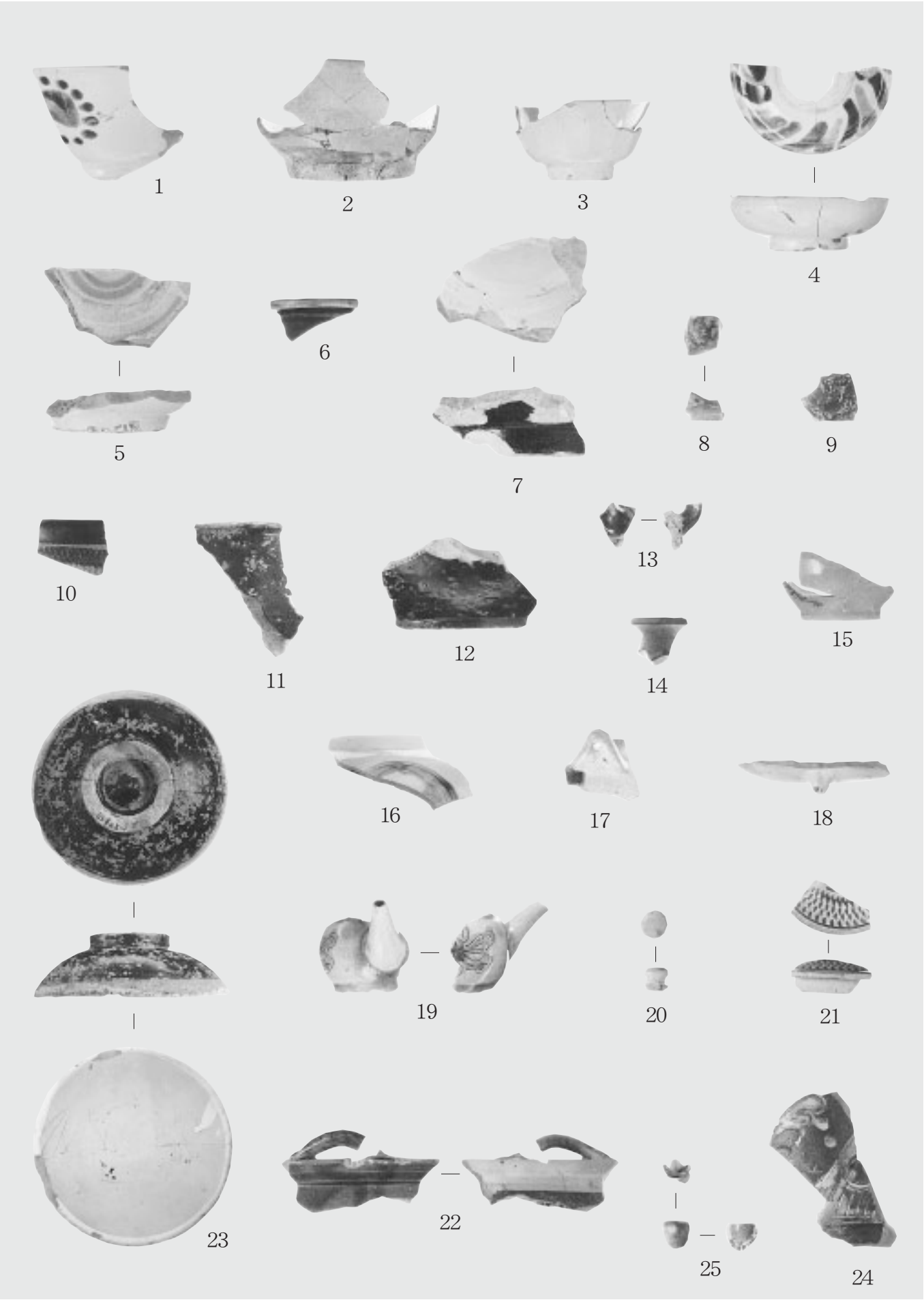


図版46　その他の輸入陶磁器（2）

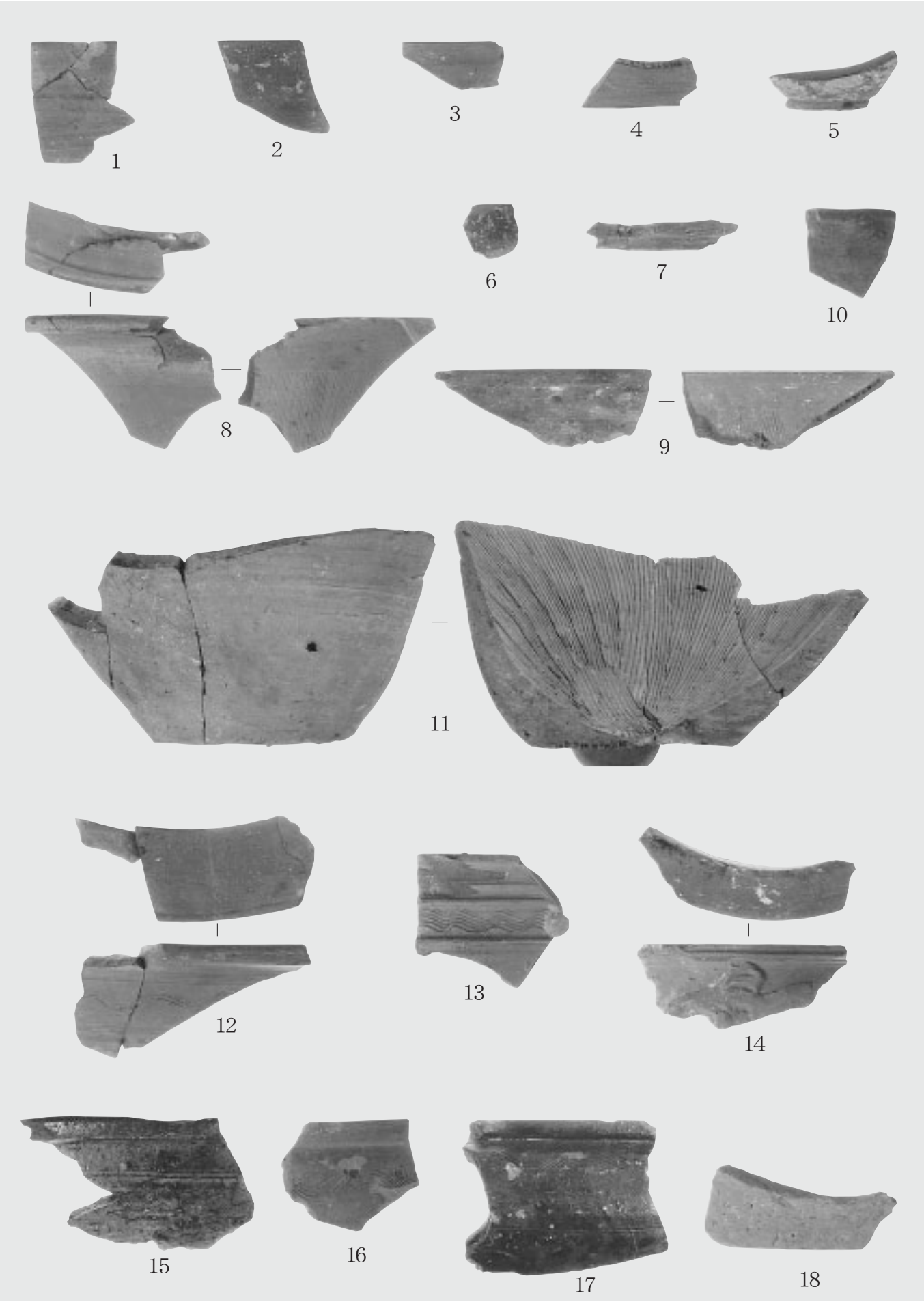


図版47　本土産陶磁器（1）

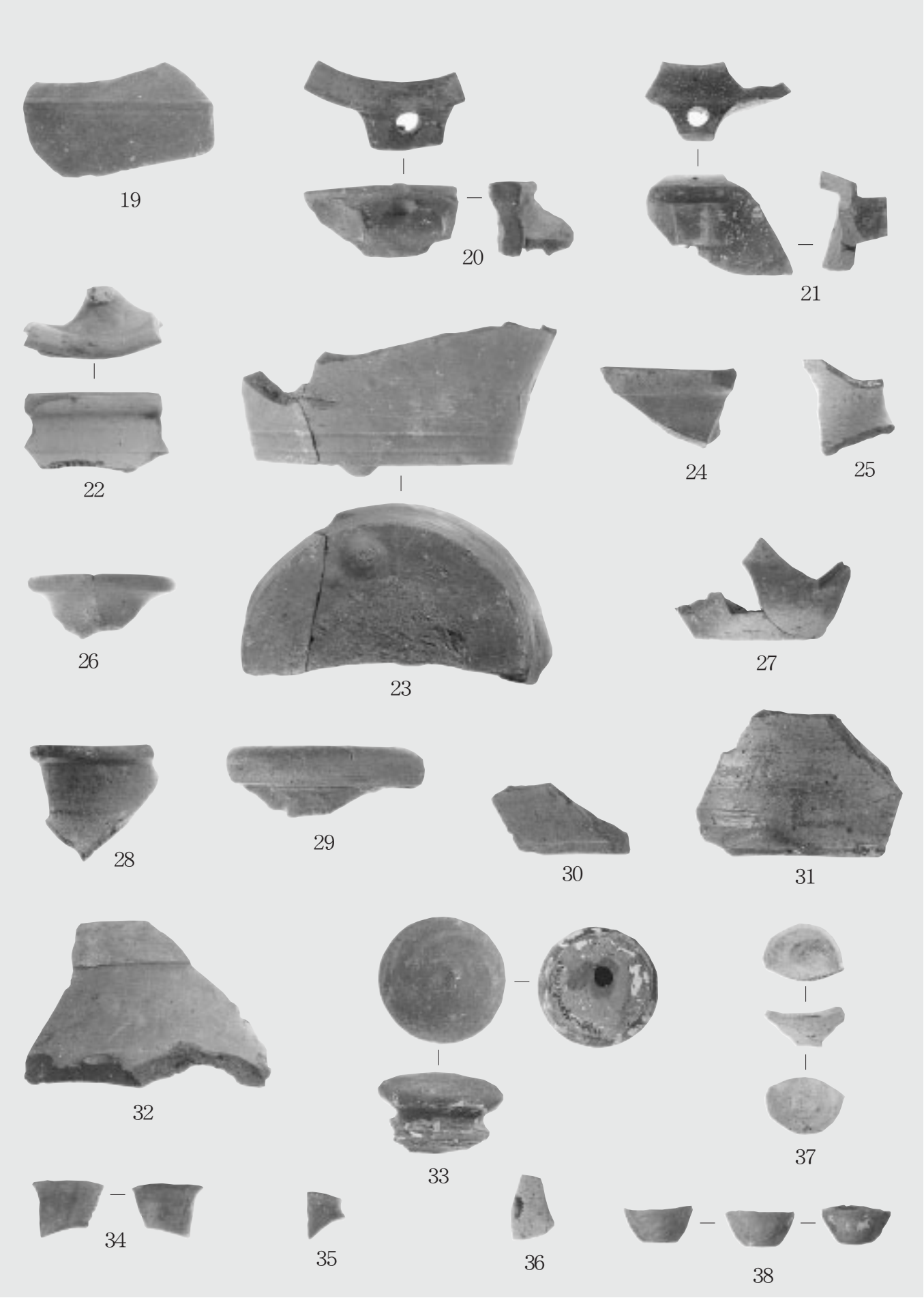
図版48　本土産陶磁器（2）



図版49　沖縄産施釉陶器

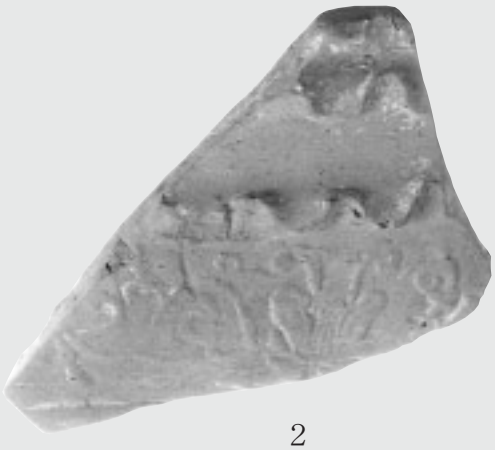


図版50　沖縄産無釉陶器（1）



図版51　沖縄産無釉陶器（2）

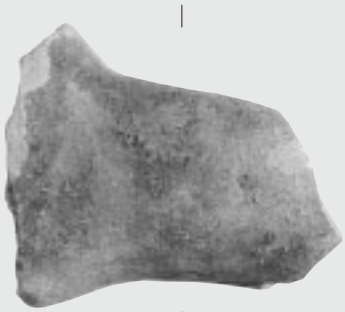
1



2

3

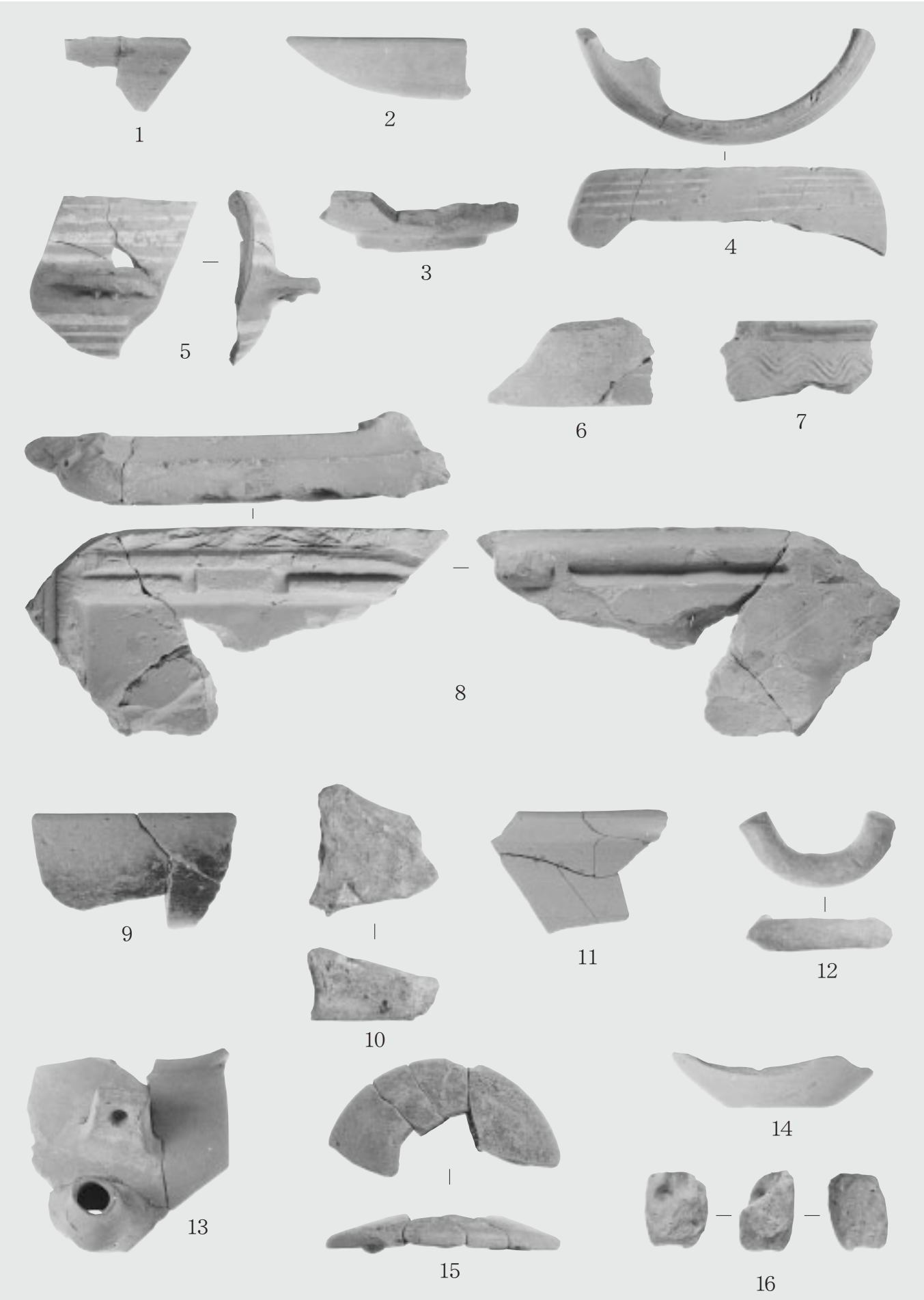
4



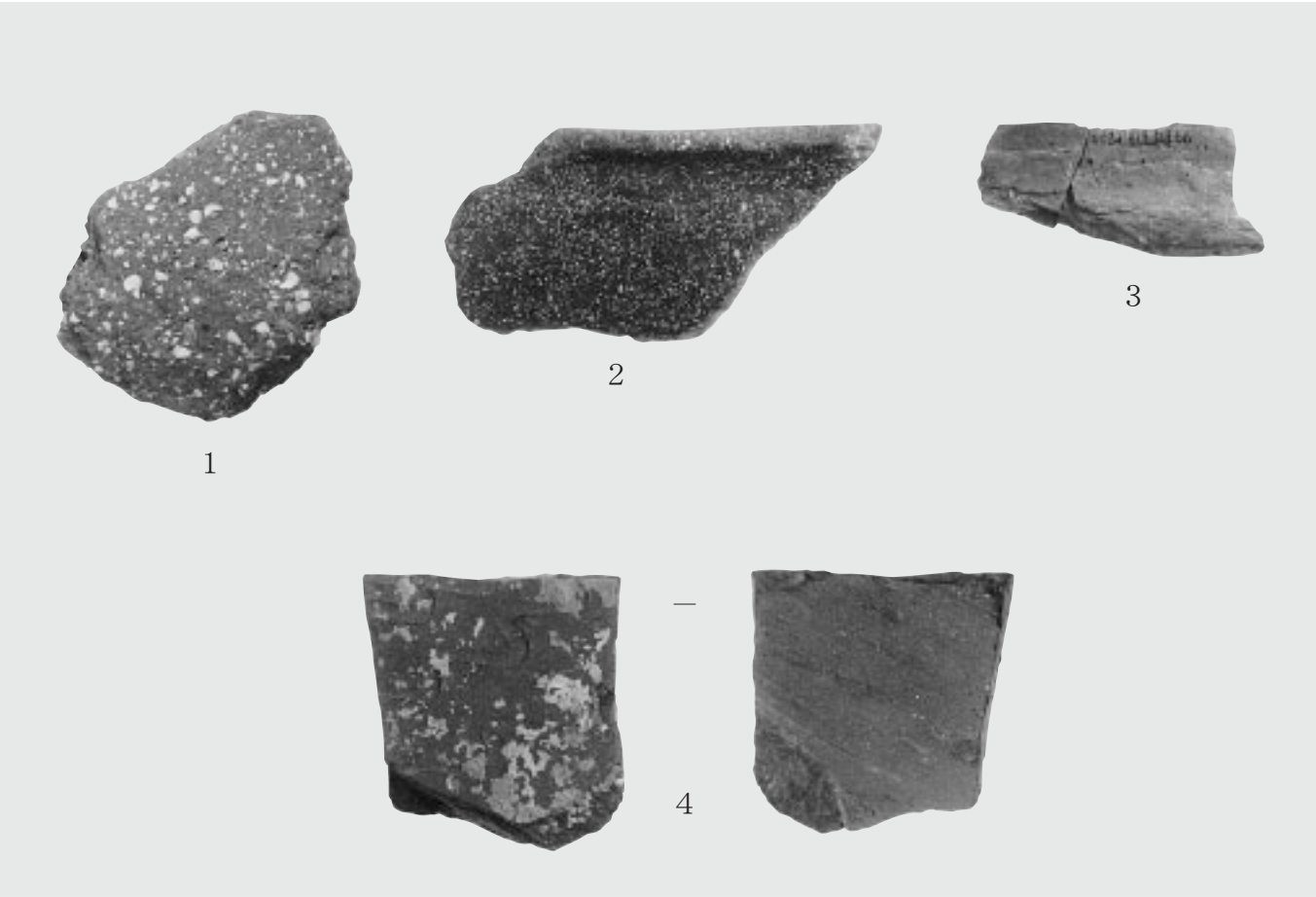
6

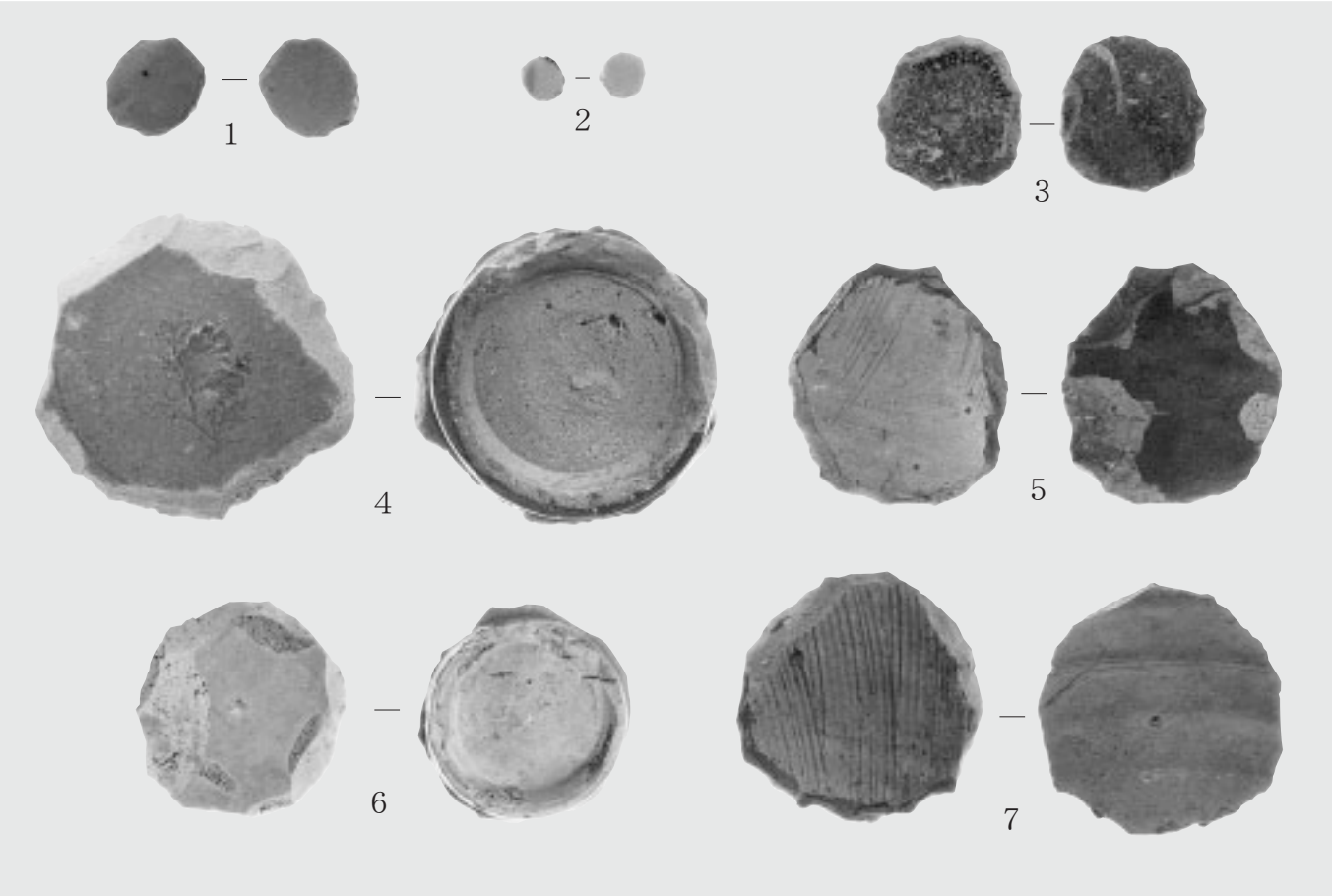
5

図版52　瓦質土器

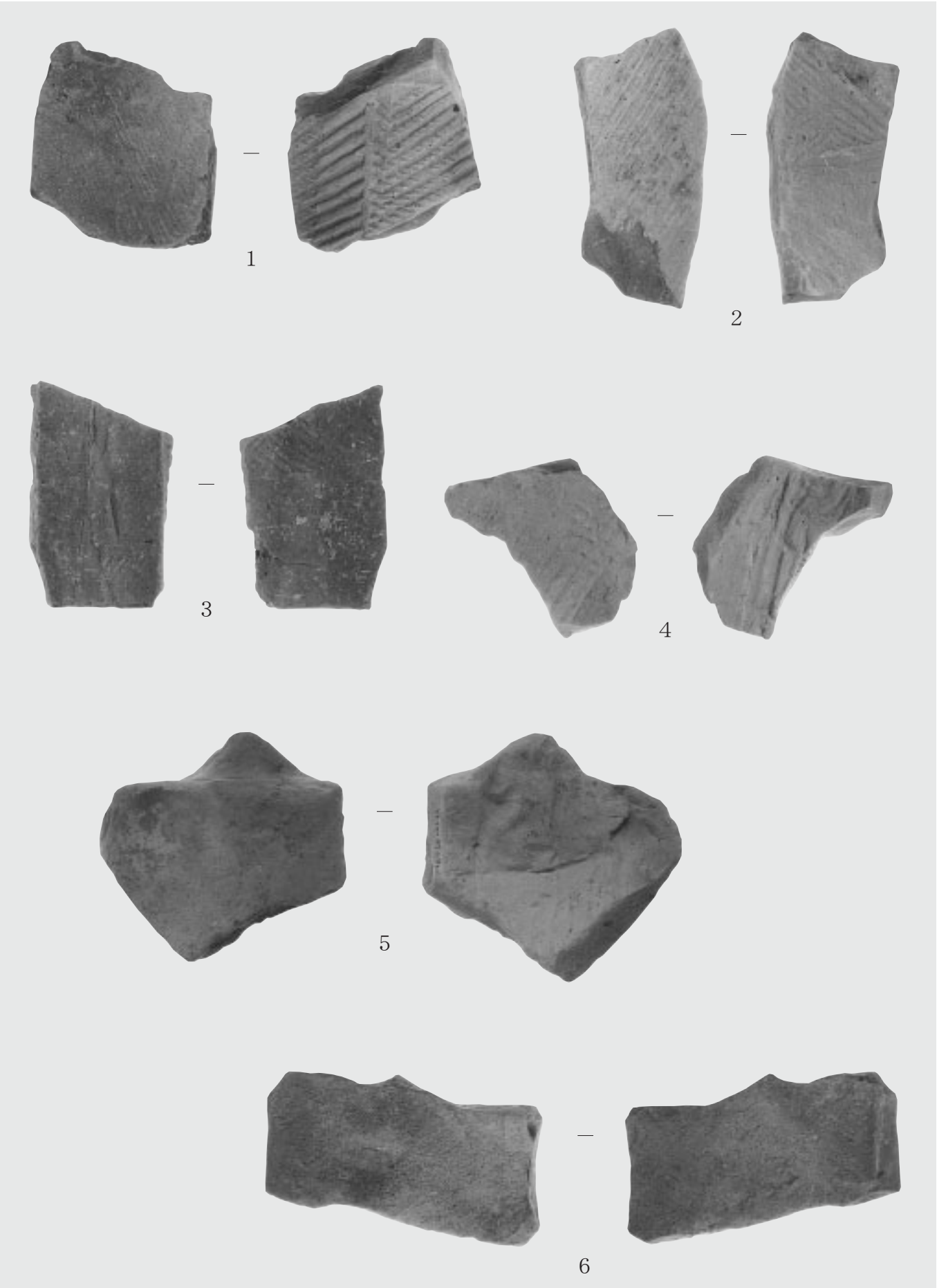


図版53　陶質土器





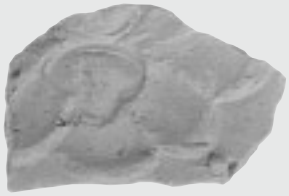
図版54　上：土器（1～3）　カムイヤキ（4）　　下：円盤状製品



図版55　瓦（高麗系瓦1～3・大和系瓦4～6）

7

8



10

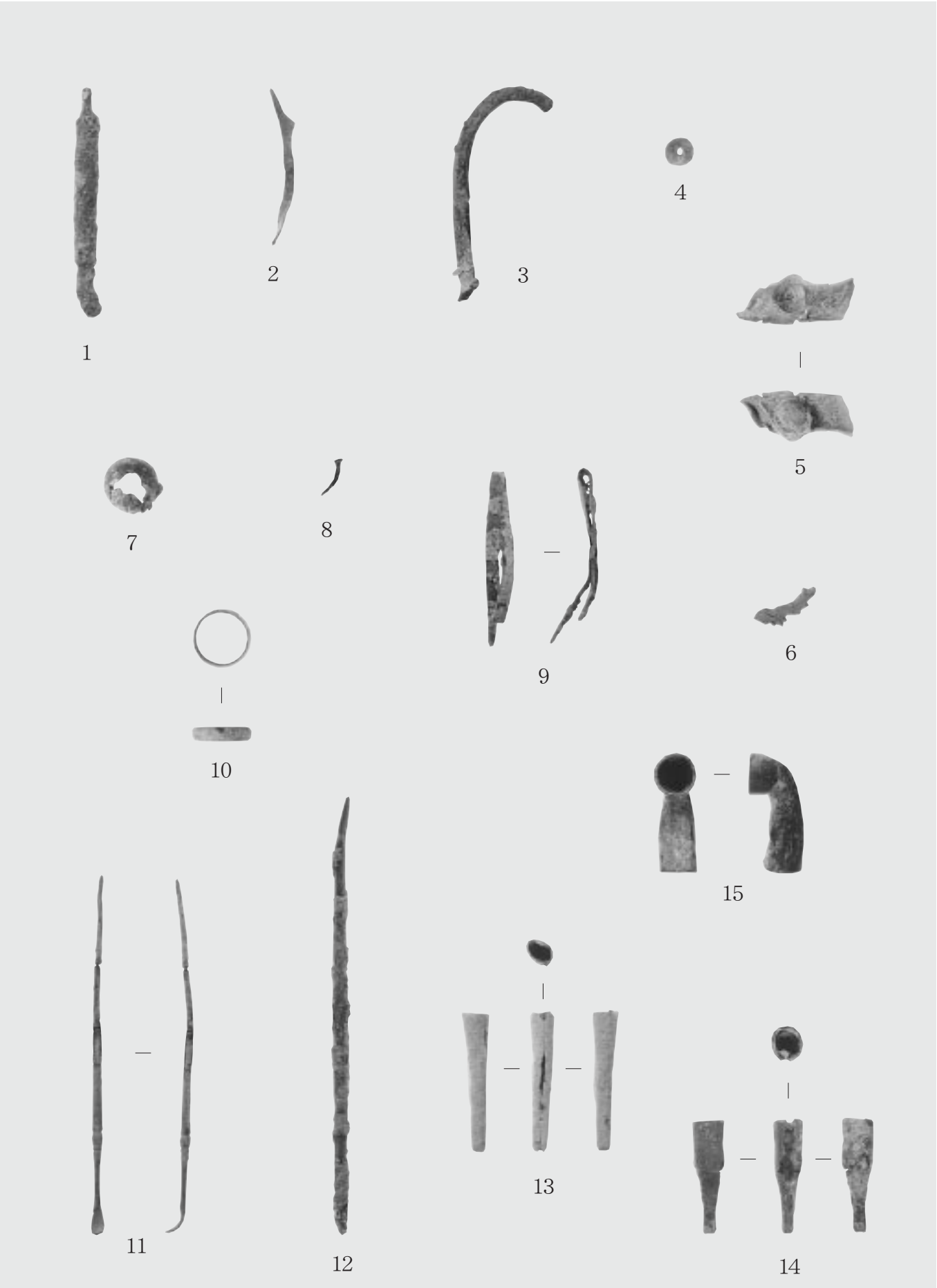
9

11

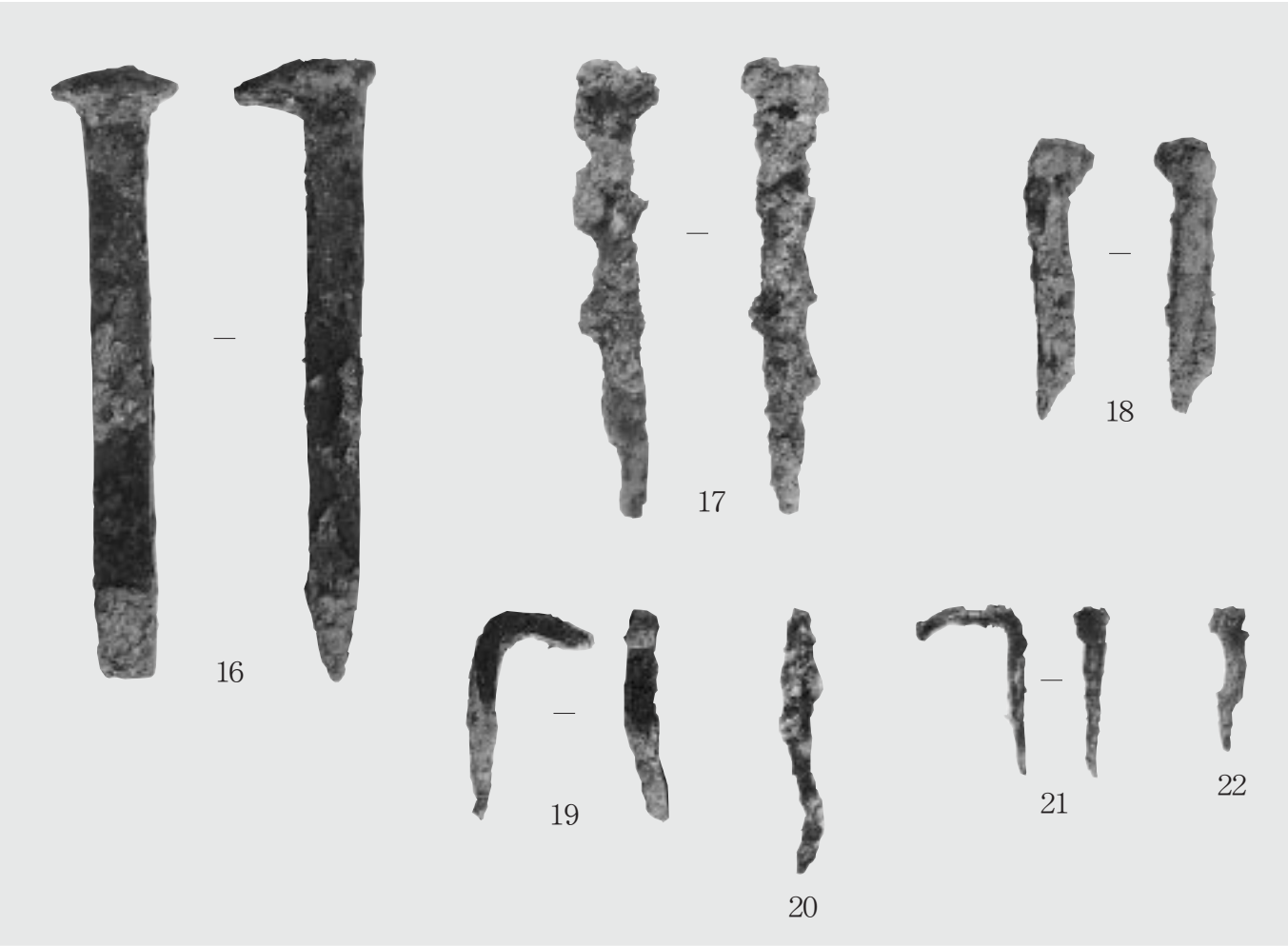
12

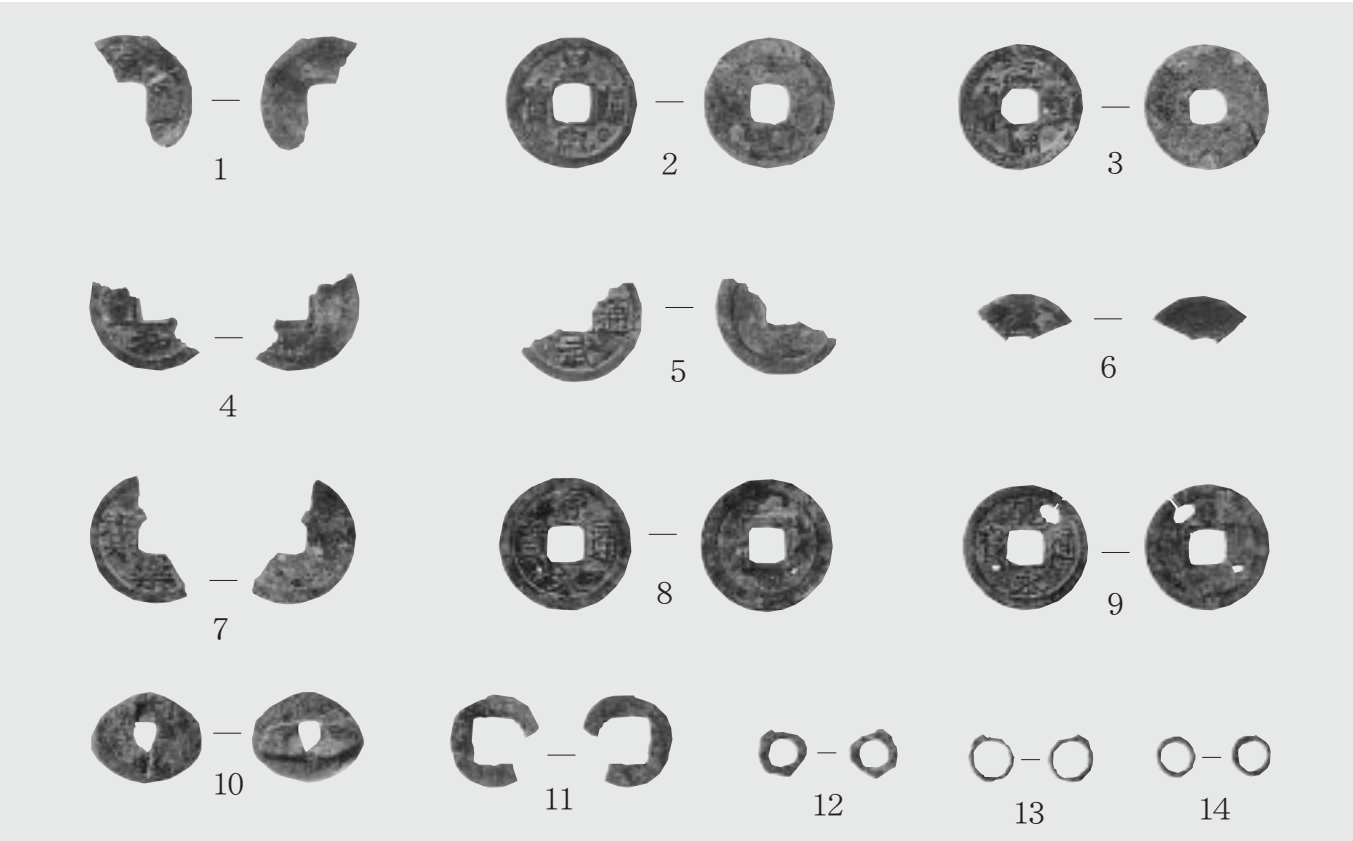
13

図版56　明朝系瓦7～13

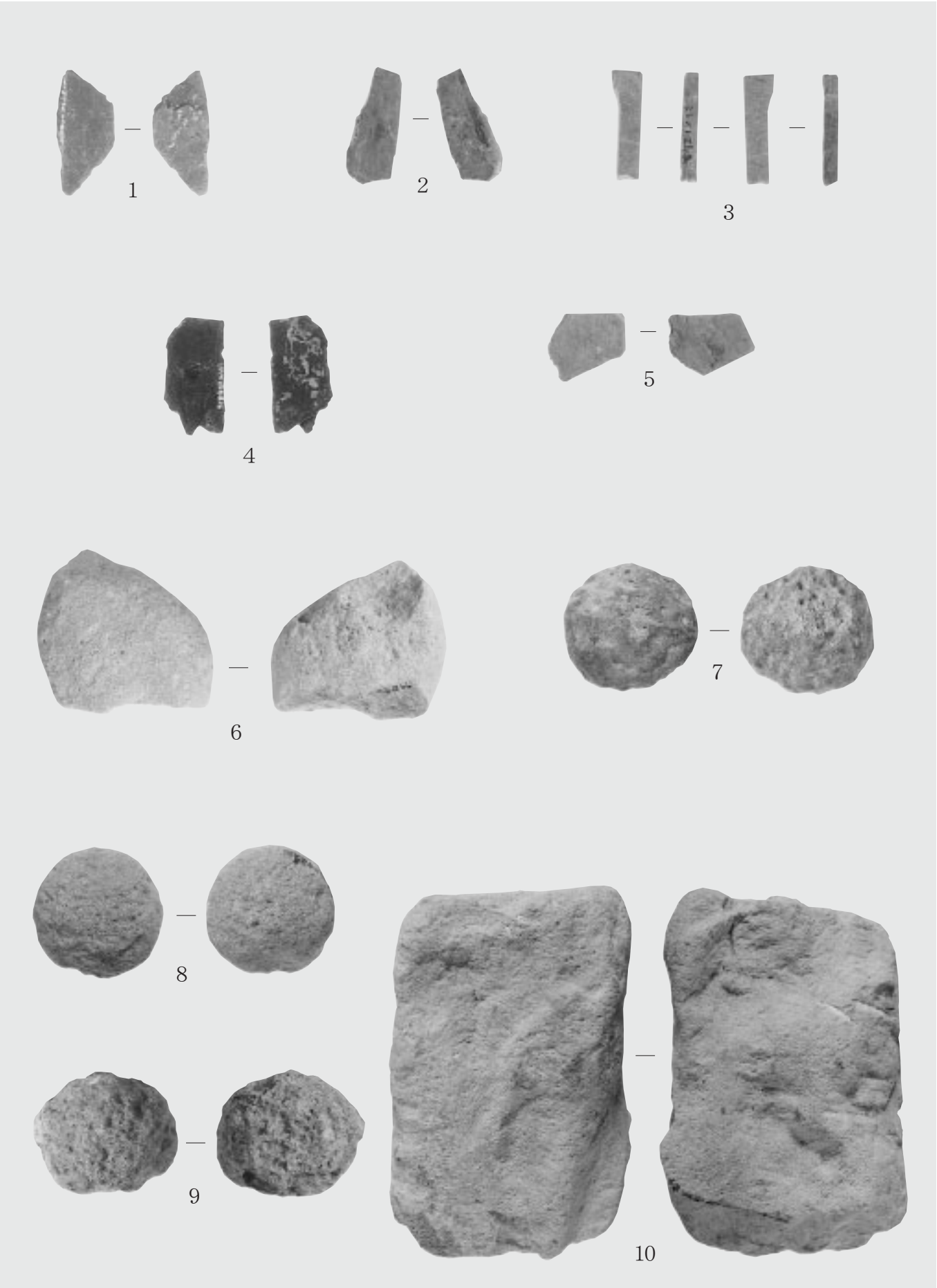


図版57　金属製品（1）

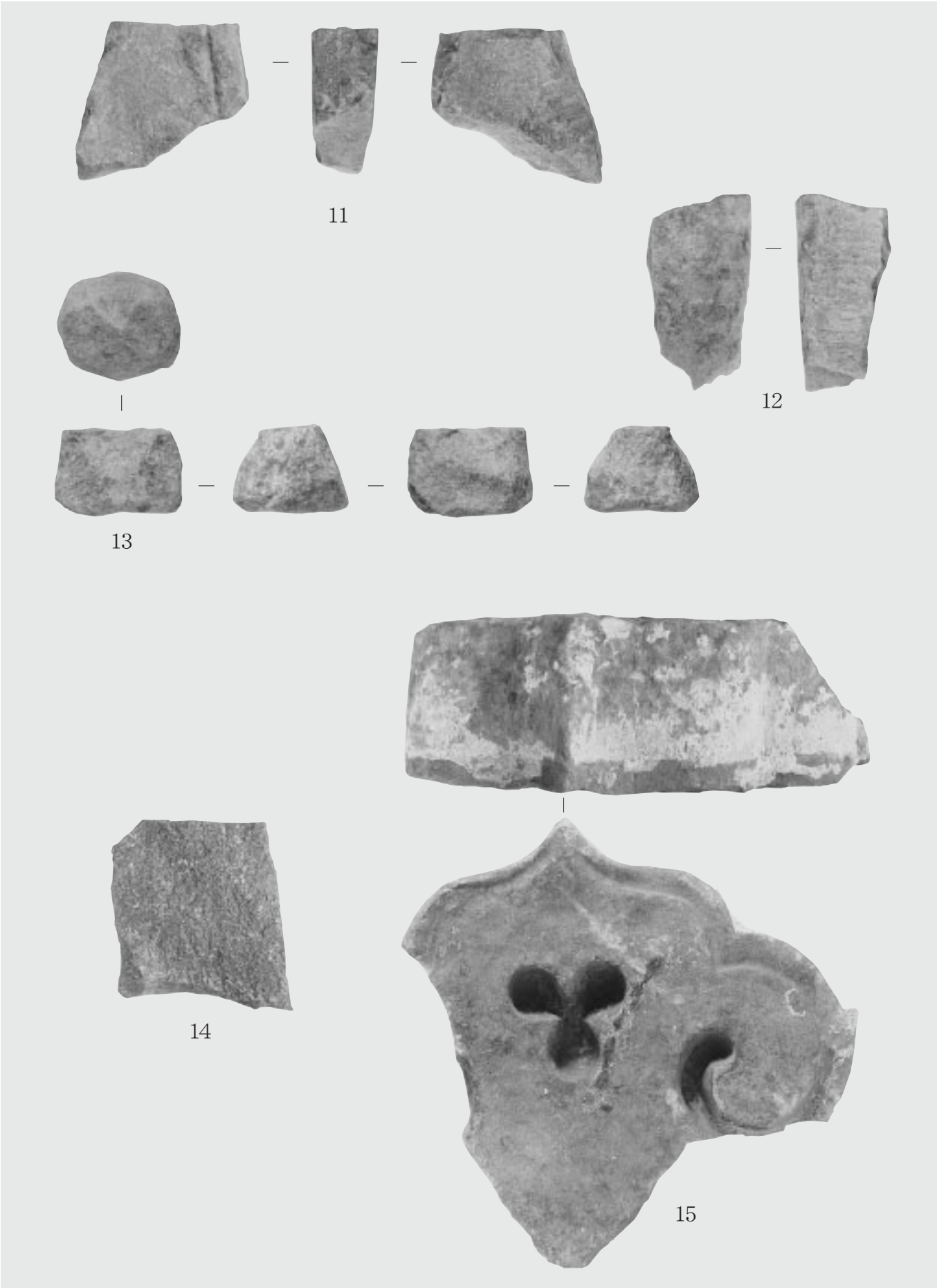




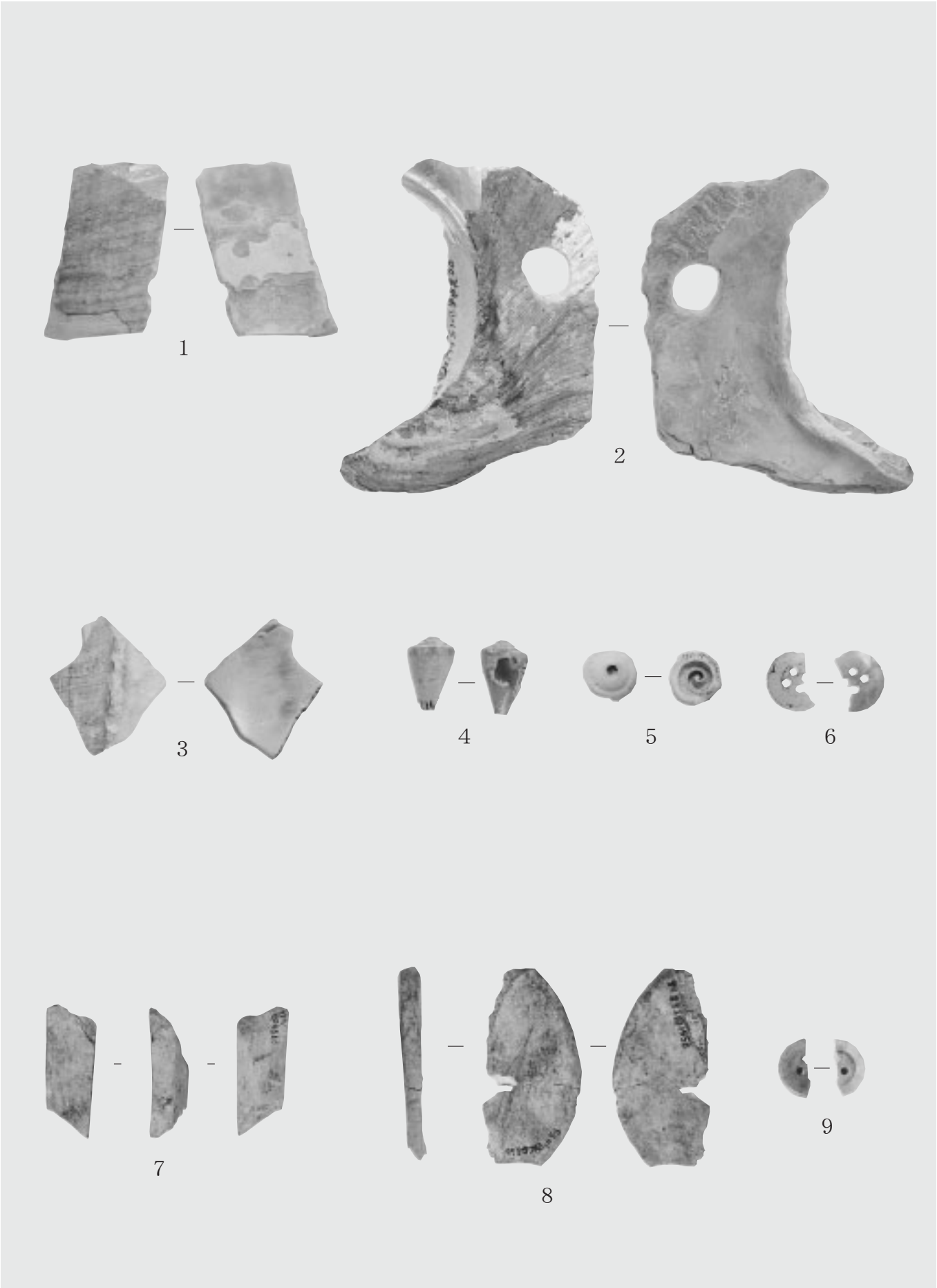
図版58　上：金属製品（2）　　下：銭貨



図版59　石器　石製品



図版60　石製造品



図版61　貝製品（1～6）　骨製品（7～9）

第129表　　首里城関係主要年表（1）

年代	王統	主な事項	中国	中国歴	日本	和歴	主名事項
607年		隋の煬帝、朱寛を琉球に派遣。	629年	舒明1			▶このころ『隋書』（琉球国伝）編集（～656年）
753年		鑑真ら阿児奈波に漂着する。					
1187年	舜天1	舜天王即位と伝わる。			1192年	建久3	鎌倉幕府創立。
1260年	英祖1	英祖王即位と伝わる。	1271年	至元8			蒙古、国号を元とする。
1296年	英祖38	沖縄本島に元軍襲来という。	1274年	至元11	1274年	文永11	元軍日本襲来（文永の役）。
1350年	察度1	察度王即位（浦添按司から王となり首里へ）	1281年	至元18	1281年	弘安4	元軍日本襲来（弘安の役）。
			1333年	元統1	1333年	元弘3	鎌倉幕府滅ぶ。
1372年	察度23	中山王察度、はじめて明に入貢。	1338年	元4	1338年	延元3	室町幕府成立。
			1368年	洪武1			▶元滅び、明建国。
1389年	察度40	察度、朝鮮（高麗）と通好する。	1369年	洪武2			▶景徳鎮朱山山麓に御器廠を設け監督官を置き焼造一説に景徳鎮御器廠はこの年に設けられる。
1392年	察度43	高世層理殿で遊観する。	1392年	洪武25			
1404年	武寧9	冊封使、はじめて来硫。シャム（タイ）船渡来し交易。					
1406年	尚思紹1	察度王統亡び、尚思紹、中山王となる。（第一尚氏）					
1416年	尚思紹11	尚巴志、山北王攀安知を討つ。					
1421年	尚思紹16	パレンバン（インドネシア）と交易はじまる。					
1427年	尚巴志6	龍潭を堀り安国山を築く。					
1428年	尚巴志7	**国門（中山門）を創建。**					
1429年	尚巴志8	尚巴志、山南王他魯毎を滅ぼし全島を統一する。					
1430年	尚巴志9	ジャワ（インドネシア）との交渉はじまる。					
1453年	尚金福4	志魯・布里の乱、首里城炎上。					
1454年	尚泰久1	琉球銭貨、大世通宝が初めて鋳造。					
1458年	尚泰久5	護佐丸・阿麻和利の乱。万国津梁の鐘を鋳造。					
1459年	尚泰久6	王府失火で倉庫などを焼く。					
1461年	尚徳1	琉球銭貨、世高通宝が初めて鋳造。					
1463年	尚徳3	マラッカ（マレーシア）へ使者を派遣。					
1466年	尚徳6	室町幕府に使いを遣わし、京にて「鉄砲」を試射する。	1467年	成化3	1467年	応仁1	応仁の乱始まる。
1470年	尚円1	尚円（金丸）即位。（第二尚氏）。 琉球銭貨、金圓世宝が初めて鋳造。					
1477年	尚真1	**首里城歓会門、久慶門創建。与那国に朝鮮済州島漁民金非衣ら漂着する。**	1477年	成化13	1477年	文明9	応仁の乱終わる。
1490年	尚真14	パタニ（タイ）と初めて交易。					
1494年	尚真18	円覚寺の宗廟を設立。					
1500年	尚真24	八重山、アカハチ・ホンガワラの乱。					
1501年	尚真25	玉陵を築く。					
1506年	尚真30	久米島、具志川按司を征討。					
1508年	尚真32	首里城北殿創建。					
1522年	尚真46	与那国、鬼虎の乱。					
1529年	尚清3	**首里城守礼門創建。**					
1532年	尚清6	「おもろさうし」巻1編集。			1531年	享緑4	一向一揆、越前朝倉氏を破る。
1534年	尚清8	**陳侃、来琉。**					
1546年	尚清20	首里城東南の城壁工事完成。	1543年	嘉靖22	1543年	天文18	鉄砲伝来。
1554年	尚清28	倭寇を防ぐため屋良座森城竣工。					
1556年	尚元1	倭寇を撃退する。	1572年	隆慶5	1572年	元亀3	室町幕府滅ぶ。
1605年	尚寧17	湧田窯にて「萬暦33年」銘入りの瓦器が焼成される。	1600年	萬暦28	1600年	慶長5	関が原の戦い。
1609年	尚寧21	慶長の役、薩摩軍侵攻。					
1616年	尚寧28	薩摩より朝鮮陶工、張一官、安一官、安三官をつれ帰り、湧田窯を開く。	1616年 1634年	萬暦44 崇禎7	1634年	寛永11	▶満州王朝興る。 鎖国令。

第130表　　首里城関係主要年表（2）

年代	王統	主な事項	中国	中国歴	日本	和歴	主名事項
1623年	尚豊3	「おもろさうし」巻3以下となる。	1636年	崇禎9		▶	満州王朝、国号を清とする。
				崇禎10	1637年	寛永14	島原の乱（～1638年）。
1628年	尚豊8	首里城南殿創建。	1644年	順治1		▶	明朝滅亡。
1633年	尚豊13	**杜三策、来琉。**					
1660年	尚質13	首里城正殿焼失。	1662年	康熙1		▶	明王殺害完全滅亡。
1665年	尚質18	平田典通ら諏方仲左衛門より上焼物秘伝書を譲り受ける。					
1671年	尚貞3	首里城正殿の再建工事始まり、瓦葺に建て改められる。					
1672年	尚貞4	平田典通、中国から「五色玉諸焼物薬掛け」の法を学び帰国。					
1682年	尚貞14	陶工を牧志村壺屋に集住させる。					
1709年	尚貞41	首里城正殿、南殿、北殿焼失。					
1712年	尚益3	首里城北殿、南殿再建。					
1724年	尚敬12	仲村渠致元、八重山山田平等に窯を作り窯および上焼を伝授。					
1726年	尚敬14	八重山、山田平等窯より「雍正4年丙午」銘入り無釉陶器が焼成。	1726年	雍正4			
1729年	尚敬17	首里城正殿重修される。					
1730年	尚敬18	仲村渠致元、薩摩の立野と苗代川において陶器の陶法を伝授。					
1731年	尚敬19	仲村渠致元、湧田にて磁器を焼く。					
1739年	尚敬27	漏刻門に日時計を置き時刻を計る。					
1753年	尚穆3	首里城内に寝廟殿、世添御殿を創建。					
1768年	尚穆17	地震の被害にあった首里城正殿を重修。			1776年	▶	アメリカの独立宣言。
					1789年	▶	フランス革命。
1846年	尚育12	首里城正殿重修。	1840年	道光20		▶	アヘン戦争。
1853年	尚泰6	ペルリ提督来琉、首里城訪問。					
1854年	尚泰7	**ゴンチャロフ、来琉。**					
1857年	尚泰10	中城御殿（世子殿）を当蔵へ移転。		同治6	1867年	慶応3	江戸幕府倒れる。
				同治7	1868年	明治1	王政復古。
1874年	尚泰27	琉球王国最後の進貢船渡清。					
1879年	尚泰32	首里城明渡し、熊本鎮台分遣隊駐留。	1894年	光緒16	1894年	明治27	日清戦争おこる。
1897年	明治30	沖縄県師範学校、首里城から当蔵に移転。					
1908年	明治41	中山門、腐朽のための売却撤去。		光緒30	1904年	明治37	日露戦争おこる。
1909年	明治42	首里城跡、首里区に払い下げる。	1911年	宣統3		▶	中国に辛亥革命おこる。清朝滅亡。
1912年	明治45	首里城に第一小学校ができ、広福門、奉神	1912年		1912年	明治45	中華民国成立。
	（大正1）	門が撤去される。			1914年	大正3	第1次世界大戦はじまる。
1924年	大正13	沖縄神社創建し正殿を拝殿とする。			1917年	大正6	ロシア革命。
1925年	大正14	正殿国宝指定。					
1927年	昭和2	国補助による正殿の解体修理実施。					
1931年	昭和6	正殿の解体修理工事完成。			1931年	昭和6	満州事変おこる。
1933年	昭和8	歓会門、瑞泉門、白銀門、守礼門等国宝指定。					
1936年	昭和11	伊藤忠太・鎌倉芳太郎の両氏による首里城跡ほかの発掘調査（～1937）。**守礼門修理着工。**			1939年	昭和14	第2次世界大戦はじまる。
1937年	昭和12	**守礼門修理完了。**					
1944年	昭和19	首里城跡、地下に第32軍指令部壕が構築。					
1945年	昭和20	**首里城の建物や石垣等、沖縄戦で焼失。守礼門全焼。綾門大道は破壊を受ける。**			1945年	昭和20	第2次世界大戦終る。
1958年	昭和33	**琉球政府により守礼門復元。**					
1992年	平成4	首里城正殿ほか復元される。					

沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書第13集

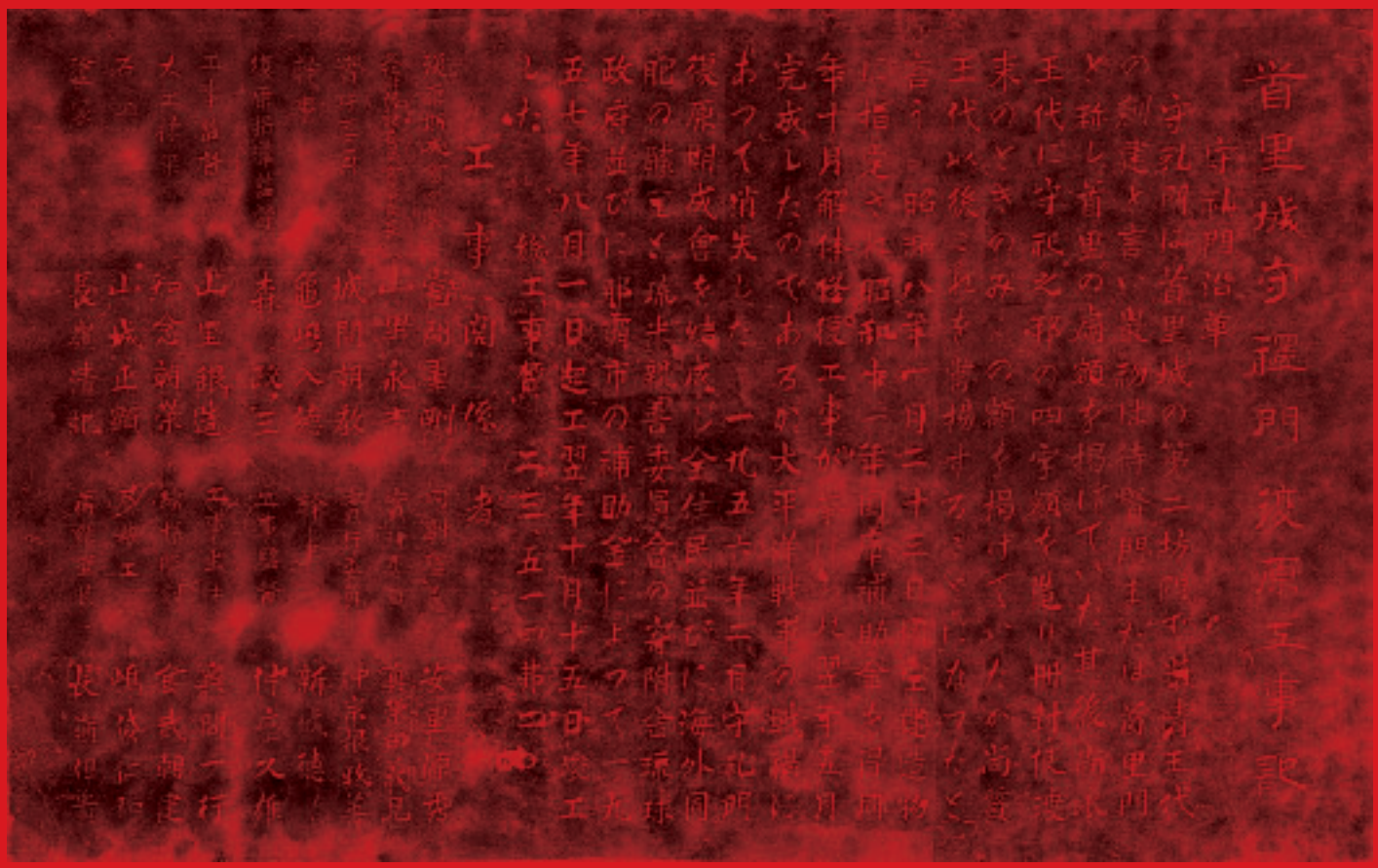
綾　門　大　道　跡

－首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書－

発行年　2003（平成15）年3月25日
発　行　沖縄県立埋蔵文化財センター
編　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒901-0125
沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
TEL　098（835）8751

印　刷　糸満印刷
〒901-0361
沖縄県糸満市糸満2082番地
TEL　098（992）2950

© 沖縄県立埋蔵文化財センター　2003Printed in Japan
許可無く本書の無断複製、転写、複写を禁ずる。



首里城守礼門復元工事記　昭和32(1957)年